

水も滴る触手精霊、始
めました。

ジョン・ドウズ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

都立来禅高校に入学した色無誠。入学初日に精霊（美少女）になりました。

これは、本編に紛れ込んだ異物の物語。

誠「歓迎しよう、我が触手で！主に菊を！」

士道「くっ、殺せ！」

十香「おのれ、シドーをどうするつもりだ！」

※本編にはこのような場面はあるとは限りません

エロ一辺倒ではありません。イチャイチャのみをお求めの甘党の方！たまにビター

混ぜてますぞ!!

基本、本家を邪魔しない形で進みます。
見切り発車はご愛嬌。

R—18にならぬよう頑張る。

目次

プロローグ

Date. 1 「精霊、始めました」

1

Date. 2 「ラタトスクからのお誘

い」

19

Date. 3 「無職は辛いよ」

35

第一章—十香デッドエンド—

Date. 4 「邂逅、十香」

52

Date. 5 「デェト前夜の『デート』」

Date. 6 「ダブルデート・アンド」

72

ミーツガール

Date. 7 「エンド・オブ・ロンリネ

ス」

104

第二章—四糸乃パペット—

Date. 8 「変態殺しの四糸乃」

131

Date. 9 「目覚めよおねにーさん」

Date. 10 「いつから俺は便利屋

145

になったのか」

157

Date. 11 「君のためのヒーロー」

Date. 12 「君の隣に居たいから」

173

第三章―狂三キラー―

189

Date. 19 「先輩のデートで飯が

美味い：後編」

307

Date. 13 「ねんがんのくるみ

Date. 20 「狂三と、繰三」

をてにいられたぞ！」

325

Date. 14 「初めまして、《私》色

Date. 21 「ザ・トゥルー・ビギニ

無誠です」

ング」

344

Date. 15 「学校へ行こう」

第四章―五河シスター―

248

Date. 22 「それでも好きです、司

Date. 16 「折紙先輩と拳銃」

令」

368

262

Date. 23 「シヨッキング・シヨッ

Date. 17 「福音」

ピング」

382

Date. 18 「先輩のデートで飯が

Date. 24 「有栖部彩」

397

美味い：前編」

294

Date. 25 「その唇に、抱擁を」

412	Date. 26 「デートの裏側」		
433	Date. 27 「二人羽織」		
468	Date. 28 「それぞれの道」		
	閑話―触手マテリアル―		
	Material. 1 「プロローグ」		
	第四章		
	第五章―八舞テンペスト―		
481	Date. 29 「WELCOME to DEM!!」		
492	Date. 30 「魔法少女、誕生」		
509	Date. 31 「集え、或美島へ」		
526	Date. 32 「BAD COMMUNICATION」		
570	Date. 33 「天敵」		
580	Date. 34 「湯けむり温泉殺人事件(大嘘)」		
596	Date. 35 「八舞に死す」		
616	Date. 36 「デート・ア・ストレイ」		
	Date. 37 「魔法少女の真髄」		

プロローグ

Date. 1 「精霊、始めました」

「あーあ、俺ん家跡形も無いなあ」

悲報：俺のアパート全壊。

俺は瓦礫の前で立ち尽くしている。

「どうしよっかなあ………」

おい、今日は新学期初日だぞ、笑えよ。来禅高校に初登校してる間に、借りてた家が吹っ飛んだ。キャツシユカードとか通帳とか判子もね。後は財布の中の金しかない。

それもこれも、空間震という奴のせいだ。言わば空間の揺れ。地震の上位互換みたいなもの。三十年前のユーラシア大空災なんて、国を三つ跨いだ大規模な災害だった。何人も死んだ。国が作れる程の被害額だった。今でも犠牲者の追悼式典が毎年行われている。

さて。今回はそんな規模では無かつたらしいが。

一人暮らしの俺こと、色無いろなし誠まことさんには、死亡フラグが立ちました！

ヤッター、人生ヤバイ！

天宮市こんなどこに引つ越して来るんじや無かったよ！涙が出るね！あーあ、都立の学校行きたいとか考えなきや良かった！ついてねえ、最高にだ！

前住んでた所は、空間震にギリギリ遭ったことがないという奇跡に近いとこだった。避難訓練は受けたが、その後の危機管理意識が足りなかった。俺、空間震の被害を生で見るのは初なんだ。後の祭り開催中。

参ったなあ。確かに住居とかは復興して貰えるのかも知れないが、流石に通帳とか小物は無理だ。

何せ、かつて空間震でカードを失ったと装って銀行で詐欺したってニュースがあったからなあ。空間震詐欺以来、銀行やお役所は、その辺のガードは固いんだよ。

仕方無い。ひとまず何処かに身を寄せよう。何処にだ。親戚居ないしなあ。友達の家うちに厄介になるのもなあ……引つ越してきたばかりだから居ないしなあ。

よし。

「学校行こう」

あそこなら事情を話せば何とかなる。

瓦礫の山にサヨナラバイバイ。俺は旅に出る（学校まで）。

「ん？」

道端の小石を蹴りながら通学路をしばらく歩いてみると、町の残骸の中のあるものに

目が止まった。

拳より小さい、水晶のような何か。ガラス質のようにも見える。どっちなのかは俺にはさっぱりだけど、取り敢えず何か綺麗。貰っていききたい。発想が火事場泥棒。ま、流石に良くないのは知ってる。

でもさあ、こーいうのってちよつと触ってみたくならない？だって綺麗じゃん。手に持って覗いてみたい。プリズミプリズムプリズマイリヤ。こんな時でも能天気な俺がアホみたいですね。ちくせう。

「失礼しまーす」

周囲を見回し、誰もいないと分かった所で、俺は一応詫びを入れてから水晶を拾い上げる。

「おー」

光を受けて反射する水晶の輝きは、何となくガラスのそれとは違うように思えた。もつとこう、何だろうね。スピリチュアル？な感じがする。こう、魔法のなんちゃらみたいな。俺の願いでも叶えてくれるのかね。無いわー。夢見すぎだわー。

「ん？」

あれ。

この水晶、てつきり日光を反射してるもんかと思っただけど……。

これそのものが光ってねーか!?

「お、おお?!?何だこいつ?!?」

うおつ、まぶしつ?!?急に光度が強くなったぞ?!?何の光!?

あ、やべ。

確か、超強力なフラッシュとかって、下手すると意識持つてかれ——

目が覚めた。おーエライ目に遭った。ショックでぶっ倒れたようだが、特に身体に痛みは無い。安心。

空が見える………まだ青い。時間は全然経ってないみたいだ。ほっと一息。何だったんだろ、さっきの。どうなったんだ?あの水晶は?

「ん?」

起き上がろうとして気付いた。胸の上に何かある。大きなお山が二つ。あら素敵、まるで女の子のお胸みたい。青色の薄い布が、申し訳に被さる感じで乗っている。

.....

むにゅん

「あ、ふん」

気持ちよい。むにむにする。これ、自前だわ。何だ自前か。

———
自前？

「待て待て待て待て!？」

さあ立ち上がれ俺よ、異常事態だ! どういうことだ!?! 声が女声! 女声ですよ奥さん!! 跳ね橋のように起き上がった俺は、反射的に股間に手を遣る。

ブツが無い。何だと。

うわ、これキャミソールじゃねーか!?! 胸元から腹までバッチリ開いてるじゃないですか!?! 下は腰布とサンダル.....ベリーダンスか何かでもやるんですかね!?! 露出高すぎね!?!

「まさか.....」

服装が変わってたせいで道端に落ちこちてたスマホを拾う。そして自撮り。指でピースは忘れない。

うん、いかがわしい写真が撮れました。俺の面影が全く無い、金髪碧眼のツリ目美女が写ってます。どこのイケナイお店だ。あ、髪飾りにさっきの水晶つぼいの付いてる。大分サイズダウンしてるけど。

ひとまず理解完了。女の子になりました。それもとびきり痴女いとびきりの美少女に。

「お休みですか？お泊まりですか？そ・れ・と・も♪お持ち帰りですかあ？」

試しに言ってみた。スゲー頭悪い感じがする。あと、俺自分の声なのにときめいた。ヤバイ。

一言で言おう、気に入ったと。

そのアナタ、変態って言わない。水が滴るいい女と言ってくれ。いややっぱやめて、ちよつと悲しい。

うーん、それはさておきどうしたもんだ。こんな格好じや俺が俺だと先生に証明出来ないね。そもそも通報される。

どうしたもんか。

よし、人生諦めが肝心。女の子として生きていこうそうしよう。

あと、頭の中にあるこの触抱聖母アルミサエルってのは一体何だ――

「精霊確認！」

「よし、囲みなさい！」

ん？

何か空飛ぶハイレグ水着のような格好の女性の方々が大量に!?!美少女偏差値高くね!?!いやそんなことはどうでもいい!!

あれよあれよと言う間に、15人くらいに囲まれてしまった。うおすげえ、ハイテクハイテク。で、これは何の騒ぎだ？

「あの、どちら様？」

何か友好的な感じはしないが、取り敢えずコンタクトを——

「攻撃開始!!」

「はいイっ!?!」

一斉に銃口が向けられる。ガトリングガンが、ミサイルが、ゴルフバッグみたいなものが、俺に狙いを付けている。銃でお返事ですか。バッドコミュニケーション。

そのゴルフバッグみたいなもの、武器なんすね。アニメで見たことある。エネルギー充填なんちゃら%。白ヤギさんたら読まずにファイア。説明書なんて飾りです。武器なんて捨ててかかってこい。無理か。

ああ、これは詰みました。間違いなく。

やられる。

やられる？やられる。

殺られる。

いやだ。

何でこうなる。

でも。

「アルミサエル
触抱聖母」

私知ってるよ。

私は誰にも負けないってこと。

空間が歪む。軋む。

やられる前に、やればいい。

「て、天使!!」

「靈力値、急激に増大!」

「総員対シヨック用意!!急ぎなさい!」

何やら皆さん慌ててますけど。あなた方、覚悟して来てる人ですよね？

空間から吹き出す靈力の波が、辺りを抉り、削り、侵食する。

スーツの女達が吹き飛ぶ。

舞い上がった土が、私と敵とを別つカーテンとなる。

空間の歪みから現れたのは、20cmはあろうかという、棒状の水晶。

「おいで、アルミサエル」

それを胸元から体内に挿入する。沼に沈み込むように、ずぶずぶ、ずぶずぶ。

私の中の何かが切れ、私は身体が崩れていくのを感じる。

そう、水になる。

私知ってるよ。

私の夢は、求めるのは、
■■■■■■■■■■ことだつて。

【寵愛】

水は力を持ち、力は私から次々と飛び出していく。一つ一つが宙をうねり、鎌首をも

たげて敵を見据える。

「ひっ!?!」

土煙が晴れる。衝撃波から立ち直り、私を再び見るようになった敵の一人が、息を詰

まらせる。

それはそうだ。私の背中からは、優に100を越える水の触手が生え、宙を埋め尽く

しているのだから。ちよつと怖いだろう。

「安心して下さい、怖いのは初めだけ。後は私が天国へ連れて行ってあげるから」

ああ、分かった。

この後メチャクチャこちよこちよした（へタレ）。

だって無理矢理性的に襲うってスツゴクダメでしょ!?特に戴けるモノ戴いちやうとかさあ!足腰立たなくなるまでイタズラしてから逃げたけどね!!

でも何か後半はイケナイ事してるみたいな反応されてヤバかった。何かがキュンキュンした。ハッ、これが恋!?

すっかり蕩けた顔した皆さんを道端に放置するのは気が引けたが……………。

あー、でも何かいい気分だったなあ。

濡れるツ!!

何処がとは言わない!!

◇

日が暮れた。

「夕日が綺麗だ……………」

逃げて逃げて、見かけた公園のブランコでギコギコしていた。既に追手は撒いたよう

だ。

逃げ始めた時点で、俺は触手を消して走った。明らかに身体能力が向上しててびびった。これならオリピックで世界一を取れるね！ってレベル超えてた。ナニコレ。

時刻は五時を回った。誰もいない公園は寂しい。ついさつきまでは、ボール持った小学生の男の子がいたから一緒に遊んであげてたけど、ちゃんと門限守って帰っていった。顔が赤かったのは夕日のせいに違いない。罪な女だ、フツ……………。

公園に辿り着く前にコンビニで買ってきたおむすびを頬張る。ポカリを煽る。今日の晩飯です。変なのに追っ掛けられたから、食えるときに食わないと。

え、どう買ったかって？ 誰かを使いつぱしりにしたり、強盗してはいないよ？

この〈^{アルミサエル}触抱聖母〉とやら、自分の身体を水に変える効果らしいのだけど。こいつを利用すれば、好きな姿形に変身出来るっぽい。その名も【^{マセカイ}整形】。便利。お陰で服をそれっぽく構成して店に行けた。このスケスケ衣装……………：霊装って言うの？ こいつも俺の一部らしいからちゃんと変化してた。

だけどね。常に変身使つてると疲れるのよ、これが。身体に水晶ぶつ刺してても、水になるから元の身体維持する分には全然負担が無いんだけど。だから今は変身を解いてる。

あーあ、もつと維持出来るなら、元の身体に戻っても良かったんだが。本来の用途で

は無いからか、連続使用出来るのはせいぜい半日が限界と見た。ツライ。

しかし悲しむことは無い。この力があれば、当面の宿の確保は容易い。

他所のお宅に上がり込んで、風呂の水に成り済ませばいいのだ。ついでに美少女の浸かるお湯になりたい。グヘヘヘ、美少女エキス（汗）抽出だあ！俺が、俺達が、美少女汗だ！！ハッハア！！

いや、いや違うぞ？目の保養を求めたり心の栄養補給を主にして考えたりはしてないぞ？ホントだぞ？紳士だからな？

という訳で、通り掛かった美少女がいたら、お宅にお邪魔してしまおう作戦開始！！

——二時間後——

.....

えー七時です。すっかり暗くなってしまいました。

だーれもない。

若い娘がない。

見事に主婦の方々しかいない。

お疲れのサラリーマンしかない。

むしろ計算されてんじやねーのかってくらいいいない。

しかもスマホの充電切れた。もうやだ。おうちかえる。おうち無い。しねる。

もういいや。適当なお宅のお風呂に忍び込んで寝よう。そうしよう。お留守のお宅がいいな。

決意完了。目標決定。公園を出た俺は、明かりの点いていないお宅を探す。空き巣の行動。お宅の風呂場、盗みます。

おつ、ここ、電気点いてない。インターホン鳴らしてみようか。最悪ダツシユする。

ピンポン

……………。誰もいないと見た。

レッツゴー。すまないね五河さん。ちよつと民宿させて。無断で。風呂だけでいいから。

身体を液化化させて、ドアと床の僅かな隙間から家に潜り込む。ハイクオリティ不法侵入。デイモールト。俺の頭はマンモーニ。

さてと。

潜入成功。俺が人型に戻る時に、水も全て回収出来るので、濡れた形跡など残らない。証拠など残らないんだよ。フフフ……………。

さーてお風呂お風呂ー。お風呂場を探しましょう。

と言ってもここは一般的なご家庭だけあって、あっさりが見つかった。あら素敵。ちやんと掃除されててピカピカだね！風呂の蓋を開けてビツクリ！素敵なベツド（バスタブ）でヴェリイイナアイスですよおお!!

さて、寝ましようか。再び液化化し、湯船に収まる。万が一誰か帰宅しても水を張つてるように見えるよう、入浴出来る体積に調節して、つと。

よし。液化化してるとバスタブでも結構落ち着くぞ。水の性か？

まあいいや。ずっと水アルミサエル晶刺してて疲れたし、寝ながら休みましようそうしましょう。次の夜までさようなら。

違うか。

まあいいや。誰も聞く人などいないだろうけど、お休み。

この時、俺の運命は決まっていた。

風呂の蓋を閉め忘れたことが、俺の全てを決めたんだ。

でも。

そうしなかったら、俺は救われなかったんだろう。きつと。

◇

物音がして、目が覚めた。半覚醒状態だが。いや、今は水だし、目、無いけどね。誰か帰宅した？ ドアの開閉音と、続けて施錠音がする。

「全く、面倒ね。土道に説明してる間にもう一体精霊が現れるなんて。しかも変態。懸念要素が増えただけじゃない」

おんなのこ？

でも。あー、眠い。ほつとこう。今何時だ。分かん。真つ暗だから夜だな。

俺は無視して、再び意識を手放そうと努力を始める。

羊が一匹、羊が二匹、三匹……………。

足音が近付いてくる。

羊が十一匹、十二匹、十三匹……………。

間近でドアの開く音がした。うん。人影が見える。ちよつとヤバイかも知れないけ

ど、下手に動かない方がいいな。寝よう。

「シャワーだけして、もう寝たい……………あら。土道つてば、風呂に蓋も出来なくなつたのかしら。あのフライドチキン」

羊が二十四匹、二十五匹、羊が……………

「予定変更。追いつきして湯船に浸かりましょう」

———— バーニング。

「あつつうううううううううい!!」

「へえっ!!」

何だ!?アツイ!ヤバイ!焼ける!あつ、でも逃げ場がない!燃える!水だから燃えな

い!ヤバイ!

「ハツ、ハツ、アツ!?!アーツイ?!アーツ!!アーツエ!!アツウイ!?!」

「ひ、ひいつ!?!何この水!?!」

緊急脱出!自分の身体だけ構成して浴槽からエスケープ!素潜りしていたかのように水の中から勢い良く飛び出す!2ゲット!シンクロナイズドスイミング!!

「風呂の中からコンバンワー!!」

「嫌アツ!!」

顔を出した先には、一糸纏わぬ赤い髪的美少女が。あら可愛い、中学生くらいかな?

そして、

——そして、凄まじくキレの良い平手が迫っていた。

／＼ヒエー／

「待て話せばわかウツボア!？」

女子の伝家の宝刀、直撃。乾いた、しかし聞いただけでも痛くなりそうな程の音を立てて、俺の頭は壁に向かって方向転換。

頭を強く打ち付けた俺は、望み通り意識を手放した。

だが、これだけは忘れない。

親指を立て、右手でサムズアップ。

「ナイス、ちっばい……………こふっ」

Date. 2 「ラタトスクからのお誘い」

「起きなさい変態テルマエロマエ」

「痛てえ!？」

頭をはたかれて目が覚めると、何やら見知らぬ部屋。病院の診察室のような部屋のベッドに寝かされていた。

「よく眠れたかしら」

目の前には、何だか眠たそうなマッドサイエンティスト的に見える眼鏡の女性と、今しがた俺をはたいたと見える赤髪ツインテロリがいる。

ちよいまち。このロリ見たことある。

起き上がってベッドに胡座を掻き、脳内検索ソフトを展開（ただ思い出してるだけ）。こう、ツインテをほどいて、髪を下ろして……………。

該当一件。

「ああどうも……………眼福でしアイタツ!？」

身体能力は向上してる筈なんだが、どうもこの平手が見切れない。恐ろしい。女子、恐ろしい。

「忘れなさい。今すぐ」

「二度もぶつた！いや通算で三度目か！だが断る！」

中々に無茶を仰る。紳士が夢と希望の膨らみを忘れる時は、則ち死ぬ時と決まっている。故に忘れることは出来ない。俺は紳士だ！俺は必ず墓前にちつぱいを供えて逝く（断言）。

「……………最低ね」

「もつと激しく！」

「最低のクズね」

「ありがとうございます！」

強気ロリの罵倒ハアハア。我々の業界ではご褒美です。

いかん、完全に俺の中の変態が覚醒しつつある。どうやら美少女になったことでわりとマジでナルシスト気味になってるらしく、貶されることに何か快感を覚える。悔しい、でも感じちやう！

と、俺がビクンビクンしていると、ツインテロリの一步後方にいた、目の下に熊を放し飼いしている女性がロリに話しかける。

「琴里、彼女は神無月の妹か何かなのだろうか？」

「知らないわよ。もしそうなら、神無月は簀巻きにして海に沈めるわ」

「悦ばれそうだ、止めておきたまえ」

……………ただ変態なんだ？その人。上には上がいたわ。変態業界も上下関係が激しいんだな。くそう。世間の荒波に揉まれて……………揉まれ？揉む!?濡れるツ!!

ところで脱線しまくってるけど、ここ何処だ？そもそも俺はどうなる……………ハッ!? そうか！（コテリン！）閃いた！

「俺に酷いことするんでしよう!?エロ同人みたいに！エロ同人みたいに！」

「ちよつと淫獣、発情するのは止めてくれる？」

「改造ですか！開発ですか！感度3000倍とかですか!？」

「ここいつから海に沈めるわ」

おふぎけから一転、強張った俺の喉から風を切るような音がした。

琴里という名前らしい少女に、汚物を見るような目で見られました。何か玉ヒュンした。もう無いんだけど。カエルがへびに丸呑みされる五秒前って感じ。自分が本質的には被虐待嗜好ではないとまざまざと感じてしまった。琴里様と呼ばせてください。今だけ。

「ヘラタトスク」の目的に反するから我慢したまえ」

眠そうな人にもカワイソーなものを見る生温かい視線を向けられました。流石に

自重します。すいませんでした。無言の土下座。

「こんな精霊もいるのね。何か救う気になれないのだけど」

俺が大人しくなった所で、空気が緩んだ。琴里さんがチュツパチャツプスを啜える。それ、バインダーに綴じるものかよ。飴だけを綴じるバインダーかよ！ビルギットさん！

さて、それよりも気になる単語が出て参りました。

「精霊って何ですか？」

何だかとってもへろへろ、あいやフアンタジーな響きですね。フアンタジーそのものか。ドライヤドとかニンフとかだっけ？ニンフ、ニンフ、妊婦!? 止めて！俺よ思考を止めて！ニツチな好みがバレる！

「そこからのね。精霊とは、……あなたみたいな奴のことよ」

「美少女になってハアハアしてる人の事ですか」

「違うわよ。あなたみたいに、人間辞めた奴のことを言うの。——美少女になつた？」

あ、ミスった。言っちゃったよ。仕方無い、バラそう。

「水晶みたいなの拾ったら女の子になりました。てへぺろー」

わざわざ女の子座りに直してから、ダブルピースしてみた。え、顔？えへ顔ですが何か？何もされてないのに無様は晒さんぞ!?アへ顔は別料金だ！高くつくぜ！

「何と。意外な事例だ、過去に例がない。中々面白い精霊を見付けたね、琴里。………」
「琴里？」

研究者らしい反応を熊眠の飼そい主うながし、琴里さんの方を見る。

反応が無い。

沈黙が流れ、琴里さんの眉が険しくなる。ウケなかつたか。プルプルと小刻みに震えながらチュッパチャップスを口から取り出し、頭を守るように両手を交差させる。顔は羞恥に赤く染まり、目尻には涙が………」

「おにーちゃん以外の男に、変態に、は、はだか見られた………」

吹いた。笑う方面じゃなくて、意表突かれて肺の空気全部噴いた。

やっちゃまった。

NA ☆ KA ☆ RE ☆ TA 。

ぐすん、ぐすんとこれはマジ泣きですわ。

あ、やべえ。これはやべえ。可愛い。超可愛い。さつきまでの女王様オーラとのギャップが今の年相応のロリオーラちから力略してローラちから力を呼び覚ましリーンの翼がハイパー化（意味不明）。しかもお兄ちゃん大好き子とか素晴らしく可愛いのは確かなん

だが。

今、スゲエ死にたい。

「いたいけな少女を泣かせた事に関して謝罪の意を表明したい。お兄様、どこにい
らっしゃる。今すぐ俺をカイシヤクしてくれ、ハイクも詠まない。」

「ああ、止めて！眠そうな人！またもや俺にその兄弟ゲンカを諫める母親のような
生温い視線を投げないで！ツライ！色々と突き刺さる！今なら俺を目で刺殺出来ます
よ！」

「ほらッ！俺もう男辞めたから！身体は完璧に女だしっ！ノーカウントですよ！ノーカ
ウ！ほら笑って！笑って琴里さん！お兄さんも笑顔のあなたが好きはず！さあ笑っ
てー！！お願い泣かないでー！！」

何かの儀式か躍りかの如く、なりふり構わず俺は琴里さんの回りを舞い回る。

ここでやらずに何をやる。だからって何やってんだとは言うな。知ってる。

「ただ俺がつ！全ての涙をつ！止めてみせるッ！」

「君も必死だな」

「女の子に泣かれて黙ってる奴は男じゃない！」

「じゃあ君は男性じゃないか」

「昨日から俺は女だ問題ない！！」

「事の発端は君だけどね」

「いぶつ!!」

完封されました。眠たい人手強い。勝利の美酒を飲むように、或いはラムネを一気食いするように、睡眠導入剤を煽っている。異様な光景だ。

このあと延々と、琴里さんが泣き止むまで、同様の励ましを喉が枯れるまで続けた。後半の記憶は無い。

ともかくも、俺には絶対逆らえない人が一人出来た事には変わりがなかった。



「なるほど、琴里さんのお兄さん……五河士道先輩が精霊とキスをすると、精霊の持っている^{世界}の^{脅威}と霊装を体内に封印出来るので、精霊は人間として生活が出来るようになる、と」

「そうよ。ところで何故士道を先輩呼びなのよ」

「俺、昨日都立来禅高校に入学した身だったんで」

「あ、そうなの。まあいいわ、続けなさい」

「はい。で、琴里さん達へラタトスク機関の皆さんは、士道先輩と精霊をデートさせて

キスを導き、精霊をお手軽に幸せにするお仕事をしていると」

「その認識で間違いないわ。流石に発情期のサルよりはマシね」

「発情してゐるにはしてまずけどね」

あれから十数分後。

俺は空間投影モニターを利用しながら、精霊と〈ヘラタトスク機関〉についてのレク

チャーを受けていた。

「椅子、座りにくいわ」

「アイ、マムー」

琴里さんの椅子になりながら。

端から見ると、子供軍人が娼婦に乗つてゐるみたいで絵面がヤバイ。そんなことより、琴里さんを落つことさえないように姿勢維持すんのが結構辛い。

何より、画面が見にくい。そして琴里さんのきゅつと締まったおしりの感触を悦ぶ俺、醜い。喧しいわ。

「貴方は誠君と言いましたか！是非、私と代わつてください！」

それと例のスペシャル変態が現れた。確か、神無月。これで副司令とかどうなつてんだ（フラクシナス）。まあ、変態は大体ハイスペックつて相場が決まつてゐるから。

「神無月さん。良いんですか？苦痛の得られぬ手段で快樂を得てしまつて？」

「ハッ!? そうか、君は同志か!!」

「下がってなさい神無月」

「放置プレイですか!」

目と目が合う瞬間^{ダテ}変態だと気付いた。握手出来ないのが歯痒い。あ、部屋出てった。素直だ、欲望に。さらば友よ。君のことは忘れよう。きっと交わらない道なんだ。おれはしよきにもどった! あれ、変態って誰だっけ。神無月のことかな?

取り敢えず、ここまでで分かったことを一言で簡潔に言おう。

超展開。これに尽きる。

・ 戦艦持ち出しというデート

・ 中学生が秘密組織の前線司令官

・ 兄貴を女たらしにしようとする妹

・ キスで世界を救う兄貴

・ 死ぬか口説くか

・ 対するASTという例のくっ殺団は自衛隊

・ つまりあのエロスーツ税金の塊(ナイスウ)

・ 顕現装置なる現代的魔術兵器

・ DEMとかいう厨二心が燃える存在

・そもそも精霊への対応が二択しかない

何だこいつら。意味わからん。俺が言ったらお仕舞いだ。俺だって昨日からめでたくイミフ世界にお邪魔してんだから。

ところで、今思ったんだけどさ。俺、この流れからすると、琴里さんの兄貴とらぶらぶちゅつちゅしなきやいけないよね。

「男とキスすんのやだあ……………」

「まあ、そうなるでしょうね」

背中の上から、深い溜め息が俺の旋毛に吹きかかる。こそばゆいぜ。あ、何か甘いニオイ。飴だ、チュツパチャツプスだな。

「それにですよ琴里さん、俺、力封印されたら男に戻るかもしれないですよね」

「ウソ、戻るの嫌なの？」

「はい」

だって美少女ですよ美少女。人生それだけで薔薇色ですよ。何の取り柄も無いボククラな見た目の男よか、俺は女として生きるウ！

「今のままで、日常生活なんて無理よ。分かったでしょ？」

「三度の飯より美少女食べたい」

「へフラクシナス」の主砲に詰めて流れ星にするわよ」

「すいません。覗きとおさわりに絞ります」

「死ねばいいのに」

「わー、例えとか一切無くドストレートに言われるとかなり心痛いわー」

でも譲る気は無い。どや。

生憎、俺の心はとつくに固まっている。

「俺は、精霊のままでもいい」

「馬鹿なこと言わないで……後悔するわよ、必ず」

琴里さんの目が、何かを物語る。まるで、俺の行く末を肌で知っているかのようだ。

本当に、年下とは思えぬ気迫だ。

俺を、本気で心配してくれてるんだ。

今、全く不安はない。ASTとやらも、何とかなる気がする。だって、特に触抱聖母を使わなければ、追われにくいと言うことも昨日判明した。

樂觀視だろう。でも、俺はそれでいい。

こんな馬鹿にもかかわらず、琴里さんは俺と本気で向き合ってくれた。昨日、迷惑かけた変態なのに。言つてて悲しい。

「ならこうしましょう、司令。貴女やお兄さんが俺を呼んだら、俺は必ず助けに行く。代

わりに、俺がヤバくなったら助けてください」

だから、力になりたいと思つた。

嗚呼、俺は本当に変態だ。

貴女に惚れたと、今気付いた。

司令の器、しかと見させて戴きました。

「交換条件、つて訳？随分上から目線ね」

「変態は強欲なので」

呆れて見せるが、琴里さんの目からは先の気迫が失せている。俺を止める気は、もう無いのだろう。

「天使を悪用しなければ、まあ当面は目を瞑るわ」

ほらね。

俺が、いつか助けてと言うことを、約束したから。今はその時じゃないと、そう言つたから。

「転送して好きなどに送るわ。どこか希望はある？」

「そうですね、景色が素敵な所で」

「宇宙ね」

「勘弁してください」

「冗談よ。見晴らしのいい公園があるの。今の時間なら、良いものが見れると思うわ。精霊として生きることが望むなら、私達はバックアップ出来ない。餞別代わりよ」

「へえ、楽しみですね。司令お気に入り場所ですか。そこで土道先輩とデートしたことは？」

「ブツ飛ばすわよ」

「ワタシナンモイツテナイデス」

「やーい司令赤くなってやんの。あ、ヤバイヤバイ心読まれてら。目から光が消えつつあるぞ。万歳！琴里司令万歳！

「全く。いい？警察沙汰は避けること。空から見張ってるから、何時でも主砲撃ち込むわよ？」

「肝に銘じときます。霊装腹丸出しなんで」

頭を振って肯定すると、琴里さんは俺の上から降り、部下に指示を出す。埃を払いつつ立ち上がった俺の回りに、何らかの力場が生じていくのが肌で感じられる。これも精霊の力か。

もう、行くのかな。

「さようなら、色無誠。戦争^{デート}の先約、取り付けておくわよ」

「ははっ、お相手は司令じゃなく、先輩でしょ？」

「馬鹿ね、土道を動かすのは私よ」

「それは、楽しみですネ」

力場に加わる力が、増大する。

さあ、司令のプレゼントを堪能するために。俺よ、今は目を閉じようじゃないか。プレゼントは、サプライズ含めてのサービスだからな。

そして、〈フラクシナス〉から、一人の精霊が立ち去った。

「馬鹿なやつ。精々後悔すればいいわ」

一人残った五河琴里は、誰に向けた訳でもない言葉を、ぽつりと漏らす。

「ま、でも、アイツみたいな精霊がいても、いいのかも、ね」



静かだ。

風が心地好い。

そつと目を開く。

「ん、っ……………」

眩しい。けれど、俺が精霊になった時と異なり、心地好い。

天宮市の外れ、開発地の高台にある公園に、俺はいた。

俺を迎えたのは、春の穏やかな風と、そしてもう一つ。

「ははっ、これは敵わない」

司令からのプレゼント。

「こいつはでかすぎて、持っていきませんよ、司令」

今、まさに水平線から顔を覗かせる、あの朝日だった。

最高に眩しくて、最高にビッグスケール。この宇宙で一番素敵なものをプレゼント

されてしまった。

「惚れ直しましたよ、司令」

これは、ちょっとやそつとじゃ返せないなあ。

落下防止柵に頬杖を付き、太陽が総て露になるまで見つめることにした。今は、俺

が太陽を独り占めだ。

俺は、司令と約束した。

司令と、お兄さんの危機には必ず現れると。

安請け合いしちやつたな。つまり、正義の味方って訳だ。触手系変態精霊には、荷

がちと重たいか。

だが、ただ無意に生きていくより何倍も楽しい。

「さあ、俺の人生デイトを始めようか」

誰も聞く者の無い俺の言葉が、宙に溶けて、消えた。

Date. 3 「無職は辛いよ」

司令と約束して、一週間。

俺、ちゃんと生きてます。いいい。流石に餓死したらカツコ付かないわ。

で、どうやって生活してるかって言うと、まともな生活してない。

公園で水飲んで暮らしてる。マジで。

OK、言い訳を聞いてくれ。バイト、応募したんだよ。コンビニにファミレス、薬局、スーパー、喫茶店、百貨……。だけど、全部落ちたんだよ。何が悪かったと言うのか。15歳らしからぬ色気か。ムンムンだったからか。おかしいなあ、露出の少ない私服姿になって行つたんだが。

一軒、採用してくれそうなスーパーもあつたよ。ただ、脂ぎつた顔のハゲデブ店長が、鼻息荒くしながら迫ってきたもんで、条件反射で股間蹴り上げて逃げてしまった。女性からすると男性って結構欲望駄々漏れつて良く分かった。

大学生位に変身して面接を受けることも考えたが、霊力漏れでASTに見つかることを考えるとそれもアウト。結局俺は、失意のままに五河家近くの公園に戻つてきた。

腹減つてたもんで、気を紛らせようと水道水飲んだだけどき。無茶苦茶美味いの、これが。

水の精霊になつたせいとか、水を摂取するだけで活動可能らしい。疲労も取れる。雨の日なんて絶好調。空腹感が無いの。だから、もういいかなー、つて。人間辞めちまつたな、ホントに。町内の自販機の下とか漁つて小金を集め、たまに弁当とか買つてる。

いつも公園にいるせいか、精霊になつた初日に遊んであげた小学生になつかれた。友達と一緒に菓子持つて現れるもんで、スナック菓子が俺の貴重な嗜好品になつてる。

それと、この七日間で少しだけ精霊の力に理解が及んだ。触抱アルミサエル聖母を試すことは出来なかつたが、霊装を弄くことは出来た。どうも、量子化してから構成を組み直すと、好きな服に出来るらしい。もっと早く気付きたかつた。

今現在は、フリル付きブラウスト、コルセットタイプの青いハイウエストスカートに変換してる。足元はハイソックスに黒ローファーだ。つまり童貞を殺す服だよ。今は毎日小学生の視線を胸に浴びている。濡れるツ！節操ねえな俺！これでバイト行つたから落ちたんじゃねえの!?

コホン。

社会不適格者なりに、まあ社会に溶け込んでるって訳だ（公園の主として）。美少女

じゃなかったらただのクズだが。他人ヒトをクイモノにするから精気を奪うことでより強くなりながら生きることが可能、と触抱聖母が言っているが、司令との約束だ。

で、精霊としての生活が軌道に乗り始め、三日目で暇が生まれたんだよ。

やること全くなえ。本来なら学校行ってるハズの所が、すつぽり抜けちゃったからなあ。どーしよ。暇だわ。

と思い、俺は図書館で一日の半分以上を過ごしている。

ウォータークーラーがあるから食事の心配は無く、また一日中人が一定以上いるので、ASTに気付かれても手が出しにくいと判断した。

人間、極限まで暇になると知識を求めようになるとは思わなかった。今は、高校のカリキュラムで習う内容を徹底して読み込んでいる。強制されたもの、って思うと飽きやすいけど、自分からやると楽しい。自分のペースでやれるしね。

ところでエロ本はありませんか。無いですか、そうですか。ではラノベで手を打ちましょう。最近のラノベは無駄にエロに傾倒している。

……………。

午後三時か。ちよつと疲れたな。気分転換に散歩に出掛けよう。

そういえば、土道先輩オニイサンに逢ったことが無い。どんな人なのか気になるなあ。

多分、俺や神無月みたいに変態では無いんだろう。司令が顔を赤くする位だから

な。人の上に立つならぬ、人の尻の下にいる俺達とは心の次元が違うのだ。……………こないだは、別に俺から椅子になった訳ではないんだが。

よし、試しに士道先輩に逢いに行ってみようそうしよう。

そうと決まれば話は早い。

早速来禅高校母校へ凱旋だ。



物理準備室。

士道は、コントローラーを握り締めていた。

『せーんぱい♪えへへ、今日はあー、一緒に帰りませんかー?』

① いいよ、帰ろう

② すまない、持病の癪が

③ 俺、今日は下校しないんだ

「くそ、分からない……………」

『恋してマイ・リトル・シド』。五河士道に課された愛を囁くためのスパルタ式ジゴロ教育。要す

るにラタトスク謹製恋愛ゲームだ。

様々な黒歴史を抉られて枕を濡らす日々を送りながら、土道は着実にゲームを進めていた。少し、自信も付いてきていた。

……が。ここに来て久し振りにおかしな選択肢が現れた。

「下二つのせいで、まともな①が地雷にしが見えない……」

現在攻略中なのは、前髪を真っ直ぐに切り揃えた、バスト90オーバーのおっとり系後輩キャラ。お嬢様な様子もあつたが、比較的まともな選択肢が続いたので、不意を打たれた気分だ。

（ここは回答時間一杯まで待つべきか。それとも、実は第四の選択肢がメッセージボックスと同じ色で隠されて表示されているのか……）

分からぬまま、時間ばかりが過ぎていく。

「次は何をペナルティにしようかしら」

「昨日はノーミスだったからね。追加調査する時間があつたので、仕込みは充分だよ。ここにリストアップしてある」

「へえ、どんな？——」ブツ!!何これ!?!土道あんた、こんなのもやってたの!?!」

背中越しに聞こえる令音と琴里の声に怯えながら、地雷でないと信じて①を選ぶ。

『ホントですかあー!?!やったあ!外に車を待たせてるんです、一緒に帰りましょ、先輩!』

はしやぐヒロインに連れられ、CGは車内に切り替わる。他愛ない会話が続き、ようやくと土道は胸を撫で下ろす。

「ふう………騙されないからな」

しかし、舞里司令可愛い妹からのお言葉は、土道にとっては予想外だった。

「あら土道。あんた詰んだわよ」

「え？」

驚いて振り向くと、カんだ拍子にコントローラーのボタンを押し込んでしまい、会話が進む。

『それで先輩、今度——』

ドンツ!!

『おいコリアー!降りろ!免許持ってんのかコリア!』

「は？」

唐突に事故が起きた。運転手が歩行者に気付かず、跳ねてしまった。軽傷で済んだようだが、激怒している。

『すいません許してください!何でもしますから!』

『ん?』

あれよあれよという間に、学校にバラされたくなければ慰謝料を払えという話にな

り、ヒロインは2000万円、士道は500万円を口座に振り込めと言われてしまう。「お、おい、これって……………」

戦慄する士道。汗が頬を伝ってコントローラーに落ちた。会話を進めるのが恐ろしい。それが黒歴史解放のカウントダウンにしか思えなかったからだ。だが、まだ救いはある。そう信じて、ボタンを押した。

『翌日。彼女は学校から消えていた。彼女の住所を訪ねても、何ら関係の無い雑居ビルしか無かった。残ったのは、彼女との想い出と、この借金のみだ。』

『エンド』

「嘘だろおおおお?!」

コントローラーを放り投げて、頭を抱える。狂乱する兄に向かって、琴里は嘲笑を投げた。

「いつからヒロインが好意ばかり向けてくると錯覚していた?」

「好感度メーターの意味は!」

「金蔓メーターだったんでしょ」

「分かるか!」

何とガタガタ喚こうと、最早逃れられない。士道の黒歴史がまたも解き放たれる。「今回見つかったのは、シンが考えていた物語のオープニングテーマソングの歌詞だ」

令音がスツと取り出したのは、一枚の紙。何度も何度も鉛筆で書いては消して直してを繰り返して作られた、青き日の土道の力作だ。

「うわああああ!?!」

「しかも五線譜が解らなかつたのか片仮名で音階が振られている」

「やめてええええええ!!!」

「——を、既にコピーして山吹亜衣君の下駄箱に投函してある」

「始まる前から終わっていた!?!」

「く、くくつ………音読しようかしら、土道?」

「堪忍してつかあさい!!」

流れるような土下座。一旦恩情でこの場は凌ぐも、しかしまだこれで終わった訳ではない。

「ほら、早くクリアしなさい。次は放送室から劇団所属経験のある機関員が校内放送でアツく音読するわよ」

「ここは地獄だあああつ!」

「違うわ。私が、私達が地獄よ」

「知るかよ?!」

もちろんバツチリ放送された。

因みに正解は②だった。解せぬ。



自分、一言いいですか？

え？先輩何やってんの？

ギャルゲ？

霊装を制服に変換して学校に潜入。二年生の人達に聞いて回ったところ、先輩のクラスメイトだという殿町という人から『最近はよく物理準備室に先生といる』と聞いたので、早速やって来てドア越しに会話を聞いていけば………実にカオス。

因みに件の殿町さんだが、

「君何組？今度お茶しない？」

と誘われたので、

「三日間連続耐久可能な絶倫だと、自信を持ってお返事頂けるなら考えます」

と答えて立ち去った。公衆の面前で。一回もそんな経験ありませんが。

後日、学校七不思議に『謎の変態美少女』が追加され、併せて土道先輩絶倫説が広まったらしいが、そんなことはどうでもいい。

ここまで来たついでだ。直接土道先輩と話してみたい。司令もいるみたいだし、挨拶くらいはしていこう。

物理準備室のドアノブに手を掛ける。回らない。鍵が掛かっている。

「ふんっ!!」

ドアが開かない、ぶち破ろう。ノブを握り潰してドア板から引き抜く。勢い良く音を立てて穴の開いたドアを蹴り倒し、ダイナミックに入室する。

「ちわーっす！三河屋でーっす！」

選手宣誓するように、右手を高らかに上げ、元気良くご挨拶。可愛い後輩は先輩に気に入られるからね。

「アホか!!」

「あだだだだだだだだだだだだだだ」

速やかに司令にコブラツイストを掛けられました。うわあ、この体格差でこうもアツサリやられると尊敬するわ。惚れるわ。足もげるわ。

「ちよい、しれえ！ごめんなさい！許して！サプライズしたかったの！」

「アンタの頭の中がサプライズよ！」

「それはつまり俺が生粋のエンターティナーということでおk？」

「無駄にポジティブ!？」

ああん、一週間ぶりの司令もふつくしい。あ、チュッパチャップス羨ましい。甘味！甘味が欲しい！

「こ、琴里……誰だ？ラタトスクの人か？」

俺が琴里司令と戯折檻れていると、突然のことにフリーズしていた土道先輩が口を開く。やれやれと溜め息を吐きながら俺を解放した司令は、立ち上がると飴の棒をピコピコさせながら否定する。

「あー違うわ。コイツは精霊よ。珍しく人間に友好的なね」

「な、精霊!」

まさかこんなところで精霊に出くわすとは予想していなかったであろう先輩が驚く。だろうね。恐らくギャルゲで予行演習してたんでしょ、デートの。

「先日、君に我々の行動目的について話していた際、突如出現した精霊だ。ASTからの識別名は〈サツカバス〉。AST十五人を相手に触手プレイをやつてのけた大型新人だよ、シン」

眠そうな人……令音さんだっけ？がより詳細に紹介してくれる。え、何その識別名つての。淫魔？サイコーじゃねーか。あーエロスエロス。悪意を感じるわ！これはASTに目を付けられたな！ヤバイ！

「触手プレイ!」

あらら、年頃の男子（一歳しか離れてない）にはちと刺激が強いワードだったかな。では、一つからかってみよう。

「はぁーい士道先輩、私、色無誠って言いまーす♪よろしくお願いしまーす!」

言うが早いか立ち上がり、先輩に抱き付いてみる。右腕にタックルしてホールドし、胸でガツチリ包み込む。フ、これか触抱聖母のやり方よ（琴里司令とはちがう）。

「な、な………ちよつ、俺は君の先輩になった覚えは無いんだけど!」

「ええー、覚えてないんですかあ? ゲンメツ。私とはお遊びだったんですか?」
「へえっ!」

おー、慌てる慌てる。顔真っ赤にしちやつてまー。女の子との出逢いは経験しなかつたと見た。俺も無かつたが。

「そこまでにしなさい変態。中身男のくせして、何をぶりっ娘してんのよ」
「はい!?! 男!?!」

「そうよ男よ。同性に誘惑されてその気になつてるんじゃないわよ」

あ、ネタバレされた。しょうがない、マシユマロホールドは止めましょうか。司令がお怒りだ。鼻の下伸ばしてると士道先輩にファツキンアングリー。俺にもお怒りだ。ブリーズファツクミー。但し司令に限る。

「司令のいけず。改めて、俺は色無誠。一週間程前に精霊になった、元・来禅高校一年三組の男子生徒です。宜しくお願いします。」

「え、そういうのも居るのか？」

「居るのよ。あ、土道。こいつは性転換したことに喜んでる変態だから、攻略の必要は無いわ」

「ソウデスカ」

先輩が目を白黒させている。キャパシティを展開が凌駕しているということッ！司令のお兄さんとしては興味あつても、野郎オトコとしては興味一切持つてないんで！俺とデートなんて結構です！そんなことより美少女持つてこーい！

「で、アンタ何しに来たのよ。呼んでないわよ」

あら、にべもない。ツンデレさんですか。違いますかそうですか。すると本格的☆不機嫌ですな。

「やだなー司令、ちゃんと生きてるって報告ですよ。土道先輩ヒカルゲンジに会ってみたかつたって言うのもありますが。それだけなんでそろそろ帰ります」

「そう。全部知ってるわよ。バイト落ちたことも、水で生きてることも含めて全部。言つたでしょ、見てるって」

「俺にプライバシーは無いのか……!?」

「因みにバイト受からなかったのはラタトスクの根回しよ」

「今明かされる衝撃の事実ウ!？」

「お、俺の苦勞返せ! 身体で! グへへへ!」

「こんなんじや俺、司令の力になりたくなくなっちゃまうよ……」

「はいはい。早いとこ諦めてウチでバックアップさせなさい」

「前言撤回! 司令の心遣いに感謝! でもまだいいです!」

俺、ちよろい(確信)。でも今は、この生活が楽しいんだ。やっと動き出してきた俺の精霊ライフ、手放す訳には行かないぜ。

と、アホがまだいける宣言すると、予想していたのか司令は溜め息を吐く。

「だろうとは思ったわ。令音、あれお願い」

「分かった。誠、これを受け取ってくれ」

手渡されたのは、スマホ。見た目は何ら変わったところの無い、普通のスマホだ。いや違うわ。『Orange』て何処のメーカーだ。パチモンじゃねーか。

「それは顕現装置を応用して作られた靈力で動くスマートフォンだ。私と琴里、それからシンのアドレスが登録してある。連絡用として持っていて欲しい」

「アンタが精霊のままでもいいって言うから、特別に作ったのよ。感謝しなさい」

早速スマホを立ち上げる。

お、もうこんな時間だ。今まで時計無かったから、助かる。そろそろ行かなきゃな。

「ありがとうございます！では失礼します！」

「へ？アンタどつか行く用事あんの？」

「ええ、ありました。ドアの修理だけお願いします！それじゃ！」

言うが早いか、俺は窓から飛び出して学校を後にする。

待つてるんですよ、司令。

今日も可愛い小学生達（とお菓子）がね！

明らかに小学生にたかつてるわ。俺最悪だわー。オトモダチつてことでいいよね

？



「行つたようだね、彼」

「ええ。元氣そうでまあ何よりつてとこかしら」

窓から見送っていた誠が見えなくなつたのを確認し、琴里と令音は窓を閉める。

「なあ琴里。精霊つて、誰しも救いを求めてないのか？」

見計らつたように、土道は口を開く。土道から見て、誠は、名前の無い精霊と異なる

り、生き生きとしていた。

だが、琴里の表情は、優れなかった。

「それは、無いわね」

琴里は知っている。土道が他人の絶望に敏感なことを。

だから、土道が気付かなかつたからこそ、不安に思った。

「土道。先に言っておくわ。頭の片隅に記憶しておきなさい。誠のことよ。先週から、アイツの経歴について調べさせたの」

「ああ」

妹の様子に、土道は何かを感じとり、自然と応答にも力が籠る。

少し言うのを躊躇ってから、琴里は調査結果を告げた。

「小学校高学年の時に父親から虐待されて、中学生の間は施設に入れられていたみたいよ」

「何だっ!?」

つい大声を出してしまい、慌てて口許を押さえる。暫し沈黙が流れるが、琴里の言葉を引き継ぐように令音が語りだす。

「施設の管理人によれば、自己防衛が働いたのか、誠は虐待当時の記憶を完全に忘れていくらしい。しかし、何らかの心的外傷が残っていてもおかしくない。彼は今、危ない橋

を渡っている可能性もある」

「力に、なれないのか？」

「無理ね。下手に手を出すと、私達がトラウマを抉じ開けることになる。私達に出来るのは、祈ることと、誠が助けを求めた時に、駆けつけてあげることだけよ」

だから、琴里は誠の邪魔をした。

（絶対に、後悔させてやる。早く泣きついて来なさい）

もう居ない男女に思いを馳せ、琴里は目を瞑る。

（——アンタが、壊れる前に）

第一章―十香デッドエンド―

Date. 4 「邂逅、十香」

十香^{トリーカ}

私の名前。

「へプリンセス、今日こそは」

十香^{トリーカ}

私のこと、だ。

「殺す」

十香^{トリーカ}

十香^{トリーカ}

ああ、嗚呼、今はこの名を噛み締めよう。

例え渦巻く悪意と殺意の中でも。

果てぬ破壊と荒廃の中でも。

無限の孤独が再び訪れようと。

士道^{シンドー}がくれたこの名前を。

トスカ
十香。

初めて受けた、祝福を。

「いつかの私の言葉に継ごう、トビイチオリガミ」

「……………」

憎い、憎いあの女。

何度も私を否定する、あの女。

「私は、十香だ」

「……………そう。記憶はしない」

今日からは、言い返せる。

私は十香だと。

「だろうな、期待はしていない。自慢したかっただけだ。ばーかばーか」

「嫌に、饒舌」

「貴様もな」

「一緒にしないで、精霊」

「貴様はトビイチオリガミ。私は十香。端から違うではないか。誰が一緒なものか」

「今だけは、肯定する。お前を否定するために」

「力で否定出来ないのか？」

「ッ!!」

それだ。その殺意。害意。悪意。敵意。

私を乱し、侵し、苛み、嘲り続けた。

貴様の振るう刃には飽きたが……………。

今日は、付き合ってやってもいい。

私は、^{トリーカ}十香……………。

「その美少女！確保オー——っ!!」

「何——ぐわああああっ?!?!」

突如戦場に現れた、謎の女。私の腹に全体重を乗せて飛び付いてきた。トビイチオリガミとの打ち合いが中断され、私は瓦礫に沈むことになる。

「なっ、何をする!?!何だ貴様は!」

痛い。肉体の痛みは感じなくなって久しかった。つまり、メカメカ団の連中とは、明らかに格が違う。

「おう！お前も精霊だろ？そうなんだろ？俺もなんだよ！っはー！」

……のだが、私に馬乗りになるこの女は、私を惑わせる。

精、霊？お前も？

「友達になろうぜ！」

「ともだち？」

「おう！」

ともだち？何を考えている。

「何だ、それは」

こいつは、何を言っているんだ？

「お前は……………〈サツカバス〉!!」

トビイチオリガミが、謎の女を呼ぶ。

奴の敵なら、私の同類なのだろう。

プリンセス私の呼び名と似たようなものが飛び出したし

な。多少、警戒を解いてもいいか。

「んお？おお！くっころ団じゃねーか！お前襲われてたの？」

「退け、邪魔だ」

「いやん、もつと激しく荒々しく」

覗き込んでくる女を押し退け立ち上がると、サンダルフォン塵殺公を構える。女は何やら嬉しそ

うにしていたが、すぐに立ち上がると埃を払う。

「襲われていた………とと言えるのか？ 傷も付かぬ砲を撃たれ、刃を向けられるのが」

「一応言えるんじゃないの？」

「そうか。煩わしいな」

「あ、そう？ じゃあ、ここは俺に任せてちよいと見物しててよ」

私を遮って前に出た、女の姿が変化する。肌の露出した破廉恥な姿。しかしそれだけで、何処か神々しさもある姿。

「へ神威^{アー}霊装^シ・無番^ト、こいつも久しぶりだな」

自分の容姿について、深く考えたことは無いが。こいつも私と同類だ、と確信した。成る程、だから友達か。

言葉としては識っているが、まるで感覚の理解が及ばない。これまで居たことがないからな。

一番該当しそうなのは………土道^{シド}か。

「へ触^{アルミサエル}抱^{ヤツド}聖母^ル、【寵愛】!!」

霊力の嵐と共に、空中に水晶の柱が現れ、体内に取り込まれる。すると、奴の身体から無数の水の筋のような、蔓のようなものが飛び出す。

「なあお前、名前何て言うの？」

奴は、軽い調子で問うて来た。少し前なら、答えられなかったが、今は違う。

「^{トカ}十香だ」

「OK、覚えた。俺は誠！色無誠だ！十香！」

「何だ！」

首だけをこちらに向けながら、誠は叫ぶ。

「親しみを込めて、名前を呼び合える奴、これが友達だ！」

時が止まったように思った。

何と。

何と、暖かい。

名前とは、これ程までに暖かいのか。

「俺は呼んだぞ、十香！お前は呼んでくれるか!？」

嗚呼。断れる訳が無いだろう。

それは、私が求めてきたものだ。

お前は^{シド}士道と同じだ。

他の奴とはちよつぱり、ほんのちよつぱり違う。

私のことを、否定しない。肯定してくれる。

「ああ！勿論だぞ、誠!!」

それだけで、誠は嬉しそうに笑うのだ。

「OK!じゃあ、友達のために一枚脱ぎますか!!」

「一肌ではないのか?」

「俺は変態さんだからな!変な友達だからって嫌がるなよ?」

「変態なのか。ばーかばーか」

「何で罵倒されたん俺!?あ、変態だからか」

「そんなことも分からないのか?仕方無い友達だな、ばーかばーか」

「俺の扱い荒いなチクシヨウ!慣れてるが!」

何やら叫びながら、誠はメカメカ団の群れに飛び込んでいく。結局脱いでいないが。水の蔓で捕まえては投げ、捕まえては打ち、捕まえては……くすぐり?

ともかく、多人数相手なら私よりもずっと効率が良さそうだった。あのトビイチオリガミと、指示を飛ばす隊長格の女くらいしか、誠に対応出来ない。

適当な瓦礫を転がし、その上に座って誠を待つ。

ばーかばーか。

例え変態でも、誠が良い奴だという事くらい、私にも分かる。

士道は私を私にしてくれた。

お前は私を私と認めてくれた。

どうして、拒絶出来ようか。

「……………ばーかばーか」

本当に、ばかばかり。

でも、……………ありがとう。

今はまだ、お前やシドーがちよっぴり怖い。私にとって、未知な存在だからだ。私を肯定してくれる者というのが。

だから、もしも、もしもちゃんと仲良くなったら……………いつか言う機会もあるだろう。

その時は、……………どうしたら良いのだろう。

とにかく、心から、ありがとうと言おう。

「誠め、時間が掛かっているな。本当にしようがない奴だ。ばーかばーか。」

嫌にくすぐつてばかりだな。あれが有効なのだろうか。もしや、戦い慣れていないのか。メカメカ団の連中の、女ばかり拘束しているぞ。

「男は要らん！帰れ！美少女だ！美少女成分が足りないんじやアアアアア!!」

『イヤアアアアアア!?!』

「バカ野郎そこは悲鳴上げずにキビキビ向かってきて返り討ちにされる！そしてメは、

くつ殺せ、だ！お前ら身体も張れないんじゃないや意中の相手も落とせないまま悪の幹部に弄ばれるぞ！！」

『何の話?!』

「同感。身体的接触や性的興奮を伴う積極的なアプローチは重要」

「アンタ分かつてる！俺は色無誠だ！」

「精霊であることが悔やまれる。鳶一折紙」

「いざ尋常に立ち合うがいい（ケイネス風）！」

「望むところ」

『エエエエエ（。D。）エエエエエ』

………何故かトビイチオリガミと意気投合しているが。他の連中を蔓であしらいつつ、拳と刃の応酬を繰り返して何やら語り合っている。わざわざ天使でなく自分の拳で戦う意味が分からん。

「誠!!私は別に面倒なのでやりたくないのだが、お前がどうしても手伝って欲しいと言うなら、助太刀してやらなくもない！」

「いや、大丈夫だけど」

「助太刀してやらなくもない！」

「助けて十香さん！」

何だ、やっぱりそうではないか。うむうむ。仕方の無い奴め。

「任せろ誠!!この私がいれば、メカメカ団など烏合の衆に過ぎんぞ!」

塵殺公を握り締め、私は一気に誠の前に飛び出した。



時間は少し遡る。

士道先輩に逢った日から三日経った。今は、時刻にして午後五時二十分過ぎ。

丁度何時もの小学生が公園から帰った辺りで、突如空間震警報がした。

慌てて子供たちが無事か近隣のシエルターに駆け付けたところ、全員親御さんと共に避難していたようで安心した。俺に気付いた子が手を振ってくれたのは可愛かったなあ。子供に罪無し。シヨタとロリは正義。

因みに俺は親御さんに『公園のお姉さん』と紹介されていた。何処と無くいかかわしく感じた俺は汚れちまってると思うの。

さて、無事を確認した所で、今日は精霊に会いに行こうと思う。人の流れに逆らつて上手いことシエルターを脱出、誰にも呼び止められることなくその場を後にした。

俺以外の精霊がどんな奴なのか。どんな力を持っていて、何を思っているのか。直

接本人に聞いてみるには絶好のチャンスだ。

あと、可能なら友達になりたい。ボツチ辛い。考えてみ？毎日毎日公園の水が主食とか何さ。腹は満ちるが心が満ちぬ。ここは一つ、精霊ならではの愚痴を精霊同士でしたい。つまり精霊トーク。セイトトーク。あ、漢字で書けそう。聖徳？………太子？飛鳥文化アタック？

と、言うわけで。俺さんこちら、手のなるほうへと大☆爆☆走。何となくそれっぽいほうへ走るっ！え、根拠？勘？取り敢えず精霊の全力で走りや天宮市くらい五分で一回り出来る！うおおおおおっ！

おっ、何か母校の方角が喧しいぞ！ドンパチやつてるみたいなのがするわー怖いわー！精霊居るの間違いないわー！俺も混ぜてー！



———で、今に至る。

「おい、誠よ。何処を見ている」

男の夢の詰まった胸のフツ

「十 香 山」

「どの山だ？」

「汚れた目でお前を見て悪かった」

止めてくれ、澄んだ瞳で山間部をキョロキョロ眺めるのは止めてくれ。

「大事無いか？水道とやらで洗うか？」

「本当に悪かった。大丈夫だ」

おう誰か俺の目くり貫いてくれ。自分でやれ？怖くて出来ん（ヘタレ）。

現在どうなったかと言うと、ASTの皆様を見事にブツ飛ばし、俺の城いつもの公園にいる。ホントは触手プレイを堪能したかったんだけど、張り切った十香が全員塵殺公でブツ飛ばしていったもんで獲物が失せました。因みに比喻じゃなく、文字通りね。

剣リアライザが顕現装置に衝突した瞬間、バットでゴムボール打つたみたいにかツ飛んでつたのはシユールだった。どうやったお前。何がリアライザだ、全然現実味リアルがねえ。俺のアルミサエルでグローブ作って今度野球やったらるか。

最後に残った鳶一折紙は十香と打ち合っただけあり、元氣100倍十香ちゃんにも何とか食い下がっていた。ただ、流石に無茶だと思つたので、「仲間回収した方が良くない？」って言ったら「借りは返す」と言いつつ引き下がっていった。二対一だからね。

精霊二体が結託したということで、流石にASTも黙ってない………つてか、面子が立たなかつたのか、少し間を置いて増援を送り込んできたけど、これも漏れ無くお星様になりました。精霊強すぎイ!?もう十香一人でいいんじゃないかな。あ、俺も精霊

か。

まあ、やり遂げたつて言わんばかりの笑顔で十香が汗拭つてたから、いいとしよう。ストレス解消したつて感じのいい笑顔だったよ。

ああ、今の人生、とかく現実味が無いことだらけだ。リアル直売所の在庫一掃セールでもやつてるんか。ちよつとストック買いたい。

遠い目をしつつ、公園のブランコに佇む。

ついさつき、お疲れさまという気持ちを込めて（俺殆ど何もしてないので）、サクマドロップをあげたら喜ばれた。ハツカはウケなかったが。何でや。ハツカ飴もなかなかだろ。缶で保管出来るサクマドロップは俺の貴重な甘味なんだぞ。美味しそうに一缶ペロリと平らげやがつて。可愛いじゃねーかチクショウ！また仕入れとくぞ！

「わはははははは！」

そんな十香だが、今は大はしやぎでブランコ漕いでる。描く軌跡がほぼ180度……いや、270度近いんだが。おめえ自前のアクションでもつと激しいこと出来るでしょうに。ホント子供っぽいな。可愛いから許す。

「それくらいにしとけよー。危ないぞー」

「む？ そうなのか？ 一回転したかったのだが」

「頭打つてブランコ壊れるから止めなさい」

十香の心配へブランコの心配

こう考えると我ながら酷いな。だが実際精霊の方が頑丈だから笑えん。

注意したら、十香はブランコに立つのを止め、俺と同じように腰を降ろす。さて、折角だから少しお話しするか。

「なあ十香。お前いつも何してんの？」

「ぬ……………こちらに来てすぐに毎回メカメカ団が現れるから、それと戦うだけだな。そうでなければ、臨界で休眠状態にある」

「——ああ、俺行ったこと無いんだよね臨界」

臨界。精霊達が普段いる世界。こつちに来るときに空間震が起きるのが、精霊が目の敵にされる最大の原因。だが、俺一回も行ったこと無い。疲れても寝ても行けない。何でや。

「何と。では普段は何をしているのだ？」

あら、質問が同じ質問で帰ってきちゃった。まいつか。

「図書館行って本読んで、この公園で子供と遊んで過ごしてる」

「トシヨカン？」

かくん、と首を倒して俺を覗く十香の頭の上に、疑問符が見える。こつちの常識はあんまりないんだな。

「楽しいところだぞ。色んなことが載ってる『本』を読むんだ。ただ、皆集中してるから、大声は出せないな」

「おお、興味が湧いたぞ。連れて行ってくれ」

未知への興味に、拳を握り締めてブンブン振り回す十香。瞳を輝かせる所を見ていると、何かを連想させる。

……………オオカミ少女？違うか？

「いや、それが残念ながら今日はお休みだ」

「そ、そんな……………」

分かりやすくしよぼくれる。純真な子供そのものだ。

……………ウケるかな、これ。

「安心しろ、安心しろよ十香。ここに図書館で借りてきた本がある。本当は良くないけど、貸してあげる」

(俺) つ「桃太郎」スッ

小学生達……………いや正確には、彼等がすっかり俺のことを信頼して、更にチビッコの妹や弟連れてくるようになったもんで、絵本も仕入れてたのです。

直感した。

十香には、桃太郎。

……流石に大丈夫だよな。字大きいし平仮名だし。

「ぬ？これは……何だ？」

「桃太郎。日本が誇り、国内知名度・人気共にナンバーワンの大冒険記だ」

嘘は吐いてない。

嘘は。

「おお！凄いな！」

「だろ？」

「で、これはどう見るのだ？」

「そっからか!!」

いやあ、本を知らんとは!!参った！大誤算!!

「ならば仕方無い。ここは俺が長年（二、三日）培った読み聞かせスキルを披露してやる

しかないようだな！」

「わくわくするぞ！」

悟空かお前。今日から語尾に（悟空）付けろや。

まあいい。この輝く瞳に全力で応えなければ。

「昔々——」

「読み聞かせ中」

「めでたしめでたし」

そつと絵本を閉じる。そつ閉じ。古いドアが軋みそうなくらいにそつ閉じ。

「誠」

「何だ？」

「もう一回頼む」

「もう三回読んでぞ?!」

十香ちゃん、まさかの大絶賛。

桃から桃太郎が生まれて目を白黒させ、キビダンゴを食べたいと言い出し、私もお供するぞと拳を振り上げ、鬼との戦いでまさかのハラハラドキドキしてらした。

しかも、鬼ヶ島から宝を持ち帰り、幸せに暮らしましたと締めたら、「良かったなあ」とうるうるする始末。

この子感受性強すぎイ!? チビッコ達の中に放り込んでも違和感無いぞ! ただし見た目は考慮しない!

「それだけ気に入ったのだ! 誠、私も鬼を成敗する!」

「今いねえよ! 桃太郎がやつつけたよ!」

「むう………ならばキビダンゴをくれ」

「あたしやババアか!」

「ならばもう一回………む？」

十香の言葉が途中で止まった。何だ？

「無念。そろそろ臨界に帰るようだ」

「良く保った方じゃねえの？」

「かもしれないな。そうだ、誠。一つ聞きたいことがある」

「何だ？」

「シドーにデートに誘われた。デートとは何だ？行っているものだろうか？」

へー、先輩に会ったのか。成る程、早速司令が動いてるって訳ね、OK。ならば援護射撃しとこうか。

「デートってのは、男女で遊びに出掛けて仲良くなるのが目的だ。土道先輩はお前と仲良くしたいんだよ。行っていいんじゃない？」

「何と、誠もシドーの知り合いだったか。うむ、なら安心だな」

よし、良いじゃねえの。やはり同類からの言葉つてのは良く効くって訳だ。

「では、誠も共に行かぬか？」

男女恋愛を分かかってない。これはダメだ。それは友達としてのベストであって、デートの上では最悪だ!!

「あのな十香、」

「では誠、今日はさらばだ!また会おうぞ!」

「十香、ちよい待て!十香ちゃーん!?!」

あ、消えた。

間 に 合 わ な か っ た 。

.....

かくなる上は。

「あ、もしもし。誠です」

『何よ突然。何かあった?』

助けて琴里司令!俺ピンチ!

「あのー、十香っていう精霊に会ったんですけど」

『へえ。仲良くなった?』

「いや、まあそうなんです。士道先輩とのデートに付いてこないかと誘われたんです

けど」

『え?』

「どうしたらいいですかね」

『……………行くしか無いんじゃない?』

「マジっすか?」

『十香を説得して、アンタが影から十香をサポートしなさい。突拍子も無いことしないように。土道には黙っておくから』

おいおい、勘弁して司令。

それって、

俺に精霊版ラタトスク機関でもやれって言うの!?

変態には荷が重いんですけど!?

Date. 5 「デート前夜の『デート』」

十香のデートを補佐する役目を、司令より仰せつかった日の夜。

「なあ、聞いてくれよお嬢ちゃん。俺、なんも悪いこたあしてねえんだよ。なのにさあ？ 上司はしゃんとしろもつとやれ仕事出来ねえつてガミガミ騒がしいし、嫁さんはもつとお金入れる入れるつて捲し立てるんだ。子供はすっかり反抗期。毎日楽しくねえよ。ヒック」

「大変だなおつちゃん、元氣出しなよ。ほら、飴ちゃんあげる」

「ハツカ飴か。いやハツカ飴しか無いのか」

「他のは友達に食われた」

「あつはつは！お嬢ちゃんも大変だな！」

酔っぱらいの中年のおつちゃんがフラフラと公園に迷い込んできたので、相手してやっていた。俺はスナックのママか。開くか。公園スナック『アルミサエル触抱聖母』。キャミソールのママがお出迎え。店主が未成年なのでお酒が出ない。常連客は小学生。どっちかっというところでお嬢ちゃん、何でこんなところにいるの？

「ところでお嬢ちゃん、何でこんなところにいるの？」

「ここが俺の自宅だよおっちゃん。靴は脱いで上がってくれよな」

「あつはつは、お嬢ちゃんは冗談が巧いなあ！」

………言えない。ホントに住んでるとか言えない。おっちゃんが信じてないからいいけど。

「おっちゃん、そろそろ帰らないと奥さんにまた怒られるぞ。また愚痴聞いてあげるか。ね？大変なら家まで肩貸そうか？」

手を貸しながら立ち上がらせ、おっちゃんと共に公園の入り口へ歩いていく。

「おっぱい貸して」

「セクハラですよシャチョサン。どんと来いやウラウラ」

大丈夫？おっぱい揉む？俺に頼めばやらせてあげよう。ただし、相手は選ぶ。

「男らしいな!?でも止めとくよ。話聞いてくれただけで満足だ。ありがとうよお嬢ちゃん」

「おう。車に気を付けてなー！車乗るならタクシーだぞー！」

赤ら顔のおっちゃんが見えなくなるまで見送ったところで、俺は悠然と敷地内に戻り、ジャングルジムに登る。街灯が俺の背中を照らし、夜の闇の中にうつすらと影を作り出す。

その影の色が濃くなり、不自然に延びて行く。

否。それは違う。寧ろ、被さっていた他人の影が、本人の元へと帰っているのだつた。

「随分人間にお優しいんですね、誠さん？」

「あ、そこに居たんだ」

滑り台の上に佇む、一人の少女。

黒とオレンジで、艶やかに、妖しく、それでいて愛らしくデザインされたドレス。

左右で長さの異なる、特異なツインテール。

金色の左目には、時計の針。

俺の同類。バケモノ 精霊だ。

「アンタは誰だ。俺を知っているらしいな」

「わたくし、時崎狂三と申しますの。お友達になりませんか？」

「即答不可。おっちゃんを摘まみ食いしようとしてたからな」

あらあら、手厳しい………と笑うが、ここまで恐らく奴の想定内。俺が気付いてると知ってておっちゃんを狙った。

気付いたさ。霊力がおっちゃんに迫ってたことくらい。そこに悪意があることも。そこに殺意が無いことも。だから帰らせたんだ。折角の酔いが覚めちゃうだろうからな。

触抱聖母の例があったから分かるが、こいつは人間を喰うタイプだ。わざわざ接触してきたのも、何か裏があるだろうな。

「それで？ どうすんのお前。俺は水飲んでりや死なないから、お食事ディナーのお誘いなら遠慮しとくぞ」

「中々ワイルドな生活をされてますのね」

「ほつとけバーロー」

せやかて工藤、こんな生活辛いんや。水が美味いと思えなかつたらとづくに司令に泣き付いてる。狂三に比喩オフレートに喩まれて的に表現された途端、何か悲しくなった。鉄骨に腰を降ろし、頬杖を突いて不機嫌アピールしてみる。あ、笑いやがった。コンチクシヨウ。

「くすつ、面白いお方。わたくし、今日はお尋ねしたいことがあって参りましたのよ？」

「何さ？」

「精霊の力を封印出来る人間が居るとウワサで聞いたのですけれど、何かご存じありませんか？」

—— ツ!!

こいつ、俺じゃなく！

士道先輩の方が狙いか!!

「へえ、知らないな。というかそのウワサ、誰から聞いたんだよ」

「さあ？ウワサですから、わたくしも偶然聞き齧った程度ですの。詳細をご存じの方がいないかと思ひまして」

こいつ、めんどくせえ……。牽制球ばっか投げ込んで来る気だな？だったらこつちも四球待ちだ。

「ああ、残念ですわ。ご存じ無いとは。ですが、随分と鈍くていらつしやるのですね？物理準備室でその方と談笑されたのに」

あつ。ストレートきました。急に。ストライーク。バッターアウト（精神的に）。

分かってんじゃねーかこいつ!!

「ですよねえ、誠さん。キヒヒッ」

先ほどまでの淑女然とした笑いではない。箍が外れた笑い。

こいつは、一線を越えている。それが何かは明確には分からないが、越えた世界に、生きている。

「……………何のつもりだ」

「いいえ？興味を持っただけですのよ。あなたが精霊として生きているのか、人として生きているのかに」

「あ、そう」

「結果は随分と人間寄りでしたけれど」

「だろーね」

「ええ。ですが、それでこそ面白い」

滑り台の縁を軽く蹴つてジャングルジムに飛び移ると、狂三は俺の隣に座る。

「改めてお訊きしますわ。わたくしとお友達になりませんか？」

「今の俺はさつきよりガードが固いぞ。話は聞くが、説得は厳しいと思えよ」

「そう仰らずに。わたくしは土道さんが欲しいんですの。今ではなく、もつと熟れてからの彼が。そうすれば、誰も悲しまなくて済みますのよ？」

わざとらしく、しなだれかかるように抱き付き、耳元で甘く囁く。実に蠱惑的。こいつ、男を刺激するように、いや、俺の中身が男だと知ってるかのように振る舞いやがる。男だった時にやられてたら、すぐに堕ちてたな。今は………理性が勝る。身体が女だからだ。

しかしそうすると、かなり前から俺や先輩は見られていた可能性がある。先輩のこととはともかく、俺のことはかなりバレてるって感じがするな。別に隠しちやいなかったが。

だが………誰も悲しまなくて済む、か。

突然だな、おい。どうということだ？

「どういふことか説明してくれ」

「わたくしは、全ての精霊を無かつたことにするつもりです。そう、三十年前の惨劇の事実を、無くすのです。精霊という存在に乱される者も、壊される物も、全て均しく無くします」

「それで？ 何故俺なんだ？」

「それは——」

キヒヒツという、イカれた笑い。

先程よりも、俺を抱き締める力が強くなる。

「——精霊の中で、あなたが、一番食べやすそうだから、ですわ」

——ああ。

納得。

確かに、食べやすいだろうな。

あつさりど、しかも丸腰で話を聞いてるから。

影が急速に広がり、内から大量の手が延び、俺を拘束する。

チクショウ、油断したよ。人間みたいに、同類同士仲良くしたいって気持ち強いからな。十香に信頼されたことで、同族には警戒意識を持ちにくいもんなのかと思って

しまった。

俺自身、始めから狂三を怪しんでいたんだ。なのに——甘えがあった!!

「ようこそ、わたくし達の元へ！歓迎しますわ！」

狂三の手に長短二挺の銃……歩兵銃と短銃が握られる。何かを指し示すかのよう
うに、二挺の銃を構える。

やる気か。俺を。

「さあ、さあ、さあ、さああああああああッ！戴きますわよ、誠さん!!」

引き金と共に、俺を撃ち抜かんと飛び出す、影のような銃弾。

「ぐっ、くそ!!」

避けようにも避けられない。全身を、影から這い出る数多の手が拘束している。

ただ、脳天に向けて吸い込まれるように突き進んでくる弾を、見つめることしか、出

来ない——!!

頭蓋を穿ち、銃弾は地面を抉って掻き消える。狂三は、残心するように、誠の頭を開いた丸い穴を見つめていた。

例え精霊の生命力で生きていようとも、脳を貫通した以上、まともな抵抗は不能。

だが、狂三は、誠から一瞬も目を離そうとしなかった。否、出来なかった。

「まさか……………〈^{アルミサエル}触抱聖母〉だと言うんですの!？」

そう、脳天を撃ち抜かれた誠が、瞳に明確な光を灯したまま、真っ直ぐに狂三を見つめ返していたのだ。

「おう。これは紛れもなく〈^{アルミサエル}触抱聖母〉だぜ。どうだ？出し抜いたつもりが出し抜けなかった気分は。ねえどんな気持ち？ねえどんな気持ち!？」

悪戯の成功した子供のように笑うと、己を水へと変化させ、拘束を逃れて狂三へ襲いかかる。場の流れが、完全に誠に傾いた。

狂三は分らない。いつ〈^{アルミサエル}触抱聖母〉が展開されたのかが。迫る意思を持った水を撃ち抜いて四散させ、^{ジャンゲルジム}鉄骨から飛び降りて距離を取り、心を落ち着かせる。

「わたくしの前で、あなたは天使を顕現させなかった。一体、いつ呼び出したんですの

!？」

飛び散った水が一ヶ所へと集まり、人の形を成して行く。成形が終わるとにわかには色付き、色無誠となる。

「あ、分らない？ 覗きするならちゃんと見ないと。じゃあ謎解きね」

忌々しげに狂三が睨むも、誠は寧ろ喜んでいゝ。彼としてはまさに、してやったりというのがびつたりなのだろう。

「簡単だよ。十香と一緒にA.S.Tを相手にした時から、ずっと展開していた」

「な———!？」

予想外だろう。誠の天使は、狂三のそれと比べて、燃費が凄まじく良いということ

は。狂三の刻々帝は、効果は精霊の中でも群を抜いているが、使用コストも相応に高い。対して誠は、自身の形状を変更する、スイッチの切り替えの瞬間だけ霊力を消費する。後は霊力ではなく体力の問題。全身を水にするだけなら朝飯前。能力の長時間使用など容易いことなのだ。

だからこそ、精霊になった初日に、一日中天使を展開させていられた。誠は既に、自分の燃費効率の良さには気付いていたのだ。

「A.S.Tを警戒して刺しっぱにしてたんだが、俺は運がいい。天使を体内から抜いたか

どうか、キツチリ確認すべきだったな。ん？刺しっぱ？抜く？卑猥にエロいな!!」

最も、本人はいつも通りだったが。

「く……………流石に旗色が悪いですわね」

真に丸腰ならばとうに仕留めた。だが、本気を出せる今の誠と、この狂三では戦力に歴然の差がある。互いに全力ならば、軍配は……………狂三は確信を持って自分上がると思うだろう。

「ん？天使出さねえの？」

「ええ。もうお暇しましょうかと思ひまして」

恐らく素直な感想なのだろうが、見透かされたような台詞にひやりとする。この場を離脱する方法を、狂三は全力で思索していた。自分の代わりはいくらでもいるが、自分が生き残ることは損にはならない。この場における最善だ。

「諦め早いな。今夜は帰さないぜ（意味深）」

「まあ。誠さんがいっつもお求めの、だあい好きな美少女がお願いしても、駄目ですの？」

ちよつとウインクしてみる。

「バカ野郎！だから帰さないんだろうが!!」

「ですわよねえ!!期待通りの答えに涙が出ますわ!」

帰れそうになかった。

この後無茶苦茶触手祭りした。
テンタクルファイバー



——翌日——

「誠よ！今日はシドーとのデートに行くぞ！——む？今日はやけにこう………つやつやしていないか？」

臨界からコツソリ出た後、私は昨日の公園へとやって来た。頑張つて思い出した。うむ、ちゃんと覚えていたぞ。

視界の端に写つたブランコに乗りたい衝動もあったが、我慢してジャングルジムとやらの上にいた誠を呼ぶ。手元を覗き込んでいるが、やけに肌の色艶が良い。何かあったか。

「え？ああ、昨日十香が帰つた後、ちよつと激しく遊んだだけ」

「一体どんな遊びをしたのだ？」

「これだよ。スマートフォンで写真撮つて遊んだんだ」

誠がこちらに四角いものを見せてくる。スマートフォン？聞いたことがないが。

ともかく面白かったのだろう、ならば後でシドーと会って皆で一緒にやればいい。

しかし、今はそんなことより、重要なことがある。

「誠よ、デエトだ！デエトに行くことにした！シドーに会いに行くぞ！どこに居るだろうか？」

「あー。学校に行ってるんじゃないの？ついさつき歩いてくの見たから」

「ようし、ならば走って追いかけるぞ！」

「止めようね？二次被害が偉いことになるから止めようね？歩いて行こうね？」

「？」

何を気にしているのだろうか。誠も変な奴だ。変態だ。

「とにかくだ！行くぞ誠！」

まどろっこしいので、ジャングルジムをよじ登って誠を持ち上げ、来た道に戻っていく。

「あ、おい！離せ！離せええええ！」

「デエト、デエト！楽しみだな、デエト！」

「ちよ、おまあ？！」

今日という日は始まったばかり。

折角のデエト。楽しもうではないか。

「分かったから離せ！俺を振り回すんじゃない！小学生の横断バッグみたいに！！止めてええええええええええ！！」

「よく戻りましたわねわたくし」

「隙を突いて逃走しましたの、わたくし」

「ところでわたくし？何をされたんですの？」

「手足を触手で拘束され、ひんやりとした触手で、そおおおおと背筋からうなじにかけてをなぞられ続けましたの。五時間ほど。スマホで撮影されながら」

「（無言の背筋なぞり）」

「あつ、あう、ひ、ああ、んっ」

「お の れ 誠 さ ん」

「何故今なぞったんですのお!？」

Date. 6 「ダブルデート・アンド・ミーツガール」

士道は焦った。

「シドー！ デエトだ！ デエトに行くぞ！」

昨日、十香とデートの約束をしたら、今日になって突然現れた十香にデートをするよう要求されたからだ。今は「フラクシナス」のサポートも無いにも関わらず。

「し、死ぬ………脳味噌シェイクされて死ぬう………」

しかも、何故か今にも死にそうなほどぐったりとした誠を引き摺っていた。何があったのか想像したくない。

「誠に聞いたぞ！ デエトとは、仲良くなるために遊びに行くのだろうか？ 約束した通り来てやったぞ！ さあシドー！ デエトだデエト！ デエトデエトデエトデエトデエト！」

「ちよつと待てえ！ 連呼するな！」

周囲から、クスクスと奥様方の微笑ましいものを見ている笑いが漏れている。

幸いなのは、誠が説得したらしく十香が来禅高校の制服姿だということ。誠はブラウスとスカートで、どこかお嬢様然としている。変に目立ってはいるが、霊装姿で現れられて悪目立ちするよりはましだ。

頭が痛いことには変わらないが、士道は現状把握から始めることにする。

「十香、昨日はあの後どうなったんだ」

「ぬ？昨日か？」

黒歴史を掘り起こす
血の滲むような訓練を終えた士道は、

来禅高校に現界した十香に接触を試みた。そ

の際に、十香の名前を考え、そしてしばらく語らった。デートの約束を取り付けた所でASTが現れ、士道は空中艦へフラクシナスに回収。十香は戦闘に入ったことで、互いに昨日は自然解散となった。そこからは、士道は把握していないのだ。

「昨日はな、あの後誠がやって来たのだ！友達になったのだぞ！共にメカメカ団を相手取ったのだ！まあ、私が殆ど倒したのだがな！」

「た、倒したって……………鳶一は!?だ、

誰か殺しちやいないよな!」

士道の知る十香は、明らかにASTに対して明確な攻撃の意思を持っていなかった。それが、『倒した』と言われると、十香が戻れない道を歩み始めたように思えて恐ろしかった。

しかし、それは杞憂に過ぎない。

「あー、……………先輩？死者は……………出て……………ない……………です」

空気の抜けた風船、或いは綿の足りないぬいぐるみ。へにやへにやの誠が、力なく

サムズアアップした。

「お前が死にそうだよ!？」

「へ、へへへえ……………司令のちっばいが見える……………」

「人の妹で何て妄想してんだお前」

「お、お兄さん……………妹さんのちっばいを下さい。先っちよだけでもいいんで」

「ゴーサイン出ると思うか？」

「ぐへへえ……………司令のばんっ何色？」

「お前実は元氣だろ」

取り敢えず、土道の中で、誠を琴里に近付けたくないという思いが膨らんだ。それと、この会話を琴里達に聞かれてなくて良かったとも思った。

『私は赤の縞パンが良いかと思えますアイタア!？』

『バ神無月は黙ってなさい』

『我々の業界ではご褒美でアイタア!!二度もぶった!もう一回!!』

土道の想像の中の〈ヘフラクシナス〉が騒がしい。きつと神無月が誠に共鳴して暴走する。この二人を組ませてはいけない（戒め）。可愛い妹のために。

一方十香は、地面に『ちっばい』と書き遺そうとしている誠の頭をつついて、不安げに覗き込む。

「誠、大事無いか？」

「あるわ！ここまで来る道中ずっとお前に振り回された（物理）からよお！吐くかと思つた！」

「す、すまない………そうだ、キビダンゴがあれば百人力だぞ！」

「残念ながらここにはありません。てかどんだけ桃太郎気に入ったんだよ！」

「うむ。桃太郎は日本の産んだ文化の極みだな！」

「お前それ桃太郎以外の本読んだ後でも同じこと言えんの？」

確かに仲良くなったようだ。桃太郎という単語が出てきたが、大方誠が読ませてやったのだと土道は把握する。十香が笑う姿を見て純粹に嬉しく思うと同時に、やはり誠に聞いた方が話が飲み込めるとも思った。

「誠、今どういう状況なんだ？」

「えーつとですね。先輩は昨日、十香とデートの約束したんですよね？」

「おう、したな」

「昨日十香との別れ際に、デートとは何かと聞かれたんで、『男女が仲良くなるために一緒に遊ぶ』ことだと教えたんです」

「うんうん」

「そしたら十香が一緒に行こうと言い出しまして、無理矢理連れてこられました」

「お前は泣いていい」

「あへえ」

「喘ぐな」

どっちでもあんまり変わらない気がしてきた。

土道が頭を掻きつつどうしたものかと考えていると、ようやくと回復したらしい誠が立ち上がり、服の埃を払い落とす。

「取り敢えず土道先輩。もう男なら腹決めましょう。今日は先輩と十香でデートつてことで。俺は帰ります」

「お前が腹決めてねえじゃねーか!?!」

「ま、誠! 私と遊びに行くのは嫌か!?!」

十香のうるうるおめめ!! こうかはばつぐんだ!!

「うつぐ……ち、違うんだ十香! デートは男と女、一対一で行くんだ。桃太郎みたいに皆で行くものじゃないんだ」

慌てて誠がフォロースると、十香は寝耳に水と言わんばかりに目をぱちくりさせる。

「何と、そうなのか!?! ではあと一人男を浚ってくれば……!?!」

「さらつと恐ろしいこと言うな！くそ、どうするか………!!」

「——あ。それだ」

誠が居てはデートにならない。かといって、誠を抜けば十香がデートに乗り気にならない。確かに変態ではあるが、誠を抜くのは気が引ける。堂々巡りする土道の思考がヒートアップ寸前になった所で、誠が手をポンと打つ。

「呼ぼう、今すぐ。追加で一人」

『は?!』



「シドー！何やらしい匂いがあるな！これは何だ!?!」

「パン屋だな。行ってみるか?」

「シドーが入りたいならば」

「入りたくてふるえる」

「ならば仕方無いな！うむ!」

先輩と十香は、上手く行ってるようだ。

で、俺が呼んだのと言うと、だ。

「誠君！パン屋ですよパン屋！」

「閃いた！俺が、俺達が司令のパンを乗せるトレーだ！」

「では焼き立てのパンを直接我々が!？」

「そうだア！ヨツンヴァインになるんだよ！直接肌に乗せるんだア！」

「背中を焼くアツアツのパン!!熱を耐えるトレーは自然と歩みが遅くなり、司令にお叱りを受ける!!トングで叩かれ挟まれる！しかしどんなに痛くてもトレーは逃げられない！何故なら背中には司令のパンがツ!!ああッ！司令、お慈悲を！お情けを!!」

「何たる、何たる苦痛!!」

『だがそれがいいッ!!』

お分かり戴けただろう。

我がソウルヘンタイフレンド、神無月恭平である。

へフラクシナスに、空間震無しで精霊が出現したとの報を送るついでに、俺が離れることを十香に納得させるべく、応援として送ってもらったのだ。

クルーの中では一番気が合い、尚且つ見た目は同じ金髪。兄妹で過ごしているようにも見えなくない。ダブルデートの形になるので、十香も文句無し。フラクシナスは現場フォローに入りやすい上、俺のデータ観測も可能。いいことづくめだ。

……………変態がコンビを組んで過激さを増しただけでも言う。

『まあ、こつちとしては艦橋の環境が良くて助かるんだけど』

「流石司令、隙を生じぬユーモアセンス」

『主砲でぶっ飛ばすわよ』

「待ってます」

司令もあつさり承諾した。まあ、神無月の得意分野知らないけど、間違はなくまともな恋愛のサポートは出来ない。変態にや無理だ。

「土道君のことは司令に任せましょう。我々は、影から十香ちゃんをフォローすることです」

「うっかり十香が物を壊しちゃったら俺達が謝る、と」

「衆人環視の中で恥辱に耐える訳ですね」

無言の固い握手。

「十香ちゃんが勢い余って誰かに危害を加えそうになったら、我々が止めましょう」
「俺が、俺達が、クツションだ！」

無言の固い握手（二回目）。

あー、なんか理解者がいるとスッキリするわー。楽しいわー。

俺が内心を隠さず、友がいる感覚にホクホクしていると、神無月が突如神妙な顔をして見つめてきた。

「誠君。君は……………司令の胸派ですか？尻派ですか？」

『何話してんのよアンタ達』

「馬鹿野郎！司令の全部だ!!」

「友よ!!」

全力の抱擁。

『止めなさい川越!!放しなさい!!』

『司令、お気をお確かに！ミストルティンは駄目です!』

司令と通話しっぱなしにしてた俺のスマホから物騒な会話が聞こえるが、まあよしとしよう（震え声）。通話終了。

とにかく、俺は十香と先輩をしつかり見つめていなければならぬ――。

ん？

「……………」

ポストの影から福引券を手歩く二人の背中を見つめっていると、同じく二人を見つめていた、電信柱の影にいたある人物に気付いた。こちらの視線に気付いた相手が振り返り、目がバッチリ合う。

「お前は……………鴛一折紙!!」

「そういうあなたは、色無誠」

あらら。ASTに見つかってやんの。しかも、何やら装置らしきものを持っていて。こいつは参ったね。デートは中止にすべきか？

と思っていた所、折紙はつかつかとこちらへ近付いてくる。

「何を、しているの？」

「兄貴と二人で買い物」

さらりと誤魔化しつつ神無月を兄貴と紹介。二重の嘘。はいと神無月が笑うが、折紙は無視して手元を覗き込む。

「兄……………？精霊でない、この男が？」

げ。それやっぱ精霊探知機的なアレですか。てことは十香もバレてますね。神無月に目配せ。ウイंकが返ってきたので、大方『艦橋には伝わってます』って所か。流石に副司令だけはある。なら、敢えて真実を種に攪乱しようかな？

「そうだ。俺が異常なんだ。俺は元人間。それも、四月頭に来禅高校に入学し、本来の今頃は高校一年生だった、元人間の精霊だよ」

「……………信じられない」

僅かに。本当に僅かに、鳶一折紙の目が驚きに見開かれた。すぐに元の無表情に戻るが、度肝は抜いた。少し、時間を稼げるか。

「まあ、それも当然。でも俺は——」

「だが、信じる」

……………は？

え？鳶一サン今何テ？

信じる!?んなアツサリ!?

攪乱するつもりがストレートに信じられた！一本取られました！もう駄目だあ（無策）。

「色無誠。来禅高校一年四組、出席番号四番。私からすれば後輩に当たる。入学式以来出席が無く、消息不明。学校側から搜索願いが出ている。空間震に巻き込まれた、或いは精霊の被害に遭った可能性があり、生存の線は怪しいが一応搜索するようASTにも情報が回ってきていた」

わあ、そんなスラスラ言われると口挟むタイミングねえぞ!?!というかかなり大事になつてたんだ俺!?

「あなたが昨日名乗った時、まさかとは思ったけれど。あなたからくすねた毛髪のDN鑑定の結果からも、整合率は97.2%。そして今、あなたの口からも証言された。最早疑う余地は無い」

神無月、ちよつと助けて。

ムリ?ムリか。

俺と神無月がアワアワするのもお構い無し。鳶一折紙は俺の両肩を掴む。その瞳には、強い意思がある。暗い炎であり、そして希望を見付けた目でもある。

「私と共にASTまで来て。そしてあなたを詳しく解析させて。決して悪いようにはしない。可能なら人間に戻るよう治療する」

!!

「あなたは、人的被害を一つも出していない。空間震も起こしていない。まだあなたが人間なら、力を貸して欲しい。精霊に拮抗する力を人類が手に出来れば、これ以上悲しむ人は産まれない」

本気、だ。

彼女は本気だ。

彼女は本気で、俺を救い、そして俺の力で精霊を倒そうとしている。

精霊を、害悪と信じて疑わず。

俺を、人間と信じて希望している。

「お願い。私に、父と母を殺した精霊を殺す力を。私に、人類に、精霊を倒す力を与えて欲しい」

声に抑揚は無い。しかし、僅かに身体が震えている。細い、陶磁のような白い指が、俺の肩に強く食い込む。それだけで、彼女の必死さが伝わって来る。

両親の、敵。

多人数で挑んでいるにも関わらず、十香に圧倒されている事実への焦燥。己を摩耗させて尚、精霊に挑もうとしている。

答えなければ。

向き合つて、答えなければ。

「鳶一折紙……いや、鳶一先輩。俺と同じように、他の精霊は見てあげられませんか？」

「——ッ!?!」

鳶一先輩の表情が、はつきりと歪んだ。

「俺みたいに、偶々なつてしまつて、邪魔者扱いされて、それでも生きていこうとしているようには、見てあげられませんか？」

「なに、を……?」

鳶一先輩の目が、すぎるように焦りを帯びていく。俺を、引き留めようとするように。

でも先輩。俺は——。

「十香は——桃太郎が大好きなんですよ。読み聞かせてあげたら、子供みたいに喜ぶんです」

俺、何言つてんだらうね。でも、言わなきゃいけない。そんな気がするんだ。

「そりゃあ、人を襲う奴だっているでしょう。でも……俺が思うに、精霊は人間なんです。突如与えられた力で人生を狂わされた、人間だつて」

「……………理解に苦しむ」

「個人の感想つて奴です」

「絆されてはいけない。あれは人殺し」

何としても俺を引き戻そうとするが如く、肩への圧力が一気に増す。だが、俺は、止まらない。

「有無を言わさず精霊を殺すなら、それは人殺しと何ら変わりませんよ、先輩。『家族を撃ち殺した人間が憎いから、銃を持った人間を見たら皆殺しにする』と言っているのと同じです」

鳶一先輩の力が、僅かに緩んだ。

「違う。精霊は違う。精霊は——」

別に、先輩の復讐を、否定はしない。

憎しみからは何も生まれませんなんて、綺麗事は言わない。復讐は弔いであり、過去の決別。過去を忘れるのか、清算するのかの違い——、

忘れる？

過去を？

頭の中で、何か引つ掛かった。何だ？

だが思い出せないし、今は鳶一先輩の方が重要だ。

「俺は人間であり、精霊です。鳶一先輩が全ての精霊を殺すなら、俺は友達のをに相手します。でも、鳶一先輩が俺達を助けてくれるなら——その時は、命ごとあげたって惜しくはありません」

つまり——ごめんなさい先輩。お断りします。

「……………本気？」

先輩の目は、俺からびくりとも外れない。

「本気ですよ、先輩。俺は、人間も、精霊も、等しく愛します」
「そう」

それだけ言うと、先輩は俺から手を放す。その目には、今だ光も炎も宿したまま。無表情にメモ用紙を取り出し、ペンを走らせる。

「以前の借りもあるから、今は諦める。ただし、いづれあなたも精霊が何たるかを理解する。その時は、連絡して。人間であるうちに」

ピツとメモを切り離すと、俺に渡してくる。携帯電話のアドレスと電話番号が記入されていた。

「わかりました」

素直に受けとる。そうしないと、恐らく喧嘩別れになる。鳶一先輩とは、そうはなりたくない。

俺はアドレスだけ先にスマホに登録すると、件名に名前だけ入れたメールを送る。数秒間あつて、鳶一先輩が自分のスマホを確認し、俺を登録したと告げた。

「いい返事を期待している」

それだけ言っていると、先輩は踵を返し、去っていく。随分早足だ。俺に近寄ってきた時の倍近い。

「……………いやあ、空気でしたね、私」

蚊帳の外だった神無月が、労うように俺の肩に手を置く。あの空気で茶々入れられたら勇者だぞ。

「口挟んだら蹴られてたろうね」

「それは残念」

「それより、十香と土道先輩は？」

「今はラブホに向かっています」

「デートの過程すつ飛ばし過ぎイ!?!」

〈フラクシナス〉の皆さーん!!しれえ!!何やってんのお!?!エロに頼るな!KEN

ZEN大事！古事記にもそう書いてあるでしょおおお!?

「まだ好意が実りきっていない相手をいきなりラブホに連れていき、罵倒と共にひっぱたかれ、蔑みの視線を送られる！」

「あ、それは良いかもしれない………って、流石にラブホは十香にやハードだ！他人の善意と悪意の境界をハッキリ理解してない純粹な奴だから！行くぞ神無月！」

「あつ、待つて下さい誠君!!精霊の力で走られたら追い付け………いや、これもまた乙!!」

俺達は、走る。

〈ラタトスク機関〉お抱えのラブホへ。

………うわ、スッゲーいかがわしい字面だ。たまげたなあ……。

Date. 7 「エンド・オブ・ロンリネス」

「存在一致率97.5%……。これは、確実に精霊ね」

日下部燎子一尉。鳶一折紙の上官である彼女は、観測機のもたらしたデータを見て溜め息を吐く。町中を精霊が、しかも二体も彷徨っている。この事実に関頭が痛くならないAST隊員など居るものか。

……いや、居た。

「隊長、狙撃許可は」

抑揚の無い声で、燎子を見つめる、年頃の少女……。鳶一折紙だ。

頭痛より前に、殺意を、害意を、敵意を研ぎ澄ませる。精霊を相手にした途端、彼女は刃と化す。

「まだ出てないわ。お偉方が揉めてるんでしょ。待機してなさい」

「了解」

燎子の返答に最低限度で反応すると、折紙は目を閉じる。まるで修験者のようだ。

彼女は実力的には折紙に劣る。経験は燎子が圧倒的に上。しかし、折紙はそれを覆した。

精霊への執念、ただそれだけで。

実際、指揮能力・実務能力を見れば燎子が勝り、隊長としての器はある。しかし。個として見るなら、指揮官として見切りを付けねばならない燎子は、復讐の炎を燃やす折紙を超えられない。

だからこそ。燎子は、精霊の狙撃役に折紙を選んだ。

優れた個を活かすことこそ、指揮官に求められることだ。

例えば相手がどう見てもただの少女だとしても。それを撃つのもただの少女だとしても。空間震を止め、平和を守ることには代えられない。

なお折紙の報告では、精霊の一名は、中身が男らしい。名を色無誠。精霊は女ではなければいけない決まりでもあるのだろうか？

この色無誠についての折紙の報告書を上層部に提出したところ、大いに揉めている。

『人類に味方する可能性がある精霊』。

それはもう、お偉方の意見がまるで纏まらない程の荒れ模様だ。知ったこと無いから殺れという者も居れば、交渉材料を探れと叫ぶ者も居る。騙して研究材料にしようと思む声が上がれば、保護して人間に戻してやるべきだと反論される。

しかも、それを出したのは今朝の定例会議。丁度会議中に折紙から連絡があり、追

加で本人の証言と連絡先まで仕入れてきた。合わせて精霊の出現情報もしてきたのでその場は逃げられたが、会議がどうなったか考えたくもない。

「……………」

少々現実逃避していた燎子の通信端末に、連絡が入る。

狙撃許可。

驚いた。撃つのか。

折紙の追加報告には、こうあった。

普段は非常に友好的かつ人間的。ただし、同胞を攻撃された場合は不明。色無誠は、人間にも精霊にも仲間意識が強いのだ。今回は事態を静観するのかもしれない。………何か、あったか。

上層部の決断を意外に思いつつも、燎子は折紙にゴーサインを出す。

「いい？」発で仕留めるのよ。外したらこつちが終わり。世界が終わる前に、私達の命が終わるわ」

「了解」

またも折紙は、眩くように答える。

普段と変わらぬ、剃刀のような意思を感じた燎子は、僅か、僅かだが、そこに普段と異なるものが浮かんでいるように思えた。

迷い。

折紙は努めて普段通りになっていたのだ。

手を握って開いてを繰り返して、感覚を確かめる。その間にも、浮かんでは消える、雑念。

『俺が思うに、精霊は人間なんです』

『有無を言わず精霊を殺すなら、それは人殺しと何ら変わりませんよ、先輩』

誠の言葉は、確かに折紙を揺らしていた。これまで、ただ精霊に対して悪意だけをぶつけていた。害だとただひたすらに信じ、疑わず、全く迷いなどなかった。しかし、誠の投げた言葉は、折紙の心に波紋を作った。

人間が精霊に変わるという驚愕の事実。それが、普段の折紙なら受け付けなかったであろう、誠の言葉を耳に焼き付けた。

(違う。精霊は災厄。生きていることが罪。存在が毒。命を絶つのが慈悲である程の、世界の異物)

十年間蓄積させてきた殺意を全身に充たすことで、無理矢理に自身を維持しようとしていた。そうでなければ、自分が折れてしまいそうだった。

そもそも、何故一般人である土道が精霊と関わっているのか。何故あの精霊は土道と共にいるのか。昨日も、今日も、ともすれば十日前も、偶然の廻り合わせでは無いの

ではないか。では、何のために。

まさか、土道が精霊と繋がっている？それとも、明確な目的があつて？

巡る思考は疑念を次々と浮かべ、考えれば考える程に深く深く、疑問の海に沈んでいく。

それら全てに意図的に目を瞑り、折紙は銃を構える。

狙うは、〈プリンセス〉。対話交渉、或いは人類への貢献の可能性のある〈サツカバス〉は今回標的にしない。寧ろ、彼女……いや、彼に見せしめる。人間は本気だと。

対精霊用狙撃ライフル、へ^クC^{ライ} C^{ライ} C^{ライ}。己すら破壊しかねない、殺意だけを撃ち出す鉄の塊。

今の折紙は、自分でも予期していなかった己の弱さを、鋼鉄の人間の悪意で支えているだけかもしれない。



やはり、土道先輩は凄い人だ。

他人が十香の存在を否定するなら、自分がそれ以上十香を肯定する。そんな台詞、

この変態にはとてもじゃないが言えない。

天宮市を士道先輩とデートして回った十香は、人間の生活を素晴らしいと感じるようになったと同時に、自身を否定し始めていた（本当にラブホに入っていたらどうなっていたかからん）。

しかし、先輩はそれを引き留めた。

ありやあ要するに、良くある口説き文句だ。『お前を守る』ってやつ。ただし、重みが違う。何故なら、先輩は十香の精霊の力を封印出来ることを知らない。

たった今、先輩は十香と共に、世界に宣戦布告したにも等しいんだ。これを男らしいと言わずに何というか。

「抱いてツ!!メチャクチャにしてツ!」か?違うか。

ともかく、俺は先輩のことをマジで尊敬しそうだ。

「いやあ、いい雰囲気ですね」

「そうそう。俺ら変態も空気は読める」

見晴らしの良い公園……何日か前に、俺が司令から朝日をプレゼントされたあの場所で、夕日を背景にして二人のデートはまさにクライマックス。俺と神無月の変態ハッピーセットは街路樹の影から見守ってます。

そういうクライマックスって片仮名で考えると『涙の最高点』みたいにも見えるよ

な。おいハンカチの用意はいいか。十香が希望を見出だす感動のシーンだ、泣けよ。良かったな十香、兄ちゃん嬉しいぞ。誰が兄だ。姉ちゃんだよ。違うか。

「握れ！今は——それだけでいい……ッ！」

士道先輩は一体ナニを握らせようとしてるんですかねえ。不馴れで恥ずかしがってる十香に迪々しくナニを握ってもらうんですかねえ？ 手だよ。常識的に考えて手だよ。エロいこと考えた人は切腹。間違いなく俺だけハラキリ。イヤ！グワーツ！

これで、少しは苦勞も報われる。といいなと言うのが素直な所で、今回別に俺は目立ったことをしてはいない。

十香がおかしなことをしないようフォローしろとは言われたが、士道先輩のエスコート（と見せかけたフラクシナスのエスコート）が非常に順調で口を挟む機会無し。ぶっっちゃ暇だった。

やったことと言えば、神無月と共に周囲の警戒。十香と先輩の前で手を繋いで見せて恋人繋ぎを促す。あと物足りなげな顔してた神無月に、特に理由の無い暴力を振るってモチベ維持させたくらい。殴ると元気になる人種って某野菜戦闘民族と神無月だけだと思うの。

ちゅー訳で、『十香を影から見つめ隊』やってただけだった。あらすトーカーよ。通

報しました（自首）。

鳶一先輩にバレた時点でもかなり気を回していたのだけど、どうもASTに動きが見られない。〈フラクシナス〉にいる司令も、『嫌に大人しい』と言っていた。……今日の様子見でもしているのか？

!?

何だ？

急に嫌な予感がした。

不快感を解消したくて、俺は周囲に目を遣る。

そして、公園よりも更に一段高くなっている高台の上に、鳶一先輩がいることに気付く。

肝が冷えた。鳶一先輩の構えるあれは、狙撃銃ツ!?んなもんゲームかテレビでしか見たこと無いぞ!?

「あれは——ASTでも平時は使用しない、対精霊用狙撃ライフルクライ・クライ・クライへC C C」

！流石に今の十香ちゃんでは無理ですよ！

俺の見ているものに気付いた神無月が、銃を判別し、焦る。狙撃、更に特殊兵装の持ち出し。だから動きが殆ど無かったのか！精霊をぶち抜けるなら、〈触抱聖母アルミサエル〉の【寵愛ヤッド】では盾にならない。ならば！

「神無月ツ！後頼む！」

「誠君!？」

「変態は凌辱エンドだけじゃなく、ハッピーエンドも大好きだからな！ちよつと行つてくる!!」

俺は、遂に二日連続挿入しっぱなしの触抱アルミサエル聖母を起動させると、身体を水に代えて二人の元へと飛び出した。ローターか。



ざらつくような感覚を感じた。

それが誰かの悪意だと、直感が身体を動かした。十香を突き飛ばしたのは、根拠なんて無い、勘だった。

十香が地面に倒れるのとほぼ同時に、目の前に大量の水が押し寄せる。にわかにならざる纏った誠に変化して、仁王立ちになった。何故、とは思わなかった。護つてくれるのだ、と本気で嬉しく、そして申し訳無くも思った。

自分の為に、傷付かなくていい誠が盾になる。それが最善の策にも思えたが、そうならなければ良かったのにと強く思った。

一秒にも満たぬ、刹那の時間が過ぎた時、誠の身体が弓形に折れた。腹部に攻撃が命中したらしい。殺しきれなかった衝撃に吹き飛ばされ、身体が振られるように仰け反った。

スローモーションで見える世界の中で、倒れる誠と俺の目が合う。誠は嬉しそうに笑っていた。『これでいい』と言わんばかりに。

いや、それじゃ駄目なんだ。お前が傷付いたら、それじゃあ怪我人が変わるだけ――

あ、れ？

立て、ない……………？

誠の目が、俺の腹部を見て、見開かれる。

何、が……………？

手を伸ばして探ってみる。

え？嘘だろ？

誠が身体を張って助けてくれたのに。

何で、手応えが、無い……………!?



天地が逆転していく中で、俺は見た。

士道先輩の腹部に開いた大穴越しに。

一瞬だけ、ちらと見えた。

狂三が笑っていたのを。

撃った、のか。士道先輩を。

喰う、つもりなのか。

なら、何故消えたのか。

だが理由はどうでもいい。先輩が撃たれた事実は変わらない。

糸が切れた人形のように、とは使い古された表現だけど、まさにその通り。先輩は、膝から座り込むようにストンと崩れ落ち、前のめりに地に臥した。

——それが、先輩の最期だった。

大事なものが切れてしまった感覚。

呼吸が出来ない。ライフル弾を腹にモロに貫つたからではない。そうじゃないけど息出来ない。何でか自分でもわからない。

空が赤い。血の色みたいだ。

一瞬視界がブレて、それ以上空が遠のかなくなる。どうやら、完全に倒れたらしい。

十香が呆然として、俺を覗き込む。視点が前後している。俺と、士道先輩を交互に見ているってことか。

十香、ごめん。

俺、やっぱお前がいないと駄目だわ。

ああ、泣くなよ。泣いちや駄目だよ。女の子は笑顔が一番なんだ。一番輝く宝物なんだ。

司令。すいません。

約束、守れませんでした。

やっぱ俺じゃ、駄目だ。

俺じゃ、駄目だ。

私じゃ、なくちや。

目蓋が落ちる。暗闇を漂う感覚。音がしない。その中で、俺は、自分が摩耗する感覚を——

『しゃんとしなさい誠！まだ何も終わってないわ。始まるのよー！』

突如、俺のスマホから司令の喝が飛び、微睡みから冷水で叩き越されたように思考がクリアになる。強制的に通話回線を開いたらしい。そんなことも出来たんかこのスマホ。

『いい？誠、士道はその程度では死なない。今に甦るわ。だから誠、今こそ役目を果たしなさい』

先輩が、甦る？頭がハッキリするなり、意味不明な現実を押し付けられる。だがしかし、俺の心は高揚していた。

士道先輩は、甦る。ならば、まだハッピーエンドは潰えない。

そして、司令から期待されているという今。やらないわけには、いくまいて!!

「何をすればいいんです、司令?」

俺は寝転がったまま、スマホを手に取りやすらせず、司令に問う。

『アンタと士道がASTにやられたと思つた十香が、尋常じゃなくマジギレして暴れまくってるわ』

言われてみれば、酷い有り様だ。恐らく微睡んでたのはわずか数十秒だが、公園は見る影もない。真つ二つ、いや真つ六つ（意味不明）?もう大地が斬られるとか意味不明。誰に手伝って貰つたんだ。素晴らしい。すこぶるヒイツツカラルド（感動詞）。

『このままだと死人が出る。土道が十香を止めるまで、速攻でASTと十香を抑えて』
「無茶ぶり頂きました。辛っ!？」

『ASTはアンタにはものの数では無いはず。骨が折れるのは十香よ。頑張んなさい』
「オツスお願いしまーす」

『アンタにやれって言ってるの』

俺は腕の力だけで跳ね起きると、腹の傷を見る。既に何ともない。霊装の無い所に当たった弾が腹に突き刺さっているが、ちよつと引つ張つたら抜けた。出血も大したところ無し。身体にも不調無し。

敢えて言おう、絶好調であると。

『ああ、それと誠。一言付け加えとくわ』

「はい?」

何を、付け加えるのだろうか。

俺の返事から一拍あつて、司令の指示が来た。

『私が全て許すわ。《持てる全てを以て応えなさい》』

それは、願ってもない言葉。

嗚呼、司令。俺はあとあなたに何回惚れればいい。

この晴れ舞台で、俺に『全力を尽くせ』と仰る。

「変態にそんなこと言っていないんですか？」

『あら、自信無いの？』

「寧ろ逆です——ご期待には、全力で」

先輩を神無月に預け、俺は二人と距離を取る。

そして、俺は初めて全力を振るう。

「行くぞ、AST。くっころの準備は万端か」

——そして、十香。

今から、お前を幸せにしてやる。

今日が、お前の人間としての誕生日だ。

〈アルミスエル触抱聖母〉の名の元に。全ての誕生に、祝福を。



唐突に鳴り響く、空間震警報。

〈フラクシナス〉艦橋では、対ショック用意が緊急で行われていた。

「来たわね、誠!!」

それを平然と見つめる、琴里の姿があつた。

今度の空間震を起こすのは、誠。

それは、今まで人として有つた誠が、今より精霊の全能を振るうという宣言。

その全力を観測する意図もあり、琴里は誠に火を点けた。

「司令!?!いいんですかあんなこと言つてしまつて!?!」

クルーの一人が上擦つた声を上げる。これでは誠がASTから危険な精霊として更に警戒されないか、と。

「キャンキャン吼えないで頂戴、チワワを飼つた覚えは無いわ。それとも、私の采配が考えなしだとも?」

「いえ、そうでは……」

「なら、艦の制御に全力を尽くしなさい。あそこにいる色無誠は、〈フラクシナス〉が誇る艦載機とでも思つていればいいわ」

「空間震、来ます!!」

「念のため対ショック用意!」

司令の言葉の枕が気になつたが、クルー達は衝撃に備える。

——しかし、何秒待つても、艦の随意領域にはダメージも何も無い。

「ふむ………やはりか」

静寂を打ち破ったのは、令音の呟きだった。通信端末を取ると、艦外部に連絡を取る。

「神無月、そちらはどうだい？」

『五体満足、無事です。まさか誠君の空間震が、こんなにも小さいとは思いませんでした』

艦のメインモニターに誠の姿が映し出され、クルー達の驚く声が響く。

『ざっと見ですが、半径3m程しかありませんよ』

クレーターの中心に立つ、誠。既に水の触手を展開しており、数多の蛇を従えているか、或いは自分の背丈以上の津波を背後に控えさせているかのようだった。

「村雨解析官！副司令から色無誠の^{スベックデータ}身体能力値が来ました！」

「メインモニターに回してくれ」

「了解!!」

誠の映像の上に、半透明のウィンドウでその詳細が明らかにされる。

— MAKOTO IRONASHI —

SpiritNo. ———

Astral Dress — Succubus Type

Weapon | CoreType [Almisaal]

総合危険度AA

空間震規模D

霊装B

天使AAA

力 170

耐久力 329

霊力 207

敏捷性 50

知力 150

「耐久力無駄に強すぎじゃない?」

琴里はちよつと吹いた。

敏捷性を犠牲にして耐久力に特化した、ゲームで言うところの耐えて反撃するタイプのステータス。しかも、それほどでもない霊装がBランクと言うことは、ほぼ誠本人のタフさだ。

更に天使の触手を考慮すると、誠のスペックは完全に一対多向きなのだ。カビゴン

?

琴里が誠の能力の極端さに呆れていた丁度その時、司令室に飛び込んでくる人影がひとつ。

「ああつ、素晴らしいです誠君！それほどの耐久力があれば、そう！ビルから飛び降りたり、爆弾を抱いて火に飛び込んだり！様々な痛みを経験し放題ではありませんか！！羨まし〜！！」

「お帰りください」

「ちよつと今忙しいんで」

「あつ、川越さん、中津川さん!?!何故押し出すんです!?!私もここから誠君を応援し——

艦橋に帰ってくるなり追い出される神無月だった。



精霊としての筋力を生かし、大ジャンプで高台まで飛び上がる。着地の瞬間に両足で大地を踏み締め、アスファルトの一部が粉碎される。

「伸ばせ、〈アルミサエル触抱聖母〉」

俺を中心に、放射状に触手を広げる。

触手は枝を伸ばし、更にその腕を広げる。蜘蛛の巣を編み上げるように、草が根を伸ばしていくように。

本気の「寵愛」^{ヤツド}、逃れられるなら逃れて見せろ。

「半径200m、俺の掌の上。さあ!」

触手が一齐に速度を増し、範囲内にいる全ての存在を絡め捕る。地面を覆うほど広げた触手のために、触手でASTの隊員が水面から上に持ち上げられているような様相を呈する。

抵抗を試みるASTだが、動けない。あ、隊長格も捕まえたっぽい。

「くうっ………随意領域を上回るパワーだつて言うの!？」

腕ごと胴体を縛り上げられ、身を振っても拘束を逃れることは叶わない。

「エロは全てを凌駕する。くっころスーツを着た時点で、お前らの負けだよ!」

「何の話!？」

「で、だ。あれほど言つたら………野郎に用は無いわア!!チエストオ!!」

『ぬあああああつ!?!』

男衆を捕らえていた触手を振り上げ、頭を下に一気に振り下ろす。情けない声を上げながら次々と地面に突き刺さり、足だけ地面から出ている状態の哀れな格好になる。

「では………。ところで皆さん、俺の触手が水から出来てることはご存じ?」

「な、何を言っているの?」

隊長がポカンとしているが、構わずに説明を続ける。

「俺は分子レベルで水を操り、成形する。そういう能力の精霊なんですよ。だから、今触手の姿をしているこれも、水なんですよ」

「だから………だから何なの!?! いいから放しなさい!!」

「おつと………では隊長さん? あなたからにしますか?」

捕らえられているにも関わらず強気な発言に、俺の口角はニイと釣り上がる。隊長さんって、某対魔忍に出てきても行けそうですよね、いろんな意味で。

フフフ………貴女にはくっところがよく似合う。そしてこいつもよく似合う!!

隊長さんの目の前に、一本の触手をニユツと伸ばす。

「くっ———え?」

攻撃されると思った隊長さんは触手を睨み付けるも、胸元にピチヨンと水を一滴落とすだけ。つつ、と肌を伝った水滴が、水着みたいなスーツに触れる。

呆気にとられてるみたいだが、何悠長にしてんの。俺のターンはまだ終わっちゃいないぜ!!

【整形】
マセカイ

俺の能力は水を操る。

《体積も、形も、温度も》全て!!

「いひいっ!?!」

隊長さんが、顔を青くする。

そりやそうだ。胸元に落ちた水滴が、突如体積を膨れ上がらせ、スーツと体表面の間に入り込んで行くんだからなア!!

「なっ、あ、あ、あ………イヤアアアアアッ?!?!?」

さつきまでと異なり、涙を浮かべて、激しく、なりふり構わず暴れる隊長。その様子に、怯えつつ様子を見ていた隊員が一斉に震え上がる。

もう………分かるだろ。《触手服》のプレゼントって訳だ。中はどうなってるか分からないが………まあ、よろしくやってるでしょうな、触手が。

「安心しろ!?!——皆、こうなるから」

『ヒイヒイヒイヒイッ?!?!』

勿論、この後滅茶苦茶触手仕込んだ。

◇

俺は、AST凡そ半数を約一分で片付けた。いやあ、激しい闘いだっただ。眼福眼福。

あー濡れる濡れる。無惨にも抵抗不能な隊員達を放置し、孔雀の尾みたいに触手を広げた俺は、十香を相手にしている一団へと向かう。

……が、既に片付いてる。うわあ、鳶一先輩以外全滅してらあ。完全に伸びてやがる。よく立ってられるなあ先輩。最も、息も絶え絶え、背中の顕現装置半壊、武器が剣一本の時点で結果はお察しだが。

十香は十香で、^{サンダルフォン}へ塵殺公を見たこともない巨大な剣にしてやがる。上段に振り上げて、今にも鳶一先輩をぶった斬りそうだ。あれはまずいな。当たったら流石に無傷は無理だな。

「終われ」

十香の口から殺す宣言がッ!!あの無邪気な十香の口からっ!!お姉さん泣いちゃう!!そっちはフォースの暗黒面よ!!

じゃあ、やることは決まってるよね。

「とーうか♪」

明るく声をかける。肩をビクンと震わせた十香が振り返る。涙でビチョビチョ、目は充血して真っ赤。

「ま、ま………?」

俺の前で、まるで子供のようにコロコロ表情を変えていた十香に、表情が無い。ま

さに壊れる寸前。間に合って良かった。

「大丈夫」

触抱聖母の触手を解除し、俺は優しく十香を抱き締める。

「もう、大丈夫だから」

「まこと……………しどーが……………」

十香に表情が帰ってこない。俺が生きてることも認識出来てないのかも知れないな。だが、俺は笑顔で返す。

「大丈夫。皆無事だから」

「でも……………でも……………」

「ううん、大丈夫」

抱擁を止め、俺は十香と目線を合わせると、そつと頭を撫でてやった。

「俺も土道先輩も、十香をひとりぼっちには、しないから。約束する」

「う、あ……………」

十香の顔がくしゃくしゃに歪んでいく。瞳に光が帰ってきた。瞳が潤み、涙が滲んで溢れ出る。

お帰り、十香。辛かったね。

「あああああつ!!うあああああつ!!」

声を上げて本格的に泣き出してしまった。あーあ。こりやあ土道先輩も罪な男だなあ。こんな子泣かせてどうすんの。あ、それ俺にも言えるわ。メンゴメンゴ。

もう一度抱き締めて十香を宥めつつ、俺は背後の鳶一先輩に目配せする。緊張の糸が切れた先輩は、顕現装置の重みに引かれるように倒れた。やはり、随意領域は展開できてなかつたみたいだ。本当にこの人凄いな。

「よし、いい子いい子。十香はいい子だね。よく我慢した。ほら、いい子の十香にはブレゼントがあるよ？」

泣きじやくる十香に、上を向くように促す。鼻水を啜りながら天を仰いだ十香の顔が、笑顔になる。

「十香あああああつ!!」

「し……………シドー!!シドー……!!」

空から、土道先輩が落ちてきた。十香を解放してやると、元気一杯にジャンプしてお姫様抱っこで先輩をキャッチする。ヤダ十香ったら格好いい。抱いて!この節操無い女を抱いてえ!!

「シドー!!シドーだな!?!足は付いてるな!?!」

「お、おう……………。何だか分かんないけど生きてたぞ、十香」

地面に降ろされた先輩は、自身も何が起きたか釈然としない様子で頬を搔く。ま、

ハッピーエンドなんだから別にいいでしょ？

「誠、ありがとう。助かった」

「二回死んだでしょ先輩。助けられてないです。生き返るとか、なかなかトンデモですよー。俺要らなかつたんじゃ？」

今回、俺は大したことしてないって。先輩何言ってるの。

「そんなことない。お前がいなかつたら、きつともつと大変だった。だから、ありがとう」

あら、良くもまあ躊躇い無く言えるもんだ。すごいなホント。じゃあ、お言葉に甘えまして。

「それじゃ、先輩。一個だけお願いがあります」

「何だ？」

士道先輩の手を取って、楽しそうにブンブン振る十香。それに苦笑いしつつも、どこか楽しそうな先輩。

これが、俺が護ったもの。

強欲な変態は、これ以上を望むとしましょう。

「十香を、必ず今より幸せにして下さい。やってくれなきやブツ飛ばしますよ？」

士道先輩は一瞬はつとすると、すぐに、女だったら惚れてしまいそうな程に爽やかな笑顔をくれた。

「ああ、任せとけ!!」

それを聞いて、安心した。

「じゃあ、後は二人でヨロシクやって下さいね♪先に帰りますから」
「な、なっ!?!」

焦りに焦る先輩の声を背に、俺は一人帰路に就く。

今日は疲れた。公園で寝よう。

長いようで、短い一日だった。

——多分、今日の公園の水は、いつもより美味しい。

第二章―四糸乃パペット―

Date. 8「変態殺しの四糸乃」

五月。新年度より一月が経ち、新しい環境に慣れた人々がちよつとずつダレる頃。雨だ。今日は雨が降っている。そこそこ大降りだ。

公園には雨を凌ぐ場所はある限り無い。屋根の付いてるベンチか、或いは砂場に鎮座するコンクリート製の山のトンネルの中しかない。

子供の頃は、このデカイコンクリートの山で一晩過ごすのに憧れた時期があった。で、その夢がまさかの現実となった今の色無誠さんは、と言うと。

今日も一人で自己発電、あ、いや、自己啓発をしております。あぶねえあぶねえ、何賢者タイム報告しようとしてんだ。アホか。今はしとらんわ、今は。
ソフトアンドウェット!!
柔らかくそして湿っていた!!濡れてるツ!!

まあ、あれだ……このコンクリの山、俺の城になつてんのよ。ビニールシート敷いて、山の穴は触抱聖母の水で埋めてるから、雨に濡れる心配なし。

何ということでしょう!スマホでラジオ聴きつつ、図書館で借りてきた本を読める快適空間が出来上がっております。しかも防音仕様。精霊レベルの聴覚でもない限り

音漏れ無し。

占拠してて良いのかつて？ 晴れの日ならともかく、流石に今日は子供来ないでしよ。だって今日雨だぜ。かの南の島の大王の御子息も仰有つておられる。『雨が降つたらお休みだ』とね。

もつとも、これは狂三対策も兼ねてる。流石に土道先輩をいきなり襲つた件は気にしている。いつ来るとも分からないからな。これなら、山ごと破壊しない限りは先手は取られないって訳よ。

「……………」

あ、そうそう。遂にこの間、高校一年の指導要領相当の本は読み尽くしてしまった。だって暇なんだもん。皆いつも来る訳じゃないし。今は横山三国志読んで。げえつ、関羽!?

土道先輩は言うまでもなく、学校。この公園は五河家とまさに目と鼻の先にあるので、おにぎりとかたまに差し入れてくれる。あんたが神か。

十香は人間としての戸籍を手に入れ、来禅高校に転入して土道先輩と同じ授業を受けてる。こないだ、今日みたくまつたりしてたら「因数分解とやらが解らん!!」と十香が駆け込んできてビビった。土道先輩に聞け。ちゃんと教えたが。

琴里司令は中学とヘフラクシナスのダブルワークだから、まあ忙しそう。一昨日

メールで『神無月を黙らせる方法を五つ挙げなさい』って無茶ぶりが来た。司令、無理です。あいつは死んでも「私は死にましえーん!!」と甦るだろう（白目）。

鳶一先輩は……。学校とASTの訓練の合間に、週二ペースで乾パン持つて現れる。音もなく背後に現れるのは慣れないが、気にかけてくれるのはありがたい。世間話をし、去り際に「気は変わった？」と毎回聞かれるが、いつものパターンだ。取り敢えず今の俺は、公園に来る子供達を守る『公園のお姉さん』で満足していると答えている。

まあ、皆それぞれの生活があるわけだ。凄まじく暇してるのは俺だけ。怠惰を貪り、それにすら怠惰して本を読む日々。

「……………」

ところで、さつきからアルミサエル触抱聖母の水壁越しに俺を見ている人影があるんだが。見た感じ、子供だよな。

来ちゃったよ、子供。余裕ぶつこいてた俺を殴りたいね。音は抑えた筈。触抱聖母がバレたか？

……………待った。

この子傘差してるか？差してないよな。ウサギの耳みたいな飾り付きの緑色のフード付コート着てるけど、雨宿りか？

「……………」

おお。警戒されてる。顔を半分くらい覗かせてえらい警戒してる。そんなにイカ臭いか？いや、俺は女の身体だった、それはあり得ん。

よし。

「どうしたの？」

「……………ッ!？」

触抱聖母を部分的に解除して、彼女を迎え入れる格好を作る。が、ビクンと肩を飛び上がらせ、儂さを漂わせる青い瞳に怯えの色が混ざる。見つかった！とか、逃げなきゃ！とか思ってる奴だな。どこぞの蛇が見付かった時の音が幻聴で聴こえたぞ。

オーケイ。君はすっさまじく人見知りなんだね。了解。

ところで触抱聖母越しだと気付かなかったが……………。君、そのコート凄いな。濡れてない。

……………濡れてない？

ん!?明らかにそれレインコートじゃないよな!?しかもインナーガッツリ見えてるけど、同じく濡れてない。

そして、俺の靈力で充たされてた空間に流れ込む、俺のではない靈力。

間違いない。彼女は精霊だ。あら、随分小さくて可愛らしい精霊もいるのね。子供は好きだぜ、俺。もちろん性的な意味じゃ無く。……………いや、小さくてもイケるか？

「君も精霊なんだね。俺もだよ。おいでおいで」

同族だとアピール。これでどうだ？少しは警戒心を解いてくれないかな。結果的に触抱聖母見せてたから、少しは行けるかと思うんだが……………。

「……………!!」

『やー、お仲間と会うのは初めてだねえ。いいんじゃない？』

「……………でも……………」

『よし、じゃあよしのんにまっかせなさい!!』

お、パペットしてたんだ。ちびつことパペットが何やら会話している。それにしてもパペット操つてると偉い軽い調子で話すなあ。こう、電話だと強気になるとか、メールだと文面絵文字だらけの男子とかと近いものを感じる。

『やつほーおねーさん。お邪魔するよ?』

「おう、いらつしやい。靴は脱いでね」

『たつはー!砂場でジャパニーズハラキリカルチャーを要求されるとは思わなかったなあ』

「違うないけど、ハラキリは違う」

ちびつこ精霊を招き入れたが……………ああ、いつぞやのおつちゃんを思い出すやり取りだぜ。そういやおつちゃん昇進したらしい。おめでとうおつちゃん。

さてと。ファーストコンタクトはまあ成功、か？

『おおう、おねーさんなかなか良いところに暮らしてるね』

「キッチン風呂無し家賃無しの一部屋って素敵じゃない？」

このコンクリ山、中が案外広いもんで、身長170台の俺が寝そべってる所にちびっこ精霊が入っても余裕がある。良物件だぜ。公共の場所だから、俺が使えるのは雨の日か夜限定だけだ。

「さて、それじゃ早速自己紹介と行こうか。俺は色無誠。この公園でのらりくらり生きてる精霊だよ。因みに元男でーす」

定番の挨拶となりつつある元男宣言に、ちびっこ精霊のパペットが大仰に驚く。

『ファツ!? おねーさんはおにーさんだったのか?! いや、今は女だから、おにねーさん?』

「おにねーさんは止めてくれ、何か鬼って言われてるみたいだ」

『おおう、じゃあおねにーさん?』

「オナニー?」

『何言ってるんの変態おねにーさん』

「照れるね」

『オツケー出ちゃった!?!』

パペットが引いているが、ボデイのちびっこ精霊はポカンとしている。多分イマイチ分かってない。綺麗なままの君でいて。ソノーマーデーイー（A、）

『ま、まあ、気を取り直して。ボクはよしのん。変態おねにーさんがいたのに気付いたから、つい来ちゃったんだ』

どうやら渾名は変態おねにーさんで決定のようです。

「へえ。あ、よしのんも氷砂糖食べる？サクマドロップもあるよ？」

俺は乾パンの缶を取り出し、中にある角砂糖を一つ口の中に放り込みつつ、よしのんに勧める。

小さい子を落とす常套手段。必殺奥義（餌付け）。ある程度会話した所で、話の茶請けとしてお菓子を取り出す。自分も同じものを食べつつ、一緒に食べる？と聞くこと。

知らない人からお菓子貰っちゃダメとは言われるが、相手も同じ物を食べてると油断する。

フッフッフ……………このために乾パンの氷砂糖を二十個程食べずに温存していたのだ。ちびっこ対策にな!! 鳶一先輩マジダンケション。

『だつてさ、四糸乃。どうする？』

「う、うん……………た、食べて、いいですか？」

本人が口を開いた。いや、パペットも本人か？そして——四糸乃？よしのんと

……………四糸乃？

ああ、パペットがよしのんで、本人は四糸乃って名前なのか。なるほど。さつきまですつとパペットにご挨拶してたのか俺。どんだけ怖がられてんだ。

「いこよ。はら」

四糸乃が恐る恐る角砂糖に手を伸ばす。いや、よしのんの口を伸ばす。

『とつたどーっ！！』

何処かのゴールデン番組のノリでよしのんが叫ぶと、四糸乃は手を引つ込める。パペットの口から角砂糖を受け取り、まじまじと角砂糖を見つめる。

ああそうだ。先に言っただけじゃないと。

「硬いから、口に含んで舐めるんだよ？」

「……………」

震えながらこくと頷くと、四糸乃は今からガン手術でもされるのかと言うくらい真剣な瞳で角砂糖を見つめる。俺角砂糖がこんなにビビられてるとこ初めて見たわ。こう、背後に「」 「」 「」 「」 っって劇画タツチで浮かび上がってる感じ。

数十秒躊躇い、遂に四糸乃は意を決して、ぱくん。角砂糖を食べた。

直後にカツ!!と目が見開かれる。フリーな右手の親指を立て、こちらにグツと見せてくる。気に入ったらしい。やったぜ。完全勝利した四糸乃ちゃんUC。君もう

ちよつと拳高く掲げてみ？脇が見えるくらいに。つよそうだよ。

「……………あの……………あ、ありが……………とう……………ごさい……………ます」

ちよつと打ち解けてくれたらしい。ふるふる震えながらも、瞳からもつと欲しいなーという子供特有のキラキラした欲望と、けど言い出せないなーという慎ましさを感じる。君は実に良くできた子だ。たんとお食べ。

缶ごと渡してあげると、遠慮がちに角砂糖を口に運んでいく。そして、にこつ。小さな幸せを噛み締める笑顔が溢れる。

うつ。

うおお、あ……………。

あ”あー四糸乃が可愛くて下腹部が全く濡れないんじやあー（浄化）!!

何か久し振りに来た孫を甘やかしちゃうお爺ちゃんお婆ちゃんの気持ちがかつた。何この可愛い生き物。世界遺産にしようぜ。クツツ、何なんだこれは。対変態用最終必滅兵器かコノヤロウ!!

四糸乃に見えない所で、爪が肉に食い込みそうなほど拳を握り締める。いかん、自制せよ。今にも左手で四糸乃をロックして右手で無限ナデナデしてしまいたいそうさ。静まれ左手。右手で左手首を拘束。その為の右手。

「あつ」

「ん?」

『あちやー……………ごめんおねにーさん! 四糸乃が全部食べちゃった! メンゴ!』

「あらら」

唐突に、よしのんが手を合わせて謝るポーズをする。俺が意識を逸らしてる間に氷砂糖十九個をペロリと食べちゃったのか。あつ、涙目になつてる。

「(ゴ、ゴ)……………ごめんなさ……………」

怒られると思つたのか、最高潮に震え出す四糸乃。君身体の中にモーター何機か積んでない?

ん? モーター? 体内!? 濡れるツ!! いつもの調子が戻ってきた四糸乃が可愛いんじゃない? あー!! ぬわー!!

ひつ、ひつ、ふう……………よし、落ち着いたぞ。黙っていることで四糸乃をこれ以上怯えさせるのは忍びない。何一つ怒る要素なんて無いんだ。

「全部食べてくどくなかった? 大丈夫? 他の食べる?」

The 大人の対応。変態舐めんな。変態は紳士だからな。これくらい容易いとよ。

「えつ……………、え……………?」

「怒つてないよ。おねにーさんはお友達が欲しいんだ。四糸乃と会えて嬉しいからね。

それは俺が四糸乃にあげたんだ。気にしないでいい」

スツと手を出し、四糸乃の頭を軽く撫でてやる。見よ、我が理性。左手で太股つねってハグしたい衝動耐えてるんだぜ。ダメダメじゃねーか。

「んっ……………」

『ぷひいー、良かったね四糸乃。おねにーさんが優しくして』

「うっ、うん」

すっかり身体の震えも治まり、よしのんと会話しながら胸を撫で下ろしている。まだまだぎこちないけど、ちよつとずつ心を開いてくれているんだな。

四糸乃は、十香とは良い意味で正反対だ。十香は、人との繋がりを求めつつ、それを諦めた絶望型。四糸乃は、人と触れ合うことが怖いつてタイプだ。警戒さえ解ければ、仲良くなれる可能性は高い。土道先輩にとつてこれは良いことだろう。

……………でもこの子とキスすんの？先輩。通報するよ？

『おねにーさん。今日はもう帰ろうと思うんだ』

これから起こるであろう四糸乃と先輩のデートについて考えていると、よしのんが声を上げた。

「あ、そう？もつとゆつくりしてきやいいのに。外、雨だし」

『いいのいいの、四糸乃雨好きだしさ。今日は急に来たから、また今度ちゃんと来ようか』

な、って』

なるほど。よしのんも結構律儀な奴。あ、そうか、結局四糸乃だからかなり気が回るのか。デキル女だね。俺？やれる女？

「気にしなくていいのに。どうせ一人で暇だし」

『止めないでくれおねにーさん。本音を言えば、初めて友達が出来て四糸乃が跳ね回りたいくらいはしゃいでるんだ』

「よ、よしのんっ!!」

『やめれやめれ、目が回るるるるる』

顔を真っ赤にして左手をブンブン振っちゃってまあ可愛い。こんな子に友達だと思ってもらえるならサイコーだわ。とは言え、ちよつと急なことで舞い上がっちゃってるのね。じゃあ、四糸乃の気持ちを尊重しようか。

「四糸乃。雨の日ならいつもここにいます。晴れの日も、日が落ちる頃にはこの公園で四糸乃を待つてるよ」

「……………!!」

こくんこくんと、首をどつか飛んできそうな程縦に振る四糸乃。ああもう可愛い。俺、今日からママ兼パパになります。無理か。じゃあ変態おねにーさんで。

「あ、の……………!!」

「何?」

「まつ、……………また、来ていいですか!!」

勇気を振り絞った一言。何て健気。俺は本当に四糸乃には全く下心が湧かない。

「いつでもおいで?」

だから、目線を合わせて笑顔で返してあげた。俺に、それ以外に用意出来る返事はない。

「は、い……………っ!」

『んふふ、おねにーさんもお人好しねえ。嫌いじゃないよ。じゃあねー!!』

「気を付けて帰れよー。変な精霊に声かけられても付いてつちや駄目だぞー」

コンクリ山を出た四糸乃は、よしのんを着けている左手を掲げ、ちらちらと振り返りながら去っていく。よしのんが、器用にもこちらに手を振っていた。

因みに変な精霊とは狂三のことだ。

『おつとお!じゃあ変態おねにーさんにも気を付けないとね!』

「泣くぞオラ」

二人……………いや、厳密には一人だけど、そう思ってしまう精霊の姿が見えなくなるまで、俺は見送っていた。

「シドー！この単語は何だ！むつかしくて敵わん！」

「辞書引け辞書！——ん？誠からメールだ」

「おお、何と書いてあるのだ!？」

「えーと……『先輩、もげろ』……?」

「何のことだ？」

「俺も知りたい」

Date. 9 「目覚めよおねにーさん」

四糸乃と会った翌日。今日も今日とて雨が降る。やけに雨降るなあ最近。まあ、俺としては良いんだけどね。

俺は雨の日はいつもの二割増しで強くなる。何故か。俺は水に含まれる僅かな霊力からでも霊力補給が出来るだろ？ 雨に打たれてる間は常時霊力供給状態になるから、ちよつとばかり身体がハイになる。

……ところで、俺は昨日あることに気付いた。自分の精霊としての力についてだ。

俺は自分を水にして操る精霊だ。〈触抱聖母^{アルミサエル}〉を取り込むことで、身体を液化化させる。

しかし。どうやら、天使で作り出した水ではなく、水道水やペットボトルの水など、現在その場にある水をも操れるらしい。ただし、俺が意図的に霊力を通す必要がある。水溜まりの雨水に手を翳すだけでは操れないが、軽く霊力を放出して浴びせてやると俺の支配下に置かれる。

つまり、触抱聖母を常に展開していなくても、日常生活に活用するレベルなら触手

や水を操れるという訳だ。便利ツ!!しかも霊力消費がほぼゼロに近い。俺は精霊始めて一ヶ月目にして、ようやく天使常時^{切り札}展開生活とおさらばした。

実際戦闘するとしたら、やっぱ天使に頼るけど。だって、天使で作った水じゃないと体積までは弄れないから、自ずと使える量が限られてくる。

「閃光の夢だっけ〜がこの闇を照らしてく〜」

今は、足突っ込んだ水溜まりに「整形」^{マセガイ}を使い、水のサーフボード的なのを作り出して濡れた路面を滑走中。遠目には、熱唱しつつ水を弾いて疾走するようにしか見えない。殆ど霊力使わないから、ASTにバレることもないはず。能力の練習大事。

え? 四糸乃に雨の日は公園に居るって言っただろって? 書き置きしたから大丈夫。多分(曖昧)。

「——ん?。」

公園まであと少しという所で、道の真ん中で土道先輩が、何かを差し出しながら、傘も差さずに何かと対峙してる。その何かは、土道先輩の背中で見えない訳だが。じりじりと前進している。これは決闘^{デュエル}か? そうなのか?

それにしても切迫してないなあ。先輩の背中丸まつてるし、明らかに喧嘩系の気迫がない。ホント何してんの先輩。

「ちいーっす先輩グーテンモルゲン!!」

「わひいつ!？」

ということとで、先輩の背中にガツシリ飛び付く。こう言うのは直接聞くに限る。ほれほれ先輩、おっぱいですぞ。大きさは十香以上だ舐めんじゃねえ。物理的になら舐めるの大歓迎。

「な、何だ、誠か………ふう、心臓に悪いから止めてくれ」

突然の背後からのハグに大いに取り乱した先輩だが、俺だと気付くとすぐに調子を取り戻した。チツ。

「何だとはご挨拶ですね先輩。初めて会った時もこんな感じでしょうが。金髪美人の後輩と戯れるとかオイシイでしょ？」

「中身男だからちよつと嬉しくねーよ」

「でも身体は正直ですね」

まさぐりまさぐり。鳶一先輩直伝のフィンガーテクニク。今回は胸元で我慢。下は鳶一先輩用だからな。

「ヒイヒイ!?!どこまさぐってるの!?!」

「お?先輩つてやつてる時にパートナーにナニしてるか実況させたがるタイプ?」

「ちげえよ!?!」

「鳶一先輩に教えてあげなきゃ。先輩はご奉仕がお好み、つと」

「止めてえっ!? 嫌な予感しかしないから鳶一にメールするの止めてえっ!?」

本格的な悲鳴が土道先輩から飛び出した辺りで引き際と判断し、俺は背中から離れ、対峙していた相手を見据える。因みにメールは既に送った。

「あつ……………ま、誠さん……………」

「四糸乃ツ!」

守ってあげたくなるオーラを纏う、可愛い系少女四糸乃が、そこにいた。だが、何かが足りない。左手が寂しい。

「パペット…そうだ、今日はよしのんはどうしたの?」

「……………う……………う……………!!」

フルフルと怯えながら、指差す先は土道先輩の伸ばした手の中。そこには、抵抗する力を失い、項垂れるよしのんの姿が!!

ウソウソ。つまりよしのんパペットが土道先輩に握られていた。

何で?

——頭のなかで方程式が組み上がった。

四糸乃(可愛い) + 土道先輩(ご奉仕好き) + よしのん(人質) || 言いな

り

——妄想タイム——

『ぐへへへ、こいつがどうなっても良いのか？ん？』

『よ、よしのんを虐めないで！』

『じゃあ……どうしたらいいか、分かるだろ？』

『い、痛くしないで、下さい……!!』

『痛くするんだよオ!!』

『ひ……、ひいつ……!!』

——妄想タイム終了——

——。

「外道先輩」

絶対零度の視線、発動。ロリコンブチコロ慈悲はない。幼女泣かすは人類の敵、女の敵。女の敵は私の敵だ。いつものイントネーションのままに、殺意を籠めた渾名をプレセント。

「違うわア!!この子がコケた拍子にパペットを落とすから、返してあげようとしてただけだ!!」

「ホントかな？」

「メチャクチャ疑われてないか俺?! 違うから! 違うからな!」

土道先輩は一応信頼してるんで、まあ無いとは思いますが、一応ね。マジだったら殴ってますよ、前が見えなくなる程度には。

「なら、いいですけど。早く返してあげて下さい。四糸乃泣かせたら承知しません」

「お、おう」

「ケツの穴から触手突っ込んで口から先端出しますよ」

「なにそれこわい」

二人の距離が更に縮まり、四糸乃の手が届く範囲までに近付く。すると四糸乃はよしのんを先輩から奪い取ると、ウサギのように先輩を飛び越え、俺の後ろに縮こまってしまう。

土道先輩が苦笑していると、俺の背中からよしのんがニユツと姿を現した。再装着が完了した模様だ。

『やーやーおにーさん、助かったよ。んでえ? 助け起こしてくれる時に、いろんなトコ触ってくれちゃったみたいだけど……………』

「あ”あ”ん”?! 外道先輩イア?!」

『どんな発音?!』

鎮まった変態に再び火を点けたな……………。我等紳士の鉄則は、YesロリータNo

タッチ。それを知らぬは変質者かりア充のどちらか。どちらにせよ、我等の敵よ!!フ
ハアアアハハハ!!

「ま、待つてくれ!誤解だ!!」

「問答無用!!一夫多妻去勢拳ツ!!」

その股ぐらに、メガトンパンチ。一に金的、二に金的。全体重を乗せて抉り込むように打つべし討つべし。

「ア” ツー……?!?!”」

一夫多妻去勢拳。効果、男は死ぬ。女も死ぬ。例外なく土道先輩も死ぬ。

ふう。

「まあ、許してやってよよしのん。四糸乃も。土道先輩は悪い人じゃないんだ。身体の異常が無いか見てくれたに違いない」

爽やかスマイルと共に、土道先輩を擁護する。あの人は命懸けで十香を救った男だぜ?悪いやつのはズがないさ!!

『殴つてから言うかねそれを。おねにーさんも中々過激だね』

「あはは、何言ってるんだいよしのん。俺は土道先輩を殴っちゃいない。外道先輩を殴ったんだ。四糸乃を守るためなら変態にも鬼神にもなる」

「誠コノヤロウ」

俺がキラキラしたエフェクトが付きそうな感じで舞いながら力説していると、土道先輩が膝をくつ付けて股をピッチリ閉めた状態で立ち上がっていた。

「何だあ、先輩無事だったんですね。——俺と一緒にねにーさんになりましようよ」

「嫌だよ!？」

「まあまあそう言わず。——素質はあると思うんで」

「俺はダークサイドには堕ちないぞ!!」

「これは即堕ちニコマですな。野郎のアへ顔とか見たかねえな」

「そうだよ（便乗）」

「お前ノンケかよお！（驚愕）」

「何でホモ百合する必要があるんですか（困惑）」

——先に言っておこう。

俺は土道先輩とわりと仲良い。少なくとも、俺が男子で普通に後輩として先輩と会ってたら、放課後につるんでいたであろう位には。

十香に居場所を作り、人間を信じる機会を作った土道先輩に感謝と尊敬の念は抱いているが、純粹に人としても好きだ。最も、先輩を異性として好きになれそうかと言えば………勿論、今も返事はノーだ。

「あ、あの………誠さん………この、人は？」

雰囲気からどうやら悪い関係ではないと察したらしい四糸乃が、そーつと俺を見上げて来た。そういうえば確かに土道先輩を紹介していない。ちとふざけすぎたか。

よしよし、四糸乃は空気が読めるいい娘、ルックスも最高だ。将来はきつとミス・ユニヴァアアースになるだろう。あ、それアカン。四糸乃が赤いサンングラス掛けてたら俺泣く。

「ごめんごめん。この人は五河土道。俺の人間だった頃の先輩に当たる人で、端的に言うなら精霊の味方さ」

そういう意味では、俺と土道先輩は同志だからな。片や人の身で、片や精霊の身で精霊を守る。俺が土道先輩と精霊の橋渡しをし、〈ラタトスク機関〉が先輩の後押しをし、そして先輩が精霊の力を封印する。中々面白い共闘体制だ。

『へえ、おにーさんも物好きねえ』

「土道先輩は好き者でも可」

「誤解を与えるな」

軽くチョップを入れられた。痛くねえ。何せ俺は爲一先輩の殺意全乗せ狙撃を腹に喰らって生きてたからな。本当に何ともない。土道先輩の家で、タンスの角に小指ぶつけてタンス粉碎したときは吹いた。その後説教された。ちくせう。

「ツクシヨン!!」

唐突に、土道先輩がクシャミした。

あ、精霊の俺と四糸乃と違つて、土道先輩は濡れるの大問題でしたね、そういや。余りに先輩が平然としてるもんで気付かなかつた。

「土道先輩、これ以上はマジで風邪引きますよ。帰りましょう、送りますから」

「や、こんくらいなら大丈夫だ。悪いな、四糸乃、よしのん」

『いいつてことよー！人間は精霊より脆いからね、身体は大事にしなよ』

「お、……………お大事、に……………」

よしのんはともかく、四糸乃まで声をかけている。土道先輩にとっていい傾向だ。精霊としての仲間当たる俺よか警戒を解いていないようだが、四糸乃に比較的受け入れられている。これならきつと上手く行く。グッドコミュニケーション。

「誠、後頼むわ」

「了解です。さあ四糸乃、よしのん。俺んち……………つてか、公園来る？」

『突撃、精霊の晩御飯！なんちつて！』

「お、お邪魔、します……………」

俺は四糸乃と手を繋ぐと、公園に向けて歩き出す。

俺は四糸乃のおねにーさん。四糸乃が人としての生活を送れるようになるまでは、

俺が四糸乃を笑わせよう。

だから先輩？風邪なんか引かないで頑張ってくださいよ？



ずぶ濡れになった土道は、湯船で暖まりながら、ふと思った。

いや、気付いたと言うのが正しいか。

『ホントかな？』

誠のあの時の台詞。

話している時は、ふざけているのかと思いきや留めていなかったが、今思えば何か不自然だった。

「別人みたいだったな……」

声そのものは誠だった。しかし、声色が突然変化したように思えた。一瞬の変化ですぐに普段に戻ったため、確信して言えないが。

普段は、変態だが気のいい後輩。しかし、何かある。そう直感した。琴里が危惧し

た通りだ。

それが、誠の経験したのから来るのか、はたまた精霊になった副作用なのかは、士道には分からない。

機会を見て、誠に聞いてみるのもアリかもしれない

『ふんふんふんふん』

脱衣所から、十香の異歌鎮魂歌が聞こえた。

数秒後。

士道の思考も肉体も、揃って湯船に沈んでいた。

Date. 10 「いつから俺は便利屋になったのか」

士道先輩去勢未遂から、二日後。

事件は、起こった。

「何だ?」

俺がいつも通りコンクリの山の中で読書して過ごしていると、道路工事のような激しい音が公園に近付いてくるのが聞こえてきた。恐ろしいことに、誰かの足音らしい。

その足音はコンクリ山の前で止まる。

おう、俺正直おっかなくて怖いんだが。誰だよ。そんな人間重機みたいな奴。

「誠よ! いるか!」

あ、十香だった。悪い、美少女をデカブツ扱いして。ほんに申し訳無い。

「(ト)にゐるぞー」

山のトンネルのうち一つを開き、ヌツと顔を出す。そこには、雨が降つていると言うのに傘も差していない十香が、仁王立ちしていた。

「おうどうした十香、遊びに来るなら傘くらい使えつて。ほれ入った入った」

「む、邪魔するぞ」

「靴は脱げよ」

「分かっている」

ただ遊びに来たという感じでは無かったが、取り敢えず中に入れることにした。流石に二人も入ると少し手狭だ。最近来客が続くので、コンクリ山の中をすこーしだけ掘ってスペースを広げたのはナイショ。

茶請けに乾パンを用意。ペットボトルに入れたサクマ水（サクマドロップを水に溶かした）と共に出しつつ、十香に話を聞くことにする。

「……………んで？どうした急に」

「誠よ、頼みがある。私をここに置いてくれ!!」

「何かと思えば家出かよ!?!」

拍子抜け。

さて、何が原因やら。

「うむ。もうシドーなんて知らん。ばーかばーか」

「成る程、先輩がなんかやらかしたか。恥ずかしい所でも覗かれた？おっぱいでも触られた？一発又かかれた？それともご飯抜かれた？」

「いや……………その、見られたし触られたが……………その……………ええい！それは違うのだ！」

「違うのかよ、寛容だなお前」

正妻の余裕か？というのと言わないでおく。十香だとこの手のフリは反応鈍いから、多分聞き返される。

さて……………それが違うなら、何だ？

「別に、もうシドーのことなど気にはしておらん！他の女とイチャコラしようが、もう私には関わりが無いことだからな！」

思い切り叫んで、サクマ水を煽る。おーいい飲みっぷり。お代わりいるか？

「成る程……………いや待て、俺はまだOK出してねえからな？」

「私には関わりが無いことだからな！」

「……………あーはいはい、わあつたよ……………」

こうなったら十香はガンコだ。本人が納得するまでは梃子を粉碎してでも動かさないぞ。先輩、今度何か奢ってくれても良いんですよ、ここまで来ると。

そんなじゃ、変態によるカウンセリング、始めましょうか。

「十香。その、先輩がいちやついてた女つてのはどんな奴だ？折紙先輩か？それとも、見たこと無い人か？」

「見知らぬ女だ。鳶一折紙ならば今頃殴り込みに行っている」

「だろぅね」

とは言ったが、お前先輩の家知らないだろ。俺は知ってる。いや、一昨日知った。『先輩にご奉仕好きの可能性が微レ存』てメールしたら、地図を添付した返信で呼び出され、

「土道はメイド好きと聞いていた。今回の情報はそれを裏付けるには充分。感謝する」

と言うなり、男目線で惹かれるメイド服はどれかと二時間位フアツションションに付き合わされた。いや、どれも似合ってたけどね。無茶苦茶似合ってたけどね。『お部屋をお連れします』と言わせたくなる位には。

流石に胸元殆ど隠していないエロメイド（というか裸エプロン）は土道先輩の為に止めたが、ミニスカート＋ガーターベルト＋ハイソックスは譲れなかった。

これの破壊力嘗めんなよ。コロニー落とし級だぞ。確かにロングスカートも素晴らしいが、性欲を掻き立てる『魅せるスカート』としてはミニスカートのパワーは計り知れない。動いた時にフワリと浮き上がり、伝説の秘境：女子の三角地帯ショウが見えそうで見えないというこの黄金比。ガーターはスカートの中への道標であり、瑞々しい太股を強調すると共に男を誘う。ハイソックスは清楚さをアピールしつつ、足のラインをよりハッキリと浮かび上がらせつつの、爪先をスリムに見せエロスを掻き立てるイケナイ装備。ガーターと合わせることで、清楚さと大人の魅力が加わりそのエロ力チカラは無限大。イデ発動。これぞメイド下半身三種の神器。

——と力説して、先輩が最後に選んだ奴を推したら次の瞬間固い握手してた。
そして、

「以後、折紙と呼んで」

と、けっこう心開かれた。それでいいのか折紙先輩。

——話を戻そう。

「そんで？じゃあどんな娘だったんだ？」

十香は暫し頭を捻ると、かなり嫌そうな顔をして答えた。

「小柄だった。左手にウサギの手袋をした、口の悪い無表情な女だ」

うわあ。

より詳しく聞けば、空間震警報が響く中、避難もせず何処かに消えた土道先輩を追った所、その女とキスしてる場面に遭遇してしまったとか。

嗚呼、四糸乃ってか、よしのんが喋ってる時の四糸乃しか思い浮かばねえ……。確かによしのん、ノリが軽いからなあ。ちよつとからかったりフザけたりしても、相手によつては馬鹿にしてるようには聞こえないからなあ。

「なあ。そいつ、よしのんって名乗らなかつたか？」

「知っているのか誠!?!」

「当たり前かよ……………」

こりやあ放つとくとメンドクセーことになりそうだ。士道先輩は四糸乃に接触せざるを得ないのに、十香は四糸乃にお冠。勘弁して下さい。

「あー、十香？よしのんというか、四糸乃のことなんだが」
「聞きたくない」

説明しようとした途端、両手で耳をガードしやがった。十香、そんなに嫌か。

「いいから聞け。四糸乃も精霊だ！」

イヤイヤする十香に無理矢理手をひっぺがして聞かせると、目を剥いて驚かれた。

「な、何だと!？」

「お前とほぼ同じ状況だろ、察しろよ」

「む、むう……………」

旦那が浮気してると思ったら、ちゃんとした仕事でしたというオチに納得が行かない奥様のような、何とも言えない苦い表情の十香。まあ、そりやそうだろ。好きな男が他の女とイチヤコラするのを、壮大な理由で正当化されても納得いかねえよ、普通。

「だが……………あのよしのんとやら、私を『シドーに飽きられた』とか、『もう要らない子』と言ったのだ。それをシドーは否定しなかった。寧ろ、あやつを氣遣ったのだ。その後、も煮え切らん態度ばかり。やはり、私は……………精霊だとか関係なしに、シドーには要らないのでは」

そう言うと、寂しそうにペットボトルを口に付けた。

十香は、自分の恋に無自覚だ。士道先輩を全面的に信頼し過ぎるが故に、恋人と友達と親と兄弟を引つ括めたような存在に見ている。そこに恩というオプシヨンが加わり、士道先輩を見る目に何処か期待のフィルターが掛かっている。

だから、士道先輩に大事にされないと悲しいし、悔しい。腹立たしい。でも、直接言うのも恥ずかしいような、言わなくても分かつて欲しいような……。色んな感情が纏めてやって来て、まだ精神的に未熟な十香のキャパシティを容易くオーバーしてしまふ。

よしのん。今度覚えとけ。火が移るギリギリまで焚き火に近付けてやる。四糸乃には悪いが、ちよつとやりすぎた。人を傷付けてまでからかつちやいけない。

「十香。友達として言えることは一つ。先輩は、お前のことを嫌いになるなんて無いよ」
「何故、そう言える」

自棄になって乾パンを流し込むように一缶丸々一気食いした十香が、口許を拭きつつ聞いてくる。

そんなの、分かりきってるだろうに。

「簡単だよ。先輩がお前を封印した日のこと、忘れてないだろ？世界を相手取つてでも、命を懸けても救おうとしたお前を、どうして嫌いになるんだよ」

「——ッ!!」

目を丸くし、息を詰まらせる十香の頭に、ポンと手を乗せる。

「あの人はバカだから。赤の他人も精霊も救おうとしちやうバカだから。他人の笑顔を
見て幸せだって豪語出来る程のバカだから。だけど、そんなバカだから、俺も十香も士
道先輩が好きだ。違うか?」

「————違、わない」

「だろ? お前がこうやって浮かない顔してりや、絶対に探しに来る。見てみ?」

俺のスマホをずいと十香の眼前に突き出す。表示されているのは、話している間に
来たメール達だ。

『十香、来てないか?』

『十香がどつか行つちまったんだ。見かけたら教えてくれ』

『今どこにいる? 駅の辺りでは見なかった』

これ以外含め、たった三十分で十通。相当必死で探してるらしい。最も、かなり見
当違いの所を当たっているようだが。近場来なさいよ、先輩。

「愛されてるだろ、な?」

「う、うむ………済まない誠。やはり帰るとする! あてつ?!」

すつくと立ち上がるうとして、低い天井に頭をぶつけた十香。涙目になっている

が、それもまた愛嬌がある。

先輩。こんないい子不安にさせちゃあ駄目ですよ。

「おう、しつかり謝って、しつかり文句言ってこい！」

「うむ！行つてくる！」

来たときと同じく、けたたましい程の足音を立てて、十香は去っていった。うつわ、見えなくなるの早いなあ。瞬きしたら消えたレベルだ。

「本ツツ当に忙しいお方ですわね」

「まあ、元気なのが十香の長所だからな」

先輩に十香が帰ったことをメールし、溜め息を一つ。学年で言えば、今では十香も先輩っちゃ先輩だ。けど、デツカイ妹のような、抜けた姉のような……………まあなんだ。世話の焼ける家族みたいってのは変わらないか。

……………ん!?

「誰!？」

「狂三ですわ」

「ホいつの間に!？」

十香を見送っている間に、いつの間にかコンクリ山の中に狂三がいた。全く気付かなかった。どっから湧いて来た。

「お前……………ええ……………（困惑）何しに来たんだよ」

「今日も誠さんを戴きに。天使も展開していらつしやらないようですし」

「あ、そう」

狂三は俺の頭に歩兵銃を突き付ける。しかし、今回は俺も最初から黙ってない。抱聖母の応用、ちよいとばかしご覧に入れようか。

【棘鞭^{ザナツ}】

右手の人差し指と中指を揃えてピンと伸ばす。指と指の間から、超高圧力が掛けた水が吹き出す。

「なツ!？」

水は銃を容易くカットすると、狂三のドレスの肩紐をちゃっかり切り裂く。

これぞ、戦闘用に調整した触手【棘鞭^{ザナツ}】。触手に圧力をかけて高速で射出することで、ウォーターカッターのように物体を切り裂く。

「先手は貰った。どうする？俺としては先月の借りを返したいんだけど」

「くっ……………」

ドレスが擦れないように胸元を押さえる狂三。あら、これくっころじやないの。きみ、いいからだしてるね！くっころしないかい！

と思っていると、狂三はケタケタと笑い始めた。

「やはり、あなたは『対人』に長けた方ですね」

「……………もしかして、今回は偵察？」

「ええ……………ですので、今回は思いつきり抵抗させて頂きますわ。わたくしは何度でもリベンジ出来ますので、不安要素はとことん攻略させて頂きますわよ？」

言うが早い、狂三は俺を突き飛ばして山を飛び出し、トンネル越しに俺を両手の銃で連続して撃つてくる。

「何だお前……………くつころの天才か？」

「それは不名誉な称号ですこと」

ならば此方もデータは貰おう。ということ、狂三の弾丸をガードせずそのまま受ける。なるほど、耐えられる。一応部分展開した霊装に命中したが、鈍い痛みが走った程度で出血無し。フィジカルには自信がある。

狂三の攻撃は、霊装+俺の耐久力があれば余裕で凌げる。何てことはない、驚異ではないな。

第二射が来る前にコンクリ山を出ると、狂三はジャングルジムの上に立ち、欠けた歩兵銃と短銃を構え、わざわざ俺を待っていた。

「きひ、きひひ!! わたくし仕返しをしたいと思っておりますので、折角ですから本気で参りましょう。このわたくしの限界値で！」

「そうかよ。じゃあ、こっちは天使無しでもどこまでやれるか、試させて貰うぜ！」
 霊装展開。〈神意^ア霊装^シ・無番^ト〉。さあ、俺もヤル気出すぜ!!

「——なあんてなあ!!」

「は?」

俺は、足元の水溜まりに足を突っ込み、霊力を流し込む。すると、少なく見積もっても五メートルは離れていたジャングルジムから、水触手が二十本程生えてくる。その姿はまるでイソギンチャク。素早く狂三の手足に巻き付くと、動きを制約。更に、両手の銃を奪い取ってしまう。

「……………え?」

触手の鮮やかな手際に、狂三が呆気に取られているうちに準備は完了。狂三はジャングルジムの側面に礫にされるように、触手に押さえ付けられていた。雨の日は、辺り一面濡れている。遊具が雨ざらしの公園は、全て俺の攻撃可能範囲であるということだ
 !!

「あのさあ。雨の日の俺に挑むのは無謀だぜ。覚えて帰んな。大体八時間後位に」

「前回より延長しておられませんこと!」

「このところ清純派ばっかで肉欲が足りないんだよ」

『ちよつと最近タンパク質足りてないんだよねー』みたいな表現しないで下さいませんかしら!」

これから起きるであろうことに、脂汗を垂らす狂三。俺は、彼女に覆い被さるように、鉄骨の一本を掴んで狂三に詰め寄る。言わば壁ドンだ。ジャングルジムでやったら鉄骨ドン。骨ドン? クリティカルに痛そうな響きだな。

狂三の顎を指で引つ掛けていくと持ち上げ、俺と無理矢理視線を合わせさせる。

「お前さあ、本当に精霊? 前回は今回も、ここまで追い詰められても天使使わなかったよな。どういうつもり?」

「あら、わたくし言いませんでしたかしら。偵察だと。必要無いんですよ」

狂三は笑って見せるが、圧倒的不利は分かっているはず。それでも尚使おうとしない。

「お前だと使えない、とか?」

「さて、どうでしょう。条件付の天使? 同じ精霊が何人もいる? ご想像にお任せしますわ」

ハッキリ言っていないが、恐らくこの狂三。分身か何か、だ。『このわたくし』って自分で言ってたからな。

オーケイ、後は楽しむとしよう。

「なあ。人間、脇腹を擦られると笑っちゃうってのはよくあるけどさ。お前、腰回りらへんでもイケそうかなって思ったことはある？俺はある」

「えっ、と……………つまり……………」

ひきつった笑顔に、満面オリジナル笑顔の笑みで返す。

「今回は腰とおへそ回りを重点に楽しませて戴きます」

「お止めになってええええええ?!?!」

「スカートの衣擦れで悶々出来るようになるまでやるから」

「人として終わるっ!?!」

「あ、そうそう。俺のスマホ特別製でね、水中でも使えるの。じゃあ、始めようか。まずはおさらいかからね」

「な、何がじゃあですのっ?!?いい、あつ、んあああんっ!!やあつ、あつ、あああつ!!背筋らめえええええっ!!」

ドレスの胸元から、裾から、スカートの中から、するすると入り込んで行く触手。この後特に来客も無かったので、雨の中延々触手祭りした。

正直、コーゲンだのサプリメントだのより、こつちの方が肌ツヤツヤになると思っただ。

「はあつ、はあつ、あつん、あ……………も、戻りましたわ、つ、わたくし」

「前回より酷い有り様ですわね、わたくし」

「そんな……………つあ、すかあとが、あつ……………んつ……………でつ、ですがっ！目的自体は、つ、果たせましてよ！」

「そうですね、それは良かった。身体を張って、よがって帰ってきただけでしたら、流石に引きますわよ。で、どうなんです？」

「はあ、ふう……………ええ。やはり、誠さんの触手で触れられた結果、数時間分ですけれ

ど、わたくしの『存在できる時間』が増えましてよ」

「あらそうですの。勘違いではなかったということですね」

「ええ。では、そろそろ時食みの城で休んでもよろしくて？」

「だアめ、ですわあ……お土産があるでしょおおおう？」

「……くっ……こちらですわ！（トロンとした顔の狂三と誠のツーショット写真）」

「ぶっは!!きひひい!!きひひひひ!!派手にやられましたわねえ!!」

「くうううっ! いっそ殺して戴きたいですわあ!」

「くっころ（笑）」

「本当にどちらの味方でして、わたくし!?!?」

Date. 11 「君のためのヒーロー」

「どよう？」

「いやどうと言われても……斬新過ぎるとしか……」

「そう」

俺、イン折紙先輩宅。

何でも先輩的に琴線に触れる拾い物をしたとのことで、見て欲しいと連絡されたのだ。そういうの女子の間でやってくれませんかねえ……。そう思ってた時期が俺にもあつたさ。

でもさあ。その拾い物が四糸乃のパペット……。いや、よしのんだったんだが。どうすりやあええのん？ どうりで四糸乃が最近遊びに来ない訳だよ。さては迷惑がかからないようにと思つて一人で探してるな？ けなげな!!

しかし、先輩は気に入つてるらしく、メイド姿の上でパペット着用という謎の格好をしている。何故か寝室で披露してくれた。それで土道先輩とヤル気なんですか？ ウサギの性欲は異常。折紙先輩は超肉食系女子。つまり今ここにいる二人は美女ヘンタイと野獣ヘンタイはつきりわかんだね。

……………取り敢えずダメ元で聞いてみるか？

「折紙先輩……………すいません、その……………それ、友達ってか知り合いの子のなんですか？」

「そう。証明して」

「無理だア!!」

「ならば、戴く」

「かなりご執心!!しかし清々しい!!」

俺の友達とは四糸乃だと言いたい。でも言えない。

言ったら絶対に、四糸乃によしのお返しタイミグで折紙先輩が来る。きっと来る。そんな見たら四糸乃泣く。泣いちゃう。俺が四糸乃を守る。しかしよしのんがいなくてもきつと四糸乃は泣いちゃう。ウサギは寂しいと死ぬ。つまり四糸乃は危篤（超推理）。どうすりやあいんだ。

……………と思っていると、インターホンが来客を告げる。

「来た」

その時、俺は折紙先輩の目の奥が光るのを確かに見た。あれは獲物を狩る目だ。主に童貞とか狩る目だ。あら男らしい。

……………と言うことは、だ。

「士道先輩……………ですか」

「その通り。今日、籍を入れる」

「法的に無理ですよ」

「結婚する頃には第三子は確定」

「出来ちゃった婚かあ、たまげたなあ」
ショットガンマリッジ

逃れられぬカルマ（悟り）。エロは全てを凌駕する。

折紙先輩はスツとよしのんを外すと、そこが定位置であったかのようにダンスの上に置いた。何だこれ、モデルルームのように（寧ろそれ以上に）殺風景な部屋の中に、ポツンと居るよしのんのファンシーさよ。存在感スゲー。

「士道を迎える。あなたは手筈通りに」

「何の打ち合わせもしてないのに何となく察した自分が怖い」

自然に台所へと身体が動いた。先輩方のためにお飲物準備しなきや（使命感）。

お湯を沸かしてから、さっきのタイミングでよしのん持っていけば良かったと思っ
たのは、ナイショだ。



士道は直感した。何か嫌な予感がする。四糸乃のパペットを回収すべく、インカムを装着して折紙の家に来たまではない。だが、何故折紙はメイド服なのか。しかも、家上がった途端に、ジャミングでヘフラクシナスとの連絡が取れなくなる始末。女子高生なのか疑いなくなつたが、そう言えば彼女は陸自隊員^A_Sだつたと思ひ出した。

リビングに通されたのでテーブルに座ると、折紙は酷く密着して士道の隣に座る。女子の柔らかな肉感。何やら部屋に漂う、嗅いだことの無い香り。メイド服の衣擦れ。目の前に迫つた、無表情ながら、ごく僅かに朱の差した折紙の顔。五感ほぼ全てを持つて、この部屋は士道を刺激する。

「何か食べる?」

「お、おう。悪い」

ただ並んで座っているだけなのにイケナイ気分を感じつつあつた士道は、一瞬でも逃れられるならと、折紙の提案に乗る。一度折紙が立つことで、僅かだが呼吸を整えられる。

そう、思っていた。

「……………」

折紙は立ち上がらない。スツと左手を掲げて指を鳴らした。突然の行動に士道が頭に疑問符を浮かべていると。

「おまたせ。」

「ブツハア?!?!?」

折紙と同じくメイド服に着替えた誠が、シルバートレイにドリンクを二つ載せて現れたのだ。

「お帰りなさいませご主人様♪喉渴いてませんか？渴いてますよね！アイステイーシカありませんけど良いですよね!!」

「ハイちよつと待ってええええッ!!」

いい笑顔を浮かべてテーブルに歩み寄る誠を、士道は制止する。落ち着こうと思つたら、更なるトンデモ要素が現れた。現状の把握が必要だ。

「え？誠お前何やってんの？」

「ご覧の通り給仕ですが。ね、折紙メイド長」

「その通り。何ら不審な点は無い」

「どこがだよ!?!」

「今なら執事の神無月も付けますよ」

「俺の手に負えないからヤメテ!!」

実際には居ないであろう神無月をつい警戒してしまう。当然影も形も無い。

胸を撫で下ろす土道に、誠はぐいとアイステイーのグラスを突き付ける。中の氷がカランと音を立てた。

「ささ、土道先輩。アイステイー飲んで落ち着いて下さい」

「……………何か流されてるみたいで釈然としないんだが貰うよ」

話していたら急激に喉が渴いた気がしたので、受け取ったグラスを傾けて一気に飲み干す。

が。

「うっ!?!」

唐突な眠気が土道を襲い、全く抗えないままに意識を喪った。

「で?…これはどういう状況なんだよ?」

目が覚めると、土道は手足をベルトで拘束されてダブルベッドに寝かされていた。仰向けの状況の腰付近には、馬乗りになった折紙の重みが掛かっている。はだけたメイ

ド服からは、白いレースの下着が覗いている。

絶好調に止まらない冷や汗。へフラクシナスの妹に助けを求めたいが、電波妨害でそれも不可能。最後の砦とばかりに、土道はいつの間にか白い神父服カソックに着替えた誠マコトに視線を遣る。

「先輩レ○プ！野獣と化した先輩！って感じですかね。祝☆童貞卒業！卒業証書婚 届、いります？」

助けてくれそうになかった。多分、命には関わらないから、と楽しんでる。

「笑い事じゃねえからこれ!?ヘルプ！鳶一を止めてくれ！」

「安心して土道。……………いえ、あなた」

「あなた!?!」

遮るような折紙の一言に、全身に鳥肌が立つ感覚を覚えた。今から何が起こるか、否が応でも連想してしまったからだ。

「明日からは、私は五河折紙になる。ただ、それだけのこと」

「生々しくて空恐ろしい!!」

「少なくとも、今日から私を折紙と呼んで貰う。夜刀神十香は名前で呼ばれているにも関わらず、妻である私が名字で呼ばれるなど筋が合わない」

「止めてくれよ……………じよ、冗談じゃ……………」

強張る顔筋を何とか動かして笑みの形を作り、折紙に微笑む。それが士道に出来るささやかな抵抗だった。

「筋が合わない、あなた」

「分かった折紙ツ!!だから勘弁してくれっ!!」

「ダメ。私達は、今日、今、この瞬間から始まる」

慈悲は無かった。

「アルミサエル〈触抱聖母〉の名の元に。全ての誕生に、祝福を」

「私はいい後輩を持った」

結婚式の神父のような雰囲気を漂わせつつ、何やら諦めた目で呟いている誠と、珍しく嬉しそうな折紙。

だが、諦めるとするのは士道の性には合わなかった。

「なら折紙!結婚したっていい!この後俺に何したっていい!だから約束しろツ!!」

「何を?」

「精霊を殺すのをだよ!!もう金輪際止めてくれ!」

「——ツ!!」

空気が変わる。依然不利な立場の筈だが、明らかに士道に流れが傾いた。誠はそれを察して目を丸くし、折紙は表情を変えずに瞳を揺らして動揺していた。

「あなたは……………何故そうも精霊と関わるの？あれは世界の災厄。例外は誠しかない。」

「そんなことは無い！精霊だって、笑って、泣いて！悩んで！苦しんで！人間と同じなんだ！」

「見てきたように、言う……………。やはり、夜刀神十香は……………」

折紙の表情が、露骨に歪む。これまでの能面のような顔でなく、憎々しげに、明確に。

「十香が精霊だって言ったら、折紙は十香を討つか？」

「……………出来ない。今の夜刀神十香からは、精霊と言えるような霊力を計測出来ない」

そう言う折紙は、実に歯痒そうだ。本人の意向でないのは明白だった。

「じゃあ、今いる精霊全てから、霊力が計測出来なくなれば、折紙は精霊を狙わない。そうだな？」

「そう、なる」

「分かった」

土道が全ての精霊を救うことを改めて決意した（ついでに話をすり替えた）所で、黙っていた誠が口を開く。

退くと、メイド服を速やかに脱いで下着姿になる。

「誠、後はお願ひ。鍵はオートだから心配要らない」

「りよーかいでつす」

それだけ言うと、クローゼットから手近な服を取り出し、一分と経たずに着替えて出ていった。

玄関のドアが開閉される音を聞いた所で、誠はベルトを外して土道を起こす。

「さ、行きましよう先輩。四糸乃のパペット……いえ、よしのんはここですよ」

タンスの上にあつたパペットをひよいとつまみ上げ、土道に渡す。誠の行動に、土道は驚いた。

「お前、気付いてたのか？」

「このところ四糸乃が遊びに来なかつたので、何かあつたんだらうとは、薄々。折紙先輩が持つてたのは予想外で、今日ここにいたのは偶々です」

「どんな偶然だ」

呆れながら、土道はコキコキと首を鳴らす。特に身体に不調は無い。盛られた葉も、既に効果は切れたようだ。誠は誠で霊装を展開。戦闘体勢になつていた。

「よし、行ける」

「オツケーです先輩。司令と連絡は？」

「付いてない。この家に入ったらジャミングでインカム使えなかつた」
 「実に呆れた折紙先輩の行動力よ……」

一先ず折紙の家を出ると、漸く通信が復旧する。待ち構えていたであろう琴里が、
 間髪入れずに応答した。

『士道！ やつと繋がったわね！ 目的のブツは!?』

「確保した。それより、今度の精霊は!？」

『四糸乃よ。ツ!! 士道、身を守りなさい!!』

琴里が焦る。その様子に危機を感じ取った士道が動く前に。

—— 肌に、冷気を感じた。

「つめた——」

〔アルミスエル触抱聖母〕 ツ!!〕

誠はほぼ反射的に天使を呼び寄せる。乱暴に呼び寄せた、靈力の嵐を纏った水晶を
 自分に挿入。己の身体を水に変え、士道を覆う盾になる。

直後、士道の視界は白く染まった。いや、見える全てが凍り付き、一面の銀世界
 になっていた。

—— 誠も、含めて。

「ま、誠ッ!!」

戦慄した士道が名前を呼ぶも、誠は返事をしない。最悪の事態が、脳裏にビジョンとして浮かび上がる。

『士道、無事!?そこに誠がいるの!?!』

暫し呆然としていたが、琴里の声に我に帰る。助けを求めるように、士道は声を張り上げる。

「誠が凍った!!天使ごと!返事もしないし動かない!」

『な、何ですって!?!』

インカム越しに、琴里以外の動揺も聞こえてきた。

が。

「さつつつつつむいいいいいっ!!」

突如、氷が喋った。誠は生きていた。良く見れば、僅かだが氷が溶けて水になっていた。それにより誠は復活出来たらしい。

「あ、あ、あ、あ、あ、マジで死ぬかと思ったあああつ!」

表面から氷がみるみる溶けてゆき、色付いて誠の姿が甦る。士道の溜め息と、艦橋に漏れる安堵の声とが、士道の耳の中で重なった。

「大丈夫か、誠」

「大丈夫です。さつきはただ水になっただけだったせいで、水の主導権を持っていかれ

て凍っちゃいました」

『まったく、心配かけさせないで頂戴。それで誠、水の主導権って?』

インカムをスピーカーモードに切り替えた琴里が、誠に直接疑問を投げる。琴里に無様を知られてばつが悪そうな誠は、ポリポリと頬を掻きつつ説明する。

「俺も四糸乃も、水に靈力を加えることで操るみたいですよ。同じ水に靈力を操ろうとした時、より多くの靈力を浴びせたほうがその水を優先して操れる……つまり、主導権を握るって訳ですよ」

『成程ね。さっきは取り敢えず水になっただけだったから、四糸乃側の瞬間的な靈力に負けた、と』

マイクに琴里の舐めるチュッパチャップスの棒が当たったのか、唐突にコツンと雑音が響く。

『こちらで計測した。誠、君の靈力は、四糸乃の靈力の最大値より若干上のようなようだ。油断が無ければ君自身はもう凍らないだろう』

「了解です。ちよつと自信出ました。四糸乃のおねにーさんになりたいのに、四糸乃を止められないじゃ無理ですからね」

令音のフォローに素直に感謝しつつ、少し嬉しそうな表情をする。それは、妹の前で背伸びをしたがる姉のようで、土道は気付かれないようにクスリと笑みを溢した。

『それと、だ。四糸乃はパペットをしている時だけ、本来の人格の裏で、本当に別人格が現れているようだ』

令音は続ける。よしのんは、四糸乃が誰も傷つけたくないと思ったことで生まれた存在だと。

「——誠。俺、四糸乃に『ヒーローになつてやる』つて約束したんだ。力を、貸してくれるか？」

「勿論ですよ。俺にそれ以外の選択肢は無いですから」

決意を込めた土道に、誠は何時もの軽い調子で応答する。しかし、その瞳は確かに燃えていた。

「私も、今回は助けてあげるね」

「えっ!？」

唐突に変わった口調。土道は思わず誠に聞き返してしまう。

「どうかしました？」

しかし、誠は気付いていない。自分の変化を、意識していない。

「い、いや………気のせいだったわ」

「気張り過ぎですよ、先輩」

ニツと歯を見せて笑う誠からは、先程の気配は一切見られない。それに、先の台詞

からして、どうやら味方ではあるらしい。取り繕った土道は、漠然とした不安を頭から追い出す。

「四糸乃の所に行こう、誠」

「任せて下さいよ、先輩」

降り頻る雨。肌を切るような冷気。凍りついた街並み。

たった一人の少女を救うため、少年と精霊は空を睨む。

「さあ、俺達のデートを始めよう！」

「人の恋路を邪魔する者は、色無誠が受けて立つ!!」

Date. 12 「君の隣に居たいから」

身体を構成する水の一部をサーフボード状に変え、土道先輩を乗せた俺水流が、凍りついた街を駆け抜ける。

「琴里、次はどっちだ!?!」

『二つ目の信号を右よ! 後は目標ポイントまで直進!』

「司令! 折紙先輩……………ASTは!?!」

『100m近く遅れて四糸乃を追撃してるわ! 四糸乃と接触したら、誠はASTを迎撃して頂戴!』

「イエスマム! 先輩、飛ばしてきますよ!」

「頼んだ!」

時速にして150kmは出ているだろうか。振り落とすとマズイので、先輩の足をサーフボードから出した触手で縛って固定している。

まさか車に乗らずにこんな速さで動けるとはなあ……………。恐らく、これでも俺は敏捷性は精霊最低クラス。〈触抱アルミサエル聖母〉の水化のお陰で何とかこのスピードだ。

司令の指定した交差点を、水流の向きを振るように曲げることで速度を落とさずほ

ぼ直角に曲がる。

巨大なウサギのような天使が、こちらに猛進して来るのがハッキリと見えた。

「先輩！四糸乃が見えた！」

「よし……………四糸乃おおおおおおおおおおおおお
お—————っつ!!」

ポケットから取り出したよしのんを手に、土道先輩は四糸乃に呼び掛ける。過剰なまでのハイパーボイス。いざという時の大声は主人公の必須スキル。ただ、間近でやられると五月蠅い。五月蠅くて敵わない。耳押さえない。耳も手も今無い。ちくせう。

「叫ぶなら叫ぶって言って下さいよ先輩！」

「悪〜」

水になつてるからって、五月蠅いとは思いますがからね、先輩！

とは言え、先輩の行動は功を奏したらしく、ウサギ型天使の背後で緑色のウサ耳が一瞬飛び跳ねた。どうやら四糸乃が気付いてくれたらしい。元々速かった速度が更に増し、俺達の目の前で急ブレーキを掛けて停止した。

「よう、四糸乃」

俺から飛び降りた土道先輩が、右手を軽く挙げて声を掛ける。襲われる恐怖の中で知り合いに巡り会えた事が余程嬉しかったらしく、四糸乃は涙を浮かべ、そして、

「ひっ!？」

先輩の背後にいた俺を見て、ビビった。

「つうこんのいちげき!ごごっ!!」

「そういう俺、四糸乃の前で水になったことなかったや。でもこれは……………ツライ……………」

「よ、四糸乃お……………俺だよお……………おねにーさんだよお……………」

人間態に戻って四糸乃を落ち着かせるが、正直ダメージが強すぎて立てない。自然と膝を折り、両手を地面に突いてしまう。完全形態なorzの姿勢だ。

「ま、誠さん……………!？」

「そうだよ四糸乃……………先輩と一緒に助けに来たよ……………」

『まずアンタがしゃんとしなさい!』

司令に怒られてしまった……………。くそっ、駄目だ駄目だ!おねにーさんはめげない!しよげない!司令のためなら何度でも立つ!四糸乃だって悪気は無かったんだ。なら俺は今度は司令に良いところ見せるぞー!!

「うっす!司令、すいませんでした!色無誠、頑張れます!」

『じゃあ、さっさとやってらっしやい。討ち漏らすんじゃないわよ!』

「漏らしたら？」

『三角木馬の上に一週間座らせるわよ』

ああん。いたあいそれ。でも琴里司令に座らされるならそれはそれでアリかも知れない。濡れるツ！——と、妄想を膨らませつつも真面目にやろうと考えていると、

『誠君！一人くらい討ち漏らしませんか?!』

『うっさい神無月。アンタには今すぐプレゼントよ！下がってなさい!』

『ア” ツーリがどうございまあ” あず!!』

友が楽園に散っていった。何でもあるへフラクシナスの艦内構造が気になるが、その気持ちはそつと胸にしまっておこう。胸にしまつて物理的にはおっぱいで挟むってことだよ。ナニをしまつちやうんだらうね。しまつちやうおねにーさん。無いか。

「討ち漏らしはしませんよ！神無月から聞きました。俺はへフラクシナスの艦載機みたいなものなんですよね？なら、司令の艦の名を傷付ける訳には行きませんかからね!!」

『ハッ！言ってくれるじゃない！なら、やつて見せなさい!!期待してあげるわ!』

顔は見えない。しかし、俺は誇らしい。

惚れた人に尽くせるってのは、中々幸せなんじゃないかな。しかも、俺の場合は欲望を満たしつつそれを果たせる。素晴らしい労働環境だ。ヤル気マシマシだぜ!

「篤イエス、マイロードと御覽在れ！」



今更だが、日下部療子は色無誠が個人的に嫌いだ。

確かに折紙の言う通り、精霊への敵対行動を取らない限りは人間に友好的だ。報告にあつた誠が棲んでいるという公園で、彼女（彼）が子供達相手に遊んでいる姿を、療子自身の目で見ただけということもある。あの精霊嫌いの折紙と親交があると言うから驚きだ。

だが結局の所、色無誠は精霊だ。どんなに人間に友好的でも、ASTを明確に妨害してくる時点で、精霊寄りなのは明らかだと思つていた。

しかし、誠と交戦した際の被害は、ほぼ無いのだ。女性隊員の清純が奪われるのが問題だ（一名程特殊性癖に目覚めた）が、装備の破損も隊員の負傷も最低限。間違いない手加減している。人間側にも配慮しているのだ。

「いよっすー！くっころ団の皆さん！」

「出たわね、（サツカバス）!!総員、気を引き締めなさい！」

だから、今対峙する、どっち付かずのこの男が、嫌いだ。

さ、俺と一緒に遊びましょーoooooooooo!!」

そこからは、ワンサイドゲーム一方的な戦いだつた。

触手が次々と襲い掛かる。隊員達は随意領域を圧縮展開することで防ごうとするが、触手が触れた瞬間に随意領域ごとCRユニットのエネルギーが根刮ぎ奪われてしまふ。

一瞬で無力化され、触手に絡め捕られる同僚達の姿に、折紙は接近を断念。

すると誠は、触手で捕らえた隊員の口に触手を突っ込み始める。苦悶の声を上げて必死に暴れる隊員達だが、口の中から光る何かは触手内部を逆流すると、次々と力を失つて無抵抗になつていった。

その様子に恐慌状態に陥つた隊員数名が魔力ビーム砲を乱射するも、全く通用せず、に敢えなく同じ道を辿つた。

そして、今に至る。

「やむを得ない」

折紙は、魔力ビーム砲の照準を合わせる。

四糸乃に。

今、土道からパペットを受け取ろうとしている、誠よりも討滅しやすいであろう、四糸乃に。

「なっ!? 折紙先輩、それは勘弁!!」

意図に気付いた誠の触手が、ビーム砲本体を貫くより速く。

——トリガーを、引いた。



「ひ、っ……あつ、あああついいあああああ………!!」

「四糸乃!!」

士道先輩と、四糸乃の間を線引きするように放たれた魔力の奔流。それは、四糸乃を恐怖させるには十分過ぎた。

「あああひあああつ!! いやああああ………!!」

四糸乃の天使が、こちらを向いた。まずい、完全にパニック状態になってる! 普段の四糸乃の思いやりを、自分を押し潰さんとする悪意への拒絶反応が上回ってるんだ!! 側に士道先輩がいることを忘れて天使を使おうとしている!!

「士道先輩! 一回離れて!」

「お、おう——うわっ!」

急激に上昇した冷気が、先輩の靴を凍らせて道路に張り付ける。バランスを崩した

先輩は、その場に倒れ込んでしまう。

丁度、吼えようとする天使の、口の前に。

「—— ツ!! 四糸乃おおおつ! 駄目だあああああつ!!」

「ひいあああああつあ、うあああああああ——つ!!」

ウサギの天使の口内に、霊力が満ちる。もう間に合わない、あれは発射体勢が整った。しかも、俺の後ろには——

「く——」

「総員退避! 近い奴だけでも回収して逃げなさい!」

「そんな事言っただって隊長! 見捨てるなんて!」

折紙先輩と、ASTが……!!

畜生、俺が殆んど抵抗力奪っちゃったからなあ! 折紙先輩も、俺が破壊した武器の爆発でCR—ユニットから火花が出てる。幾ら敵として相対してたって、見殺しには出来ないぞ!!

……く、そ……!!

—— やむを得ない! 出来ることをやるまで! 先輩は原因不明の蘇生能力がある! それを信じる!

「折紙先輩! こいつら頼みます! 俺の後ろから出ないで下さいよ!」

触手で絡め取っていた隊員達を降ろし、折紙先輩に預ける。返答を待たずに背を向けると、俺は道路の中央で仁王立ちする。

「——!!分かった。隊長、誠より後ろに！」

「精霊に助けられるつてのは癪だけど……頼むわよ!!総員、精霊より後ろに退避!!」
『は、はい!!』

良かった。これでいい。四糸乃が誰かを殺めることがあつちやいけない。

さあ、後は、俺が殺すか、俺が護るか。

「四糸乃おおおつ！撃つて来いやあああああ!!!」

俺の目の前に、十枚の水の膜が出現し、

「ひああああああああああつ!!」

迸る冷気が、視界を白く染め上げた。

ぱきん、と音がした。

「ふう」

ああ、ひやひやした。

流石に全力の天使のぶつけ合いはヤバイ。何とか生きてるわ。良かった良かった。もつとも、水の膜は全層漏れ無く完全凍結。俺の全力防御だった訳だし、痛み分けてるところかな。

折紙先輩も、ASTも、全員生きてるわ。衝撃波で全員伸びてるけど。ま、司令の参加する作戦で死者が出るとか、ゼツテー駄目だからな。生きてるならオールオツ

ケー。

———そうだ、士道先輩は!?

「士道先輩……いつ!!」

凍った膜を蹴破り、先輩を探す。

………四糸乃共々、姿は見えない。どうなったんだ

「おーい!誠!こっちだ!」

それは、ビルの上からだった。

「あつはつは、やはり私がいないと駄目だな、誠!うむ、シドーなら無事だぞ!!」

士道先輩を抱えた十香が、誇らしげにこちらを見下ろしていたのは!!

お、お前って奴は………!!最高じゃねえか!!結婚してくれ!!抱いてくれ!!

「十香ア!お前は俺にとつての新たな光だあ!!」

「安心した途端ふざけんのやめろオ!」

「?」

俺は、ビルの上に一気に飛び上がった。遠目で見ると良く分からなかったが、近付いてみると十香の異変に気付いた。何というか、霊装がちよつと出ちやつてた。〈塵殺公〉もだ。ただ霊力が凄まじくシヨボく、へおうさつこーって感じ。

「十香、それどうやったんだ?」

「む? シドーを探していて、見つけたと思つたら危機にあつたのでな。必死に助けようと思つたら出た」

『愛されてるじゃない、士道』

「先輩これは十香と結婚しなきゃ嘘でっせ」

司令の言葉に便乗してみた。

「お前が言うなお前が」

先輩にコンと小突かれた。痛くねえ。もつともつと、もおつと激しく! それじゃあ変態は満足させられんぞ! 神無月とか!

さて、それはそうと、四糸乃はどこだ? 寒い通り越した、痛いに近い冷気がまだ収まってないから、まだいるとは思うけど。

「琴里、四糸乃は?」

『そこから100m先で、結界を作つて閉じ籠つてるわ。見える?』

成る程、高所からならはつきり分かった。ビル群の中に、ドーム状の何か顔が覗かせている。

「四系乃?.....あの、よしのんとか言う奴か.....」

四系乃と聞いた十香が、液面を作る。この間の家出未遂の後、先に帰って土道先輩を待っていたら、先輩が四系乃を連れて来たので一悶着起きかけたらしい。十香が堪えて何とかなつたらしいが。

「気持ちの整理、付かない?」

「うむ.....あやつも精霊なのだも知っていても、な.....やはり、シドーの隣にあやつがいると、もやもやするのだ」

「そらそうよ。なら、古今東西、伝統的な解決法がある」

「何と!!それは本当か!」

「おうよ」

十香が目を丸くして食い付いてくる。おう、あるとも。単純明快だぜ?

「お前が、いつも土道先輩の隣にいてあげればいい」



士道は、覚悟を決めていた。

四糸乃の結界は、魔力や霊力を感知して攻撃するものだ。誠や十香の力は借りられない。

ならば、生身の自分が行けばいい。自分が謎の治癒能力を持っているのは知っている。

『馬鹿な真似は止めなさい！もし致命傷を受けて治癒能力が発動したら、霊力に反応して凍らされるわよ!』

「そうか……俺の力は、精霊の力なんだな」

『ツ!!ちよつと、士道!!おにーちゃん、止め——』

インカムの通信を切り、耳から外す。例え何と言われても、この決意は梃子でも動かない。

「誠、十香。今から四糸乃の所に行く。止めるなよ」

振り向いた士道の目に映るのは、飽きれ顔の誠と、何やら腕組みして楽しげな十香。「司令に泣かれる訳には行かないんで止めたいんですけど……どうせ言っても聞かないですよね?」

「ふふん、仕方無い奴め。シドーのばーかばーか。本当に本当に仕方無い奴め。
……………だからこそ、私達が力を貸してやる」

私達が。その言葉が、とても力強く響いた。

「いいのか？」

誠と十香、二人を交互に見る。二人とも、静かに、はつきりと首肯した。

「シドー！水先案内人は、この私と誠が引き受ける！」

「先輩を置いていく勢いでやりますからね!!」——付いて来れますか？」

二人からの問いに、土道は一つしか答えを持っていなかった。

——ああ!!

それを確認した二人は、顔を見合わせ頷きあう。

「行くぜ十香、サンダルフォン〈塵殺公〉を翳せ！」

「応!!」

天に突き立てんとばかりに構えられた塵殺公。身体を水に変えた誠が、剣に、十香に纏わり付いていく。

変化は直ぐに起きた。十香に触れた水が変質し、土道にも見覚えがある姿を形取っ

ていく。

「これって……………十香の神威霊装・十番!!」

数十秒で形成は完了し、土道の目の前には、青く染まった霊装の十香が立っていた。「そう言うこと！俺の新たな力、名付けて【ツイウツト錬装】！！パワーとスピード、両方が必要なら、この場は十香に任せられた方が良いでしょう！」

「おお……………力が満ち溢れる！！しかも変身みたいで格好いいな！」

手を握って開いて感覚を確かめていた十香は、満足げに鼻を鳴らす。愛剣の柄を握り締めると、爪先でカツカツと地面を蹴る。霊装と同じく青く染まった玉座が、主人に応えて現れた。

「いざ、行くぞシドー！！乗れ！」

「おうー！」

玉座の背もたれを倒し、不格好なサーフボードを作る。土道が飛び乗るや否や、結界に向けて空に飛び出した。瞬きする程の僅かな時間でドームの最高点に辿り着くと、十香は声を張り上げ叫んだ。

「サンダルフォン〈塵殺公〉 ツ！！」

「ちよつ、おわあああああ?!?!」

玉座が霧散し、土道が宙に投げ出される。それに構わず、十香は太刀を再び上段に構えた。散った水が渦巻いて刀身に集まっていき、10mはあろうかという蒼き大太刀を作り出す。そして、

「いいか誠!」

「勿論だ!」

その名を、今高らかに告げる——!!

【最後の水剣】!!
ハルヴァンザナグ

烈迫の気合いを込めて降り下ろされた太刀が、結界を切り裂く。荒れ狂う氷の刃の嵐を吹き飛ばし、水泡が割れるように、半球の結界は消え去った。

「ほら、今ですよ先輩!」

十香の霊装から一本の触手が伸び、紙のように舞っていた土道を捕らえる。そのまま、結界が消えて呆然としている四糸乃の前へと降り立たせる。

「ここまで膳立てしたんです。四糸乃を幸せにしないとぶつ飛ばしますよー?」

「お前なあ、つたく……!ありがとう、行ってくる!」

「うむ!行つてこいシドー!」

四糸乃に向かって駆けて行く土道を見つめながら、ゆっくり落下してきた十香は、すたんと地面に降り立った。途端に霊装が解除され、十香の隣に誠が現れる。

「やったな、十香」

「うむ!礼を言うぞ誠よ。お前のお陰でシドーを護り、そして隣に居ることが出来た!」
 「なら、俺からも言わないとな。十香が居なかつたら先輩がどうなつてたか分かん

かったし、四糸乃を助けられなかったかも知れない。ありがとう

互いに視線は合わせなかったが、誠も十香も、口許に笑みを浮かべていた。

誠が、スツと左拳を頭の横に掲げた。意図を察し損ねた十香が、その手を覗き込む。

「……………？ 誠よ、それは何のポーズだ？」

「ああ、知らなかったのか。十香、右手をグーにして、俺のポーズの鏡を作つてよ」

「こうか？」

「そうそう」

ぎこちなく真似する十香。誠はその拳に自分の左拳を軽く当てる。

「こーやって拳をぶつけあって、友情を確かめ合うんだ。——悪くないだろ？」

「ああ——意味はさっぱり分からんが、これは何だか気分がいいな」

無邪気に笑う十香に「もう一度だ！」と言われ、苦笑しつつも応じる誠の姿が、凍

てついた街並の中にあつた。

因みに、士道とも拳をぶつけ合おうとして、裸の四糸乃を抱く彼の姿を見た十香が、士道の頬に拳をめり込ませたのは、また別の話だ。

第三章―狂三キラー―

Date. 13 「ねんがんの　くるみを　てにいれたぞ
！」

「わたくしと決闘して下さいませんか、誠さん」

「ええ……………」（困惑）

四糸乃の手を引く俺の前に。

またまた狂三が来た。性懲りもなく。定期便ですかコノヤロー。

時は六月。四糸乃を無事封印し、ただの可愛い女の子にするのに成功してから一月。おねにーさんとして、毎日ヘフラクシナスに顔を出し、四糸乃に付き添っていた。ご飯も一緒に食べたし、一緒に遊んで昼寝もした（寝過ぎて四糸乃に起こされた）。勉強にも付き合ったし、お風呂に二人で入ったことだってある。色々とぶにぶにしていたな、ぐへへ。

訓練を重ねた四糸乃は、知識としては既に一人で生活出来るレベルだ。勿論、料理

は無理なのでへフラクシナスゝ頼りだけど。依然として人見知りが直らないので、艦を降りるのはまだまだ先だ。

で、今日は訓練の一環かつ四糸乃の気晴らしのため、艦からの外出が許可されたのだが……………」

「あのさあ……………」それ、四糸乃の公園デビュー……………」もとい、ピクニックよりも大切な案件?」

俺の影に隠れてふるふる震える四糸乃を庇いつつ、割とマジめの殺気を放つ。

ヤロウ。俺の右手には、四糸乃と一緒に作ったサンドイッチ入りのバケツがあるんだぞコノヤロー。タマゴとツナマヨとハムきゅうりだぞコノヤロー。四糸乃が一生懸命作ったんだぞコノヤロー。こんなタイミングでまた君かあ、壊れるなあ……………」俺のこと怒らせちゃったねえ!」

「すっかり母親の顔になっておりませんこと!」

『あながち間違いとも言えないねえ……………』

四糸乃の母親? 光荣だね。ママンと娘の二人で親子丼しねーか親子丼。つり目巨乳とタレ目ロリのセットだけ、理想的だろ。

「ピクニックならまたの機会、とは参りませんこと? わたくし上機嫌でして、少々銃が暴発しそうですの」

狂三が短銃を弄び、ヘアアイロンのように自分の髪を巻き付けてはほどこいている。受ける以外の選択肢は無し、か。

「誠、さん……………」

四糸乃の小さな手が、俺のスカートの裾をきゅつと引つ張る。可愛い。

「四糸乃。へフラクシナスでちよつと待っててくれるか？三十分で戻る」

「は、はいっ！」

『おねにーさんかっくいーっ！ヒューッ！』

バケツトを四糸乃に預け、走り去る四糸乃の姿を見送る。小さな背中がブロック塀の角に消えると、俺は狂三に向き直る。

「あら？【錬装】^{ツイウツト}があるから四糸乃さんは必要ない、とでも？」

「バカ、ちげーよ。そもそも【錬装】^{ツイウツト}は他の精霊の霊装を核にしないとやれねえ。四糸乃を危ない目に遭わせるつもりはない、ってんだよ」

「本当に母親と化してますわね……………」

「……………で？ここでやる気か？」

「いいえ、いいえ。こおおんな街中で戦るつもりは流石にありませんわ。ですので……………」

狂三の口角が三日月のようにつり上がる。嫌な予感がして、持っていた飲料水の

ペットボトルを握り潰す。吹き出した水に靈力を浴びせ、身の回りに滞空させた。今はあの靈力とか魔力とかを吸収する力は使えない気がするが、ガードにはこれでも充分過ぎる位――

「今日は地下など如何でしょう?」

「へ?」

俺が情けない声を上げるのとほぼ同時。

地面から無数の影のような弾丸が飛び出し、俺の立っていた地面が崩落する。

「へあつ?!」

「ファーストアタック
先制攻撃、戴きますわよ」

バランスを崩し、足元に気を取られた俺の隙を突き、狂三の踵落としが眼前に迫る。咄嗟に常時展開の霊装髪飾りりで受け止めるが、落下の勢いは加速。俺は地下へと墜ちて行く。

「きひい!きひひひひ!!もぐら叩きで、す、わ、ねえええええ!!」

追い立てるように降り注ぐ銃弾を逃れるべく身を振り、暗い地の底に着地する。ここはどうやら下水道トンネルらしい。やけに広いが、非常灯も点灯しているので完全な暗闇でない。それに、水が全く無い。もしかすると、空間震時の避難にも使えるようにしているのかもしれない。

だがそんなことよか、俺の気を引くものがあつた。

「きひひい」

「くすくす」

「誠さん」

「遊びましょおおおう?」

「八人のわたくしと」

「九人入り乱れて」

「殺陣バレーですわあ」

俺を囲うように、七人の狂三が待ち構えていた。そして、俺に接触してきた狂三が加わり八人になる。

「如何です? 誠さんはどうやら乱れ交わる方がお好みの方ようですし」

「俺を痴女みたく言うな。変態淑女と呼べ」

「そのこだわり要ります!?!」

「要るとも。痴女というのはなあ……………」

俺は狂三にビツと指を突きつけ言い放つ。

「———こういう奴の事を言うんだよ! キャストオフ!!」

輝く閃光。

弾け飛ぶ俺の衣服。

惜し気もなく晒け出される肢体。

突然下着の束縛から解放され、揺れる豊かな胸。

大事なことだけ隠す鉄壁の水。

そう。痴女に四七ある正装の一つ、ZE☆N☆RAである。

「見よ狂三。これが由緒正しき原初の痴女だ!! キツチリ訂正して貰おうか!!」

「たつた今痴女だという証明が完了しましたわよ!」

「今回は分かりやすく全脱ぎしたただけだ! 紳士淑女ならニーソは残す!」

「知ったこつちありませんわ!!」

何だか残念な人を見る目の狂三達が一斉に弾を撃ち込んできたので、リンボーダンスするかのように仰け反ってみる。

「痛スギイ!」

八人分の射撃が胸に直撃しました。主に先端部分に。つべー、マジヤベー。ちよつとこれからリヨナを見る目が変わりそうだ。これは痛い。マジでヤバい。取れる。取れちゃうから。おうここは初めてだ、力抜けよ。頼むよ。調子こいてすいませんでした。調子に騎乗位してすいませんでした。

「あの、誠さん?」

回復体位、或いは某囃ませ犬のように地面に倒れ伏す俺に、呆れ果てたような声が

かけられる。

「ちよつとタンマ」

「は、はあ……どの程度?」

「本当に待たなくていいから(困惑)」

痛みを堪えつつ立ち上がる。ダメージとしては軽い。小指の角に筆筈ぶつきたくらいだ。逆か。流石に反省したので、霊装をきちんと纏う。これ以上ふざけたら四糸乃に悪い。

「じゃあ、やり返していいよね」

「ええ、どうぞ」

おつ。許可が出たぞ。髪の毛を払い落とし、倒れていた間に制御を離していた飲料水に再び霊力を浴びせる。右手に水を纏わせて、正面の狂三に攻撃をかけるべく突進する。

「天使は出しませんか?」

狙われた狂三は俺のタックルを飛び越して回避し、他の狂三を集結させた。集合写真を取る時のように、前列をしゃがませて四人ずつ二列で並ぶと、俺の逃げ場を無くすように弾幕を張ってくる。

「生憎、四糸乃との約束を反故にする訳には行かないからね!ASTにバレたら面倒な

んだよ!」

「きひひい! そうすると武器はその水だけではありませんの!! 攻め手に欠けますわねえ!?! ねええええ!?!」

数で有利。尚且つ、銃弾も一応有効な狂三は、長期戦のつもりなのだろう。俺が接近しても、陣形を崩さずに畳み掛けてくる。

対して俺は500MLの水しか無い。何ともしよつぱい。今もガードだけで300ML使ってるが、大した問題はない。複数本触手が出せないだけで、各個撃破すればいい。

「^{ザナヴ}棘鞭」

右手の人差し指と中指をピンと伸ばし、指の間から水触手を超高压で噴射しながら腕を横風ぎに振るう。前列の四人に命中した触手は、ドレスのような霊装をアツサリと切り裂く。

『いやあああつ?!』

——丁度、胸元の辺りを。

先端部が露になりかけた四人の狂三は、顔を真っ赤に染めて胸を押さえる。

「乙女の恥じらいが命取りだ!!」

バリア代わりの水の膜を解除し、今ある水の全てを用いて四本の触手を作る。それ

を四人の狂三の服に差し込み、背筋をなぞる。

『ひゃん!?!』

全員ビクンと身を震わせる。が、違う。求めている反応と違う。

「お前らじゃない。初々しい!でえや!」

『きやあああああつ?!?!』

触手を構成する水を炸裂させ、水の勢いで四人を吹き飛ばす。ついでに霊装も全部吹き飛ばす。衣装破壊は基本。素っ裸の狂三が四人程地面に転がる。我ながら見事な手際。

「次はどの狂三だ?」

少しは戦意を削いだかと思っていたが、それでも無かった。一気に半数の狂三を失うも、残る狂三は余裕の表情だった。いや、一名脂汗垂らしてるわ。あれいつもの狂三じゃねーか。

『きひひひひひ!』

残った狂三は、一人一体ずつ倒れた自分を影に取り込んでしまう。おう、共食いかコノヤロー。自分を喰う。俺なら性的な意味になるな。濡れるツ!!

「さあさあ!誠さん、第二ラウンドと参りましょう!きひひひひひ!」

脅威であろう触手を撃ち落としてから、狂三達が俺に迫る。——さつきより

速いな。二人が時計回りに、もう二人が逆回りに俺の周囲を旋回しながら銃弾を放つ。一発の重みが増した攻撃に思わずかおをしかめてしまうが、まだ耐えられる。

「まだまだ！残念だったな！」

飛び散った水の主導権はまだ俺の手にある。水溜まりから触手を発生させ、狂三達の足に絡ませる。

「ぎいつ!？」

「ぐぎゅ!？」

「げうえ!？」

三人捕らえてスツ転ばせるも、一人に触手を撃ち落とされて避けられた。あれいつもの狂三じゃねーか。汗拭けよ。

「させませんわよー!」

いつもの狂三は躊躇い無く他の狂三を切り捨て、急速に広げた影で取り込んでしまふ。あ、このやろ、触手も吸収して俺の武器も少し奪ったな!?

「き、きひひひひひひ……結局いつも通りになりましたわね」

「まあな。だが、今までのお前とは違う。そうだろ?」

「お気付きでしたか。八人のわたくしが一つになったことで、擬似的ではありませんがオリジナルのわたくし並みの霊力を手に入れましてよ……相変わらず天使は使

えませんけれど」

ドレスを摘まんで恭しく礼をする。流石に様になっている。俺がやるとキヤミソール持ち上げて胸チラするだけになるという。まさに痴女。違う、俺は淑女だ。

「では、参りましょう。第三ラウンドへ。これで決闘らしくなるというもの——」

——ざしゅつ。

「決闘なんてしやがらなくて結構。ここらでいい加減逝きやがれってんです」

狂三の胸元から、光輝く刃が生えた。

……否。

狂三が、貫かれた。魔力の、刃で。

「ぎ……ぐえ……ま、真那、さん………?」

「気安く呼びやがるんじゃねーです」

傷口から血は出ない。魔力の刀身に肉を焼かれ、無理矢理止められている。

狂三を討ったのは、声からして少女。まだ若い。本当にどうなっている、この世界。どうして幼い奴ばかりが戦場に立つのか。

「逢瀬………の、邪魔は………不、料で………す、わ………よ………う………？」

絞り出すような軽口。それを最期に、俺の知る狂三は事切れた。目の焦点が合わなくなり、重力に引かれ、突き立てられた剣で身を傷つけながらどうと倒れる。

狂三は………人を喰いモノにする精霊だったからな。こうなるのも、仕方がない所もある。それは俺も認める。

だが、だからこそ………一応知り合いであつた彼女が死ぬことを、認めたくなかつた。

「食事^{デザート}を自由にさせてやるつもりはねーです。私の駆除^{デザート}じゃ満足出来やがれませんか」
狂三が倒れたことで、下手人が露になる。

長髪を括つてポニーテールにした、泣き黒子がチャームポイントの少女。学校にいれば、きつとこぞつて告白されるであろう整った顔立ち。そして、どこか見覚えのある顔の少女が、感情を使い果たしたかのような死んだ瞳で、狂三を見下ろしていた。

「………ん？ ああ、あなたが噂の〈サツカバス〉………色無誠でいやりますか」

まるで今俺に気付いたような口ぶり。狂三を殺すことに拘つてたのか、はたまた俺が相手にされてなかつたのか。

「俺を知つてるのか？………ASTの人？」

「ちげーます。真那はDEMからの出向でいやがりますよ」

「へー」

真那、と言つたか。少女はワイヤリングスーツを消すと、年相応の活動的な服装へと変化する。これももう人間だか精霊だかわかんねえな。殺気が無いので、俺とこの場でドンパチする気は無いらしい。

こちらとしては警戒を解ききれないが、急にカラツと爽やかな笑顔を浮かべているので、さつきとのギャップに悩む。

「それにしても驚かせやがります。あなたのこと、根も葉もない噂だとばかり思つていやがりました」

「勝手に人の存在を否定しやがらんといて下さい」

うわあ。初対面の女子に『キミ居たんだけ』って言われた。これイジメの始まりですよ。さては心を病ませて愉悦するんでしょう!? 麻婆豆腐食べながら！ 麻婆豆腐食べながら!!

「いやこれは失礼。何度も何度も狂三を捌いてやがったせいで、人間に味方する精霊が

現れるなんて考えられねー頭になっていやがったんです」

へー、狂三をねえ。お前は今までに捌いた狂三の数を覚えているのか？今更数えきれるか！つてとこか。まあ、分身の相手してた俺からすれば、ある意味先輩つて訳か。俺に先輩が増えつつある件について。

——ん？人間に味方する？

「俺、そんなに噂される程の事した？」

素直に疑問を口にしたところ、真那という少女は数瞬ほかんと口を開けていた。今日は呆れられてばかりだな。

「へーミット」の攻撃から、それまで交戦していたASTを庇いやがったのはどこの誰でいやがりますか」

「俺だな……………成る程」

「世界的に対精霊対策世論を二分しやがっている原因が、こんな調子でいやがるとは……………」

「えっ、そうなの？」

寝耳に水。有名人になった覚えはからつきし無い。ASTがそんなに広めるとも思えないが……………お得意様DEM社には勝てなかったか？司令の言う通り、随分と悪どいところだ。

「そーです。『女の敵にして人間の味方』って呼ばれてやがりますよ」

「むしろ女とエロの味方なんだが」

「そのエロが問題でいやがるってんですよ!!」

エロに免疫が無いのか清いのか、余りに顔を赤くして手を振り回すので暴走機関車に見える。息も荒くバタバタしているのでまるで怖くない。

「しばらく私はこっちにいやがりますからね! えっちいことしよーってんなら、とっちめてやりやがりますよ!!」

前言撤回。この子怖い。俺からエロ取ったら何も残らない。ASTの皆様と戯れるのがどんなに昂るか、貴様には分かるまい! そらそうか!

「勘弁して下さい。死んじやいます」

「知らねーですよ!」

真那は携帯端末を取り出すと、俺に背を向けて何処かへ電話を始める。『狂三』『処理』という単語が出てきたので、恐らく狂三の遺体を誰かに撤去させようと言うのだろう。

「話し過ぎました、ここらでおさらばです。じきにASTの皆さんがその生ゴミを片付けに来やがります。あなたもさっさと帰りやがるといいですよ」

通話を切ると真那は振り返り、右手の親指で背後の天井を指す。そこからは、近所

の人であろう女性の声が聞こえる。どうやら道端に穴が開いていることを警察に通報しているらしい。

「確かに。ここにすることがバレて変に騒がれたくないな」

「私も一応公には知られてねー存在なんで、見られる訳には行きやがりません」

——無理っばいかな？

俺は頬を搔くと、苦笑しながら真那に聞いてみた。

「……………なあ。狂三の遺体、持ってつてもいいか？」

「そんなもんどーすんです？」

「食べる」

「いひいっ!？」

一瞬で青ざめて引かれた。いや妥当な反応だが傷付く。

「うそうそ。一応、ライバルってか精霊仲間だったしな。処分されるなら弔いくらいやらせてくれ」

「どーせ蘇りますから」

「かもな。だが————戴いていく!」

今の今まで放置し続けていた水を動かし、狂三を掬い上げて俺に投げる。お姫様抱っこの姿勢に抱き止めると、俺は水をボード状にして飛び乗り、一目散に下水トンネ

ルの奥へと走り出した。

「あつ、ちよつと!?!待ちやがれつてんです!!」

泡を食つた真那が声を張り上げるが———そいつは悪手だろ。

「おいつ!?!キミ!?!大丈夫か!?!」

「うえつ!?!お、お巡りさん!?!」

「お嬢ちゃん大丈夫!?!怪我はない!?!」

「巡查、ロープ持つてこい!落ちた女の子がいたぞ!」

声に気付いた警官が、穴の中を覗き込んでいた。ずいぶん速い到着だ、優秀だな。続けて電話していた女性の声も響く。俺には気付いてないが、真那をバツチり見ている。

真那としてはここで逃げたら大事になるし、軍属と明かす訳にも行かない。俺の方を悔しそうに見つめつつ、真那は立ち尽くしていた。

悪いね、これでも精霊なんだ。仲間意識くらいあるし———知り合いに死なれるのは寝覚めが悪い。

「運に助けられたな、狂三」

既に冷たくなり始めている狂三に声を掛ける。返事はなく、目蓋は閉じたままだ。だが、諦めたくはない。俺も土道先輩みたく、諦めない人になりたいからな。

俺はただひたすらに、下水道の奥へと突き進んでいった。

因みに、ピクニックは一時間遅れで実行された。遅刻して焦ってヘフラクシナスンに行ったら、四糸乃がマジ泣きしてて死にたくなかった。許してください、何でもしますから!! 行って言ったら、

「ま、また……一緒にピクニックに……行って……くれ……ます、か……?」
って言われた。天使降臨。快諾した。



何処を漂っているのだろう。

まるで臨界で眠るような、浮遊感。

けれど、不思議と心地よい。

目を開けてみる。

一面の青。水泡がちらつく。

水の中？

「お、目が覚めたか！ やったな！ やってやったぜ!!」

誰かのはしやく声が聞こえる。何と言っているかまではよく分からない。

(だれ……………?)

口を動かすが、喉は声を紡がない。肺にまで水が入っているのか。

「まだ動くな。傷が深いからな」

ぼやけた視界に、僅かに浮かぶ人のシルエット。けれど、誰か判別は出来ない。

「数日はかかるかも知れない。流石に一日じゃお前を安定させられないが、我慢してく

れ」

しかし、それが誰なのかは何となく理解出来たし、今はどうでもよかつた。

これほど安心して眠れるのは、いつ以来だろうか。目蓋が重くなり、視界が、意識が闇に沈む。まるで海の底に墜ちていくよう。

「お休み、狂三。俺が治してやるからな」

最後の瞬間に、ハッキリと声が聞こえ。

紛い物の狂三は、安堵した。

そして願った。

———まだ、生きたい。

Date. 14 「初めまして、《私》色無誠です」

「未確認の精霊？」

へフラクシナス艦橋、司令席に座る琴里は、令音からの報告に眉根を寄せた。何せ、今は自ら接触してきた精霊：時崎狂三の攻略に全力を注ごうとしていたタイミングだった。

加えてつい先ほど、土道の妹を名乗る崇宮真那が現れた。今はDNA鑑定のために、彼女が口を付けたコップを艦に持ち込んだ所なのだ。これだけでも今日は手一杯だと言うのに、またも厄介事が舞い込んできたと言うのだから、頭が痛くなる。

「ああ。しかも、この天宮市を彷徨っている。今のところ目立った行動はしていないみたいだがね」

報告書を気だるそうに捲る令音の目が、心なしか細く見えた。彼女も同じような気分か、と琴里は嘆息する。

「仕方無いわ、土道にヒイヒイ言って貰いませよ。今、その精霊はどこ？」

艦橋のクルーに視線をやると、それに気付いた椎崎がコンソールを叩く。

「ええっ!？」

そして、間拔けな声を上げた。

「何よ、どうかしたの？」

「いや、それが……………今、司令の……自宅の前にいるみたいで……………」

「え？」

嫌な汗が、琴里の首筋を伝って落ちた。



「こんばんはーっ！お宅にお邪魔しても良いですかーっ？勿論良いですよねーっ！」

「……………は、はあ……………。あの君、誰？」

土道は、両手でドアノブを握り締め、ドアチェーンを粉碎しかねない力で戸を開こうとする見知らぬ少女に対抗していた。表情の上では苦笑いしているだけだが、内心は穏やかではない。今にも押し入れられそうなのだ。

感覚的にそろそろ夕食のハンバーグが焼き上がる頃。この少女を早い所追い返し

て、フライパンを見てくれている十香（多分見つめているだけ）と代わりたい。

「ミシミシと音を立てるドア一枚を挟んで壮絶なバトルを繰り広げていると、リビングから足音が近付いてきた。」

「シドー！フライパンから良い匂いがしてきたぞ！そろそろ焼けたのではないか!？」

「くそつ、やつぱりか！取り敢えず火を止めておいてくれ!!」

「分かった!」

「ねえ君、今は勘弁してくれない!?!今から夕飯なんだ!」

急かす十香の声に答えてから、最後の力を振り絞ってドアを引く。しかし、険しい顔の土道と対照的に少女は一点の曇りもない笑顔。端から相手になっていなかったと言わんばかりだ。

「まあまあ、そう焦らないで」

「焦るわあ!?!夕飯が懸かっているんだけど!?!」

「じゃあ私にもご飯下さい」

「うえっ!?!」

「ミシリと金属の歪む音がして、土道の手からノブの感覚が無くなる。チェーンは引き千切られ、強引にドアが開け放たれる。腕が引き抜かれるような痛みがあり、土道は手を振りつつ開けられたドアを見る。」

ここで初めて、少女の全身像が明らかになった。

赤いちエックのベストとミニスカート。スカートのスリットからは、半透明のペチコートが覗く。純白の半袖ブラウスに黒のネクタイを通し、ハイソックスも同じく黒。艶のある焦げ茶のローファー。服の各所に透けたフリルがあしらわれ、まるで何処かのアイドルグループの衣装のようだ。

目を引くのが、特徴的な髪型だ。ショッキングピンクの髪を、三つに分けている。側頭部は青色の細いリボンで腰まで届くツインテールにしているが、中程から三つ編みに編み上げている。更に後髪にも三つ編みを一本結つていて、何編みかいまいち解らない印象を受けた。

「こんばんは、センパイ。私が逢うのは初めてですよね」

少女は笑う。つり目を細め、青い瞳が土道を見上げる。その瞳に見覚えがある。まさかと思つたが、土道自身にも、何故少女をその人物と結びつけたのか分からなかった。「お前……………誠、か……………?」

土道の口から出た言葉に、少女は顔を輝かせる。小柄な身体でぴよんと宙返りし、着地と同時にアイドルのようにポーズを決めて告げた。

「初めまして!!いつも《俺》がお世話になってます!!《私》が色無誠でーっす!!」

五河土道はこの日を消して忘れないだろう。

気の置けない友人にして、戦友である存在の真実——色無誠が二重人格であるを知った、この日の事を。



五河家のリビングは、再び騒がしくなっていた。

「シド……これが……誠なのか？」

「本人曰く」

「ほ、本当だ！触れるぞ！」

「やあだ十香、くすぐりたいからあ」

真那との妹面談の時同様、テーブルを挟んでソファに腰掛ける。今回は琴里から、十香の同席許可が出ている。隣に座る誠を、十香が不思議そうに頬をつついて幻でないと確かめていた。

しかし、何度言われてもしつくり来ない。見た目や身長は琴里や四糸乃と同年代程度。そもそも声音が普段の誠の声より若干高く、より『女の子』している。

「新しい精霊かと思えば、まさか知り合いだつたとはね」

琴里としては、それが解せない所だつた。精霊が二種類の霊力を持つのは前例がない。仮に裏返つても、霊力自体は本人のものなのだ。

「んふふ、今の私は自分の霊力使つてないからね！司令を欺けるとか私優秀！ご褒美に司令ちようだい！抱き潰させて！にぎやつ！？」

「嫌よ」

テーブルを乗り越えて抱き付こうとする誠の顔面を足で受け、押し返す。

「いじわるう〜……司令のいけずう。女の子の顔面蹴るとかサイアクう」

「何かアンタいつもより鬱陶しいわね」

鼻筋を押さえ、子供のよう駄々をこねて喚く誠に毒を吐いてから、しまった、と琴里はこめかみを押さえる。ついついもの誠の感覚で対応してしまつたが、別人格である以上は相応に扱うべきだ。自身の軽薄さに内心で舌打ちした。

「鬱陶しいって何さ！私は可愛いんだよ！ぶんすか！私、司令のこと嫌い！何でこんなのに《俺》が惚れ込んだか全然分かんない！」

案の定機嫌を損ねたらしく、頬を膨らませてそっぽを向いてしまう。普段の誠よりも何かとリアクションがオーバーだ。

「ま、まあまあ……誠、何か飲むか？いつもはアイスティーだけど、今日はどうする？」

不味いと思つた土道が、助け船を出す。明らかに土道達の知る誠でない。一旦誠を落ち着かせて仕切り直すべく、飲み物で和ませることにする。

「んー、んー………ココア！ヴァンホーテンね！」

「コンビニ行かないと無いんだけど………」

「用意悪う………まいつか。じゃあミルクティーで良いですよ」

土道が頷いてキッチンに向かうと、今まで黙っていた十香が口を開く。その目は興味津々と言つたところで、キラキラと輝いていた。

「誠よー！どうやったらこんなに変身出来るのだ!? 凄いなー！」

「ふっふん！変身は《俺》の十八番なんだけどね！《私》が出てくるには、二つの条件をクリアしなくちゃいけないの」

十香に素直に褒められたことで気を良くした誠が語り出す。琴里も、要らぬ茶々々を入れることにならないように気を付けつつ、耳を傾ける。

「二つ。私の霊力が充分に溜まっていること。二つ。《俺》の意識が薄れていること。これだけよー！」

「霊力が溜まる？ どういうことだ？」

「こくん、と首を傾げる十香を見て、ニヤニヤと誠が笑い出す。口許に手を当てて、目が半月を作る。」

「えー知りたいー？ 知りたいのー？ でもこれ企業秘密だしどーしよつかない」

「む、大事な秘密なのか。では仕方無いな……誠が困るなら言わなくていいぞ」

と言いつつしよんぼりする十香に、誠は目眩が来たように額を押さえて笑い転げる。

「無欲！ 十香カワイイ！ だから特別に教えてあげる！」

丁度帰ってきた土道からミルクティーを受け取り、ストローで一気に飲み干すと、わざわざ宙返りしてテーブルの上にダンと立つ。

「《私》の力は《俺》と表裏一对！ 《私》が『靈力剥奪』で《俺》が『靈力讓渡』なの！ 《俺》が闘ってる時にASTの魔力を奪ったりしてたでしょ？ ああやってエネルギーを蓄積させて靈力に変換、それを私の力にするの！ どう、凄いでしょ！」

「何だか格好良いな！」

打てば響く十香にすっかり有頂天となった誠は、顔を恍惚で赤く染めて自分を抱く。十香の頭を撫でながら、土道に首を向けた。

「十香ホンツツツトにカワイイ！ センパイ、十香私にちようだい！ お茶のお礼も兼ねて、司令あげるから！」

「おいおい、人をモノ扱いするなよ」

土道が苦笑しながら返す。

突然、誠が凍ったように動かなくなる。

そして、笑顔の形でありながら、目に光の無い、底冷えのする表情を浮かべて、告げる。

「センパイ。死にたくなければ覚えておいてね」

身を屈め、土道の目線にわざわざ目の高さを合わせてくる。瞳の中には、無限の闇が広がっていた。

「《俺》は人間トモダチが好き。だけど《私》は愛玩動物オモチャが好き。言うこと聞かないガラクタなら、要らないから壊しちゃおうよ」

「まっ、と……………」

誠の背後で、十香の呆然とする声が聞こえた。土道も、本当は喉から友の名が出かかっていった。だが、何か言えば殺されるという直感が恐怖を呼び起こし、口を震えながら閉ざされただけになる。

琴里もまた戦慄していたが、司令としての冷静さが状況を客観的に分析する。やはり、誠の中にあつた闇は、深刻なものだ。しかも、人格が別れているために対処しづらい。普段の様子からするに、《俺》の時の誠は《私》を認識出来ておらず、逆に《私》は《俺》の意識や記憶を一方的に共有している。《私》への対応が後手に回りやすいのだ。

緊迫した状況を打開する方法を練っていると、不意に空間震警報が鳴り響く。

「兄様あーッ!!」

同時に、ASTのものとは別のワイヤリングスーツに身を包んだ真那が、窓を突き破り五河家のリビングに飛び込んできた。

「真那!?!何だよその格好は!?!」

「兄様、詮索は後で。今は早く逃げやがりませー!それは人間じゃねーんです!」

両手で光の刃を構え、誠に向かって斬りかかる。瞬時に反応した誠は、両手でその

刃を掴む。

「同時片手真剣白羽取り、かな？」

誠の顔が喜悦に歪む。新しい玩具が来た、と。対して、真那は驚愕していた。

「——速い……………!!」

「お人形と私を一緒にしちゃダメだよ。次は私の番——」

「やらせない」

誠がニイイと口角を吊り上げ、真那に手を出そうとしたタイミングで、誠の背後の窓を切り裂き折紙が現れる。躊躇いなくレイザーブレードを振るい、それを誠と知らずに仕留めようとする。

「あはっ、いい殺気。折紙センパイかあ」

しかし誠は顔すら向けずに左足で刃を受け止める。まるでバレエのポーズのような格好だが、魔術師二人に挟まれているとは思えない程に微動だにしない。寧ろ、押し込んでいる筈の二人が冷や汗をかいていた。

「CR—ユニットの出力が下がっている!? お前がやっていやがるのですか!?!」

「馬鹿な……………これは、誠の能力……………!?!」

そこに、新たな人影が接近する。前髪をカチューシャで上げた女性隊員と日焼けしたショートカットの女性隊員が、レイザーブレードを手に猛進してきたのだ。

「折紙、手伝うわ!」

「仲間をやらせるかあああーっ!!」

誠の手数を超えた攻撃。しかし、誠は前髪カチューシャの隊員を認めると、真那や折紙を弾き飛ばして姿を消す。

「仲間想いつてステキだね。でも、自分は?」

「え?——おぐえ?!」

一瞬で距離を詰め、日焼けした隊員を随意領域ごと掴んで窓の外に放り投げる。ブロック塀に叩き付けられた仲間、に気を取られた前髪カチューシャの隊員の腹部に、自身の膝をめり込ませる。目を見開いて苦悶する彼女の髪を掴んで持ち上げると、ぎゅうと抱き締め、彼女の唇に自身の唇を重ねる。

「飼犬に手を噛まれるのは嫌い。今から躰をしてあげるね。んちゅう——」

「んむう!?!む——っ!?!む——!?!ん。ん………うん………」

身を振って抵抗していた隊員だったが、徐々に抵抗が弱々しくなる。瞳が微睡むように焦点を失い、やがて自ら求めるように誠を抱き返す。

「んはあ………玩具作りかんりよ——」

誠が唇を離し、彼女を解放する。弄ばれた少女は、すんと床に崩れ落ちる。しかし彼女は、誠の脚を抱くようにしなだれかかると、恍惚の表情で見上げていた。

「あつ、や、やだあ、もつとお……………お願ひしますうう!!」

その光景に、一同が絶句する。前髪カチューシャの隊員は、誠に顎の下を撥られて、猫のようにされるがままになっていた。

「私、こういう娘が好きなの」

「人を……………人をモノ扱いしやがるんじやあねーです!!」

激昂した真那が、肩のパーツから光線を放つ。誠は避けない。着弾した光線は誠に傷一つ付けず、吸収された。

「……………な、何と……………」

「真那……………だっけ。ウザいね」

誠は自分が作り替えた隊員のレイザーブレードを拾い上げると、自身の霊力を流し込んで無理矢理刃を生じさせる。先の攻撃が通らなかつたことで怯んだ真那と折紙が、得物を構えつつ一歩引いた。

「精霊の恐怖を忘れた人間に、思い出させてあげる。私は対人精霊。モノよりも人を壊すことに長ける!」

笑いながら二人に飛び掛かり、レイザーブレードを振るう。真那は寸での所で回避したが、折紙は位置的に逃げ場が無く、やむ無く打ち合わせるようにレイザーブレードを振るう。

しかし、折紙のレイザーブレイドの、魔力の刃が両断される。

「な……………」

「鈍亀さああん、あつちいつてようねええー……ッ!!」

予想外の事態に思考が止まった折紙は、誠の蹴りを捉えることも出来ずに直撃。家の外に転がされて気を失う。

「鶯——曹!?!」

「余所見したらア、死んじやうよおおおおお——ッ??」

真那が、倒れた折紙に目を向けた。その刹那。

「え」

視界がぶれ、次の瞬間には、夜空を見上げていた。

「あ、れ」

それが、蹴り飛ばされて十数件の民家を貫通し、崩壊した家屋の中に寝ていたのだと理解したのは、真那の元に救援のASTメンバーが来た時——全てが終わった後だった。

◇

一夜が明けた。

士道は、未だに昨日のことが信じられない……いや、夢であつて欲しいと思つていた。

部屋から出て、リビングに向かう。

ソファアの上では、金髪の美少女がだらしない寝顔を晒していた。

昨日。

真那と折紙を倒した誠は、止めを刺そうと考えたのか、レーザーブレードを指で回しながら家の外に出ようとした。

「誠」

それを止めたのは、琴里だった。

「起きなさい、誠」

「はあ？司令何言つてんの？」

振り向いた誠は、レーザーブレードを突き付けて笑顔を作る。士道の肝が冷えた

ああああああああああああああああああああああああああああああ——

——ッ!!!」

誠の声にいつもの誠の声が混ざりだし、頭を抱えて苦しみ始める。レーザーブレイドを取り落とし、脚にすがり付く女性隊員を引き剥がして吠え狂う。

「オマエ、オマエがあ……私の言うこと聞かない癖にい……………」

「生憎だけど、私は言うこと聞かせる側だから」

「流石司令！黙れチンチクリン！私が一番なんだ、私が女の子を幸せにするんだ！くそつ、くそつ、くそつ!?ここまでか!!忘れないぞ五河琴里！オマエは必ず侍らせてやる!!いや寧ろ結婚してくださいウルサイっ!!」

ミシミシと空気が軋み、音を立てる。髪を掻きむしり、整った顔立ちを歪め、目を血走らせた誠には、鬼気迫るものがあった。

「私は俺だ、俺は私だ！なのに何故コイツに縛られたがる!!何故耐えるの!?解らないよ!!私は、嫌だア!!!」

琴里を呪わんとするかのような視線で睨んだのを最後に、誠が突然弾けて水になった。

水は独りでに集まっていき、見慣れた高身長女性の寝姿を作り上げる。成形が終わると色付き、土道の良く知る誠が出来上がる。

「しれえー……ふひひっ……」

というか、寝ていた。

そのまま放っておくのも悪いので、十香の手を借りてソファーに寝かせたのが、昨夜の出来事の結末だ。

余りに唐突、そして後味の悪い幕引き。

士道は、どちらの誠が本物なのか、気になってしまった。

《俺》なのか、《私》なのか。

本当は、どちらも本物なのだろう。けれど、余りにも違い過ぎて、そう思ってしまった。

士道の中に芽生えた、誠への……ひいては、精霊への恐怖。

万全でないコンディションのまま、士道は狂三攻略へと向かうことになる。

Date. 15 「学校へ行こう」

「ごめん、悪気は無かった。というか俺にも『どうしてこうなった?』としか言えないと
いうか」

「みー」

「いや、悪かったって。この通り!」

「みー」

先に言っておくと、俺はネコ相手に平謝りしている訳ではない。

「ならどうにかしろって?………どうすればいいんだろう?」

「ぎふきえる!!」

「いつてえー!?!?!? 噛んだなコイツ?!」

俺は今、10cm程の狂三に土下座しているのだ。

先日真那に刺されて倒れた分身の狂三。俺は下水トンネルに水の幕で嚴重な結果を張り、俺の靈力を全力で込めた水に狂三を封じて治療した。俺の靈力を流し込んでやると、傷そのものは僅か数秒で塞がった。

しかし、ここで問題が発覚。分身の狂三は精霊には存在しないハズの寿命があり、

尚且つ残り数日の命だった。

そこで、狂三の身体を一から構成し直すことに。幸い狂三本体並みの霊力を秘めていたので材料は困らなかった。完璧な身体を作り上げ、もう一人の『狂三』として生まれ変わらせた。霊装のカラーリングは少し弄り、オレンジ色だった部分を白に変えてある。作業も予想外に早く終わつたし、これで万事オツケー。

——の、ハズだったが。霊力の結晶『聖結晶』セファイラが真珠玉くらいにちびつこくなつてしまったせいか、狂三まで急に縮んでちっちゃくなつてしまった。

目覚めた狂三はそら怒りますよ。起きたら二頭身にデフォルメされてりゃ。いや、可愛いからいいじゃん。駄目か。俺だつて狂三とエロスを堪能したかった。まるで物欲センサーでもあるようだ。ちくせう。

そういうや霊力を使い果たす位に全力で狂三を治療したせいか、昨日は疲れて一日中寝てしまったらしい。今朝起きたら土道先輩の家で寝てた。どんな寝相だ。でも司令の夢を見た。椅子でも机でも何でもやらせてあげると言われたので大ハシヤギしたが、それ以降の夢の記憶がない。無念。

話を戻そう。

「みー！くる！くるみー！ぎふきえる!!」

「いてっ！だーかーらー、俺にも原因は分からんつての！」

ともかくこんな感じで、俺は公園に帰宅するなり狂三を宥めようと必死なのだ。何せ、身体を再構築したときにスベックが上がったらしく、霊力は本人以下だが肉体スベックは本人以上なのだ。痛い。

幸い、このちびくるみの鳴き声は意味が正確に理解できる。コミュニケーションも取れなかったら終わってる。基本『くるみ』の派生か『ぎんぎんぎん』としか鳴かないが。俺以外は理解できんのかこの言語。

「まあまあ、機嫌直してくれよ。お前の復活祝いに大枚（※500円玉）叩いてケーキ買って来たんだ。食べようぜ」

俺はスツとケーキの入った箱を取り出す。前に士道先輩から聞いた評判のケーキ屋『ラ・ピュセル』だ。司令も御用達だとか。クツソ高かった。ここで何か買った日には自販機漁って得た俺の財産が露と消える。しかし、狂三の為に奮発した俺を誰か褒めてくれ。

「みー!」

あ、食いついた。何だかんだ、女子。甘いものには目がないか。違うか、単にお腹すいてたんですよね。箱をぐそぐそと開き、中のケーキを御開帳。くぱあ。

「チーズタルトとショートケーキどっちがいい?」

「ぎんぎんぎん」

「くそ、俺が食いたい方を……いいよ！こいよ！タルト持ってけ！」

ぱああと顔を満面の笑みで満たし、とてとてと愛嬌のある足取りでケーキ箱の中に入っていく狂三。あらかわいい。

………んだけど、俺の頭の中にある単語が浮かんだ。

———『狂三ホイホイ』と。

俺の中で何かのスイッチが入った。

「かかったなアホがアーーー!!」

ぱたんとケーキ箱を閉じる。

「み?!くるみ?!」

中から驚く狂三の音がするので、見えないだろうがおもいつきし悪い顔をしてみる。

「フアハハハハ、まぬけなちびすけめ!出して欲しければタルトを譲れ!お前には過ぎた代物だ!」

「ぎふきえる!!くるみ!」

「え?ちよつと待った!じよおくだんですよおお狂三さん!?ちよい待ち狂三さん?!」

慌てて箱を開くも時すでに遅し。報復として俺のショートケーキのてっぺんからイチゴが消えていた。満足げな狂三がタルトに腰掛けてどやつとしている。ちくせう。

「くるくるみ!」

「……………自分、涙いいつすか……………?」



ちよつと寂しくなったケーキを食べた所で、今日はちとやってみたいことがある。

「よし。狂三」

「ぎふきえる。くるーみー!」

頭の上に座るちつこい狂三に声を掛けると、名前を訂正された。

以後、『繰^{くるみ}三』と呼べ、と。

どうも独立した精霊になったという事で、オリジナルと差別化したいらしい。どっちもみち発音『くるみ』だから、狂三と繰三が居る場で呼んだらどっちも反応する訳

で。あんま意味無いけど、本人が自慢気なので尊重してやる。

因みにどういう訳か知らんが、狂三本体の元に戻るつもりは無いらしい。どんな心境の変化があつたやら。俺は同居人が増えて嬉しいが。

……………それにしてもこの繰三、ノリノリである。もうちつこいことに文句言わなくなつた。適応早いな。

「はいはい分かつた、繰三さんよ。今から来禅高校行かないか？」

「み……………」

繰三をひよいとつまみ上げ、掌に載せる。体格差で簡単に持ち上げられるのが不服のご様子。頬を膨らます姿も、今はただただ可愛いだけだ。

「るるみ?」

「おう。一つ、俺の今の頭で高校二年のカリキュラムと果たして渡り合えるかやってみたい」

図書館で本を読み漁り、とうとう学校指導要領をオーバーしてしまつたのだ。もし、今の知識で通用するなら、美少女高校生になるのも悪くない。

たとえば聞こえがいいが、実はあんまり図書館にいるせいで、司書さんから「君学校は?」って聞かれるようになってしまつたのだ。大学生だからと言おうと思つたが、図書カード作る時にうっかり実年齢で登録してしまつている。下手に騒がれても困る

のだ。形の上だけでも何とかしたい。

「み」

……が、繰三に仮に付いていけなくても何ら問題ないと言われた。自分に分かるから何とでも出来る、と。……お前ちっこいのに俺より頭良いつて何よ。嘘だろ承太郎!?

「くるる、みー」

「え、お前戸籍偽装までやれんの？偽の転校手続き含めて？」

「み」

「お見逸れしました」

「ぎ、ふきえる……!」

ヤバイ。初めて分かった。コイツ明らかにオーバースペックだ。ウチのハンコは繰三に預けよう。シャチハタしか無いが。

しかし折角の提案なのだが、俺は高校に通うつもりは無いのだ。土道先輩の側に居るよりも、俺はフリーで動ける状態を確保したい。なので、ちやつかり授業を盗み聞きしたり、図書室で本を読めればそれで万々歳だ。

「みー?」

それを繰三に伝えると、忍び込んでも問題ないのかと聞かれる。

勿論問題ないとも。何故ならば……………。

◇

チャイムが、昼休みの開始を告げてから五分。土道は何処かへ消えてしまい、十香は一人しよぼくれながら弁当箱をつついていた。指で。十香にとって、土道の作った美味しいご飯も、土道と食べられなければ旨味が半減してしまう。なので一口も手を付けていない。

鳶一折紙が時崎狂三を伴って教室から出ていったので煩わしくはないが、十香にとって本当に静かな昼休みだった。

しかし、その静寂は突如破られる。

「来た！」

「見た！」

「撮った！」

亜衣麻衣美衣が、教室の戸をガラリと開けて飛び込んでくる。その手にスマート

フォンを握り締め、決定的証拠を掴んだ刑事ドラマの俳優の如く沸いていた。

「みんな、聞いてっ!!遂に現れたわ!!」

「来禅高校七不思議八番、『謎の変態美少女』がッ!!」

「写真も撮ったわ!!というか撮らせてくれたわ!!」

三人の台詞に、教室がざわつく。廊下からも、注目の視線が三人に向いていた。七不思議が要領オーバーするのは良くある話だ。

「マジでか!?写真オツケー!」

土道の友人・殿町など、拳を天高く突き上げて席から立っている。他の男子生徒も、口々に騒いでいた。一人状況を飲み込めない十香が、目をぱちくりさせて教室内を見回していた。

「な、何の騒ぎなのだ……………?」

助けを求めるように亜衣麻衣美衣に話しかけると、三人とも待つてましたとばかりにポーズを決める。

「ご存知、無いのですか!」

「彼女を知らぬとはとんでもない!!」

「知らざあ言つて聞かせやしよう!!」

三人揃ってスマートフォンを操作し、写真フォルダーを開く。

「時は四月。彼女は突如として我が校に現れたッ！」

「茶に誘われても、名前も名乗らずただ一言。『絶倫ならば、やりましょう』!!」

「そしてそれから行方も知れず。またも風のように今日現れた!!」

「ずいとい写真を見せつける。そこに写っているのは、金髪碧眼の美少女。完璧な身体バランスを持ち、愛想良くピースサインをカメラに向けている。」

「制服に身を包んではいるが、紛れもなく十香の知る人物だった。」

「おお、誠のことだったのか」

「なるほど、ならば変態と言うのも合点がいく。十香は笑顔でポンと手を打った。」

「途端に、水を打ったように教室が静まる。何かいけないことを言っただろうか。十香は思案し、思った。そう言えば誠はこの高校の生徒ではない。それがまずかったのか。どうしよう、と十香が慌て始めた所で、殿町が声を上げた。」

「十香ちゃん、七不思議と知り合いなのか!?!」

「それを皮切りに、教室が先程を上回る喧騒に包まれる。」

「何てこと!?!美少女同士は惹かれ合うというの!?!」

「変態の魔の手からは逃げられない!!」

「バイである可能性が微レ存……………!?!」

『ガタッ!!』

「教えて十香ちゃん！彼女はどんな娘なんだ!?!」

「待てい殿町！それより前に、疑って悪かった！このドリンク、使えよ！」

「俺のマカを受け取ってくれ殿町！」

「お、お前ら!!——頼む、俺に元気を分けてくれ!!」

『殿町いいいい!!』

何だか良くわからないうちに、十香がどうこう出来るレベルの話ではなくなってしまう。助けを求めて視線をさ迷わせるが、頼れる相手など——

「おっ、十香ちーっす」

話題の中心こと、謎の変態美少女：誠が現れた。

「誠!?!」

『ナンダッテ!?!』

十香の台詞に、教室の視線が一斉に廊下へと集まる。余りの迫力に、誠は思わず一歩引いた。

「ど、どうも………変態美少女です」

「志村!?!」

「後ろ!!」

「誰もいないけど!!」

目を白黒させる誠の元に、颯爽と現れた影が一つ。漢、殿町。失うものは童貞だけ。

友の夢と、熱き思いを乗せて大胆に告白する——！！

「今日ツ!!俺と!!お泊まりしませんか!!」

差し出した右手。誠の視線を肌で感じる殿町。

『とつのまち!!とつのまち!!』

高鳴る心臓、友の声。そして、誠の細い指が触れ——

「ムード考えろやあああああツ!!!」

「ぐあああああああつ?!?!」

右腕をむんずと掴まれ、鮮やかな上手投げと共に、殿町は床にキスをした。

『殿町いいいいいいいい!!?!?!』

それからのことは、殿町の記憶に無かった。

「あら………きひひつ、初めまして」

「おう。初めまして」

「……………何故ここにいるの」

「あつ、折紙先輩どうも」

「え”っ!?何で誠が殿町の席に!?”

「おつ、士道先輩もちーつす。殿…町……?いえ、知らない人ですね」

『あいつは確か——いい奴だったよ』

「何このクラスの空気!?”

「皆さーん、授業始めますよー………え”、誰ですかあなた!?”

「おお、これが噂に名高いタマちゃん先生!!」

「えつ、ええ………?あの、殿町君は?」

『さあ?』

「えええええええ………」

「やれやれざいですわふきぎえる……」

Date. 16 「折紙先輩と拳銃」

鳶一折紙は、困惑した。

色無誠が来禅高校に、それも折紙と同じ教室にやつて来たことは、百歩譲ろう。寧ろ、時崎狂三が居る今は、思想の相反する彼が居ることに不都合はない。

本来高校一年であるはずの彼が、授業に付いていけていることも、五十歩譲ろう。公園を訪れるとよく本を読んでいたのも、それだけ知識を得ているのだろう。子供相手の読み聞かせを通して、度胸も付いていると見た。

先日現れた新種の精霊と誠との関係は………ひとまず置いておく。そんなことより、今は気になることがある。

「なるほど、さっぱりわからん。ぐむむ」

「みー。くるみみみ」

「おお、そういうことか。繰三は凄い奴だな」

「ギィィィィィー」

隣の席の恋人、五河士道を挟んでその隣。日本史の資料集相手ににらめっこする夜刀神十香が、手のひらサイズの珍妙な生物と会話しているのだ。所々違いはあれど、ど

う見ても靈装姿の時崎狂三そのもの。全くもって意味が分からない。

しかも先程から見る限り、謎の鳴き声を苦もなく理解し、授業の疑問を小さな狂三に聞いている。殺したはずが蘇った精霊と似ていることが、折紙には余計に不気味に思えてならない。

「もう、訳が分からない……………」

士道も、誠と小さな狂三を交互に見遣つては溜め息を吐いている。士道の彼女として今すぐに席をくつ付け、疲れた彼氏を癒したい所だが、今は授業中。成績に問題が出れば二人の今後に関わるので自重する。

時崎狂三——等身大の方——に、動きは見られない。気にも留めていないのか……………はたまた想定通りなのか。

誠に問い質す必要がある。いや、それだけでは足りない。証明させる必要がある。彼が、本当に人間に味方する気があるのか。

「——それで、北条政子の鶴の一声で、幕府方の結束が高まったんですよ」

「なるほど、ダイナミックかかあ天下。いや、女性に顎で使われた当時の武士はマゾだった可能性が……………」

「な、無いんじゃないかなあ〜!?先生はそう思いま〜す!」

今はただ、問題児にもきちんと反応する岡峰教諭に、心の中で称賛を送る折紙だつ

た。



結局ホームルームまでずっと居座ってしまった。岡峰先生には、明日菓子折持つてこう。ご迷惑をおかけしました。また有り金が飛ぶよ！やったね！おいやめろ（切実）。

さて諸君（誰に向けての発言か不明）。学校が終わったということは、今から部活動の時間な訳ですよ。つまりだ……新鮮な女子高生が玉肌を汗に濡らす時間という訳だ。更に言えば、繰三は十香に気に入られたので、一緒に帰るらしい。オフコース！つまり俺は今フリーダム！こいつを逃す色無誠ではない。

ヒヤア我慢できねえ！覗きだあ！

「色無誠」

——肩にポンと置かれる手。抑揚のない声。

「ハイすいませんでした!!」

悪巧みがバレたと思った俺は、相手が誰かも確認せずに、椅子から倒れ落ちるよう

な流れる動作で床土下座を決める。芸術点下さい。

「何のための土下座？」

「ん？折紙先輩？ああビックリした、覗きを計画してたのがバレたのかと」

「覗き？」

「あつ」

「……………」

絶対零度の視線が俺を串刺しにする。ヌワー!!折紙先輩が対土道先輩限定の変態なの忘れてた!!あれは養豚場の豚を見る目だアー!!ヌワー!!怒られる!

「————きて」

「アツハイ」

ああん、先輩に呼び出し食らっちゃった。これは告白かカツアゲか手込めか。答え③を希望します。と考えてるうちに折紙先輩が俊足の歩きで視界から消え去ろうとしている。速すぎイ!!競歩の選手か!!陸自の隊員だよ!!

階段を全く変わらぬペースでスタスタと上がっていく折紙先輩が止まったのは、屋上。何故その速度で息が上がらないのか。

「ぬわあああん疲れたもおおん!!」

「そう」

落下防止柵に片手を突く先輩、にべもなくスルー。ちくせう。ちよつとへこむぜ。

「士道先輩なら乗つてくれるんだけどなあ……………で、何ですか先輩。ここでお説教ですか?」

「違う」

折紙先輩は静かに、しかしハッキリと告げ……………スカートで隠していたホルスターから、ゆつくりと拳銃を引き抜いた。

「質問に答えて」

銃口が俺に向いている。携行火器で仕留められる精霊ではない。しかし折紙先輩は、俺をこの場で倒すつもりで武器を抜いたのではないだろう。

返答次第で、敵と見なす。

俺は今、絶縁状を突き付けられている。

「……………分かりました」

無意味と思うが、両手を上げて素直に応じる姿勢を見せる。こうなった理由は分からないが、折紙先輩を無用に刺激したくない。

「昨日、未確認の精霊が現れ、士道の家を襲った。知っていた?」

「初耳です」

寝てたから当然知らない。

「昨日は何をしていた?」

「丸一日寝てました。起きたら土道先輩の家でした」

折紙先輩の目が鋭くなる。そりや信頼しろつても無茶だけどき、事実なんですよ。

「信用出来ない」

「しかし、他に何と言えば……ああ!あの小さい狂三を治療した結果、疲労で倒れてたつて言えばどうです?」

ピクリと先輩の眉が動く。どうやら興味を示してくれたようだ、助かる。流石にさつきよりかまともな返答だったからな。言葉を選ぶ必要はあるが、まだ説得の余地はありそうだ。

「説明して」

「はい。一昨日、俺は狂三に決闘を申し込まれました。俺は応じましたが、乱入してきた真那とかいうAST隊員に狂三が刺されて瀕死になったので、俺が治療しました。縮んだ理由は分かりません」

「狂三との関係は」

「顔見知りの敵——でした。今はマスコットになってますけど」

暫し、沈黙が流れる。繰三を助けたのつて、実は悪手? いやいや、人助けに善し悪しも何もあるもんか。

思案を終えた先輩が、再び問うてくる。

「狂三の能力は、知っている？」

「全貌は分かりませんが、分身を作り出す能力があるのは確かです」

「———— ツ!!確かに、辻褄は合う……………!!」

おお、先輩の目が開かれるの久しぶりに見た。余程衝撃だったと見える。俺の時は狂三が自分で吐いてくれたから何にも驚かなかったけど。

一瞬銃の構えが緩んだが、直ぐにもとに戻る。まだ、許してもらえてないらしい。結構情報出したんだけどなあ。

よし、逆にこっちから聞こう。

「折紙先輩。俺は昨日一日の記憶はありません。先輩が銃を向ける程の何かを俺がしたなら、教えて下さい」

「———— わかった」

暫しの躊躇の後、先輩は教えてくれた。警戒が多少和らいでる感じがする。有用な情報を渡したからだろう。

「昨日、未確認の精霊が土道を襲ったと言った。その精霊が、あなたの魔力を吸収する力を使った。昨日の精霊があなたなのか、別人か。これがわからない」

ええ……………ネタ被りはダメでしょ……………でも、確かに疑われても仕方無い。俺自

身にも説明が出来ないしな。

「んー……魔力の吸収能力は、いつも使える訳じゃないんです。たまに誰かから借りたみたいに使えます。俺の意思で自由には使えません。それが関係するかもしれない」

「誰かから借りたみたい？」

「はい。狂三の治療を通して〈触抱聖母〉アルミサエルを理解しました。俺の能力は、『水を媒介した霊力譲渡』だったんです。吸収能力は、何故使えるか分かりません」

「そう」

先輩はそれを最後に銃を収める。本気で納得してくれたとは思えないが……からこれ以上答えは出ないと判断したんだろうか。それとも、俺を信じてくれたのだからか。

何にせよ、折紙先輩に何かしないとダメな時期が来たなあ。打算的な付き合いはしたくないんだけど、立場つてもんがある。

俺は今〈ラタトスク機関〉側に付いてる。けど、その上で折紙先輩とも仲良くしたいとなると……どうすりゃいいんだ？

これから先のことを考え、頭を搔いていると、折紙先輩がさつきまでよりずっと接近してきた。

「誠。付いてきて欲しい所がある」

「はあ。どこへ？」

「陸上自衛隊天宮駐屯地」

「えっ？」

あの、折紙先輩？

そこ、司令から聞いたんですけど、

——もしかしなくても、ASTの基地ですよエ!?



「色無誠に隊員の治療をさせる？」

「はい。彼ならば可能かと」

天宮駐屯地に着くなり、折紙先輩は迷わず上官のいた格納庫へ出頭した。俺は他の隊員の好奇の視線に晒されながら、少し離れて二人のやり取りを見守っている。

「お久しぶり、でいやがります」

「ん？ああ、真那だっけ？」

生あくびをして暇そうにしていると、ポニーテールに泣き黒子の少女……真那（苗字を知らない）が話し掛けてきた。

「私から奪った狂三の死体とは、仲良くやっていやがりますか？」

「よせやい。流石に死体性愛者^{ネクロフィリア}じゃねーよ。治療して本体と独立した新たな精霊に生まれ変わらせたまさ」

皮肉をスルーして繰三のことを伝えたら、ポカンとされた。何だ、お前もか。因縁がある感じだったから知ってるのかと思ったら、違うんかい。

「本体？何のことを言っついていやがりますか？」

「ありや分身だよ。本人のコピー。どっかにオリジナルがいるんだとさ」

「な、何とおっ?!道理で殺しても殺しても死にやがらねー訳です。自分の手を汚さずにいたって訳でいやがりますか!」

何だか分かんないけど、お疲れさん。文句言ってるわりにスッキリした顔になつてるじゃないか。良かったね。

途端に元気になった真那が、左手で肩を押さえてぐりぐり腕を回し出す。テンションが急激に上がっているな、この子。明らかにスポーツ女子だ。

「ふ、ふふふ………狂三、首を洗って待ってきやがれつてんです！あー！何だか身体を動かしたくなつてきやがりました！色無誠！鳶！一曹はまだ時間かかるようではないやがりませんし、私と模擬戦に付き合ひやがりませ！」

「えっ、何それは（困惑）」

「私に勝てたら、食堂で夕食奢るのもやぶさかでねーです」

「乗った」

条件反射でオツケー出した。これでまともな食事になりつける（切実）。よだれを手の甲で拭っていると、獲物を見付けた野獣のような視線を感じた。

「ふっふっふ、あめーですよ。私が勝ったら、ASTのお抱え精霊になりやがれつてんです！！たまに私とDEMにも行くんで覚悟しやがれつてんです！」

「嵌めたな！！俺のメリットスゲエ少ねえ！！いいよ、来いよ！飯に賭けて飯に！！」

にわかになぞめき出す格納庫内。精霊との模擬戦という稀代のイベントに、隊員達が驚き騒ぐ。中には走って格納庫を後にする者も。見せ物じゃないんですがねえ………。

「皆さん、心配しやがる必要はねーですよ。CR—ユニットを使える隊員なら強制参加

可能にしゃがります！」

『止めてくれよ（悲嘆）』

『真那さんやめちくりー！』

『オナシヤス!!センセンシヤル!!』

真那の一声で、ざわめきが一転して阿鼻叫喚の地獄絵図に。そんなにヤル気出さなくていいから（良心）。

「そうと決まれば。パパパツとやって終わりでいやがります！さあ皆さん、演習場へ!!遅れるんじゃないですよ!!」

彼等の嘆きは真那には届かず。世紀の対戦は、案外軽いノリで始まってしまった。



廃墟のような構造物が乱立する、演習場。精霊との戦闘を想定し、市街戦が意識されてる。

雑居ビルを模したコンクリートの建築物の中に、真那はいた。荒い呼吸音が、誰も

いない部屋に響く。模擬戦だというのに、心踊る緊張感がある。壁に寄り掛かって息を整えつつ、真那は作戦を練る。

既にAST隊員の大半は戦闘続行不能。幾ら真那が配属初日に軽く捻ったとは言え、精鋭には間違いない。それを秒殺可能にするのは、誠の触手。圧倒的な手数と、狙った相手を逃さない柔軟かつ迅速な挙動。誠自身が動かなくとも、人間を圧倒する。

「まさに対人精霊。実際に敵に回したくはねーですね……」

ASTとしては既に何度か交戦しているが、いずれも酷い有り様だ。真那が入っても、恐らく真那と隊長の日下部燎子、折紙、それと運のよい隊員が僅かに残るのみだろう。

「わあああつ?! いやあああ——」

近くから悲鳴がした。また一人、隊員が捕まったようだ。流石に一对一で誠と勝負するには骨が折れる。勝率を上げるには人手が要ると判断し、真那は残ったメンバーを集めるべく廃墟を後にした。

しばらく随意領域を広域展開して低空飛行していると、物陰に隠れていた女性隊員を見付けた。彼女も真那に気付き、周囲を警戒しつつ近付いてくる。真那の記憶が正しければ——。

「よく無事でいやがりましたね、舞上二曹。てつきり開始早々にやられたかと」

「止してください三尉。これでも毎日吐きそうな程鎮静剤飲んでるんです」

舞上まいがみしようど勝兎二曹。

前髪をカチューシャで上げた、ASTの鉄砲玉だ。腕はそう悪くは無いが、闘争心が強く、前に出過ぎるきらいがある。お陰で誠に真つ先には弄ばれ、先日の謎の精霊に精神をやられと散々な目に遭っている。最近は頻繁にカプセル剤を飲む姿が目撃されており、相当メンタルに來ているようだ。

相棒にするには折紙程安心出来ないが、この状況下では悪くはない。薬の為に落ちて着いているので、普段以上の働きが出来るだろう。

「三尉が居るなら心強い。援護します」

「元よりそのつもりでいやがりません。ところで、他の隊員はいねーですか？」

並んで飛行しつつ状況を問うと、舞上はあまり浮かない顔をした。

「四人で行動していたのですが、今しがた私以外はやられました。恐らく、我々しか残っていないかと」

ふむ、と真那は小さく唸った。これ以上隊員を探しても、時間の無駄。早いところ誠を叩いて降参させたい。仕方がない、二人でやるしかない――

「はっ!!三尉、危ない!!」

突如舞上が随意領域に拒絶の斥力を加える。至近距離の真那を弾き飛ばすには十分だった。背後の建築物に押し込まれた真那は、体勢を整えつつ顔を上げた。

「嫌あああああああつ!!」

そこには、夥しい量の触手に全身を絡め捕られた舞上が、正面のビルに引きずり込まれる光景が広がっていた。

「二曹!このおつ!!」

真那は両肩のパーツを起動させ、双剣に変えて触手に振るう。切り落とした触手が水になり、辺り一面が雨でも降ったかのように濡れていく。

しかし、幾ら切つても随意領域で弾き飛ばしても一掃出来ず、とうとう舞上はビルに消えた。ここまで来ればやるしかない。覚悟を決めた真那は、後を追う。

「邪魔!!あつちいきやがれつてんです!!」

群がる触手を薙ぎ倒し、突き進む。これまでの相手とは違う事を察したか、触手の密度が増した。小さく舌打ちし、真那は肩からの光線で包囲網に穴を開け、突破する。

三度触手の群れをいなし、真那は遂に誠の姿を捉える。舞上を触手で撫で回しつつ、品定めするように見つめている。捕まった舞上は、既に恍惚の表情で痙攣していた。

「見つけた!観念しやがりませつてんです、色無誠ツ!!」

「うおつ!?!おいおい、目がマジじゃねーか!!模擬戦だよな!?!」

「今全力を出せねーのに実戦ならやれる、なんてあめーことほざく真那じゃねーです!!」
真那の気迫に圧された誠がたじろぐ。その隙を逃す真那ではない。左手の剣を投

げつけ、怯ませてから一気に間合いを詰める。

次の瞬間、真那は誠の首筋に魔力剣ムラクモを突き付けていた。

「私の勝ち、でいやがりませす！」

勝ち誇る真那。しかし、誠は右手の人差し指をそつと自分の唇に当てた。

「真那はせつかち。計画通り」

そして、誠が弾けた。真那の視界を水が包む。

「うわっ!?!——うっ!?!」

手足が締め上げられる感覚。CR—ユニットを強制的に外される。触手で縛られ抵抗出来ない状態にされ、真那は床に転がされた。

「く、ぐ……………」

「おう、真那。そんじゃその前髪カチューシャと仲良くやっててくれ。俺、まだ残ってるのがないか見てくるから」

そう言うのと、誠は窓から飛び降りて去ってしまった。残されたのは、縛られた真那と、解放された舞上。敗けを認めたくない真那は、上の空の舞上に向かって叫ぶ。

「二曹！舞上二曹！！しっかりしやがりませ！」

「……………たか、みや……………三尉？」

虚ろな舞上が、ゆっくりと真那に顔を向けた。真那はそれにほつとする。二曹に触

手を解いて貰えば、まだ闘える。本気でそう思っていた。
が。

「えへへ………さんいい………」

ずると床を這って舞上が真那に近寄り、馬乗りになる。真那の首筋に、嫌な汗が伝った。

「ごめんなさい三尉、そ、その、スーツの中の触手が、三尉に取り付けつて暴れて暴れて耐えられないんです………不可抗力なんですうううっ!!」

「ち、ちよつと、二曹!? ひいつ!」

舞上のスーツの隙間から、細い触手がうねうねと生えてくる。真那が身を振つても、マウントポジションを取られているため動けない。

そうこうしているうちに、舞上が真那に倒れかかってきた。背中に手を回して抱き付かれ、完全に脱出する術を失ってしまう。

「わ、私と三尉が触手で繋がれちゃう………でも、でも仕方無いですう! 不可抗力、不可抗力なんです!! ダメえ、言うこと聞きますからあ、聞いたじやないですかあああああ
あっ!!」

「二曹を病院に入れなかったのはどこの誰でいやがりますかあああ!! 必ずシバいてやりやがります!! うわっ!? 嫌あっ!? 兄様あああ………っ!!」

演習場の片隅で、艶を帯びた悲鳴が上がった。

尚、模擬戦の後に、真那と舞上が仲良さげに会話する姿が見られるようになったが
——その関係を邪推する者が、いたとか、いないとか。

Date. 17 「福音」

昨日、タマちゃん先生に菓子折を持っていくと言ったな。あれ、無理だった。だって今日学校休みなんだから。開校記念日とか聞いてねーよ！まあいいさ、どうせ俺は今日一日暇じゃないからな！

え、何でって？それはな。昨日折紙先輩にASTの基地まで連れてかれたしよ？昨日は上に許可を仰いだとか何とかで、結局模擬戦の後はメシ食っただけで終わったんだよ。久々のカツ丼美味かったなあ。ちよつと泣いた。

んで、寝袋借りて格納庫の隅で一晩明かしてる間にオツケーが出たらしい。朝一番に真那が俺をぶつ叩いて起こしつつ教えてくれた。

今は、真那と対面に座って食堂で朝食（俺だけ有料）を食べている。手元の納豆の器から、ねちゃねちゃ音がする。ちと混ぜすぎたか。

「今日の実験だかテストだかつてのは、一体何すんだ？何か聞いてない？」

「聞いてねーです。義姉さま……あいや、鳶一曹も今日は出かけていていねーですし、全く聞こえて来やがりません」

「そか。痛かったらやだなー」

などと話しながら食事していると、真那の隣に荒く配膳トレイを置く隊員が一人。

「おつ、前髪カチューシャ。気分はいかが？」

顔を上げて目線を合わせる。

「はっ、話しかけ、ないでえ………んっ、はあ………今、ちよっ………と、ヤバイ、から………あ………」

何か早朝から汗だくだった。どこか上の空というか、地に足が着いていないというか、ヘヴン状態だった。えっ、何この子。朝から偉いことになってる。

「舞上二曹は、先日の謎の精霊——ヘリリスとの交戦後からこうなんでいやがります」
「随分とエロイ精霊だな」

「貴方もですけどね」

なんだ、仲間かあ。とんだ変態だ、会ってみたいね。ただし、日常生活に支障がある開発はアウトだ。面倒見る気がないなら尚更だぞ。変態だが淑女ではないな。

「お願いですからちよつと食事終わるまで喋らないで下さいいいいいっ!!薬飲む前にその声聞くと耐えられないのおおっ!!似てる!あいつに似た声はだめえええええー……っ!!」

真那と会話しただけで、両耳を押さえて苦しみ出す。かなり深刻じゃねーか!?

「少しでも声とか口調が似てるとこうなりやがります。先日も誰かの点けたラジオに反

応して突然喘ぎ出し、医務室に運ばれやがったとか」

「お、おう………悪い」

「返事もらめえええええつ!!」

難儀してるなあ、この子。流石に気を使つて箸が進まない。俺が黙ると、待つていたとばかりにメシをかつ込み、あれよあれよと言う間に食べ終わる。薬の瓶をテーブルに叩き付けるように乱暴に出すと、絶望の中に希望を見つけたような救われた表情を見せた。

「はあつ、はあつ、はあつ………」

何かの中毒者のような反応をしつつ、瓶の蓋に手を掛ける。もどかしそうに蓋を開け

「——はいストップ。悪いけど勝兎、預かるわよ」

隊長さんに没収された。え、何で？俺だけでなく、真那までポカンとしている。前髪カチューシャに至つては、この世の終わりのように顔を青くしていた。

「たつ、たいちよおおおつ?!返してえええええつ!!麻薬じゃないの知ってますよねええええええつ?!」

椅子から跳ねるように立ち上がり、隊長さんから薬を奪い返そうとするも、身長差がそれを許さない。折紙先輩より少し高いくらいだからなあ、前髪カチューシャ。

「知ってるわよ。けどね、あんたのその症状を色無誠が治せるか実験するから、今は飲ませてやれないの」

「そんなあああああつ?!」

悲鳴を上げているが、隊長さんはお構い無しに前髪カチューシャを引き摺っている。

「真那、食べ終わったなら色無誠を演習場まで連れて来て。あそこで実験するから」

「合点です」

「たっ、助けてえええー——」

哀れな叫びが食堂に響き、少しずつ小さくなっていった。

「ど、ドナドナ……………」

「ミケ、思っても言っちゃダメですよ」

俺の後ろの方で、小動物のような小柄な隊員がポツリと漏らしていた。言ってるな、言ってるなよ……………」



朝食を終えると、他愛ないお喋りをしながら真那と共に演習場へ。昨日今日で大部打ち解けた気がする。

「でもえっちはいのはよくねーと思いやがります」

「人間の三大欲求だけ、無理だよ」

「兄様に言いつけますよ」

「例え士道先輩でも俺は止められないぞ！——例外は要るけど（ボソリ）」

話していて驚いたが、こいつ士道先輩の実の妹だというのだ。名字は崇宮。士道先輩は崇宮姓だったのか……。あれ、先輩も意外と家庭事情複雑？

俺の言う例外、それは勿論琴里司令だ。司令は士道先輩の義理の妹ということになる。知らなかった、よくあんなに仲良いなあ。

まあ、義理だろうが何だろうが、今は五河士道であることには変わらないし、今は司令が士道先輩の可愛い妹：琴里ちゃんであることも変わらない。実の妹が現れたからと司令を突き放すならブツ飛ばすけど、そんな人じゃあない。先輩のことは信頼してる俺である。

ちんたら歩いていると、目的の演習場へ辿り着く。仮に俺が暴れても問題ない場所ということを選ばれたのだろう。そんな気はないけど。

既に、何名ものAST隊員がスタンバイしていた。解析班と見られる人達がパソコ

ンやら良く分からない装置相手ににらめっこしている。しかしそれだけではなく、昨日の模擬戦では使われなかったゴツイ武器を装備したメンバーが二十人以上待機していた。うわあ、ガチ装備やんけ。

「来たわね。色無誠、早速やつてもらおうわよ」

「ふーっ!!むうーっ!!」

隊長さんに出迎えられた訳だが……前髪カチューシャよ、お前器具で拘束されるだけでなくギャグボールまで付けられてるんか……。何であるの、それ? いや、昂るから良いけどさ。あと、何故ワイヤリングスーツ着てるんだ?

「まあ良いですけど。〈^{アルミサエル}触抱聖母〉!!」

空間が軋み、霊力の暴風と共に空間を突き破って俺の天使が降臨する。空間震警報は鳴らない。今は一時的にカットしてるらしい。

「ふう。出すなら出すと言いやがれってんです」

「いや、スマン。ありがとう」

「礼には及ばねーです」

触抱聖母の余波を、CR—ユニットを高速展開した真那が随意領域で受け止めていた。おーおー、ホントにお前スゴいな。分身とは言え狂三を仕留めるだけはある。

真那に礼を言ってから、俺は前髪カチューシャの額にそつと触れる。どこが悪いの

かは、身体に一ヶ所触れば分かる。俺の様子を、皆が固唾を飲んで見つめていた。

前髪カチューシャのダメージは、肉体に刻み込まれ、心と身体を蝕んでいる。俺も確かに彼女を触手で弄ったが、このダメージは違う………他人を壊して作り替えている。

根源は捉えた。後は祝福するだけ。

「——始めますよ」

俺が静かに宣言すると、隊長さんが首肯で答えた。

人の手で為せぬ奇跡なら。今こそ見せよう、精霊の手で。

【ハエム・ハクトシヤ福音】——

両の指を固く組んで握り締め、背中から触手を生やす。触手は前髪カチューシャの身体を包み、水の球体を為す。

俺の触手は、実のところ触手ではない。本来の用途は、霊力を供給するパイプなのだ。

さあ、出力を上げよう。俺は祈るように目を閉ざす。

霊力の高まりと共に、俺の姿は少しずつ変化していく。頭光のような装飾が、肩には半透明なケープ状の帯が現れる。端から見れば、祈りを捧げる聖女みたいじゃないか？ 実際見たこと無いけど。

触手を通って、淡い光が水の球へと集まっていく。それが繰り返されるにつれて、水に浮かぶ少女の呼吸が少しずつ落ち着いていく。

回りの雑音も、誰かの声も、今は等しく聞こえない。ただ、静寂の中で祈るのみ。命に触れ、命を抱く、聖なる母。〈アルミサエル触抱聖母〉の名の元に。全ての誕生に、祝福を。

どのくらい祈っただろうか。

《——何時まで祈ってるの?》

「ツ!？」

唐突に脳内に響いた声に、張りつめた意識の糸が切れた。呼吸を止めていたかのよう
に胸が苦しい。全身が汗に濡れていた。

「真那、ただけ時間が経った!? 実験はどうなった!?」

荒い呼吸にも構わずに、背後の真那へと顔を向ける。しかし、真那は遠くを見てい
るかのように上の空で、反応しなかった。

「真那!!」

「あつ、はい!! 崇宮真那でいやがります!!」

「しつかりしてくれよ………開始から何分経った!？」

ガクガク揺さぶってやると、慌てた真那がスマホを取り出して確認する。俺がスマ
ホを見ないのは、開始時刻を見ていないからだ。

「えー…、あ、五分しか経ってねーです。もう、終わりでいやがりますか?」

「あれ、そんなもん? 確かに終わったけど………」

前髪カチューシャのほうに振り返る。拘束を解かれた彼女は、先程のような狂乱状
態を脱していた。解析班の人達もデータを見て驚いているが、まあ結果は火を見るより
明らかだろう。

前髪カチューシャは、謎の精霊とやらの支配を無事に脱したらしい。

「もう、あんたの声を聞いても何ともないわ。……………一応、お礼は言つとく」
 拘束具を外された彼女が近付いてきて、礼を言いつつそっぽを向いた。あれ、何この子ツンデレ？

「あれ、二曹はつんでれさんでいやがりますか？」

「ちつ、違います三尉!! 誰がこんな変態なんて!! わ、私はその——」

「へー、そうでいやがりますかー」

「三尉いいいいーっ!!」

ケラケラと笑つて逃げる真那を、前髪カチューシャが顔を真つ赤にして追いかけていった。あれ、寧ろこの子真那が好きなのか？ 百合なのか？

俺が走り去る二つの人影を見つめていると、背後からとんとんと肩をつつかれた。振り返ると、そこには隊長さん。

「私からも、礼は言つておく。けど、あんたは結局誰の味方なのよ」

と、申されましても。俺からすれば、人間も精霊も仲間な訳で。まあ、ヘラタトスク機関のことを言えば楽なんだが……………そうもいかないしなあ。

「俺は初めから……………惚れた女の味方ですよ」

と言うことで、かなりオブラートに包んで教えてあげよう。

「誰よ」

「ナイショです」

「フアツク」

「カモン」

簡単には口を割らねえぞコノヤロー。

「あつ、そう。じゃあ謝礼として用意したこの金一封は無かったと言うことで」

「わー誠さん今ならあることないこと答えちゃうぞー」

お金なんかには負けない!!ビクンビクン!!静まれ、俺の右手!!隊長さんの封筒を掴もうとするな!!どうせなら隊長さんの胸を掴めー!!あつでも久しぶりに食べたまともな食事のせいで俺水じや我慢できないかも!?!ああん、お金欲しい!!

と、かなり薄弱な意思ながら何とか誘惑に耐えると、隊長さんの方が折れた。

「あることだけ喋んなさいよ………はあ、これはあげるわ。流石に立場つてもんがあるし」

「うおつすげえ、五万円入ってる!大金だあ、金持ちだあ!サクマドロップめっちゃ買える!!もうひもじくないぞ!」

「何この哀れな全世界の災悪」

隊長さんのこの目、少し前に見たことある。あつ、昨日の折紙先輩の目か!ウワーやめてそんな目で見ないで!こうなったのも全て生活能力って奴のせいなんだ!!

「ふぁーあ、何か人間臭くてあんた嫌いだわ……あ、そうそう。これ渡しとくわ」

投げ渡されたのは、カードキーの入ったパス。首に下げるための紐が付いている。

「何すかこれ」

「ウチの基地のカードキー。それがあれば、重要区画じゃなきゃ入れるわ。……中で天使使うんじゃないわよ」

「食堂使うに留めます」

「宜しい。あーめんどくさいことばつかし。栄養ドリンクが手放せないわあ……」

渡すものを渡して用が無くなったらしく、隊長さんは俺に背を向けて去っていく。俺も、何となく物珍しくてカードキーを見つめていた。

「あーあ、またあの民家を襲った精霊が彷徨き始めたって報告入るし、ホント休みなくてやんなっちゃう」

——
え？

それは……………謎の精霊って言われてた奴のことか!?

裏路地。

「ひひひひひあがああああがが
!?!?
」

悲鳴が響き、直後に何かがひしゃげ、飛び散る音がする。

昼間でも、ここはビルの谷間であるために、日光が余り当たらない。

細い道の中程に、赤い海。

一人の少女が立っていた。

真珠のような柔らかな白の長髪。一部は巻き貝のように巻かれている。レースのついたドレスは、さながらフランス人形のような印象を受ける。

そして、バランスの取れた肉体と裏腹に、酷く幼い翡翠の瞳が、どこを見るでもなく瞬きしていた。

「でった、おうちかえりたくないなあ……………」

少女は、静かに姿を消した。

その日。一人の男性が行方不明になり——血溜まりしか、手がかりは無かった。

Date. 18 「先輩のデートで飯が美味い：前編」

「ここにいやがりましたか、クソテンタクル」

実験を終えてウオータークーラーの水を怒濤の勢いでガブ飲みしていると、唐突に真那が話し掛けてきた。

隊長さんの愚痴が気になった俺は、即座に聞いてみたのだが、作戦に関わることは流石に言えない、と教えてもらえなかった。何ともモヤモヤした気を紛らすために、真那の話に乗っかる。

「お前俺にどんなあだ名付けてんだよ」

クソテンタクル
「淫乱触手でいやがりますが？」

「ねえお前俺のこと嫌いなのか？嫌いなのか？」

「弁当に入ってる緑色の芝みたいな奴よりはマシでいやがります」

おま……………：バランスよりかマシって俺何なの!?淫獣!?オナホ!?

「せめて生物と比較してくれよお……………」

「それは今後のクソテンタクル次第なんです。ところで今日、義姉様が兄様とデートしやがるらしいんですが知ってやがりました？」

「いや、知らなかった。覗きに行こうぜ」

「クソテンタクルも分かかっていやがりますね。実は真那も非番でいやがります」

目と目で分かり合った。仲良くなれる、俺ら。

「俺、回収してくるものがあるわ」

「私ちよつと盗聴機買ってきやがります」

「ちよつとで買うもんじゃねー………が、いぞやってまえ。場所は？」

「午前十一時に天宮駅前広場の噴水前らしいので」

「オーケイ。その十分前に忠犬パチ公前に集合で」

「合点」

互いにニヤリと笑うと、俺達は速やかにその場を後にした。

因みに俺は通路で水のボード使って滑走したせいで隊長さんに怒られた。天使

使ったんじゃないから許せよ。生活指導の教師かオメーはよお。



「何イ!?!十時から十香とデートお!?!」

「くるみみみ」

一晩ぶりに我が家……否、公園のコンクリート山に帰ってくると、繰三がサクマドロップのハッカ味を両手で持つてちるちる舐めていた。俺は盗撮要員として繰三の力を借りるべく説得を始めたところ、開始数秒で衝撃の事実を聞いた。

何と土道先輩、十香ともデートすることになってたとか。どうなってんだこれ。飯が美味いぞ。白米を丼で用意しないと……。

「土道先輩の日程管理どうなってんだ、ガバガバじゃねーか」

「みーくるくみ。みー」

テンション上がってきた俺がゲス笑いしていると、繰三が少し悲しそうに鳴いた。

「十香がかわいそう？あそつか、お前十香と仲良くなってたからな」

「み」

うむ、やはり何とか出来ないか。俺の【整形】^{マセカ}で先輩の姿を装い、影武者としてデートを助けるとか。いや……完璧に姿と声を似せても、折紙先輩なら気付きそうだな。十香もずば抜けた直感で察しかねん。

「今、何時だろ？」

「ぞあああふきえる！」

俺がポツリと漏らすと、繰三が右手と左手に黒い爪楊枝みたいな何かを持ってポ-

ズを取る。背後に等間隔に点が打たれた円が現れた。棒切れの長さが、見事に時計の長針と短針の対だ。とすると、背後の奴は文字盤か……………お前、今の正確な時刻が分かるんか。繰三が指す時間とスマホの時間は、寸分の狂いも無かった。

「凄くはないが便利だな」

「みー！」

今はまだ九時十二分。真那と連絡付ければ何とかなるか。きつと真那の中の土道先輩の評価は悪くなるだろうが。それこそ知らん。

「あつそうだ。四糸乃にも声掛けてみよう。帰りがけにパフェか何か食べさせてあげようかな」

「み!?みみ!?!」

「いや、喫茶店に押し入りはしねーよ!?仕事して臨時収入が入ったんだ、パフェくらい何てことはない」

「みー!くーるーみー!!みー!!」

「分かった、分かりました、繰三にも奢るから爪楊枝みたいなのでつつくな!地味に痛い!!」

俺は繰三をひよいとつまみ上げ、ブラウスの隙間から胸元に押し込む。もぞもぞと這い上がって谷間から顔を覗かせると、胸をぶにぶにと押して遊び始めた。こら、止め

なさい。止めなさいったら。止めるオ（建前）ナイスう（本音）。町中で発情して喘ぐぞコラ。

道中エロスに身悶えしつつ、俺は土道先輩の隣にある精霊マンションに入ると、足早に四糸乃の部屋へ。確か今日は、四糸乃の人間社会訓練も休みのはず。おねにーさんは妹にいたずらも教えます（反面教師）。

さて、ここで四糸乃と触れ合う時の作法がある。なおこれはおねにーさん流である。

まずはチャイム。軽快な電子音で来訪を告げましょう。この時深呼吸するのが大事。

で、インターホンのボタンを押すと同時に大きな声で名乗りましょう。

「やつほい四糸乃、おねにーさんだよー!!」

これを、電子音が鳴り終わる前にならずすること。チャイムは来訪を気付かせる便利アイテムであって、本当は無くても良いのです。

「まっ、誠さん……………おはよう、(ぎ)ぎいます……………!!」

するとあら不思議。四糸乃が天上の笑顔で出迎えてくれます。生きてるという実感を感じつつ昇天出来そう。DIE往生、やったぜ。

違う違う。死んでたまるか。少なくとも四糸乃がお嫁に行くまでは死んでたまる

か。相手は誰だ羨ましい、背骨ブチ折ってやる。

物騒な親バカ（姉兄バカ）を発動させつつ、四糸乃の頭をよしよしと撫でる。少し恥ずかしそうだが、無抵抗。満更でもないという奴か。素直な子は好きです。

『やつはおねにーさん、四糸乃が可愛いのは分かるけど、今日はどうしたんだい？』

ちよつと四糸乃に集中し過ぎて、よしのんが拗ね気味に遮ってきた。悪い悪い。よしのんの頭（で良いのか？）も軽く撫でてやってから、本題に入る。

『今日、土道先輩が折紙先輩と十香の二人とダブルデートすることになりました！面白そうってのもあるけど、ちよつとヤバそうな臭いするから見に行かない？』

俺がガツポーズで堂々野次馬宣言すると、四糸乃が目を丸くする。そして、よしのんと顔を見合わせた。

「えっ……で、デート……あれ……？」

『おかしいねー、琴里ちゃんの話とズレてるねー』

ん？何で司令が出てくんの？

『どうかしたの？』

「え、つと……その……」

四糸乃がもじもじしていると、よしのんの口から衝撃の事実が。

『ボクたち、今日は精霊の攻略日って聞いてたけど？』

は？

え”、もしかして。

トリプルデートお
!?!?



時刻は九時四十分。俺は真那に集合時刻を前倒してもらい、パチ公近くの喫茶店に入った。テーブル席で待っていると、動きやすそうな私服姿の真那がやって来た。………が、メンバーに驚いていた。

「妹分です」

「よっ、よ、………よし、四糸乃、です……」

『よしのんだよー』

「は、はあ。そうでいやがりますか」

四糸乃&よしのんをまず紹介。真那の笑顔が引き吊っている。まあ仕方無い。四糸乃は元精霊へハーミットだからな。資料では見たことがあるんだろう。四

「相棒です」

「くー！くるるるる、くー！！」

「えっ、ええええええええ……………」

こつちは良く知ってるだろう、君の因縁の相手だよ。元、が付くけどね。繰三も止しなさい。フシャーとかいう効果音が付きそうな感じで威嚇するんじゃない。今のお前がやつても子猫の虚勢だぞ。

「これが俺の用意した助っ人です」

「色々と説明がねーんですがそれは……………」

「ごふき……………みー！?みみー!?!」

「特にこいつの説明をしやがれっつんです」

真那が水平にした目で俺を睨みつつ、手に噛みつこうとした繰三を捕まえて逆に頬をつねる。見事な返り討ち。

「お前に刺された後、俺が治療した狂三の分身だよ。何故かちんまくなっただけど、俺の同居人だ。もう悪さは出来ないぜ」

「……………まあ、この場合は良しとしましょう。何かやらかしたら捌いても文句言うんじゃないですよ?」

あいよと返すと、真那は繰三を解放する。悔しかったのか、テーブル備え付けの

シュガースティックで真那の手をペシペシと叩いているが、効果は無い模様。デコピンで四糸乃の前に転がされ、よしのんに甘噛みされている。繰三や、お前小さくなってるかなりマスコットが板に付いたな。

「さて……………真那。いや、おはようフェルプス君」

「誰!？」

ササツと俺はその場のノリで、両手を組んでテーブルに肘を突く。某司令官座りだ。眼鏡があつたらレンズが光っていただろう。

「予定より早く来てもらったのは他でもない。今回のデートに著しい問題が発覚した」
「ほほう。して、その問題とは？」

あ、ちよつと真那がノツてきた。

「トリプルブッキングデート……………と言えば、最早分からぬことは無いだろう？」

……………一転、真那が凍った。

慕っている兄が前代未聞系ジゴロと知った時、妹は何を思うのか。なおもう一人の妹は兄を戦場デートに駆り立てている模様。

「そ、それは確かな筋の情報で？」

「間違いない。これは現実だ」

「に、兄様……………真那が、真那が傍に居なかったから、こんなことに……………」

身を震わせ、テーブルに突っ伏す。あつ、ちよつと泣いてる。これは冗談でも『なるべくしてなった』とは言えないなあ。事実だけど。先輩にはこれから先も彼女が増えるけど。

「真那が居なかったから……妹指数の低い妹しか居なかったから……妹成分が足りてねーんですね……愛に飢えていやがるのですね……」

「お前意外と元気じゃねーか俺の同情返せ」

「クソテンの同情なんて要らねーです」

「略すな」

急にガバツと顔を上げてぶーたれてきた。こいつ俺の扱いが今まで会った人の中で一番荒いぞ……。

「でも同情するならキャラメルマキアート奢りやがれ下さい」

「自分で買えコラ」

「わ、わた、し……は……ココアが……」

「アイスも頼む？」

「扱いの差酷くねーですか!？」

「み……」

こうして、ろくに作戦会議が進まぬまま、十香とのデートの時間が来てしまい。俺

たちは急いでお勘定して店を出た。



午前十時。時は来た。

「む、あれは先日兄様と共に歩いてた……………」

「十香だ。土道先輩が大好きな食いしん坊。ちよつと抜けてる所もあるが、一途かつ美貌の持ち主だ」

「いいなあ……………」

『今度四糸乃も誘おうね』

俺達は、物陰から土道先輩と十香を見守っていた。

「あ、あつ、あの……………この、服は……………」

「これが正しい探偵の衣装でいやりますが、何か？」

「あうあう……………」

『よしのんも着たかったね』

なお、追跡調査のお約束だか何だか知らんが、真那が盗聴機と合わせて買ってきた

探偵服を皆で着ている。お揃いの茶色のコートと帽子だ。流石に四糸乃の分は買つてなかつたので、俺は霊装を変化させて対応。俺の分を着せて袖を捲つてある。それでも余裕で余る袖と、引き摺つちやう裾が可愛い。写真撮つた。

「さて、義姉様というものがありながら、他の女に現を抜かす兄様には、ちとお灸が必要です。証拠を並べてお説教しやがります！」

「さらば土道先輩、墓参りは行きます」

俺は生暖かい目で先輩の背中を見つめながら、繰三に八ミリ程の黒い円盤を渡す。

真那が買つてきた盗聴機だ。

「レッツゴー繰三。土道先輩の靴に仕掛けてくれ」

「みー」

俺から受け取つた盗聴機を抱えて、繰三は人混みに向かって走っていく。

「誠、君は一体何をして——」

その時。突如現れた人影が、繰三に気付かず彼女を蹴つ飛ばした。俺達の目の前から繰三がぶつ飛び、街灯にカーンと激突して気絶する。

「繰三イイイイイイイイイイ!?」

「だぁー!?」

「あうあう」

『ありやりや』

四者四様の反応を俺達が見せる中。

「ん？」

線三を蹴った張本人……………へフラクシナスへ解析官・村雨令音は、状況が呑めていないのか、首を捻る。

俺達の探偵ごっこは、初手から頓挫し……………そして終局を迎えた。

「ギ……………ギやれやれですわ……………」

Date. 19 「先輩のデートで飯が美味しい：後編」

「このバカ精霊!!アンタ何考えてんのよ!!」

「あだだだだだだ司令取れる取れる俺に新しい頭が必要になつちやうがががが」

「ああその方がいいんじゃないの!?!アンタのその頭じゃ、おがくずの脳味噌貰った所でポロポロ溢すだけよ!!」

「司令の罵倒つてば文学的センスに満ち溢れていだだだだだだだだ」

現在、フラクシナス艦橋。

琴里司令に鯖折りされてます。

理由は簡単。四糸乃をトリプルデートの覗きに誘ったから。

「もし四糸乃の精神状態が不安定になることがあったら、折角封じた霊力が逆流するのよ!?!元も子もないじゃない!?!」

「いやでも四糸乃が寂しいかなと思っただんでお出かけがてらやったんですよお—————!!!」

「なら普通に出掛けなさい!!それにわざわざASTに知り合い作るなんて本格的に頭ポソコツなんじゃないの!?!」

「ヤツダーバアアアー……!?!」

まあ、司令の怒りもごもつとも。真那はASTのエース。狂三の分身なら容易く葬れる腕前だ。四糸乃が精霊として相對していたなら間違いないただでは済まない。俺がいたこと、四糸乃が人間と変わらぬ存在になっていたことで手が出せなかっただけ、かも知れないのだ。

迂闊だったけど、何にせよ真那は四糸乃を襲わなかった。俺は真那を信じたい。

「こ、これが………兄様の、義妹………!?!」

四糸乃は現在別々の部屋に待機させられているが、真那はここにいる。CRユーニットを自在に展開できる魔術師ウィザードは艦に入れたくなかったが、令音さんを何らかの機関員と見抜いて

『真那も連れていかないなら、本社にチクるしかねーです』

………と強かさを見せた。しょうがないから連れてきた次第だ。

あー痛い。気を紛らすために長考していたが、何か痛すぎて快感になってきた。神無月イ！物欲しそうにこつち見んな！代わってやらんぞー!?!

それから五分あって、作戦中だからと司令のお仕置きから解放された。背中を擦り

つつ立ち上がり、真那と共に予備の座席に座る。

そういえば俺も艦橋で攻略する様子を見るのは初めてだ。いつもは現場にいたからな。ここから見るのも中々乙だ。

「何が始まりやがるんです?」

「世界の命運を賭けたデート」

「何ですとツ!」

映画でも見るような気分で俺が足をばたつかせながらメインモニターに映る土道先輩を見てみると、令音さんが近付いてきて俺の左隣に座った。

「誠、いいかな」

「何ですか?」

「この小さいのは何だい?」

と言って指差したのは、胸元の繰三だった。気絶した後そのまま寝ていたらしい。ちゃんと拾ってくれたのは嬉しい。だか、何も元々クマのぬいぐるみ突っ込んであるポケットに入れなくても。羨まけしからん。

「俺の相棒、繰三です。元・時崎狂三の分身で、日本語喋りません」

「……………色々理解が及ばないね」

「繰三誕生に關しては同感です」

ここで、唐突に目を醒ます。

さて……………俺は余裕で分かる訳だが、試しに一つ繰三語を訳していくかね。水で触手を一本生成、令音さんの右耳にそつと添える。俺の訳を、霊力を使って令音さんの耳に出力する。

くあ……………ん　ここは何処ですの
「み？みみみみみ!？」

「我等が琴里司令の座乗艦、ヘフラクシナスだよ」

ええっ　デートはどうなりましたの
「み!?くるみみみ!？」

「現在進行中。繰三が気絶してから大体五、六分しか経ってないぜ」
そうですの
「み……………。」

触手をスツと消し、繰三をつまみ上げて自分の胸元に押し込む。令音さんの方を伺うと、何とも言えない表情をしていた。

「訳、分かりました?」

「まるで法則性が見えないね」

溜め息を吐く令音さんに気付いた繰三が、フシャーとツインテールを逆立てる。ホントに子猫かお前。

「くーー!!くくー!!」

「今は何と?」

「『わたくしを蹴った方ですわね！覚えておくがいいですわ！』って感じですよ」

「やはり分からない。ひよっとしてフィーリングの問題なのかね」

「『考えるな、感じろ』って奴です。強いて言うなら、くーくー言ってたら嫌われています」

「……………そうかね。気を付けよう」

そうこうしているうちに、時間は流れる。気付けば、精霊の攻略開始時間が目前に迫っていた。

——が。

『アイタタタタタ！』

『シドー!?どうしたのだ!?!』

へーイー先輩、その大根役者っぷりは何だよ。腹痛を装って離脱とか、何してんのさ。……………信じた十香も十香だが。

あー見てられん。

「令音さん。俺を水族館前へ送ってください。偶々来たと装って時間稼ぎます」

「そうするとデートでは無くなってしまうが……………今回はそうも言っていられないか。頼めるかな?」

「ええ。どのくらい稼げばいいですか?」

「一時間……………半、かな」

「改めて思う。ムチャクチャだろこれ……………」



「おおつ、これも凄いな！シドー!!——そうだった、居ないのだった……………」

大量の鰯の群が、群を為して煌めき泳ぐ姿に十香は興奮する。つい土道の姿を探して振り向いてしまうが、そこに大好きな少年の姿はない。先程、腹痛を訴えてトイレに行ってしまったのだ。それを思い出すと、自分だけ楽しむことに罪悪感を覚えるし、土道がいなければ面白味も減ってしまう。

「シドー……………やはり様子を見に行ったほうが……………」

十香が不安げにそう口にした時、何かがピヨコンと目の前に飛び出してきた。

『やつはー!!十香ちゃんおひきさー!!』

「む?!お前はよしのん!?!」

兎のパペット、よしのん。それが顔を出すということはつまり——。

「こ、こんには……………」

「よう十香、奇遇だな!」

四糸乃が、いるということ。付き添いだろうか、誠の姿もあった。

「フツフツフ……さては十香、四糸乃を差し置いて士道先輩とデートだな?」

『やー、羨ましいねー!』と言うことで、十香ちゃんに勝負を挑む!』

よしのんの短い手が、妙に力強くピシリと十香を指した。

「勝負?」

「おう。こいつだ」

こくと小首を傾げる十香に、誠が一枚のカードを渡す。そこには、『ラブラブスタンプラリー』なる字が書いてあり、空欄が十カ所あった。

「水族館内の十カ所に、スタンプが隠して置いてある。しかも場所は毎日にランダム。これをカップルで巡ってこの空欄に押すんだ。全部集めるとペンギンのぬいぐるみがペアで貰える」

「さつ、さ、先に、っ……………全部押したほうが……………勝ち、です……………!!」

四糸乃が若干ぷるぷる震えながら声を出す。まじまじとカードを見つめる十香。裏に、そのぬいぐるみとやらの写真がある。入り口近くの売店にも並んでいた、ふわふわの可愛らしいペンギンだった。もし入手出来れば、士道とお揃いだ。

一瞬乗り気になるが、十香は考え直す。士道が欲しいかは分からないし、それに今士道は腹痛なのだ。私だけ遊んでいいものか。しかし、ぬいぐるみか——

「あつ、そうそう。さつき先輩と会ったけど、『十香にプレゼントする』ってやる気満々

でスタンプ探してたぞ」

「——受けて立つ!!」

十香は脇目も振らずに走り出す。何だ、土道も人が悪い。サプライズがしたかったのか。ならば、逆に驚かせてやろう。十香の顔に自然と笑みが溢れた。

「こら走るなー。他の人に迷惑かかるぞー」

途端にしゃしゃかと歩き出す。誰かに迷惑はかけてはいけないな、と言わんばかりに領きながら。

ともかく、十香の気を反らすことには成功した。誠と四糸乃は、ほっと胸を撫で下ろした。

なお、本来この水族館にそんなスタンプラリーは無い。ヘラタトスク機関のメンバーが今ごろ必死にスタンプを設置している頃だろう。

「さ、俺達も行こう。見たい魚、いる?」

「マンボウ……さん……が、見た、い………です」

「よし、肩車で行こうかあ」

「あうあう………」

さて、一時間以上もどうしたものか。そう考えつつ、誠はスタンプではなくマンボウを探して歩き始めた。



ランジエリーショップ。

時崎狂三のデートは、概ね順調だった。土道の反応も悪くない。彼との距離を縮めることが出来た。もう少し。もう少し。もう少しで命に手が届く。

だが、思わぬ邪魔が入ったのだ。狂三は浮かぬ表情を浮かべる。

「みー！」

「みみ!!」

「みみみ!!!」

何処からか小さな自分が三人現れて土道の服に忍び込み、スマートフォンを奪って逃走を始めたのだ。

「ここ、こらっ!?! 濟まない狂三、ちよつと待っててくれ!!」

「ええ、行つてらっしやいまし」

慌てて店を出て追い掛け、小さくなっていく土道の背中を見ながら、誰かに話し掛

けるように狂三は呟く。

「突然姿が見えなくなつたと思えば……………わたくしの邪魔をするつもりですの、わたくし?」

「みー」

すると、近くに立っていたマネキンの頭から、小さな自分が飛び移つて来た。

頭の上に乗つた小さな狂三は、みーみーと鳴き声を上げた。

「え?トリプルデート?きひつ、どうやったらそんなに面白い生き方が出来るのでしょ
うね、士道さんは」

もたらされた報告に、思わず笑つてしまった。デートの予定が重なり、その全てを同時にこなそうとする。何と不器用なことか。最も、それ以外の解決法は面白くないだ
が。

「では……………気長に待つとしましょうか」

「みみ。ざあああふきえる!」

忽然と小さな人影は消え、再び狂三は一人になる。

「きひ、きひひひひ……………」



「あのバカ………何引つ掻き回してんのよ」

「まあ、良くやっていいると思うがね」

モニターを不機嫌そうに見つめてチュツパチャツプスを啜える琴里と、傍に立つ音。二人の視線はある一点………色無誠の映る映像に向けられていた。

「こちらから提示するデートプランを無理なく実行するように上手く立ち回っている。繰三の力もあるがね」

強引ではあるが、誠と繰三が土道不在の空白を埋めるようにそれぞれのデートにイベントを起こしている。

今は、折紙のスマートフォンを繰三が盗んで逃走中。と見せ掛け、先に盗んだ土道のスマートフォンを持つて逃げることで、折紙の気を引いて追い掛けさせることに成功。折紙の目を欺いている。

更に、誠は水で土道の姿の分身を作り出して、水族館内を彷徨かせている。分身を見た十香は、自分もスタンプラリーをしていることに気付かれないのか慌てて逃げ出しており、上手く誤魔化せている。十香が見つけたスタンプは、七つ。土道との食事も違和感なく挟んだので、目に見えてご機嫌だ。水族館を回る足取りも軽い。もう少しだけ時間を稼げそうだ。

「しかし、狂三はノータッチなのね」

「繰三が最初に接触した際に、もしかすると今日のことを教えたんじゃないかな。大博打ではあるが、機嫌メーターはむしろ上昇している」

「肝が冷えるわ、もうやらないで欲しいわね。そういえば繰三つて狂三の何なの?」

「誠曰く、狂三の分身が瀕死だった所を治療した結果、繰三になったらしい」

「分身?なるほど……道理で死なないわけね。というか真那、あんた知らなかったわけ?」

「んはいっ!?え、ええ。私も知りませんでした。知ってたらさっさと本体を探して殺つていやがります」

予備席に座る真那は、唐突に話を振られてはつとなる。本気で精霊相手にデートをしている兄及び謎の機関員を見ていて、呆れ果てて何も言えなくなっていたのだ。

「それで、この後はどうするつもりで?まさかデートだけして終わりなんて話じやいやがりませんよね?」

「勿論よ。ムードが最高点になったところで、土道と狂三を——」

琴里がチュッパチャップスにキスをする真似をしようとした、その時。

「司令!!狂三に回していたカメラに異常!!映像が切れました!!」

映像を注視していた椎崎が、アクションメントの報告をする。デートの様子が映らなく

なるのはまずい。琴里は指示を出す。

「急ぎで予備のカメラを二機回して！一機は先に落とされたのと同じポジション、もう一機は望遠で十メートルは離しなさい!!」

「了解!!」

琴里の様子を見ていた真那は、何かを感じていた。狂三との殺し合デートいを繰り返した者としての直感が、真那の身体を動かした。

「真那を下ろしてください。——何か、起きやがる気がします」

席を立った真那の目は、戦士のそれだった。かつては磨耗しきっていた使命から解放たれ、今一度手にした願いのために。

精霊を倒し、人々の命を守る。

やっと出逢えた、兄を護る。

そのためなら、何度我が手を汚しても、心が擦り切れる気がしなかった。



狂三は、笑っていた。猫を撃って遊んでいた少年達を撃って、遊んでいた。

「ひ、ひゃあああああ!!!!」

情けない声を出して、腰を抜かして後ずさりしながら、涙に顔を濡らして命乞いする、最後に一人残された少年。その姿に狂三は更に昂り、口が裂けるのではないかと言うほどに口を吊り上げて笑う。

「あなたは、例えば自分が撃っていた猫が泣いていたなら、撃つのを止めまして? 止めてと乞うていたら、撃つのを止めまして? ——つまり、そういうことですよ」

「お願いです、許してください!!もうしません!!猫も病院へ連れていきます!!止めて下さい!!助けて下さい!!」

「話、聞いていましたの?」

少年の見苦しさが、狂三の嗜虐を刺激する。狂三は引き金に掛ける指に、力を入れる。その命を摘み取るために。

だが、すぐに指の力を抜くことになる。

「うわああがぎゃああいあああ!!?!?」

狂三より先に、二人の間に割って入るように突如現れた人影が、少年の命を絶つたのだ。

白いドレスに白い髪。翡翠の瞳。

人形のような少女が少年に覆い被さったかと思えば、悲鳴と共に少年の姿は消え

去った。ただ、血の染みだけを大地に遺して。

「——ごちそうさま」

立ち上がった少女は、一言そう言った。

「横取りとは、お行儀が良くないですわね」

「……………う？だれ？わたし、血のにおいがしたからきただけだよ？」

「根本的にマナーがなっていないんですのね」

「わかんない。けど、まだごはんたべたいなあ」

「でしたら、その辺りのをどうぞ。わたくし興が冷めましたので、結構です」

自分が仕留めた少年達の亡骸を指した後、興味を失った狂三は踵を返す。遊び過ぎ

た。そろそろ土道に戻る頃だ。

——しかし、それは失策だった。

「うん、ありがとう。いただきます」

耳許で、声でした。

ぐしゃ、と何かのひしゃげた音。

潰れたのは、誰の心臓？

「こつ、これは……………?!？」

へフラクシナスのカメラと共に、狂三を追ってやって来た真那は、思わず目を背けたくなった。

空き地は、血の海だった。

その中で、びしゃびしゃと音を立てながら、一人の少女が歌いながらスキップをしている。

「はーんぷていーだーんぷていー、何処へ逝ったのー♪」

そこに、彼女以外の気配は無い。しかし、人の居た痕跡は、確かにあった。

手首から上の無い、狂三の右手。固く握られた銃は、その役目を果たせぬまま、血の海に濡れていた。

「あれ？」

水音が止む。跳ねていた少女の丸い瞳が、真那を捉えていた。

反射的に、CRユニットを起動させていた。

「おーい、真那、何やってるんだ!？」

近付いてくる、兄の声にも気付かずに。

真那は、ただ目の前の少女を睨んでいた。

「だあれ? でつたとあそんでくれるの?」

靈波反応がある。奴は精霊だ。あの狂三が分身か本体かは分からないが、狂三を倒せる精霊だ。つまり——自分と同等の実力か、それ以上の相手。

A S Tに支援要請を出す。危険だ、確実に仕留めなければならない。

「でも、でつたおなかいっぱいだよ?」

こいつは、今、ここで止めなければならない。握る双剣に力が籠る。

説得^{デート}など、している場合ではない。

こいつからは、狂三と同じ——いや、もつと酷い臭いがする………!!!

士道は、明確に恐怖した。恐怖を覚えた。買い物をした。食事をした。話した。笑った。手を繋いだ。

その狂三は、今はもう、手しか残っていない。
これが、精霊。

真那が対峙する相手を見て、足が震えた。吐き気がした。あの見目麗しく、あどけない少女が。

血の海に踊る少女が、

——怖い。そう思ってしまった。

思えば、自分を《私》と言う誠と会った時から、精霊が怖かった。あれほど仲の良
いと思っていた誠の中に、あのような存在がいたことが。狂三が蘇ったことも、思えば
不気味だった。

そして、命を何とも思わないこの少女が、士道の心に止めを刺した。士道の中に、精
霊は話せる相手だ、という先入観が出来上がっていた——それを、打ち砕かれた
のだ。

妹が戦っていることも、狂三の僅かに残った亡骸も、見えなかった。

士道は、逃げ出した。

自分が情けない、とも思った。

けれど——この恐怖は、士道の手では、拭えそうになかった。

Date. 20 「狂三と、線三」

狂三の凄惨な死。それが士道に与えた衝撃は、大きかった。琴里も、不安を拭い去れない。

帰宅した士道に、明日狂三と会ったら今日のデートの話題を出すこと、と忠告した際に、士道は明らかにいつもと違う目で、

「そうだな……………。精霊は、封印しなくちやな……………」

と返した。士道の中で、『精霊を救いたい』気持ちが、『精霊を封印しなければ』という使命感・危機感に吞まれてしまっている。士道の熱い『救いたい』思いが無ければ、精霊の心は揺れない。封印は叶わない。にも関わらず、士道の中に恐れが芽生えてしまった。

しかし、気持ちも分からないでもない。十香。四糸乃。士道の攻略した二人は、よく言えば純粹……………悪く言えば安全だったのだ。人に慣れていないがために、士道の優しさにあつさりと落ちた。

ぬるま湯に浸かっていた士道を打ちのめした、『純粹な悪意』の塊。狂三を喰らった精霊——識別名〈ヘリリス〉は、士道には、早すぎた。

けれど、精霊は待つてくれない。いや、救いが訪れる日を待つてゐるのだ。だから士道には、何としても立ち直つて貰うしかない。

兄に、優しい言葉一つ掛けられない。

人を助けるために司令官と呼ばれるまでになつた琴里は——今は、その肩書きを呪つた。

士道に元気が無い。十香は氣付いていた。

十香は頑張つた、と自分で思つていた。スタンプラリーを無事制覇し、愛らしいペンギンのぬいぐるみを誠達より先に手に入れた。勝利を称えられ、鼻高々で士道の元に凱旋したが、士道の反応はどこかきこちない。スタンプ探しの疲労かとも思つたが、明らかに何か無理をしていた。

帰宅した今もリビングで、何をすることもなく、ただソファに座つて俯いている。

十香が見たいのは、そんな士道ではない。いつもの優しい笑顔が見たい。そんな顔をして欲しくない。何かに苦しむ士道の、力になりたい。

意を決した十香は、ぬいぐるみを掴んで士道に向かつていった。

「……………何してるんだ十香」

士道が人の気配に気付いて顔を上げると、十香がいた。何故か、自分の顔をぬいぐるみで隠して。

「十香ではない。私はペンギンのぺんたろう。悩める少年、一つこのぺんたろうにどんと話してみるといい」

「いや、十香……………」

「ぺんたろうだばーかばーか」

よしのんの真似か何かだろうか。十香なりに、士道を励まそうとしているのだ、と察した。それほどに、自分は疲弊していたのか。士道は苦笑した。

「ありがとう十香。でも、俺は大丈夫だ」

「……………むう。シドー、嘘を吐いても分かるぞ。シドーは今、いつものシドーではない。そのくらい、私でも分かる」

笑ってごまかそうとするが、十香はそれでは納得しなかった。顔の前からぬいぐるみを退けて、士道に抗議の視線を向ける。分かっているぞ、と。

そして、その視線は、寂しげなものに変わる。

「シドー……………私では頼りにならないか？シドーの悩みを聞いてやれないか？」

「十香……………」

「シドーは私を助けてくれた。それだけでも、返しきれない恩がある。だが、シドーといると、私は毎日が楽しい。私は、シドーから貰ってばかりだ。少しくらい、私からも返させて欲しい」

「……………っ」

そつと、十香は土道の後ろに回って抱き付いた。突然の行為に、土道の頬が赤く熱を持つ。

「な、何してるんだ？」

『お母様といっしょ』でやっていた。こうすると落ち着くらしい。……………どうだ？話す気になったか？」

子供扱いされた気分だが、少なからずホツとする温もりがあるのも事実。土道は、自分が折れることを決めた。

「……………気を悪くするなよ？」

「任せておけ」

「……………狂三が、他の精霊に殺された現場

に行くわして……………。俺、その精霊を……………いや、精霊のことが、怖い、つて思ってしまったんだ……………」

十香が思った以上に、深刻だった。このままだと、土道が何処かに行ってしまう気

がした。自然と、士道を抱く力が強くなる。

「私も、怖いか……………?」

「いや……………でも、思い返せば、俺は誠の別人格と会った時も、狂三が蘇った時も……………怖かった」

「……………シドー。私も、そうなっていたかも、知れない。シドーが助けてくれたのだ。もし、シドーと出逢えずに、あのまま名無しでいたら……………私も、見るもの全てに殺意を抱いていたかもしれない」

「……………」

「シドー。もう一方の人格の誠を見た時、私も怖かった。しかし……………同時に、可哀想にも思った」

十香の言葉に、士道は驚いた。恐怖ばかりが先行して、思いやりを失っていたと気付いたからだ。あの誠とは分かり合えない、そう決めつけてしまうように。

「もう一方の誠は……………私にとつてのシドーのような、止めてくれる誰かが居なかったのではないかと、私は思う」

「……………確かに……………」

思い返せば、《私》の誠は子供そのものだった。自分の好きなもののみを欲し、口を出されると文句を言う。叱られようものなら、嫌いと言う。甘えん坊で利かん坊、玩具

を買って貰えず拗ねる駄々っ子だ。

いつか、誠が言っていた。

精霊は人間だ、と。

確かに、その通りだ。

「……………十香、ありがとう。今度こそ、大丈夫だ」

吹っ切れた士道の笑顔に、もう曇りは無い。士道は大切なものを思い出した。

『精霊を救いたい』、純粹な思い。

「おお、シドーが帰ってきたー!」

ばあと十香に咲く、笑顔の花。士道が守りたかつたのは、これなのだ。背中に抱き付く十香の頭をそつと撫でながら、士道は決意を新たにする。

「やってみせる。俺はすべての精霊をデレさせる——あの誠だって、きつと!」

「うむ。シドー! 私の同胞を、きつと救ってやってくれ!」

「おう!」

「だが、キスは駄目だぞ。シドー、キスは私とだけだぞ」

「お、おう……………」

士道が再び苦笑いを浮かべる。キスをしなければ、その約束は出来ないのだが。我ながらふざけた世界の救い方だ。

と、不意に、ころころと音がした。背中側から……………つまり、十香からだ。

「……………シドー。まずは私から助けてくれ」

赤く染まった顔を、恥ずかしそうに背ける十香。時刻は七時半。とつくに夕飯時になつていた。



狂三とのデートの、翌日。午前中の授業を終えた土道は、高校の屋上に来ていた。落下防止柵に寄りかかり、肘を突いて空を暫し眺める。

流れる雲を見つめ——覚悟を決めた土道は、スマートフォンを取りだし、電話を掛ける。

『はあい先輩！あなたの可愛い後輩・色無誠がスピーキング！ですよー』

「自分で言うなよ……………」

『いや、実際の所、俺の見た目ってK点超えしてると思うんですよね』

「知らんわ」

相手は、誠だ。昨日一晩考えて、考えて……………そして、話がかかった。すると決めていた。

『ところで先輩、今日は何のご用？まだ学校ですよね？——まさか俺の声が聞きたくなつたなんていうラブコメディイベントでは？』

「ないです」

『ウツソだろお前……じゃあ何です？』

「誠。お前じゃない、もう一人のお前に宣戦布告したい」

『……………!?!』

風が強い。空を流れる雲を千切り、土道の髪を靡かせる。電話越しの沈黙が、風の音を強めている、そんな気がした。

「聞いているんだろ。出てこいよ」

『……………先輩、何すかそれ。イタズラなら

切りますよ？』

「本気だ。お前、二重人格なものには気付いてるか？」

『……………わざわざ教えなくても良いと思えますけど？』

——変わった。土道に緊張が走る。

『お久しぶり、センパイ。私に宣戦布告って——何考えてんの？何したいの？』

電話越しの、敵意。明らかかな不機嫌。しかし、土道はもう退かない。退けないし、その気もない。

「誠、覚えておけ。俺は、必ずお前をデレさせる。絶対にな」

『何かと思えば。ハッ、男が？私を？センパイって冗談のセンス無い？』

「本気だ。俺は、お前を叱った上でデレさせる。楽しみにしておけよ」

啖呵を切った土道の耳に、息を呑む小さな音が聞こえてきた。

『——センパイ、ホントに昨日のセンパイと同じ？昨日尻尾巻いて逃げた、あのセンパイと？』

その困惑を、土道は逃さない。昨日のことを知っている。何処かで見っていたかとも思うが、あの場に《俺》と名乗る誠は居なかった。ならば——

「やっぱり、昨日の精霊はお前か」

『——あは。センパイって、面白いね。いいよ、決めたよ。センパイも私が壊してあげる。センパイも私のモノ。ウザったいから、兄妹セットで壊したげる』

「やってみろ。その前に、俺はお前をデレさせる」

『アハハハハ!!調子に乗るなよ人間。まあでも、私が壊したいから、たまには助けてあげる、か・も・ねえー。感謝はしてよね!!』

「そりやどうも」

何だか知らないが、協力を得られる可能性があるらしい。予期せぬ収穫はあったが、これで土道は《私》に意識されるようになった。接触の機会も増えるだろう。

「もう言いたいことは無い。戻ってくれていい」

『あつそう。じゃあ私も無いし、《俺》に返すから。——あれ、何の話してましたっけ?』

途端に口調が変化し、張り詰めていた緊張が霧散する。確かに戻ったようだ。ついでに言えば、変化した前後の記憶も曖昧になっているようだ。何の話題か忘れている。

「いや、話は付いた。悪いな、突然電話して」

『……………??何か話、しました?まあ、土道先輩がいいなら、いいんですが……………ではまた』
 通話が切れる。土道は一人、胸を撫で下ろした。これで後には退けないが、寧ろ清々しい。もう迷わない。スマートフォンを仕舞うと、土道は屋上を後にした。

教室に戻る土道の姿を見つめる影が、一つあった。

「みみみ」

線三だ。一人静かに、飴を舐めていた。

「みーみみー。みー」

誰かに語り掛けるように静かに鳴き……………流れる雲を見上げていた。それは返答を待つ間のようであり、ただ思案に耽るようでもあった。

風がカサカサ、と誰かの忘れていったビニール袋を扱う。昼休みが終わる予鈴が鳴った。繰三もちよこちよここと教室に戻っていく。

きっと次の時間も、十香が繰三を待っている。

——けれど、もう自分は、自分を待っていない。



放課後。

狂三に呼び出されていた土道は、令音との簡単な打ち合わせを終え、屋上に向かうとしていた。

呼吸を整え、十香との約束を思い出す。今も、怖いという気持ちはある。だが、土道にはそれ以上に、精霊を救いたいという気持ちを維持していた。

「……………」

『行けるかい、シン』

「はい。行きます。行って狂三を、デレさせてみせます」

『氣負いすぎないようにするんだ。……とは言ったが、今の君の精神はとても落ち着いている。心配は無用だったかな?』

「いえ。緊張はしているので、助かります」

覚悟は出来た。後は、飛び込むだけ。屋上に向かおうとしたその足に、何かの重みが加わった。

「ん?」

それは、繰三だった。爪先からズボンを掴んで土道の身体をよじ登り、胸ポケットに潜り込む。

「るみー」

ひよいとポケットから顔を出し、繰三はニコニコと笑っている。まるで、一緒に行くと言っているようだ。

「繰三? 遊びに行くんじゃないぞ?」

「みみみ、ざぶきえる。くるーみー!」

「や、何言ってるかサッパリ分からないんだけど」

意思疎通が出来ないので、仕方無くそのまま歩き出そうとする。

——その時。突如として辺りが暗くなつたかと思うと、回りにいた生徒達

が呻き声を上げて次々と倒れ出す。部活動の音もぴたりと止み、立っているのは士道だけ。

静寂が、訪れた。

「何だ!? 何だこれ!?!」

『来禅高校を中心に、巨大な霊波反応が観測された。何か影のようなものが、範囲内の人間を衰弱させているようだ。十中八九、狂三だろうね』

「何だつて!?! 早く止めさせないと……!?!」

士道が駆け出そうとした時、ちよんちよんと肩をつつかれた。思わず振り返ろうとして——誰だ? と踏みとどまった。今しがた、自分の回りにいた人間が残らず倒れたばかり。なのに、急に人が現れるなんて……。……。

一瞬とも何分間とも思える思案の中で、ふと士道は気付いた。

胸ポケットに掛かっていた重みが無い。

「く、ふ、ふ……。……士道さん、そんなに警戒されると、わたくしちよつぴり寂しいですわ

よ。

背後の声に確信を抱き、土道は振り返る。

黒いドレスに、白のリボン。赤い右目と金色の左目。左右不揃いのツインテール。色違いの時崎狂三——等身大の繰三が、そこに立っていた。

「繰三、お前大きくなれたのか!？」

「いいえ、偶々ですの。恐らく、一時的なものでしょうね。この『時食みの城』………オリジナル狂三の、影を使った食事が、わたくしに靈力を補給したからだと思えますわ」

繰三は、久々の自分の身体を試すように、伸びをし、その場でターンを決め、と動き回る。明らかに楽しげだったが、土道としては気が気でない。

「食事!?!みんな喰われてるのか!?!止めなきやマズイ!!そうだ、十香!!十香は無事か!?!」

「そう慌てずに………。わたくしがいれば、それは大丈夫ですよ」

「え?」

さらりと繰三が言つてのけ、焦つてばかりだった土道は素頓狂な声を出してしまふ。

「既に、わたくしの影で中和していますの。わたくしにとつても、十香はお友達——美味しく召し上がられてはたまりませんもの。ね?」

「ぱちん、と右目でウインクしてみせる。繰三はどうやら、力を貸してくれるらしい。

当座の問題が解決された土道は深い息を吐くと、気付きの為に両頬を叩いた。

「よし。繰三、一緒に来てくれるか？」

「くふふ、わたくし、エスコートされるのは初めてですの。優しくして下さいませね？」

力強く頷くと、差し出された繰三の手を取り、土道は階段に向けて駆け出した。

「行くぞ繰三!! 目指すは屋上だ!!」

「デートスポットとしては上出来ですわね。流石はわたくし。では———此度は、わたくしが時を刻みましょう……………!!」

息を荒くしながら、土道は屋上に足を踏み入れた。続く繰三は、余裕だと言わんばかりにくるくるとターンを決めている。

二人を待ち受けるのは、影の中央に立つ狂三。どこか不機嫌そうな様子だ。

「狂三。来たぞ」

「あら、土道さん。デートに彼女以外の女の子を———それも、わたくしの妹を連れてくるなんて、どういうおつもりですかの？」

「あら、あらあら。くふふつ、嫉妬深い姉を持つと苦労致しますわ。でえ、もオ……………」

睨む狂三を、繰三が嘲る。彼女の影から黒い棒状のものが突き出し、それを両手で握って引き抜く。

「分身では役不足。オリジナル、疾く出ていらつしやいませ」
イミテーション

全貌が顕になったそれは、時計の長針と短針を横した一対の刺突剣^{レイピア}。右手で握る長針の剣を、狂三に突き付ける。

その横で、土道だけが状況を理解しかねていた。

「イミテーションってどういうことだ？」

「土道さん、ご存知ありませんでしたの？ あれは狂三の分身。これまで土道さんとデートを重ねてきたのも、この消耗品ですわ」

「なっ……………!?!」

「その通り、ですわ」

目の前の狂三が影の中に沈んでいき、入れ代わるように狂三が現れる。見た目は土道には、何一つ変わらないように思えた。しかし、繰三が口角をニイイと吊り上げて笑みの形にしたので、どうやら本物らしい。

「ネタばらしが過ぎますわよ、わたくし」

「誠さんへネタバレ対策をしなかったのが悪いんですよ、わたくし」

「お の れ 誠 さ ん」

ほぼ同じ姿、同じ声の二人が語り合う、異様な光景。土道は一つ、気になることがあった。

「狂三。聞かせてくれ、お前は分身について……………どう思ってるんだ？」

「どう、とは？」

質問の意図を察しかねた狂三は、やや食い気味に尋ね返す。一方で線三は思うところがあったようで、土道にちらと視線を遣る。

「自分と同じ姿の分身が傷ついても、殺されても……………辛く、無いのか？」

「なあんだ、そんな事ですの？まあ、余り気分の良いものではありませんが、消耗品ですもの」

「そんな事!?消耗品!?あんなに笑って、喋って……………デートもした！正直ドキドキしたよ!!分身だなんて思いもしなかった!!紛れもないお前だったよ!!」

「その通りですわ。あれは過去のわたくしを再現したもの。わたくしそのもののでしてよ」

「なら、尚更だ!!分身だなんて関係無い！時崎狂三に変わりは無いだろ!!自分を蔑ろにするようなこと、言うなよ!!」

これだけは言いたかった。喉が裂けそうな程に叫ぶ。狂三は壊れてしまっている。もつと、自分を愛して欲しい。絶えず自分を否定するようなことは、止めて欲しい。

「狂三、俺は——」

「——そこまでですわ、士道さん。その言葉はわたくしには響いても、あのわたくしには届きませんわ」

大きく一步踏み出し、言葉を継つごうとした士道を、繰三が遮る。静かに、しかしハッキリと。その様子に、狂三は壊れた笑みを見せる。

「分かつているではありませんの。情熱的な言葉は好きですけど、遊びの時間はもう御仕舞い」

長短二挺の銃が、狂三の手に現れる。

「退きなさい。あなたもまた贗イミテーション作物。折角得た命をわたくしに捧げたいと言うのなら、話は別ですけれど？」

不敵に笑う狂三の黄金の目が、日光を受けて怪しく輝く。

「丁重にお断り致しますわ。道は既に別たれた。未来を信じたわたくしからの三行半、受け取れないとは言わせなくってよ!!」

双剣を構えた繰三の姿は、細部は異なれど、まさに狂三の鏡写し。

士道を挟んで、時の精霊は対峙する。

ザアアアアアアアアア
「刻々 帝」ツ!!」

ザフキエル・メグイエエエエフ
「刻々 偽 帝」ツ!!」

顕現する、針の無い時計の文字盤が二つ。土道は巻き込まれまいと慌ててその場を離れる。少年が動いたことで、二人の“クルミ”の目線が交わり重なりあい——

「お行きなさい、わたくしたち!!」

影から現れた無数の狂三が、影を揃いの銃へと番え、

「へ刻々偽帝」——【メシヤレット遍在】!!」

文字盤の数、一つ一つの前に出現した十二人の緑三が、弾丸の如き速度で風を切つて飛ぶ。

「時を手繰るなら、わたくしが勝る!!」

「時を狂わすなら、わたくしが討つ!!」

土道が決して望まない——己が己を否定する闘いの、始まりの鐘が鳴った。

い線三だが、天使の効果が十二人の分身を産み出す以外無い。線三の得意戦法も物量戦。圧倒的物量を誇る狂三の分身相手では、本人より身体能力が高かったことで、ようやく拮抗出来る状態ではなかった。

更に言えば、分身を維持するのに体力を使う線三と、分身を造り出す時のみ時間を消費する狂三では、燃費に天と地程の開きがあった。

士道は思わざるを得ない。この勝負、線三の負けだと。

「はあつ、はつ、はあ……………ツ!!」

既に線三が限界を迎えている。レイピアを杖代わりした膝立ちの姿勢であり、荒い呼吸をすることすら、疲労を蓄積させているようにしか見えない。

線三の意識が途切れ、能力が解除された時。狂三は迷わず時間を操り、線三を葬り去るだろう。

「線三ツ!!もういい!これ以上はダメだ!!」

「いいえ、いいえ、まだですよ!ここではまだ退けませんのよ!!」

線三を心配して引き留める士道だが、逆に火を点けてしまったらしい。無理矢理立ち上がるが、膝は震えている。

線三がよろめいた。何とか堪えるも、俯き加減の額に冷たい感触が当たる。

「健闘は称えましょう。けれど、所詮は贗作イミテーション。姉に勝る妹など、いなかったと言うこと

ですわ」

狂三の分身が三体、銃を突き付けていた。奥に凜と立つオリジナルの狂三が、笑みで口許を刃物のように鋭くする。

周囲の死体の数々が、影に呑み込まれて消えていく。残ったのは、血の香りだけ。線三は、もはや『時食みの城』を抑える力も残っていないらしい。

「止めろ狂三——がつ?!」

たまらず駆け出そうとするが、士道は分身三人に取り押さえられてしまう。コンクリートの床に叩き付けられ、視界が一瞬ぶれる。広がる鉄の味。口の中を切ったらしい。

「士道さああああん?後でたつぷりお相手致しますので、今はお静かに」

「は、あ、へ……………!!」

顔を強く地面に押し付けられ、満足に声も出せない。今の士道に出来るのは、処刑を待つつかのような線三の背中を見つめることだけだった。

「では、ご機嫌よう。わたくしそのものであり、妹であり、そのいずれでもない半端者」

「やへお——!!!」

線三の最期の時を、無様な叫びを上げるしか出来ない。士道は、自身の無力を嘆いた。

しかし、その叫びは無為にはならなかった。

「間に合ったあああッ!!!」

オリジナルの狂三の背後から声が響き、一陣の風が土道の頬を撫でた。土道がそれを何者か理解する前に、自分に掛かっていた万力のような力が無くなっていることに気付く。直後に響く、何かの衝突音。

何事かと見上げた土道の視界に入る、白く細い、女性の手。

「先輩、お待たせしました!!」

金髪碧眼、心が男の美少女精霊。色無誠が、そこにいた。

「お、おせえよ……………助かった!!」

呼んだわけでは無いが、ついそう漏らしてしまう。

それは、土道が心から安堵したからだったのだろう。



やつほい、派手にやってるじゃねえか。取り敢えず、土道先輩と繰三を抑えてた狂

三はブツ飛ばして壁にぶっつんこ（時速100km相当）させといたけど。一つ聞きたいことがある。

「繰三、お前でかくなれたのかよ!？」

「わたくしにも理由は分かりませんわ……。最も、消耗しきって戦力にはなれませんけれど」

「そこは俺が補給出来るから問題ないけど」

何て事はない。頭を掻きながら返してやると、繰三は顔を赤らめて大仰に反発する。

「おつ、大有りですわ!!ど、どこから補給するおつもりですか!？」

「天使に触手繋げばやれるけど?」

「えっ」

「ていうかお前どこで俺の能力が霊力供給だって知ったんだよ。言っていないよな?」

「……………その、触手で色々された時に、寿命が伸びたので、それで……………」
「あ、そんな前なの。オーケーオーケー。……………で?ナニを期待してたんだお前? ええッ?」

「うう……………くっ、何でもありませんわ」

火が出そう、と言うより周囲の温度を上げそうな位に真っ赤になった繰三をニヤニ

ヤ見つめてたら、スネ蹴られた。元気じゃねーか。全く痛くないから無理してんだろっけど。

と俺が余裕かましていると、先に倒した狂三たちが復活して立ち上がった。まだまだやれるって目をしてるな。

「誠さん。感動の再会は、あの世で続けて頂きます?」

「俺は線三を弄ってただけだし、どの辺で感動すりゃいいんだ」

「弄られてないませんわ!!」

またも線三が過剰反応して顔を赤くしている。身を守るように自分を抱いているが、それひよつとしてゾクゾクきてるんじゃないだろうな。主に背筋が。めんどくさいんで今はスルーで。お前は後な。

「やつつと逢えたな、狂三」

ポケットに手を突っ込み、若干見下ろすような姿勢で狂三を見据える。

「ええ。わたくしもお会いしたかったですわ、誠さん。あなたは士道さんに次ぐ第二候補………あなたがいれば、精霊一人分の霊力を定期的に回収出来ますから」

「二応初対面の相手に飼い殺し発言止めれ」

ケタケタと笑う狂三を前に、俺は苦笑する。これはまだ気付いてないな。さつき狂三の背後から登場した時に、既に一撃お見舞いしてやったのを。

——では、教えてやろうか。

「まあ、そう言うことなら、俺はこいつを前金として貰おうか……………な？」

俺がスツと右ポケットから取り出したるは、レースの付いた薄布に、これまた細い紐が繋がれたもの。

それを見た瞬間、狂三の顔が一気に青くなり、腰元に手を遣る。感触を確かめ……………一転して顔を赤く染めていく。

「あつ、あつあ、あなた!!わたくしの!!」

「うん。ぱんつ貰った」

「何やってんのお?!?!」

わなわなと震える狂三に向かって何て事はないように言ったら、士道先輩に脳天を叩かれた。痛くねえ。え?女の子のぱんつってなんかエロくない?欲しくない?逆に聞くけど士道先輩は男の。パンツ欲しいの?ホモなの?

「これぞ秘技『流水追剥・下履一触』。すれ違い様に女子のぱんつだけを、傷付けることなく奪い去る!」

「んなもん修得しなくていい!!」

「ちなみにさつき五分で編み出しました」

「悪魔的才能!」

「あつ、分身のほうからも貰ったんで、本体のやつは先輩にあげます。はい」

「お土産たくさん貰ったからお裾分けしてあげるー、みたいなノリで渡すな!! 要るか!!」

「えつ、繰三のやつの方がいいですか?」

「ああつ………す、すーすーしますの………」

腰にしなを作つてへたり込んだ繰三が、口元に手を当てて恥ずかしがっている。うーんアダルティ。繰三エロイ。狂三時代から開発（意味深）した甲斐があつたな。うん、なに言つてんだ俺よ。

「もうメチャクチャだよ!!」

『それは否定しないが………時間は稼げたよ、シン』

「令音さん!?!」

頭を抱えていた土道先輩だが、しばらく通信を切っていた令音さんの声にはととす。一応俺にも聞こえるようにスピーカーで音を出してくれている。

『繰三の奮闘、誠の登場。二人が気を引いてくれていたうちに、校舎内は既に無人だ。死者も無し。更に言えば———』

屋上に入る階段への入り口が、音を立てて開かれる。そこから、飛び出してくる影が四つあつた。

「クソテン!! 兄様はご無事でいやがりますか!!」

青と白のワイヤリングスーツに身を包んだ、土道の実妹・崇宮真那。

「シドー!! 助太刀するぞっ!!」

部分的に霊装を展開した、識別名へプリンセス・夜刀神十香。

「土道、無事?」

ワイヤリングスーツを纏い、大型の狙撃銃を構えた自衛官^{A S T}・鳶一折紙。

「始末書覚悟でCCC二つ持って来たんだから、あんた感謝しなさいよ!!」

同じく狙撃銃を担ぎ、狂三を狙う折紙の同僚・舞上勝兔。

『本来ならあり得ない、共同戦線が実現したよ』

そう。俺以外の精霊が自衛隊と肩を並べているのだ。土道が人の身で精霊を恋させ、俺が精霊の身でASTと接触した結果だ。利害関係の一致でしかないが、それでも普通あり得ない。これは司令が誉めてくれてもバチ当たらない。わーい。

けどさあ。一つ聞いていい?

「なあ真那。何で魔術師^{ウィザード}三人しかいないの?」

「見習いが避難と救助に、それから部隊の大半がへりリスの対応に回っていていねーん

ですよ」

「何でさ」

「クソテンがいやがると聞いた途端、皆さん『そっちに人要らないでしょ』って口を揃えて言ってやがりました」

「押し付けられたアー……ッ!!」

項垂れる俺。泣けるぜ。くっそう……………。

と、肩にポンと手が置かれた。誰かと見上げれば、ニマニマと笑うご満悦のデコ娘が。

「色無ザマア!! プックク……………」

「るせえ前髪カチューシャ!! 触手で揉み苦茶にしてやろうか!？」

「い、いや、あたしは……………ゴクリ」

「二曹、病院行つてくるといーです」

「違うんです三尉!! クソテえええん!! 何言わせんのよ!!」

「オメーが自爆したんだろ……………」

真那に冷めた視線で睨まれた途端に、大慌てで俺の胸ぐら掴んできたこの百合髪カチューシャ、末期かもしれない。あれ? 俺こいつ治療したよな? おかしいなあ。うん、匙を投げよう。誰か受け取ってくれ。主に真那。

「とつ、ともかく! これで不安要素は無いな!! 狂三!! もう観念して止めるんだ!!」

必死で仕切り直す土道先輩。だが、止められないぜ、この一度グダグダした空気は。

何故なら――

「よし繰三、補給するぞー」

空間を突き破つて〈触抱聖母〉アルミサエルを呼び出し、体内に取り込む。数十本の触手を背中に

に生やした俺は、慣れた手付き（触手だけ）で繰三を触手一本で縛り上げて拘束する。なお、胸元を丁度押し上げるように巻き付けました。眼福！

「な、何故天使ではなくわたくしに直接!?!」

「お前に直接補給しないと誰が言った?」

「いじわるう!?!むごっ、お、おごお……………おう、つあ……………ん、むううう……………うんむ、っ……………」

文句を最後まで言わせずに、繰三の口に触手を突っ込む。そして靈力を濃密に含んだ水を直し流し込む。これが一番手っ取り早い。

やり始めると、すぐに繰三は大人しくなり、素直に水を飲み始める。息継ぎがしにくいのか時おりえずくが、協力的なお陰で補給は一分とかからなかった。

触手を引き抜く。光を受けた繰三の唾液が、触手の先端と口とを繋いで淫靡に煌めいた。

「ぬ? シドー、見えないぞ」

「見るな。見ちゃいけない。あれはイケナイ」

「義姉様、何故激写してやがるんです?」

「今後の参考」

「あつ、ああ……………ああああ……………」

仲間の反応が全く違って面白い。ただ十香が見なかったのは何となくホツとした。十香、そのままの君でいて……………」

「わつ、わたくしの姿で、声で、あのような不埒な……………!!」

狂三は狂三で、かなり狼狽してるな。

さて。準備は整ったし、そろそろ締めようか。繰三が口元を拭って調子を整えたのを確認すると、俺は先輩に向き直る。

「ささ、準備が整いましたよ士道先輩。語るもよし、絞めるもよし、捕らえるも殺るもやるもよし。狂三を、どうします?」

士道先輩に選択を委ねると、AST三人衆が動いた。

「兄様。殺らせてください」

「時崎狂三は、放置出来ない。ここで逃す訳にはいかない」

「左右に同じ。てかあんた、折紙のカレシで合ってる?」

当然といえば当然の反応だ。繰三も頷いている。微妙な反応なのは、やはり十香のみだ。

「シドー……………」

「分かつてるさ」

不安げな声に、しかし士道先輩は力強く頷いた。何を心配する、十香。この人の言うことは、何時だって同じだろう？

先輩と視線が重なる。それは十香のような不安からではなく——確認。

俺は、歯を見せて笑みを返した。それだけで、言いたいことは伝わった。拳を握りしめ、我等が五河士道はここに宣言する。

「——さあ、俺達のデートを始めよう」

俺達の視線が、余さず狂三に向かう。

対するは、依然尽きない数百の分身を従えた、時を刻む悪夢・狂三。

——だが、イレギュラーが、現れた。

「おいしそうなにおいがするよ?」

ダンを床を踏み抜かんとするような勢いで着地した、新たな影。

白い髪に白のドレス。翡翠の幼い瞳。

「ごはん、いっぱいいたべる!」

陶磁の肌を歓喜で朱に染めた——噂に聞く惨殺精霊へリリスが、その姿を

現した……………!!



恐ろしい。

対峙することに恐怖を感じ、一度は逃げ出した相手、へりリス。震える足を殴り付け、士道は己を留まらせる。

「ごはんが、ひとつ、ふたつ、みつつ……たくさん!!おかわりできるね!!」

彼女は、自分達を人間とすら理解していない。いや、人間が『ごはん』にしか見えないのだろう。狂三の分身と、士道達を見回しているからには、恐らくこの場の誰の味方でもない。

「そちらはどうなつていやがります、隊長——え!?突然逃げた!?今こつちにいやがります!——」そうです、早く応援に来やがれつてんです!!」

真那がどこかに連絡をしている。恐らく、AST本隊だろう。通信を切った真那は、肩のパーツを外して双剣を構える。

「応援が来るのは早くとも二十分後。こいつ、本隊相手に結構やんちゃしてくれたみ

てーです」

纏う衣服を靈装に組み直した誠が、繰三と目配せした後、対峙する相手を変えた。

「俺と繰三で、狂三を押さえます。二人がかりなら、手数にも天使にも対抗出来るはずですよ」

「お任せ下さいましね」

言うが早いか、二人は狂三の群れに突っ込んでいく。触手で絡めとり、繰三が分身を一体ずつ仕留めていく。取り敢えず、こちらは大丈夫だろう。

「よし………こっちはへりリスを抑える！皆、頼む!!」

士道が指示を出すと、残る四人が一斉に動いた。剣を手にした真那と十香が飛び出し、へりリスに斬りかかる。

「行くぞ妹二号！突っ込むぞ!!」

「了解！てやああああつ!!」

誰も視界に入っていないかのようにぼうっとしていたへりリス。二人の接近でようやく気付き、太刀筋を阻むように両手を掲げる。刃と手とが衝突し、車が事故を起こしたかのようなドンという音が響く。

「でつたとあそんでくれるの？」

開いた掌で剣を受け止めていたヘリリスは、二人の得物を握りしめて離さない。力負けしていたが、唐突に顔を仰け反らせて倒れ込む。

「狙撃がダメでも、この距離なら外さないもの!!こいつで泣かせてやるんだから!!」

二人に続いて飛び出していた舞上が、狙撃用ライフルを接近して射つという暴挙に出た。しかし、援護としては有効だ。真那の指摘を意識して、突出し過ぎない為に舞上が考えた戦法だ。

「ううあああああいたいよおいだいたいよおおお!!あたまぶった!!ぶったあ!!」

上体を起こし、額を押さえてヘリリスは泣き喚く。しかし、その体は再び吹き飛び、安全防止柵に衝突して止まった。折紙の針の穴を通すような正確無比の狙撃が、舞上が当たった場所と同じ位置に弾丸を当てた。

「命中」

「お、折紙………殺さないように、な?」

「出来かねる」

士道の言葉に答えつつ、一発、二発と更に追い討ちを掛ける折紙。ヘリリスが叫ぶ隙すら与えない。

「容赦ねえ!?!」

生身の士道を守るために敢えて後方に残った折紙だが、寧ろ狙撃手として生き生き

としていた。十香が若干引いている。

〈リリス〉が沈黙した。まだ勝負あったとは思えないが、土道はちらと目を離し、誠達の戦いを見る。

まず、分身体が既に残らず裸に剥かれて床に倒れていた。何となく干物の天日干しを連想した。

「ぱんつ返しますわ」

「感謝しますわ」

下着を受け取り、一旦影に捌けた狂三が、清々したという顔で影から出直してくる。

「履きましたわね。では、仕切り直しますわ」

「ところで誠さんは何処ですの?」

狂三の疑問も尤も。誠の姿が無い。

と、狂三のスカートの中から、何かがにゆるりと顔を出す。

触手だ。

「えっ」

「【整形^{マセカイ}】!!俺がぱんつだア!!」

「えええええええええええ」

エノキタケが成長する様子を早送りするVTRの如く、スカートの中らによき

鳴り響く空間震警報。かなり遠方のスピーカーからのものと思われるサイレンも聞こえる。

インカムから、令音の声聞こえてくる。司令室の慌ただしい様子が、彼女の声に混じって漏れ聞こえてくる。

『シン、急いでその場を離れるんだ。かなり広域に渡る空間震だ。何とかシエルターに

———』
「おうちかえるのおおおおつ!!かえるううううつ!!」

狂乱した声に気付いて意識をへりリスへ戻すと、真那や十香を突き飛ばして土道の眼前に迫っていた。折紙がライフルを構えるも、砲身を掴んで乱暴に放り投げる。銃ごと振り回された折紙は、勢いのあまり校庭に転落していく。

「あつ!」

「うわつ!」

泣きながら走っていたためか、へりリスは土道に気付かずにぶつかり、二人纏めて倒れてしまう。咄嗟に抱き止めるが、相手は土道の思いやりなどどこ吹く風。顔を上げるや否や、睨み付けてきた。

「なんでじゃまするの!?!でつたのじゃましたいの!?!」

「い、いや、違うよ!?!」

「いじわるなごはんさんはきららい!!きららい!!きらいなのーっ!!」

士道に馬乗りになった状態で、ヘリリスは右手を掲げる。腕から大量の金属針が現れ、それと同時に腕の部分だけ高速回転を始める。

「いいっ!」

「ばかーっ!!」

叫びと共に振り下ろされた腕を、自由が利かないながら、身を振って間一髪で回避する。不快な音を立ててコンクリートを削り取り、太いミミズがのたくったような跡が床に残る。

「シドーから離れろ!!」

「いたあ!」

「兄様、こちらへ!!」

十香がヘリリスを引き剥がし、パイルドライバーに近いフォームで床に叩きつける。解放された士道は、真那に随意領域で引つ張られる形で精霊と距離を取る。もし先の一撃を避けられなかったらと肝を冷やした士道だが、気付く。

完全に、逃げる機会を失った。空間震が起こるまで、もう秒読みする程の時間しか無い。誠は触手の中で見えない。方法はともかく、狂三を押さえ付けるのに精一杯なのだろう。

「ごめん!!謝る!!だから止めてくれ!!頼む!!」

「ばかばかばかばかばかばかあ!!」

希望は尽きた。

誠・繰三・狂三はともかく、十香や真那、折紙にもう一人のAST隊員。そして自分は今もう、助からない。

「止めろおおおおおーーーーっ!!」

「あああああーーーーーーーーっ!!!!」

「随分と癩癩起こしてくれちゃって。親の顔が見てみたいわ、あるんならね」
来禅高校の屋上に響く、幼くも凜とした声。

土道の目の前には、可愛くも恐ろしい、目に入れても痛くない妹——司令官・五河琴里が立っていた。

そして。

空間震が、来ない。

「知ってた？空間震はね。同じ規模の空間震同士をぶつけると無効化出来るの」

不敵に笑う琴里に、〈ヘリス〉は敵意に満ちた視線を浴びせる。ぼろぼろと泣きながら、両腕から金属針を生やして戦闘体勢になっていた。

「きらい。きらい。でつたおうちかえる!!みんなきらい!!」

「ええ、そうね。私もアンタみたいな癩癩持ちの子守りなんて、願い下げなただけだ」

「」

その姿、艶やかにして激情を表すかのよう。紅蓮の焰を織り込んだかのような衣を纏う琴里は、余裕を湛えた笑みを浮かべる。

「教育的指導の時間よ。士道、少しの間返して貰うわ。——焦がせ、〈灼爛殲鬼〉」

「えっ………?」

呆気にとられる士道の眼前で、琴里が構えるは紅蓮の戦斧。則ち——天使。

「さあ、私たちの戦争を、始めましょう」

この日。土道は妹の新たな真実をその目に焼き付け

「嘘だろ、司令……。ああ、そうか、そうかよ。そう、だったのかよ……。!!」

——色無誠に、三つの事実を突き付けた。

一つ。色無誠は、五河琴里に、惚れ込んでいたのではなく、恋していたということ。

二つ。色無誠の本質は、女性ではなく男性であったこと。

三つ。色無誠の初恋は、けして成就し得ない………ということ。

第四章―五河シスター―

Date. 22 「それでも好きです、司令」

色無誠。16歳、精霊です。

恋が始まると同時に終わりました。ちくせう。

狂三を性的に押さえ込んでいる（繰三もいるけど）俺ですが、ちよつと泣かせろ下さい。おのれ士道先輩。今更だがハーレム主人公に怨み辛みが向けられやすい理由が分かった。やろう、ぶっころしてやる。

くそう、琴里司令が美しすぎて辛い。あれ他人の女だぜ？俺も仲間に入れてくれよ（切実）というか俺に妹さんを下さい。マジで何でもしたつていい。

「さあ……………観念して貰おうかしら、ヘリリス〜？」

大斧を携え、不敵に笑う司令。おお、それこつち向いて俺にも言つてエ！目線下さい！！誰か！誰かカメラ貸して！！触手で女の子二人ほど手籠めにしながら何言つてんだ？言うな！！

「でつたおうちかえる！！」

「は？」

———と思いきや、ここで予想外のことが。

まさかのヘリリスへ逃走。屋上から飛び降り、脇目も振らず、ブロック塀や家屋をぶち抜きながら本当におうちかえった。遠ざかる、「かえるー！！」という涙声。お前ん家何処だよ。

「……………どうなってんの？」

勿論、司令も呆気にとられている。誰だってそーなる。俺だってそーなる。

「司令が来る直前から帰りがつたので、それかも知れません」

「え？私の出番は？」

「———お疲れ様です」

「こつち見て言いなさい」

これは酷い。

まるで俺を失恋させる為だけに司令が出てきたみたいになってしまった。これはマジで酷い。

よーし、仕方無い、こうなりやヤケだ!!俺のスペシャルトークスキルで間を保たす

ぞ!!

「司令、精霊だったんですね」

「まあね」

「好きです、結婚して下さい」

「イヤよ」

「で す よ ね ！ ！」

今も背後で触手プレイしてる時点で知ってた。さらば我が数分の青春。なおBG Mは狂三&繰三シスターズで『喘ぎ声』でした。我ながら最低の告白シーンだなあ。

「え？クソテンってロリコン？うわー」

「ガチで引くな。知ってるから。俺もそこマズイの知ってるから」

「あたしじや満足出来ないって言うの!？」

「前髪カチューシャ、お前言ってる悲しくないか？爛れた関係認めてるぞ？」

「誠お前…………お前…………もう少しマシな会話運びしろよ」

「先輩、デートに慣れすぎ」

何もみんなで傷口に塩塗り込み地区大会（天宮市愉悦部）しないで下さいよ。誰か一人くらい優しい言葉下さい。

何か哀しみの向こう側へ行けそうなので、取り敢えずムラムラに変換して発散しようと思います。涙を堪えて触手の檻に向き直る。

と、ここで司令のありがたい一言が。

「というかアンタ、女になりたいんじゃないの？私に百合趣味無いから」

.....あつ。

確かに。

俺、結局男なだけどき。今身体女だったわー！しまったー。性転換してるから俺今男として見られてなかったんだ納得ー。

———いやもつと早く気付けよバカじゃねーの!?女の身体に慣れすぎイ

!!

「^{マセカ}整形」!!司令、結婚して下さい!!」

弾ける我がボディー!!肉体再構成!!男時代を完全再現!!チャームポイントは土道先輩よりほっせい目付きだゾ!!普段通りにしてたのに女子から『睨まれた』って言われたことあるぞ!イエイ!

「男に戻りやいってもんじゃないわよ!!」

「にべもねえええええつ!?!」

結論。

ダメでした。

尚諦めは悪い模様。

「うう……………いいもんね……………線三とヌチャヌチャするから」

「何その不穏な擬音!？」

【整形】を解除して膝から崩れ落ち、両手を地面に突けて項垂れる。あれ、おかしいな。世界が滲んでるぞ。やはり性欲に逃避します。てな訳で触手の檻オープン。中の狂三&線三とご対……………面……………、あれ。

「狂三がいない」

「ええ!？」

「何だって!？」

すっかり出来上がって茹でダコのように真っ赤になり、『ひゆう……………ひゆう……………』と荒い呼吸をする線三ならいる。が、狂三がいない。

「ふう、つぶ……………残念でしたわね!!『時食みの城』のちよつとした応用ですわ!!」

見れば、校旗を掲げるポールの上に、肩で息をしつつポーズを取る狂三の姿が。どうやら自力で脱出したらしい。やられた……………!!

「チツ、時崎姉妹丼食いそびれた……………」

「何ですのその恐ろしい丼!？」

「時崎サンドウィッチでも可」

「女の子二段重ね!？」

かなりビビリつつも、狂三は咳払いして無理矢理誤魔化する。

「流石に精霊三人を相手にするのは得策ではありませんので。今日はこれにてお暇させて頂きますわ」

それだけ言い残し、狂三は自らの影に消えていった。

「あつ!!待ちやがれってんです!!くそつ!!」

真那が慌てて追おうとするも、間に合わず。残ったのは、見得切つて出てきたのに活躍出来なかつた司令と、いたたまれない空気の俺ら。それと、校庭に落ちて伸びてる折紙先輩に、ヘヴン状態の繰三。

「……………ねえ。私の出番は？」

「———やりましたね司令。オサレポイントが上がりましたよ」

「こつち見て言いなさい」

「拗ねてる司令も好きです」

「うっさい」

「にべもねえ」

とまあ、妙に長閑な幕引きで、狂三戦は終わりを告げた。
まあ、誰も死ななくて良かったじゃない？触手が司令の出番を食ったが。



「という訳で、私を再封印しなさい」

「だってよ士道先輩」

「みみみ」

「投げやり!？」

〈フラクシナス〉内の特殊な拘留用の部屋で、繰三を連れた俺と士道先輩は司令に面会し………そして、予想通りの台詞を聞くことになった。尚、繰三は既に元の小さなマスコットに戻っている。

何でも、精霊化した結果、破壊衝動が湧いてきて見るもの全てを破壊したくなるのか。薬で抑えないとヤバイとか危険すぎでしょ。………ん？

何か、よく似た経験があったような。

——あ、前髪カチューシャだ!!

「司令。それ、治せないかやってみていいですか？」

「はい？」

「いや、俺の能力は『霊力譲渡』なんですけど、前にAST隊員に掛けられた（ヘリリス）の洗脳を解いたことがあるんです。同じようにやれそうかどうかだけでも診ていいですか？」

「え、ええ………いいけど」

司令の許可を取り、小さく柔らかな手を取る。………頬擦りとかしたいけど理性で抑える。ナイス理性、グツジョブ理性。

探れ、司令を苦しめる物の根元を………。

あつ、これ洗脳じゃねーや。聖結晶セファイラというか、司令の霊力そのものが影響してるわ。専門外だわ。オワタ。

いや。逆に、霊力が薄まればいい、のか………？試しにやってみよう。

「ちよつと触手出ますよー」

「待ちなさい。どうする気よ」

左手の掌からぬるつと触手を出したら、司令に制止された。心なしかビビっている様子にも見えなくもない。

「俺の靈力を司令に譲渡しようかと」

「何処から？」

「……………口から……………？」

「イヤよ。繰三の時みたいにやるんでしょ」

「そうですけど……………じゃあ何処の穴に突っ込めば……………」

「アウトだよ!!」

土道先輩に後ろから頭を叩かれた。痛くねえ。え？おかしいな。何か問題でも？

「何故穴なんだ。何故穴からやるんだ」

「一番効率いいんですよ。上の口がダメなら下でも——」

「お前にだけは妹はやらねえ!!」

「そんなあ!!ひでえよ義兄さん!!」

土道先輩の右ストレートを右手で受け止める。接近戦は得意だぞーギリギリリー（先輩の拳を握り締める音）。

「アンター一回死ね!!」

「冗談を冗談と見抜けないようでは、俺と付き合うのは難しいですよ司令」

「ウツザ!!ドヤ顔で言うな!!」

俺は（サツカバス）。純愛も肉欲も大好物だ。プラトニックなのとかくそ食らえ。

本気で惚れた相手とイチャコラして何が悪い。ただし士道先輩リ、テメーはダメだ。
 ……………何か先輩の顔青くなってねーか？絞めすぎたか？そろそろ放そつと。

右手を押さえて痛がる士道先輩を他所に、俺は頭を掻く。仕方がない。司令が嫌がってるから止めようか。ベストがダメなら次善の策で。手を尽くして司令の役に立とう。

「じゃあ、効率は落ちますが肌から行きましょうか」

「最初からそうしなさい」

「出来るならそうしろよ」

「にべもねえ。じゃあ、何処にやっついていいですか？」

「……………手で」

司令が掌を上にして右手を差し出してきた。手の甲を掴むように下から俺の右手を添える。左手の触手の先端を司令の手に当てると、ひんやりした感触に司令の身体が僅かにビクンと震える。

「じゃあ、濃縮したやつ少量出すんで、塗り込んでください」

司令がこくりと頷いたのを確認したので、触手に靈力を送り込む。ぶちゅうと音を立て、司令の手にゲル状の靈力の塊が分泌される。

——瞬間、司令がそれを床に向かって捨てた。

「何すんですか!？」

「生理的に無理よ!!何これ!?ケファイア!？」

「いえ、ゲル状の霊力の塊です」

俺は床に落ちたブツを見る。

「ん…………ちゅ…………ハツ!?な、何ですの!？」

足元にいた線三に直撃し、効果を発揮したのか人間サイズになっていた。丁度顔面にかかったらしく何かイケナイ絵面と化している。こら、鼻の頭についたやつ指で掬って食うな。確かに霊力が身体に行き渡るのかも知れないが無味だぞそれ!?!何故美味そうに食う!？」

「……………ご覧の通り効果はあります」

「随分な証明の仕方ね!？」

司令。俺も想定外です。ほら、土道先輩も顔赤くしてないでこっち見なさい。いづれ登る大人の階段ですよー!？」

「……………見た目だけでも何とかならない?せめて固体にして……………」

この上なく嫌そうだが、それでも俺が真面目に治療しようとしているからか司令は止めるとは言わない。何とかしたいが、これが〈触抱^{アルミサエル}聖母〉の限界でしてなあ……………。

「水に普段触手操作に使う霊力の100倍を含ませたのがこのゲルなので、もっと増や

せばあるいは。劇薬になる可能性もありますけど」

「わ、わたくし飲みませんわよ!」

「繰三、ステイ」

ぶつちやけどのくらい霊力を込めていいのか分からない。【福音】は通常ハエム・ハクドシヤの100倍込めているが、使う水の量も相当なので話が違う。が、やれなくはないだろう。

「……………いい、いいわ。やってやろうじゃない。お願いするわ」

固形にするなら大体錠剤サイズが妥当だろう。で、どのくらい込めるか……………よし、最初に固形になるとこまでやってみよう。両手を合わせて霊力を圧縮し、真珠のような光沢を持つ錠剤を造り出す。300倍かあ。どうなんだろこれ。

「どぞ。固形化最低値、通常の300倍です」

「……………」

生唾を飲んで、司令が錠剤を凝視する。意を決して俺の手からつまみ上げると口に含み、水で一気に流し込んだ。

司令はまだ動かない。さて、どうなる。

「ど、どうだ琴里……………」

固唾を飲んで見守っていた土道先輩が、無言の緊張に耐えかねて口を開く。こちらに背中を向けているので、俺達からはその表情は何えない。

先輩の声に反応し、司令が霊装の袖を翻して振り向いた。

「お、おつ、おにーちやああん……………」

「え”っ」

俺と先輩の驚愕の声が重なる。

こちらに顔を向けた司令は、かつて見たことの無い蕩けた雌の顔をしていたのだ。息も荒く、急激な発汗も見られる。すっかり上気した司令は、暑がっているのかそれとも誘っているのか、胸元に指をかけ、クイとずらす。どう考えても誘ってます眼福です。

「なんだか……………あ、っ……………つういのお……………鎮めてよおう……………っ」

「おい誠これどうすんだ!？」

「アーキヨウモイイペンキ」

「現実逃避してねえでどうにかしろ!!」

いや、だって何で媚薬出来るの?え?どうなってるの?

先輩の手で俺がガクガク揺すられる間にも、艶を帯びた呼吸の司令が……………いや、一人の女：五河琴里が一步ずつ歩み寄ってくる。

「おにーいちやあん……………琴里のこと好き……………?好き?好きって言うてえ……………?ねえ……………おにーちやああーん」

「おい、しつかりしろ琴里!!帰ってこい!!誠!!おーい!!」

「失恋。それは『失うも亦心』と書きます、アハハハ……………」

「滅茶苦茶落ち込んでる!？」

放っておいてください。今の俺の友達は部屋の隅と壁の染みだけです。染み、無いけど。

この後副作用が切れるまで、土道先輩と琴里司令は一時間以上も鬼ごっこ（捕まると性的に喰われる）を繰り返すことになったが、俺は知らん。

尚、効果自体はあったようで、正気を取り戻して爆発しそうなほど顔を赤くした司令から『液状でいいから大量にくれ』と言われた。

……………最初からそうすれば良かったのに。

Date. 23 「シヨツキング・シヨツピング」

スリングシヨット。

マイクロビキニ。

ブラジル水着。

ニップレス。

うむ、迷うな。

「土道先輩!!どれがいいと思いますか!？」

「ウエットスーツでも着とけ」

「聞きましたか折紙先輩!!土道先輩はピッチピチのエロスーツがお好みみたいですよ!!」

「ガタツ」

「やめろオ!？」

俺達は今、デパートの水着売り場にいる。司令とのデートは、プールが舞台。折角なので、皆でエロかわいい水着を選んで土道先輩をドキドキさせよう!というイベント開催中である。

いやあ、この店凄いな。こんないつそ着ないほうがマシなエロ水着揃えてるとか。

凄いわ。流石折紙先輩も御用達の店だ。

え？何でそんなこと知ってるかって？ほら、土道先輩が折紙先輩の家に行ったことあったでしょ？あの時に折紙先輩が着てたメイド服、ここで買ったやつなんだってさ（白目）。まっこと都会はスゲーずら。どこ弁だ。

俺が主にエロ水着を中心に売り場を回っていると、試着室のカーテンが内側から勢いよく開かれた。十香だ。

「シドー!!どうだ!?!ドキドキするか!?!」

「お、おう……………似合ってるぞ」

十香が選んだのは、黒と紫のビキニ。自分のイメージカラーをしつかり押さえた見事な選択。

——だが。ちよいと割り込ませてくれ。

「露出が足りない」

「む？そ、そうか？」

「お前ちよつと向こう行っててくれ」

「十香、マイクロビキニ着てみないか？」

「着たらシドーはドキドキしてくれるか!?!」

「帰れよ」

十香のパーフェクトバランスボディならば、マイクロビキニの性能を120%引き出せる。そう思ったのだが、淡々と土道先輩に頭を叩かれ続けたので諦める。おのれムツツリスケベめ。へーんだ、俺のようにオープンスケベの方が後からイメージダウンしないから得ですよーだ。へっへー。

十香のいる試着室から離れると、すぐ隣の試着室から手が伸びて、ぐいと引つ張られた。なんだなんだ!?

「誠。あなたの意見を聞きたい」

「先輩、声より先に手出すの止めて下さい」

折紙先輩だった。心臓に悪い。そして格好は……完全にハイレグスーツです、ナイスタイマニン。俺の冗談を真に受けていらつしやるが、着こなしてるからとんでもない。堂々としてるから、何着ても勢いで服に似合わさせると言うか……。この人、逆に似合わない服探す方が大変だぞ。

しかし……。

「これはいいですね。折紙先輩のスレンダーで引き締まった肉体を惜し気もなくアピールするスタイリッシュエロ……なんですけど、折紙先輩が着るとワイヤリングスーツのイメージと被るんですよね……」

「盲点だった」

「いや、仕方無いっす」

「ワイヤリングスーツを持ってくる」

「そうじゃねえです。普通の選んで下さい」

地味な職権濫用になりそうなので止めさせる。コスプレ会場に本職が来るようなもんだ、止せい。何だか真那みたいなツツコミになってしまった。

あ、そうそう。真那と言えばだ。

「兄様！これなんかどうでしょう！」

「いいんじゃないか？似合ってるぞ」

「ううん……嬉しいけれど照れくせーです」

今日、俺たちの買い物に付いてきているのだ。

昨日、令音さんに呼び出された。何かと思つてへフラクシナスンに行つてみれば、唐突に真那の治療を依頼された。何と真那の奴、実は魔力処理を施された改造人間で、余命が十年位だったとか。誰がそんなことすんだおつかねえ。

へフラクシナスンの計器が不調だの欠陥品だのと信じていない様子の真那だったが、俺が診たら渋々信じた。舞上を治療した実績持ちだからね。

毎度お馴染み「ハエム「ハクトシヤ福音」で治療した後、経過観察も兼ねて折角なので兄と出掛けるくらいしたらどうだ？と令音さんが提案し、真那は承諾。今に至るといふ訳だ。

健康的な色気を放つスポーティーな水着を着こなし、土道先輩に披露しつつも照れている。年相応の姿だ。うんうん、これでいい。これが正しい姿なんだ。

兄妹仲睦まじくしている様子に、邪魔にならぬよう、その場を離れる。普通のデザインも中々、と思っていると、いつの間にか男物の水着コーナーに辿り着いていた。

流石に男の水着には食指が動かない。速やかに立ち去ろうとすると、胸の谷間で大人しくしていた繰三が突然胸元から飛び出し、原寸大に変化した。霊装だと目立つので、来禅高校の制服を構築して着ている。折角の霊力をこんなところで使うなんて。何だ？

「誠さん、ちよつとよろしくて？」

「はいはい？ お前も水着買いたいの？」

「いえ——ただ、わたくし思いましたの。もう少し誠さんは、男性としてのご自身を周囲に意識されるべきですわ。ということ、誠さんは今日、男性用水着を選ばれるべきです」

「そうかなあ」

「上つ面は女性、中身は男性であることを望むなんて方、普通なら居ませんわよ。いつそ中身も女性になられた方が楽な位ですわ」

思い当たる節々。これまで、中身が変態でも美少女だったから色々許されてたよう

な気がするし、打ち解けて貰えたような気がする。女になったことを得したと思つてゐる。だが同時に、振る舞い自体は男時代のままなのだ。

言われてみれば、確かに司令からも女性になりたいのでは？と先日指摘されてしまったこともある。ここは一つ、今回のデートは男時代の俺で過ごすことにして、俺も男物の水着見るか（金がないので買わない）！

「よし、じゃあ見てみよう。ありがとな繰三！気が利くな！」

「いいえ、大したことではございませんわ。——お礼はわたくしに水着を見繕つていただければ」

「俺の感謝返せ」

スカートの裾を持ち上げて、仰々しくお辞儀して見せた。どうやら下心有りの助言だった模様。そういうや繰三は、小さくなる前からこういう奴だったか。

「慎んでお断り致しますわ。ささ、こちらへ。お早く決めて下さいませ？」

「へいへい」

俺のことなど知らないと言わんばかりに、繰三は水着選びを急かす。心なしか楽しそうだな。何と言うか……デートでもしてるみたいだな。

一旦試着室に入ると、【整形】^{マセカ}を使って男に戻る。司令の攻略のために、念のためヘリス〈戦の時から〈触抱聖母〉^{アルミサエル}を体内に取り込んだままにしていた。つまりぶつと

が挿しっぱ。拡張されちゃう。いやん。

カーテンを開けて試着室から出ようとすると、同じく水着選びに来ていた四糸乃とばったり出くわす。手には子供サイズの可愛らしいビキニ。中々のセンスだ。

「おつ、四糸乃。いいの見つけたね」

「ひ、ひっ!?!」

『おにーさん誰? 何で四糸乃のこと知ってるの?』

ビビられた。何故だ。

……………ああそうか、俺四糸乃の前で男になったこと無かったや。これは俺の失態だ。すぐさま変身を解き、四糸乃の良く知るおねにーさんにフォルムチェンジする。

「ごめんごめん。脅かすつもりは無かったんだ。ほら、おねにーさんだよー」

「ま、誠さん……………」

目線を合わせるべくしゃがみ込み、お詫びの気持ちを込めてよしよしと頭を優しく撫でる。若干涙目だった四糸乃も、俺だと分かって安心したのか、ほっと溜め息を吐いた。

『やー、おねにーさんがおにーさんになってたとは、気付かなかったねー』

「外見に一致部分無いから、分かったら凄いや」

「びっくり、しました……………」

「いや、俺の配慮が足りなかったよ。ごめんね」

スーパ―四糸乃よしよしタイムに今にも入らんとしていたが、突如首を驚掴みされた。

「誠さアん?」

額に青筋を浮かべた繰三がいた。ヒエツ。ちよつと痛いしわりと怖い。もしかして、お怒りですかアーーーーっ?!?!

「お、おう」

「お早く、と申し上げたはずですがア?」

「さ、サーセン」

四糸乃から無理矢理引き剥がされ、ずるずると引き摺られて行く。繰三が怖かったのか、四糸乃がふるふる震えながらもこちらを見ている。

「四糸乃、強く生きろ!そして土道先輩を落とせ!!それが俺の願いだア!!ぬあああああつ?!?!」

『おつ、おねにーさーにーん!?!』

今生の別れみたいな感じでふざけてみたら、俺の首を握り締める繰三の握力が上がった。わりと痛い。

「ふざけてないでご自分で歩いて下さいまし」
「イテエー！」

ほぼ放り投げる形で解放された。うつ伏せで床に激突する。怒ってますねこれ。何でや。何で四糸乃と遊んじやいかんのだ。

寝そべっていることを利用し、人目を避けて改めて変身し直す。元の身体も悪くはない。何せ付き合いは女性の身体より長いからな。

ん？寝そべってる？

つまり、繰三より体勢が低い？

「フフフ！油断したな繰三!!だりゃあ!!」

「え?」

寝ていた姿勢から海老反りで跳ね起きる変態挙動を披露して立ち上がりつつ、呆気に取られている繰三に対し『流水追剥りゆうすいおいはまき・下履一触したはきひとしかれ』をぶちかます。

つまり、飛び上がり下着ドロである。

「きやああああつ?!?!」

繰三もビックリだろう。タイツには一切の傷を付けず、下だけ持っていかれるなんて誰が想像するだろうか。だがこれも霊力のちよつとした応用である。霊力万能説。

「か、返して下さいまし」

「面白いからヤダ。さあ、水着見に行こうぜ」

顔を真つ赤にして俺に迫る繰三が見てて面白いので、このままにしよう。実は盗んだばんつは繰三の服のポケットの中だ。仮に履いてないことが周囲にバレても、ダメーシを受けるのは繰三だけ。我ながら意地の悪いことしてるな。

「繰三、早くしろー」

「も、もう少しゆっくりお願い致しますわ」

右手で口許を、左手でスカートの前を押さえつつ歩く繰三を伴い、通路を進んでいく。内股で足を動かし、人目を気にしてチラチラと視線を動かす繰三だが、恥ずかしがるあまり逆に色気ムンムンなのは言うまでもない。いい絵だ。写真撮った。

さて。俺が向かったのは、男性用でなく女性用水着コーナー。それも、わりと高いものが陳列されているエリアだ。

ここまで繰三にやったんだ、ちゃんとした奴を選んでやろう。繰三の水着姿が見た目というのもあるが。俺のスマホの繰三写真フォルダが充実する。

「あの、誠さん？わたくしは誠さんの水着を……」

「予算は二万円。好きなの買っていいよ」

「えっ、それほぼ全財産では!?!」

「繰三の食費分は確保してあるし、必要な

らASTから演習なり取引なりしてでもたかるから。気にせず気にせず」
「誠さん……………」

困惑している様子だが、少し嬉しそうだ。さつき水着欲しいって言ったのは、ダメ元だった模様。瞳を潤ませている。良いもん見た。

「ちなみにばんつはお前の上着の左ポケットに入っている」

「折角の雰囲気か台無しですわ!!」

「ノーパン娘に言われたくな—————」

「あ—————っ!?わ—————っ!?」

「必死か」

そんなにノーパンバレたくないなら、寧ろ叫んで誤魔化すなよ、目立つぞ?急に回りからの視線が強くなってるし。通り掛かったご夫婦が、こっち見てニヤニヤしてる。青春の一コマじゃないんです。エロ漫画の一コマです。

「おい繰三、大声出すから逆に注目されてるぞ」

「誰のせいだと思いですの!!」

「俺だよ」

「分かっていらっしやるようで何より!!」

羞恥のあまり、まるで腰の入っていないパンチで俺をボコスコ殴る繰三。あんまり

痛くねえ。

「おいおい、何やらかした？」

と、大声を聞き付けた土道先輩が呆れ顔で駆け寄ってきた。どうやら悪いことしたのは俺と確信してるようです。大正解。まあ俺が男に戻ってたから、それを元に判定したのかもなあ。

「土道さん!!誠さんが——」

——ドサツ。

線三が先輩に抗議をしようとしたその時。
俺たちの背後で、何かが落ちる音がした。



振り返れば、そこには一人の少女がいた。

さらさらした茶髪のロングヘアで、袖の無いシャツにホットパンツを合わせている。

年は土道と同年代か一つ下、といったところか。身長は十香よりやや低い、折紙に近い。目鼻立ちのハッキリした活発そうな少女が一人、土道達を見て驚愕に目を見開

き、持っていた鞆を取り落としていた。

そして、口をぱくぱくさせながらも、ようやっと喉から絞り出したという様子で、一言呟いた。

「うそ……………兄貴……………」

土道の額に、猛烈な勢いで汗が浮かび上がってきた。この流れは、つい先日経験したばかりである。シチュエーションが、真那の時と酷似している。また、新たな妹発覚か。一体、あと何人の妹を抱えなければならないのだろうか。

手の甲で汗を拭い、土道が少女に言葉を掛けようとした時。首を動かしたことで、視界にあるものが映った。

「…………ヤベエ…………ヤベエヨ…………ヤベエ……………」

「誠さん?」

土道の比ではないレベルで汗をかく、誠の姿だった。繰三の声が聞こえていない様子で、少女を見つめて顔を青くしている。

「ね、ねえ、兄貴でしょ?人違いじゃないよね?」

少女も少女で、誠を指差し、恐る恐る距離を詰めていく。

店に流れる軽快なポップスが、静寂を埋め——曲が終わると同時に、誠が動いた。

「人違いです!!」

まこと は にげだした!!

「待てバカ兄貴!!」

しかし、タツクルで腰に取り付かれ、誠を下敷きに仲良く転倒する。鼻を押さえる誠に対し、少女は首に腕を回して誠を締め上げる。

「アーニーニーキーニーッ!!」

「すまん!許して!!マジで!!」

「死ね!マジで一回死ね!」

「グエエエエ!?」

「おいおい、やり過ぎやり過ぎ!!」

誠が珍しく本気で痛がっているの、士道は止めに入る。冷静さを取り戻した少女は誠を解放し、涙目の誠が喉を押さえて噎せる。

「す、すいません。つい、久々に兄貴のマヌケ面見て頭に血が昇っちゃって……………」

「やり過ぎだ……………。ところで、君は?」

士道が尋ねると、少女は立ち上がって深くお辞儀をする。

「有栖ありすべあや部彩あやです。兄貴がお世話になっています」

琴里とのデートの為の、買い物。

しかし。

士道は予期せず、誠の記憶にまた一歩迫ることになった――。

Date. 24 「有栖部彩」

これは、今から大体三年半前の話です。

私、有栖部彩は当時小学六年生。

夏休みも終わり、友達との会話に、自分達が進学する中学の話題が混じり始める頃。私は家族を喪いました。交通事故です。

え？ 兄貴？ ああ、兄貴は実の兄じゃないんです。だから、この時点ではまだ顔も知りません。私にとって色無誠という人は、正しくは兄貴分なんです。

私、吹奏楽が好きで、小さい頃からトランペットを習ってたんです。あんまり上手くありませんけどね。

父と母を喪った日は、トランペットのコンクールの日でした。

会場までは、わざわざ有給を取った父が送ってくれました。父は、パートの終わつた母を迎えに行くからと、私の受付を済ますとすぐに会場を車で後にしました。

それが、私と父の最後の会話。

母との会話なんて————思い出せないほどありふれたものでした。多分、私の「行つてきます」に、母が「頑張つてね」………と返したような。

二人とも、私の元に来ることはありませんでした。私を迎えに来る前に、二人に迎えが来てしまっただけです。

コンクールは、何の賞も貰えない、極めて凡庸な結果で。浮かない気分のまま、来ない両親を三時間以上も待っていて……。ようやく来たのは、憔悴した表情の学校の先生。

それから数日で、私は小さな施設に入所しました。父方の祖父母は存命でしたが、二人とも老人ホーム暮らしで、私の面倒を見れる状態ではなく。他に身寄りのない私には、行き先はそこしかありませんでした。

施設で待っていたのは、歓迎ムードの職員が五人ほどと、同じく身寄りのない子供が八人程。

その子供の中に、兄貴はいました。

兄貴は、バカでした。

ええ、バカでした。

私の歓迎会での様子からしてバカ丸出しでした。

隙あらば若い女性職員の身体を触っては拳骨を貰っていました。

他の子も、我儘に振る舞ったり逆に何を見てもやっても無反応だったり、お世辞にもいい子は居ませんでした。

心の中で、ああ、終わったな、と呟く自分がいました。何がという明確なものはありませんでしたが、自分の人生が決まったように思ったのです。

入所してから半月。私は一度もトランペットを触りませんでした。私がトランペットなんて習わなければ、両親は死ななかつたのではないかと塞ぎこんでいました。職員の人がどんなに優しくしてくれても、言葉尻に他所他所しさを感じて他人とか思えない。施設に於いて、楽しいと思える瞬間は全くありませんでした。

学校でも、先生やクラスの皆が私に気を使っているのがあからさまで、私は孤独を感じていました。

丁度その頃から、兄貴が私に妙に構って来るようになったんです。俺のオヤツ食う？とか。今週のジャンプ読む？とか。とにかく鬱陶しい程に私に話し掛けてきました。ウザったくて断るのですが、拒否されても食い下がり、私が逃げても追いかけてきて、何度も何度も構ってきました。

そのうち抵抗する方が面倒になって、されるがままになっていました。兄貴は気よくして更にあれこれ構うようになりましたが、私はまるで気を許してはいませんでした。

ある日、兄貴が福引券を貰ったからと言って、近くのスーパーまで私を引き摺って行きました。福引所で券を渡すと、兄は私に福引をやらせました。

何も欲しくないと思っていた私が無欲に福引の抽選機を回すと、出てきたのは二等の玉。私は大型テレビを引き当てたのです。

正直、要りませんでした。私は持てないからと断りました。

しかし、兄は私を凄く凄いと誉めちぎり、欲しいと言いつきました。小学生二人でも、持つに大変な大型テレビを、です。

福引所の大人も心配しますが、兄貴は

「二等ですよ？テレビですよ？部屋でゲーム出来るじゃないですか！俺が持つんで大丈夫です」

と譲らず、勢いで受け取ってしまった。汗水垂らし、手を赤くし、半ば引き摺りながらもとうとう持つて帰ったのです。そんなに欲しいのかと、欲の深さに呆れてしまいました。

施設で開封してみれば、テレビの端に荒い傷が付いていました。欲張るからこうなるのだ、と私は内心鼻で笑っていました。

しかし、兄貴はただ一言、

「ごめん！！小遣いで弁償する！！」

私に謝ったんです。

私は勘違いしていました。兄貴は、私が持つて帰れなくて悔しいと思っっているのだ

と考え、自分が持つと言いだしたのでした。

正直呆れました。

この人は、何てバカなんだろう、と。

何で私なんかに関心するんだろう、と。

この時初めて、兄貴に興味を持ったんです。

だから、聞いてみたんです。何故私に関心するの、と。

すると兄貴は、

「お前の笑ってるところが見たかったから」

そう、笑って答えました。

聞く前よりも、兄貴をバカだと思いました。

だから、

「バーカ」

「なつ、何だよ……こつちだつて恥ずかしいんだぞ」

私は笑顔で、思ったままを口にしてやりました。

だって、施設に来てから、本音で接してくれたのは、兄貴が初めてだったから。

「——それから、兄貴と話すようになったんです。この時点ではまだ、仲良くという程ではありませんけど」

滔々と語っていた彩がアイステイーを口にする。頬杖を突いて話を聞いていた繰三が、不機嫌そうに口を開く。

「まだ続きますの？」

「今は邂逅編なんです。次、義兄妹編です」

「もう止めて!! 恥ずかしくて俺死んじゃう!!」

彩の隣にいた誠が、羞恥に顔を赤らめながら悶えているが、彩は知らぬ振りだ。

「いい話だ………」

「どの辺がだよオ!? もう青き日の俺の過ちを掘り起こさないでエ!!」

何せ、十香という反応のいいオーデイエンスを得てしまつて調子に乗っているのだ。誠が昔話に悶える度に彩がしたり顔になるので、それも影響していると思われる。

本題に入るまでが長そうだと土道は頭を掻く。彩は話し始めると自分の語りにもり込むタイプだった。取り敢えず気の済むまで話してもらおう。土道は胸中で決意した。

水着売り場を離れた士道達は、フードコートの一隅にいる。彩から、誠の過去について聞くという目的だった。しかし、彩に怪しまれないようにするには馴れ初めから聞かねばならず、こうして本題とは脱線した話を聞いているのだが。

一応、彩の知る範囲で誠の過去を聞くことは、誠本人にも承諾は得ている。かなり渋られたが、琴里の水着写真で手を打った。明日にも、誠の携帯に琴里が着るであろう水着の写真が届く筈だ。

「思つたより兄貴していやがつたんですねえ、クソテン」

「確かに、その点は意外」

「ヤメロー!!シニタクナーイ!!」

真那や折紙にまで弄られて顔を押しさえているが、彩は容赦せず洗いざらい吐いている。もう一度トランペットを吹き始めたこと、施設の職員と打ち解けたこと。その全てに誠が出てきており、いかに誠が彩を妹として大切にしているかが滲み出ている。

それから、各々が頼んだドリンクの氷が溶け、温くなる程に話した頃。

「で、私はそれから兄貴を『兄貴』と呼ぶようになったんです」

彩の語りがようやく結末へ辿り着く。多くの脱線。彩を饒舌にはいけないと、十香以外が決意した。

「誠、私はお前を見直したぞ！」

「俺はたった今瀕死だけどな!!」

十香は一人、ハンカチで鼻をかんでいた。当の誠は、テーブルに突っ伏した顔を上げることにせず返事しているが。

さて、これまでわざわざ耐えたのだ。土道はすかさず、彩に質問を投げる。

「なあ彩。彩が会う前の誠の話って、何か知ってるか？」

振られた彩は、困ったような顔をした。人の昔話に触れるのは確かに細心の注意が必要だが、土道は彩の表情にそれだけではない理由があるという印象を受けた。

「私が会う前、ですか？少しなら施設の人に聞いたんで知ってますけど……兄貴、いいの？」

助けを求めて兄を見るが、打って変わって誠は平然としていた。

「おう。俺、今から席外すから。終わったら呼んでくれ」

「でも……」

「忘れた記憶に興味はねーよ。捨てる程に価値のない内容なんだろう？」

「……………兄貴がいいなら、構わないけど……………」

「決まりだな」

聞く気のないらしい誠は迷わず立ち上がり、近くにあったエレベーターで上階に

登っていく。誠が消えたのを確認し、彩が口を開いた。

「兄貴は、私が施設に入る半年前に、施設に入所しています。理由は兄貴の名誉のため、と教えてはくれませんでした」

彩は一度、躊躇って言葉を止める。雑念を払おうとするように頭を振り、深呼吸してから言葉を継ぐ。

「入所前とその数カ月後とで、性格がまるで違ったそうです。まるで、人が変わったみたい」

『……………!!』

一同が息を呑む。誠の二重人格のルーツが、見えた。

「昔の兄貴は——施設の人に我儘放題。叱られても反省なんて全くしない。尊大、傍若無人。とにかく女装しようとしていて、口癖は『女の子は愛されなきゃいけない』……………今の兄貴からは、想像出来ません」

「じ、女装……………」

土道の頭の中を、金髪碧眼で精霊姿いっつもの誠が笑顔で通り過ぎていく。彩には申し訳無いが、女装癖は治っていないようだ。今の誠は、最早女装どころか女性そのものなのだが。

「それが、結構似合ってたらしいですよ。小さい子って、顔付きだけだと男女判別出来な

い子もいるじゃないですか。兄貴もそれに漏れなかったとか」
「二人称は？」

ここで、誠とヘリスの関連性について疑念を抱いていた折紙が参戦。恐らくは自分を『でった』と呼ぶ個体に関して聞き出そうというらしい。

「え？……『私』、だったかな？私があつたときには、既に『俺』になってました」
「そう」

しかし、これは空振りに終わる。『でった』という個体は、どうやら誠のいた施設では確認出来ていないらしい。

これで、彩から聞けることは粗方出し切った。土道が誠を呼ぼうとスマートフォンを取り出そうとするが、それを遮る手が隣に座る人物から伸びてきた。

「で？あなたは誠さんのことをどう思っているんですの？」

右手で土道を制しつつ、左手の人差し指でトントンとテーブルを執拗に突いている。表面上は笑顔だが明らかに不機嫌で、ピリピリとした雰囲気四糸乃が怯えている。

「どう、とは……？」

「異性として、ですわ」

しかし、繰三の刺すような視線の圧力を、彩は全く気付いていない様子で笑って返

した。

「え? なーんとも?」

「えっ」

「だって兄貴ですよ? バカを濃縮して不純物を抜き取ったような謹製バカの兄貴ですよ? 兄扱いはしても、異性としてまで意識は出来ませんよー」

「そ、そうですの……………」

清々しく断言され、拍子抜けした繰三が、引きつった笑みを浮かべていた。一方で話のネタを見つけた彩が、目を光らせて繰三に迫る。

「それで? 兄貴のどこがいいんです?」

「べつ、別つ、別にわたくし、誠さんのことを好きだなんて一言も言っておりませんわよ!?!」

「確かにそうですね。で、好きなんですかあ?」

「べつ、だつ、へえっ!?! そんなことありませんわ!! 違います!! 違いますわ!!」

焦るあまり、逆に露骨になってしまった繰三。ニヤニヤと笑う彩を見て、土道はもうしばらく誠を呼べないな、と溜め息を吐いた。



そのエレベーターが屋上に着いた時、中から降りてきたのは二人組の少女だった。

「でつた、おなかすいた」

「今はダメ。後で好きなかだけ食べていいから。ね？」

「うん………でつた、いいこにしてる」

一方は、シヨッキングピンクの髪をトリオテールに分けた上で三つ編みにした、ジュニアアイドルのような小柄な少女。

一方は、長く伸ばした真珠色の髪を縦ロールに巻き上げた、人形のような装いの少女。

対照的な二人だが、どちらも極めて目を引く格好と、見る者の目を奪う美貌を備えている点に関しては一致していた。

シヨッキングセンターの屋上には、偶々誰もいない。二人は我が物顔でテラスのテーブルを占拠する。

「ねえ。あや、みんなにしゃべってたよ？ いいの？」

「いいの。彩だから許すの。でつたもダメだよ、彩に手を出しちゃダメって私の言い付

「忘れたら」

「だいじょうぶ。でった、おぼえるのとくだもん」

でったと名乗る少女は、小さくガツポーズをして自信の程をアピールする。しかし、対する少女は余りいい表情ではない。

「そう言うけど、でったは良く食べこぼしするじゃん。あんなにダメだよって言ったのに」

「うー………でった、おぎようぎいいもん。もうしないもん」

三つ編みの少女は、『でった』の膨らませた頬をつつき、ぷひゅうと空気を漏らさせて遊ぶ。

「まあ、いいの。でったの食べこぼしくらい、大したことないから」

「しないもん!!」

「はいはい。これから先、彩が私達のデートに首を突っ込んでくる可能性がある。どうする?」

「でったががんばる!!」

諸手を天高く突き上げ、ブンブンと振る少女に、微笑みを返す。綿のようにふわふわとした髪を撫でてやると、腕の振りが大きくなった。

「いい子。でったはお利口さんだね」

「えへー！むふー！！」

「じゃあ、お願いね。私が出るための霊力の回収と、彩を守ること。でつたなら楽勝だよね？」

「うん！行つてきます！！」

首が抜けそうな程に力強く首肯すると、人形を思わせる少女は座っていた座席を粉砕して飛び立つ。

残された少女は、振り返ることなく背後の自動販売機に右手を翳し、中指を折る。金属を突き破る鈍い音と共に、双刃の薙刀のような武器が二振り現れ、自動販売機を貫く。

席を立った少女は、損壊した自動販売機からドリンクを抜き取って飲み始める。飲み干しては缶を握り潰し、投げ捨てを繰り返す。

内蔵していたドリンクを全種類飲み終えた頃、持っていたスマートフォンが振動した。確認してみれば、土道からの戻ってくるようにとのメールだ。

「私が遊ぶには、《俺》の殻が邪魔だからなあ。今日はここまでかあ。じゃあ、またあの子を信じて待つてない」と

軽くスキップしながらエレベーターに乗り込む少女の名は、色無誠。

「頑張つてね、私の天使——」

『ピョンデッタ
愛欲拷婦』

いとも容易く反転する、強欲の精霊。
エレベーターの扉が再び開く頃には、その姿は、何処にも無かった。

Date. 25 「その唇に、抱擁を」

誠の過去語りが終わわり、買い物（と水着選びと称した土道の取り合い）を済ませた一同は、帰路につく。

「十香さん、兄貴の友達だったんですね」

「うむ、誠はいい奴だぞ。桃太郎を読み聞かせてくれたこともあつたな。あれはいいものだ」

「十香さんって、帰国子女か何かなんですか？」

「きこくしじよ？何だそれは？」

「あつ（察し）」

他愛のない（ながらもちよくちよく危ない）会話をしながら、一同纏まつての帰り道。その中で、一人脂汗を流す者がいた。

「兄貴。明日休みだし、今日兄貴んち泊まつていい？」

彩が兄にその質問をした時、嫌な予感的中した誠は天を仰ぐ。妹の性格からして言い出しかねないとは思っていたが、本当にこうなるとは。

「家がゴチャゴチャしてるから、駄目」

「なあに？また兄貴部屋散らかしてんの？ホント生活能力低いんだから。私が片付けてあげるし、ご飯も作ってあげる」

「いい!!今日はいい!!ノーセンキュー!!」

「兄貴、やけに必死じゃない?」

彩は不思議そうな顔をしているが、誠からすれば大問題だ。誠は今、公園に暮らしているのだ。まさか正直にホームレス宣言する訳にはいかない。ついでに言えば、普段は霊力消費を抑えるべく小型化した繰三と、公園で同棲していると云ってしまってもあながち間違いいではない。逃避行の最中という訳でもないのに、家は無いが二人暮らしというこの状況を如何に伝えるべきか。最悪繰三は何とかなるとして、自分はどうしたものか。

かつてないほど思考を巡らせていると、気付けば彩が寂しげな視線を向けてきていた。

「兄貴……………私が行くの、イヤなの?」

心臓が跳ねる。まさか妹を傷付けることになるとは。心中で頭を抱えるが、そうも言っていられない。何せ、連れて帰るという選択肢自体がアウトなのだ。幻滅されるといふより、また無用の心配をかけることになる。学校に通っていないことに関しては、くらたトスク機関>が転校手続きをしてくれたお蔭で身元確認が取れたことになり、学

校・及び行政側の騒動は収まっていると聞いている。しかし、誠のいた施設の関係者となるとそうもいかない。下手に身元を偽装すると、実際に提示した住所に、予告なしに訪れてしまう可能性がある。故に、今まで誠を放置していたということがある。

更に言えば、誠は『公園にいる』ことが精霊として安全であることの証明になっている部分がある。積極的に人間社会には関わろうとせず、破壊活動もせず、ただ友人と共に平穩に生きることを最重要事項としている精霊、という評価が自衛隊内では下されている。公園暮らしが、結果的に誠を守る重要な要素になっていると令音から聞かされていたこともあり、今の暮らしをどうにも捨てがたいのだ。そのツケが、今こうして現れている。

「そうじゃねえ、そういうことじゃねえんだ……。ほら、こう……。男子特有のブツが散らかっているというか」

「エロゲとか？」

「そうそう。だから——」

「そんなん施設の頃からじゃん。私気にならないから」

「昔の俺のバカ!!というか気にしろ!!気にしてくれ!!年頃の娘だろうがお前!!」

苦し紛れの一手も通じず、まさかホテル暮らしと嘯く訳にも行かず。下手な抵抗が、寧ろ彩の猛攻を呼ぶことになる。眼前で手を合わせ、拝みこむようなポーズで誠に迫

る。

「お願い兄貴、一生のお願い!!明日絶対帰るから!!」

「お前の一生のお願いは今日で何回目か分かんねえよ!!」

「一瞬一瞬を大事に生きてるの!!時は金なりだよ!!」

「にしても安いわ!!値引き過ぎて最早十割引きと化してるわ!!」

「何だつていいから一生のお願い!!」

「だーっあつ!!」

誠は、左手で頭を掻き巻く。誠の最大の弱点は、彩の存在だ。血は繋がっていないが、自分の唯一の肉親と言っても過言ではない程に大切な存在なのだ。実際、施設にいる頃には何だかんだと彩の一生のお願い大安売りをその都度叶えてきた。

また彩の側も、大袈裟な表現はしつつも要求する内容はそう難しい話ではないので、兄ならばきつと叶えてくれるはずという甘えが含まれている。『一生のお願い』が親愛の情の示し方ということを知る誠には、どうにも断れない。

ここで、見かねた真那が助け舟を出す。

「申し訳ねーんですが、クソテンはこれから繰三と一緒に、ウチに泊まりに来る話になっていやがります。そういうわけなんで、ちよつとご勘弁いただけねーですか?」

「え?.....中学生の家に行くの、兄貴?」

「その性犯罪者を見るような目は止めろ」

彩の視線が冷やかになり、真那は首をかしげる。手助けしたつもりが逆に誠をピンチにしてみました。追い詰められた誠は助けを求めて繰三を見るが、ちろりと舌を出し、両手の人差し指でバツを作る。

「後の手段は、わたくしと逃避行ハネムーンしかありませんわね」

「誤魔化せないのが明らかなので却下」

「いけず……まあ、当然ですけれど」

いよいよ彩の不審感が頂点に達しようとしていた、その時。

「どうしたの」

折紙が、小さく疑問を口にした。それは傍らの土道に向けられた台詞だった。土道は耳元を押さえ、明らかな焦りの表情を浮かべている。

「……………まずいことになった……………誠！琴里が！！」

「……………！！」

一言で内容の危険度を察した誠の表情が変わり、同じく真那と繰三も目付きを鋭くする。十香が土道に駆け寄り、四糸乃がよしのんと顔を見合わせる。琴里の事情を知らない折紙も、一同の様子に精霊絡みの問題が発生したことを察する。

「え？え？何？」

そしたただ一人、何も知らない彩が目を白黒させていた。

「ね、ねえ兄貴？何？どうしたの？」

「悪いな彩。急用が出来た」

「え？」

士道と真那を小脇に抱え、路面のアスファルトを粉碎する程の勢いで大地を蹴り、彩の視界から瞬間的に姿を消す。時を同じくして繰三や十香、四糸乃の姿も失せており、彩は慌てて辺りを見回す。

「あ、兄貴!?!ど!?!」

「あそ!?!」

「へっ??!——ええっ!?!」

精霊関係者の中で唯一この場に残っていた折紙が、彩の視界の遙か上方を指差す。そこには、マンションやビルの屋上を飛び移り、明らかに人間でない動きを披露する人影が。位置の関係か兄は見当たらなかったが、彩の見たことの無い金髪の女性がいる。おかしな光景であることには変わりなかったが。

「……………現実?」

「そう」

目眩にふらりと身体のバランスを失い、電柱にもたれ掛かる彩。静かに見つめる折

紙に、目の焦点が定まらない狼狽しきった顔を向ける。

「お、折紙さん、どこか喫茶店でお茶しませんか？ 私、変なもの見ておかしくなりそうです」

「構わない」

折紙の肩を借りて、彩はヨロヨロと歩き出す。

現実逃避をするために、今は甘味に意識を向けていた。

ただ真実兄の性転換を知ると向き合うのを先送りにしたに、過ぎないのだが。



十香に四糸乃と共に精霊マンションで待機するよう託した後、土道は残る三人と共に、〈フラクシナス〉艦内を走る。

『すまない皆。琴里の容態が突如悪化して暴れだした。今はまだ誠の薬が効いているが、これ以上活性化すると恐らく薬効を上回る』

インカムを通し、土道の耳元から令音の声が響く。彼女の声に紛れて、何かの破壊

音と琴里の呻きが漏れ聞こえている。焦燥を募らせながら、士道は走る。

「そうするとどうなります!？」

『琴里の破壊衝動が活発化し、この艦は墜ちるだろうね。そして琴里の手で天宮市は、再び大火に包まれる。——悪夢だよ』

「——ッ!!」

「そうはさせませんって」

思わず惨状を想像した士道の肩に、誠の手がポンと置かれる。

「大丈夫だってヘーキヘーキ。高濃度の薬飲ませて一発コロリですよ」

「殺すな」

「じゃあポロリで」

「セクハラ願望じゃねーか」

誠がいると緊張が保たない。どこか気が抜けたが、琴里のいる部屋に辿り着いたことで気を引き締め直す。ドア越しに聞こえてくる破壊音に僅かに怯みつつ、意を決して部屋に飛び込む。

「琴里!!」

「シン、来てくれたか」

破損し点滅するライト。ひしゃげ潰れたロッカーや、火花を散らすディスプレイ。

荒れに荒れた部屋の中で、コンソールと向き合っていた令音が顔を上げた。眠たげな目
に、どこか疲労の色が見える。

「どういう訳か急に暴れだしてね。鎮静剤に誠の薬も併せて飲ませてこの始末だよ」

溜め息混じりに令音が語るのと同時に、手足に拘束具を付けたままの琴里がベッド
に拳を叩き付けて粉砕する。

「ふうふうふうふうつ——あああああッ!!」

明らかに普段の琴里ではない。一目見てはつきりと分かった。深く息を吐いた後、
士道達に向かって徐に上げた顔は、喜悦に歪んでいた。

「ふふつ、ふふふふ………わざわざ来たということ、私に壊されに来たということ
しよう?。」

「琴里………」

「壊す。壊す。壊す!壊す!!力が総て!!強さが誉れ!!」

〈灼爛殲鬼〉に呑まれている琴里の様子に、真那が頭を掻く。同じ妹として、琴里を
見る目には哀れみがあった。

「こりやダメでいやがりますね。クソテン、早いとこやつちまうですよ」

「あいよ。———そんなじゃ司令、頭いきますよ!!【寵愛】!!」

水触手の群れが、誠の背中から姿を現す。先端から濃縮された靈力のゲルが噴出

し、琴里の頭はおろか全身目掛けて放たれる。琴里は敢えて大きく踏み込み、誠に詰め寄ることですそれを回避する。手数に優れる誠に接近するのは自殺行為。自らの周囲を触手で覆い尽くしたも同然だ。

しかし。

「ねえ、自分の触手を味わったことはある？」

琴里の身体から、熱を持った霊力の波が放たれた。触手を形成する水が蒸発、残らず吹き飛ばされる。誠が驚く隙すら与えず、琴里の元に水蒸気が集まり、再度液体になつて赤い触手を形成する。

「なっ!?! 琴里!?!」

「うわっ、クソテン2号爆誕……………!?!」

「これも〈灼爛殲鬼〉の力か、厄介だな」

琴里の行動に、一同が次々と驚きの声を上げる。

「……………赤い……………ということとは……………熱を持った、触手……………?」

「あのー……………線三サン?」

「士道さん、その目はお止め下さいまし」

一人、生唾を呑んだ者がいたが。

「は、はあっ!?! それ俺のお家芸!! そりゃ無いですよ司令!!」

外野を他所に、猛烈な抗議する誠だが、琴里は事も無げに涼しい顔をする。

「上書きするのは得意よ。残念だったわね」

「くっそー!!つまり〈灼爛殲鬼〉テメー、司令の意識乗っ取ってるって事じゃねーか!!」
 「誤解しないで頂戴。私がおつともつと強くあるために、私をより冷徹に、好戦的に、無慈悲にするの。それが私の………いえ、敢えて言うなら私を振るう者の願ひよ」

琴里は、いや〈灼爛殲鬼〉は、自分の触手が奪われた事にシヨックを受けている誠を縛り上げる。四肢を拘束し、股の間や脇の下にも触手を差し入れていく。

「いの………ぐ、っ!」

抵抗するが、数の暴力には逆らえない。更に首にも触手を巻き付けられ、万力のような力が誠の五体を引き千切らんとする

「素敵に無様な格好ね。散々他人を玩んだのだから、その報いよ」

必死にもがく誠を嘲笑う、琴里。固く握り締めた拳を誠に向けて振るい、胴体に突き刺さった小さな手が腹に沈む。肺から息が強制的に押し出され、少量の吐瀉物が音を立てて床に落ちる。追い討ちを掛けるように一発、二発と、抵抗敵わず攻撃を受け続ける誠を見ていられない。たまらず土道と真那が飛び出す。

「止せ、琴里!!」

「クソテン、加勢しますよ!!」

「下がらなさい！アンタ達は後。我が使命の邪魔をしたこいつを片付けてから!!」

触手の群れが、二人を阻む。誠に近寄ることが出来ない。

「ぎ……………いあ……………」

「一方的に捌られる感覚はどう?」

笑う〈灼爛殲鬼〉。しかし、これまで事態を静観していた緑三がぼつりと漏らした。

「……………ない」

「は?」

「なつてない!!そう申し上げたのですわ!!」

荒れた部屋に、緑三の力強い喝が響いた。唐突な一言に啞然とし、誰一人返事をする者は無かった。損壊した電子機器の火花が、沈黙を埋める。

「あなた！触手を便利なロープ程度に考えておいででしょう!!無粋!!ナンセンス!!実にナンセンスな使い方ですよ!!」

「……………」

「触手は拘束が華。ええ、それは確かにその通り。誠さんも確かに拘束から入りましてよ。しかしそれで終わっては意味が無い!!触手の利点は感触・本数・リーチ・フォルム!!全て揃つてのエクスタシー!!捕らえた者の申し訳な抵抗を容赦無く圧倒し、逃げ場の無い快樂の海に引き摺り込む悪夢の誘惑!!それをただの拘束具扱いとは片腹痛くつて

よ!!」

力説するその熱量に、〈灼爛殲鬼〉^{カマエル}が、精神的にも物理的にも数歩引く。

「……………じ、自分で何を語っているか分かつているの……………?」

「分かつていましてよ!!誠さんを私と同じ所に墮として下さるのかと思えば、失望しましたわ!!」

「現在進行形で自分の評価が落ちてるけど気付いてるよね?」

半ばヤケクソで割り込み、繰三に叫ぶ土道。いつの間にか随分と残念な美少女になっっていた。

「わたくしだっただだ良いように開発されて悔しいんですのよ!!せっかく逆襲出来るかと思えばこの有り様!!触手を振るう資格がありませんわ!!」

「資格あつてもダメだと思っ!!」

心の内で、ひっそりと土道は匙を投げた。繰三は狂三とは別物。分かつてはいたが、こんな形で再認識したくは無かった。誰かこの匙、受け取ってはくれまいか。主に誠。肩にポンと置かれた令音の手が、妙に暖かかった。

真那は真那で、かつて己を磨り減らしてまで殺し続けた存在が、これ程までに変わり果てた事に呆れを通り越してある種達観し、遠い何処かを眺める目をしていた。

「さあ誠さん!!いつまで愉しんでいらっしやいますの!?!早いところ格の違いを見せて差

し上げて下さいな!!」

「えー、やだー」

「案外元氣そうだった!？」

繰三の一喝に、不承不承という様子で顔を上げる誠。その表情は、あくまで自然体に嫌そうな顔をしていた。

「折角司令に攻められてるから、もー少し堪能したかったんだけどなー」

「俺達の心配を返せ」

「俺、色無誠の原動力はエロス・エロス・エロスですから。その為の触手!」

「……………もう好きにしてくれよ……………」

繰三を残念な方向に導いたこれまた残念な男、色無誠。小さな子供を可愛がり、美少女は性的に愛でる存在。

しかし忘れてはならない。色無誠は水の精霊であることを。

「はい、そんじやお邪魔しましたー」

触手に縛り上げられていた身体が青く染まり、不定形の水へと変化する。琴里の触手は締め上げる相手を失い、液状の誠の身体をただ虚しく通過する。

「な——しまった!!」

誠の〈触抱聖母〉^{アルミサエル}は、触手や霊力譲渡能力に目が行きがちだが、全ての行動に自身

の液化化を利用してゐる。則ち、全身を液化化出来る誠相手に物理的拘束など無意味。本当に遊んでいたのだ。

「では、我が愛しの司令——いや〈灼爛殲鬼〉、お前を触手の世界に引き摺り込む!!」
再び人型に戻った誠は、ピツと指を突き付ける。ドギヤアアーンだのと効果音が付きそうなボーリングだったが、状況が状況のためまるで決まっていな。一人繰三だけ沸いていたが。

「おい誠、お前に任せて琴里は大丈夫なんだよな」

「——フツ」

「こつち見ろ!! ねえ!! 大丈夫なの!!」

士道の加速する心配を他所に、誠は右手を振るう。ハンドボール大の水の塊が掌から放たれるが、〈灼爛殲鬼〉が琴里の首を捻るだけで回避される。

だが。避けたと思ひ意識の外に追いやられた水の塊から1cm程の触手が八条伸び、琴里の頭を絡め取る。

「何よこれ、むぐつ?!」

琴里に取り付いた水の塊は顔全体に広がり、顔面を覆い尽くす。強制的に外界と遮断され、呼吸不可能な状況を作り出した。

「顔面を捕らえる触手、『フェイスハガー』!!」

「ん……!? む……!? つ!? !?!」

顔面を引つ掻くように抵抗するが、掴むことは叶わない。霊力を流し込もうとして熱波を放つも、今度は誠が水触手の温度調節まで意識を向けているために乗っ取ること出来ない。更に、この水の塊は透明度が低く、琴里の表情を伺うことは出来ない。視界を塞がれた琴里としては、恐怖そのものだろう。何度も何度も熱波を放つ様子に、焦燥が伝わってくる。

「目隠し。拘束。一粒で二度美味しい? 否!! では司令、改めて失礼しますよ!!」

誠が水の塊に向けて手を翳す。すると水が脈動し、同時に琴里の悲鳴が上がる。喉に何か詰まったかのようになくぐもった叫びは、時おりええき噎せ返る事で何度も中断される。立つことも出来なくなった琴里が膝から崩れ落ち、床を転げ回る。

大の字で床に仰向けになって動かなくなり、身体を痙攣させるだけになった頃、琴里は触手から解放される。

触手が外れて露になった表情は、虚ろな瞳ながらも頬は上気していた。口から直に霊力ゲルを流し込まれたのか、口回りから鼻下にかけて白い粘液が所々付着している。

「えほっ、えほっ……あ、ああ……うえ……げほっ……」

令音がコンソールを叩いて精神状態をモニタリングし、そして安定したことを確認する。何はともあれ、琴里の暴走は抑えることに成功したようだ。土道は胸を撫で下ろ

し――

「おにいちやああああん」

「うっ!?!」

いつの間にやら抱き付いてきていた琴里に戦慄する。表情が明らかに、先日追いか
け回された時の琴里のそれなのだ。

「誠!!またかよ!?!」

誠を睨むが、目を逸らして頬を掻いて一言。

「いやあ、――ごゆっくり〜」

「待て!待ってくれ!ヘルプ!!」

部屋から逃げた。

「兄様、卒業おめでとうございます」

「お赤飯、炊きませんといけませんわねえ、くふふっ」

後を追うように、真那と繰三も部屋を出ていった。

最後の望みとばかりに令音を見る。

「ん、今回の攻略は簡単だったな」

「たっ、助けて下さい!」

「据え膳だろう、シン。よく味わうといい」

「れ、令音さー！ー！ー！！」

表情を変えること無く部屋を後にした。望みが打ち砕かれた絶望の表情で扉を見つめていると、琴里が抱き付く力を僅かに強めた。

「二人つきりだね、おにーちゃん」

「」

色気付いた妹の台詞が、死刑宣告にしか聞こえない。土道はこれから起こることを想像し、背筋が凍る感覚を覚えた。

しかし。

「う、」

琴里が突如呻くと同時に、口元を押さえる。みるみる顔が青ざめ、力無くしやがみ込んだ。

「琴里？どうした琴里!？」

「気持ちわるい……………は、吐く……………」

慌てて土道が何か袋を探そうとするも、荒れた部屋には見当たらない。琴里を立たせて部屋から連れ出そうとするも、首を強く振られて拒否された。

やむ無く土道は部屋を飛び出し、近くの部屋を漁ってビニール袋を手に入れる。琴里の元へ戻ろうとして廊下に出た。

が、

「う、うえええええつ……お、ええええええ……げ、う、おええええええ……」

盛大に吐く声がドア越しに聞こえて来た。間に合わなかった、と思った直後、

「つく、う、うえええええん……」

これまた盛大に泣き出す声が廊下に響いた。雑巾か何かが要るかと思い、一度声を掛けようと土道は部屋に入り、

「——は？」

再び絶句した。

琴里が吐いたと思われる場所に、唾液で濡れた裸の琴里がもう一人寝ているのだ。髪色は鮮やかなオレンジで、精霊時の角が生えている・赤いリボンをしている・瞳が黄色いといった違いはあれど、明らかに琴里だった。

「お、おにーちやああああん……自分が自分の中から出てきたああああー……!!」

「は、はあつ?!?どうなってるの!?!」

「わ”か”ん”な”い”ー……!!」

兄妹二人で騒いでいると、色違いの琴里が目を覚ました。

「ん……」

「……!!……!!……!!」

琴里がりボンの色も忘れる程に取り乱し、士道の背後に隠れる中、新たな琴里は上体を起こして手を見つめる。続いて顔、身体、足と感触を確かめ、最後に琴里と士道に顔を向ける。

「———そうか」

そして、静かに頷いた。

「……………君は、誰？」

士道が恐る恐る尋ねると、すつくと立ち上がり、身体を隠すつもりなど毛頭無いという様子で堂々と立つ。

「〈灼爛殲鬼〉だ。不本意ながら、天使より意思のみが抜き出され、受肉したようだ」

「へ？！何で？」

「大方、色無誠とやらのせいだろうな。忌々しい……………これでは主人を導くことが出来ん」

固く噛み締めた歯を剥き、怒りの余り歯軋りする〈灼爛殲鬼〉。怒りのままに手を突き出すと、橙の炎が部屋を嘗め、内装を焼き付くし消し飛ばす。

「主人、五河琴里よ!!色無誠は何処だ!!例え天使の全能振るえずとも、あの愚者を焼き尽くしてくれる!!」

士道と琴里は顔を見合わせる。

実に面倒なことになった。

琴里と士道のデートは、明日。まさかこのまま、保護者同伴カマエルデートになってしまうのだろうか。

「何か凄い音が聞こえてきましたが、どうかされました？」

背後で外側からドアが開かれ、真那が顔を覗かせる。そして部屋の惨状と、琴里そっくりの〈灼爛殲鬼カマエル〉を見た後、

「あれっ、おめでたでいやがります？ 神話の神様みてーでいやがりますね」

笑顔で見当違いの感想を述べた。

士道、琴里、どちらのものとも分からぬ溜め息が、揺らめく炎の音に混ざって消えた。

Date. 26 「デートの裏側」

「決着を付けるぞ、色無誠オツ!!」

「いや、ノーサンキューで」

「鬨うのが怖いか！腰抜けの腑抜けか！間抜けめ！ぬけぬけと生きて楽しいよなあ!? 貴様が何度も抜いた一物をその身から引き抜いた気分はどうだ!! ええッ!!」

「司令の見た目で躊躇い無く下ネタ言うの止めるオ!」

俺とカマエルは今、互いに相手の両手をがつきと握り締めて睨み合っている。俺は男の姿なので、幼女と高校生がマジ喧嘩しているという何とも情けない構図だが、そんなことは俺達にはどうでも良かった。

「貴様が先に入れエエエーッ!!」

「レディーファーストで譲ってやってんだよオオオオツ!!」

俺達は火花を散らす——プールの消毒槽の前で。

「貴様のツ……貴様の前でだけは無様を晒すつもりは無い!!」

「知るかバツキャロー!!まさかここまで冷たいとは思わなかったんだよ!!」

取っ組み合いを演じる俺達の視界の端には、消毒槽の中に沈んでガチガチと震える

そもそも、何故俺がカマエルと仲良しこよし（心にもない）しているかと言えば、理由は昨日に遡る。

俺がふと閃いた名案、『カマエルを司令から排除すればみんな幸せじゃね?』作戦を実行。俺の全霊力の半分を使って、司令の肉体を再現して作った魂の器に、カマエルを押し込んで無事成功したまでは良かった。しかし、独立した肉体に追いやられたカマエルが割とマジで「フラクシナス」を墜としかねない感じにブチ切れたため、速攻で司令にしよつびかれた。カマエルに引き合わされるや否や、司令のありがたいお言葉が。

「誠、アンタ明日のデート中、カマエルの相手してなさい。カマエル、命令よ。誠と勝負ならしていいけど、誰一人殺してはダメよ」

「なん……………だと……………」

衝撃を受けた。散々司令を苦しめた奴と明日中過ごす? 司令の命令でも流石に我慢出来ないね!

「あ、主人!? 何故だと言うのだ!? 私の存在は、主人が望んだからあるというのに!!」

カマエルも愕然としており、どういうわけか気が合うが馬が合わない。こういう奴は何て言うんだ? 宿敵?

「もう許せるぞオイ! カマエルおもて天宮市てに出ろや!!」

「奇遇だな！こちらも貴様を塵こころしたくて堪らん!!」

カマエルと共に部屋を出ようとするが、司令が素早く〈灼爛カマエル殲鬼〉の柄だけ呼び出して俺達を平等に叩きのめす。脳天を強打され、二人で仲良く（遺憾ながら）床に倒れ伏す。

「私は yes 以外の返答を認めた覚えはないわ。返事!!」

「イエスマム!!」

「承知!!」

いやあ、司令に逆らうなんてバカな真似したね。なあカマエル。全く司令は最高だぜ！

「お前ら……………本当は仲良いだろ……………」

「ないです」

「有り得ぬ」

士道先輩の寝言は無視し、俺とカマエルは向き合う。どちらともなく手を差し出し、固い握手をする。

「仲良くやろうぜ、司令のために！」

「その旨を良しとする、主人のために！」

こうして俺達は、司令のデータの裏で二人で行動することになった。互いの手の甲

に爪を立てて、敵意は剥き出しだった。

◇

とまあそんな経緯で、この栄部駅最寄りのテーマパーク、『オーシャンパーク』で俺はカマエルのお守りをしている訳だ。チツ。

「もー兄貴つてば、年下相手に喧嘩するとかマジに大人げ無さすぎ」
「るせえ、子供は好きだけどこいつは別だ」

傍らを歩く彩がくどくどと俺に説教する。彩の通う仙城大附属高校もたまたま休みだったらしく、またも一生のお願い大安売りで無理矢理付いてきたのだ。話し半分に聞き流しながら、俺は緑三に肩を貸しつつ歩く。

俺がカマエルとマジ喧嘩している所を、後から着替えて出て来た彩に見られ、共々叱られた。消毒槽が異様に冷たいと二人で言い訳したのだが、喧嘩している間に普通に入れるレベルまで冷めていたために通用せず。何とも言えない痛み分けに終わったのだった。

「良いザマだ。実に良いザマだぞ色無誠。肉親に嘲られる気分はどうだ？」
「るせー」

脇を歩くカマエルが、良い気味だとばかりに口許を歪めて見上げてくる。すつかり冷えきった真那を容易く背負いながらも、隙有らば俺を蹴り飛ばそうとしている。器用だなお前。

「くらーかまえちゃんもそう言うこと言わないの!」

俺がカマエルの挑発を軽くスルーしていると、カマエルを『火万柄』^{かまえ}という五河兄妹の従姉妹と勘違いしている彩がぴしやりと注意した。説教の矛先が自分にも向いたカマエルがたじろぐ。

「何、貴様は私の味方では——」

「どっちもどっち!それに、そこまで言ったらかまえちゃんが悪者になるよ!」

「ううっ……やむを得ん、自粛する」

あれ、何か上手いことカマエルを御してねーか?俺より彩と居た方がいいんじゃないかな。

よし、妹に押し付けよう(クズの発想)。

「なあ彩。悪いんだけど、そいつと遊んでやってくんね?俺、この二人をその辺で休ませてから行くから」

俺はカマエルから真那を剥がすと、軽くカマエルの背中を押して彩に寄り掛からせる。抗議の視線が向けられるが、カマエルが何か言うよりも早く、彩がその手を引いて

歩き出す。

「分かった、じゃあ流れるプールに行ってるから！行こっか、かまえちゃん」

「お、おい貴様!?! 離せ!?! 私は天使だぞ!?!」

「うんそうだねー! かまえちゃんは可愛いねー!」

「否アツ!?! そうではない! くそつ、色無誠! 覚えておけエー! ツ!」

悪気無く天使発言をスルーされ、彩が精霊聖気を知らないと理解したカマエルは、無抵抗に引き摺られていく。流石に一般人に噛み付くつもりは無いらしい。

やったぜ。これで一番めんどくせえのがいなくなった。彩も離れたから、ちゃつちやと繰三と真那を回復させられる。

「おいお前ら、調子はどうだ?」

手近なベンチに座らせた二人に問う。二人とも未だにガチガチ震えているが、先程よりか体調が戻ってきているようだ。

「く、クソテン……………鼻水が……………」

「はいティツシユ」

水着靴からポケットティツシユを取りだし、真那に渡す。

「誠さん……………暖めて……………」

「はいタオル」

水着靴からバスタオルを繰三の頭にシュートヒム。

「いけず……………」

「他人の目とか気にしろ」

「つまり衆人環視が無ければいい、と?」

「ちよつと黙つとき」

繰三を放置し、右手の人差し指と中指で真那の額をコンとつつく。指の接触した瞬間に靈力を軽く流し込み、真那の体調回復をする。くしゃみをしかけていた真那が凍ったかのように暫し制止し、すぐに急な体調の変化に驚く。

「おお!?!寒気が一瞬で消えた!?!」

「治療専門の精霊だからな」

「便利としか言いようがねーですね」

同じように繰三にも治療を施そうとすると、両手ではつしと指を掴まれてしゃぶられた。それ以上しゃぶつてると撃つぞゴルア。

「くふふう……………凹と凸が重なって、淫靡ですわね……………」

「彩の前でやるなよ。妹の教育に悪い」

「つまり彩さんの視線が無ければ……………」

「似たネタを二回もやるな」

「みっ!?!」

ちよつとしつこいなあ、没収しちゃうよ。

急に靈力が逆流し、俺に繰三の靈力がほぼ丸々入ってくる。等身大サイズを維持出来なくなった繰三が縮み、掌サイズの二頭身マスコットになって落下する。

うん、静かになったね。これならみーみー鳴いてるだけで何言ってるか分からないからね。

「危ね!繰三、何でお前俺に靈力戻したんだ?」

「み、みみ!!みーっ!」

水着姿のまま突然縮んだ繰三をキヤツチする。曰く、俺に靈力を持つてかれたとか。いや、そんな覚えねーな。とすると、俺の裏人格がやったか。ははあ、さては裏の俺め、キレたな?そうだよ。

「やり過ぎて俺の裏人格がキレたんじゃね?ちよつと自重しろよ」

「み……………みみ、るるるみ……………」

「まるで何言ってるかわからねーんで戻しやがれです」

あ、真那も繰三語分らない?そっかー。今んとこ繰三語分かるのは俺と十香だけなのか。今度四糸乃も試して貰おうかな。

俺がそんなことを考えていると。

ふと、四糸乃の靈力を感じた。



分からん。

何故、主人は私を戻すように色無誠に命じないのか。

分からん。

何故、私は色無誠の妹——彩とか言ったか——に纏わり付かれていますか。

浮き輪？とやらに乗せられ、人工的に造り出された川を流れていく。

「かまえちゃん。難しい顔してるけど、流れるプール好きじゃない？」

私の浮き輪を押して泳ぐ彩が、こちらの機嫌を伺う発言をする。別に嫌いではないが、色無誠にいいようにされているのは面白くない。

「……………否。考え事だ。気にするな」

「そっかー。あ、後でアイス食べない？兄貴に奢らせるから！」

「悪くない提案だ」

「でしよーー!!」

アイスとやらが何物かは知らんが、色無誠に命令出来るのは愉快だ。奴の事だ、彩が頼み込めば折れるだろう。妹は大切になっているようだしな。

待て。妹？大切になっている？つまりこの小娘は色無誠の弱点そのものではないか？

クツクツク……バカな真似を。こやつを人質にすれば、色無誠はすぐに言うことを聞くだろう。主人の中に戻り、主人をより強く更に強く尚強くして差し上げるのだ。さすれば意中の相手たる兄君も主人のモノとなろう。泣き虫弱虫だのと嘲られて涙に濡れる日々を送らずとも良いのだ。

右の手刀で十分か。軽く炎をちらつかせてやれば大人しく従うだろう。なに、振り翳したこの手で命を奪うつもりはない。色無誠はともかく、こいつ自体に恨みは何一つ無いのだから——

ん？

「あれ？何このウサギのパペット？誰の？」

上流から流されてきた何かを、彩が掴んだ。それはパペット。ファンシーなデザインのパペットだ。

既視感がある。確か主人の救った精霊に、確か似たようなモノを着けていた者がいた筈。四糸乃とか言う、冷気の精霊——

「ひああああああつ!!よしのん!!よしのん!!」

幼子の叫びと共に周囲の水が音を立てて凍りついていき、彩に迫る。が、当の本人はパペットを凝視しており気付いていない。他の人間は慌てて水から出たと言うに!

「十秒沈め小娘エ!!」

「わひゃい!!?」

軽く凄んで彩を潜らせる。その隙を突いて、広がる氷塊に手を翳し、宿していた火を放つ。フン。パニックで振るう霊力など、物の数でもない。瞬時に焼き尽くし、水蒸気に変えて霧散させた。

「ぶあつ——熱っ!!何これ!!」

律儀に十秒後に顔を出した彩が、視界を覆う湯気に驚愕する。

「温水プールの湯でも流れ込んだのだろう」

「そ、そっか………」

一応納得したがそれでも腑に落ちない様子で、周囲の湯気を見回す。いや、完全に納得して貰わねば困る。こいつには私がただの人間だと思つて貰つていた方が得だ。隙を突きやすい。

プールの縁を掴んで動かない彩を見つめると、餓鬼が流れてきた。呆然自失の四糸乃だ。突如水を蒸発させられて状況理解が追い付いていないらしい。

「おい」

「ひっ!?!」

水着の肩紐を掴んで捕らえると、流れに逆らって四糸乃の体を引き寄せる。突然進行方向が変わったことに驚き、更に私を見て震えている。忙しい餓鬼だ。私は彩からパペットを引つたくと、四糸乃に押し付ける。

「そんなに大切なら、結束バンドかベルトで手首に固定しろ。次は無いぞ」

「いや、結束バンドは無いわー」

「(コクツ、コクツ!!)」

「頷いちやうのね」

彩が苦笑いを浮かべる一方、餓鬼は首が取れそうな程に首肯する。いつかその頭蓋が抜けてすっ飛んで行きそうだな。それはそれで愉快だが。

「あ、ありがとうございます……(ぎ)ざいます……」

パペットを受け取った餓鬼から礼を言われた。ふん、悪くはない。だがそれは主人から聞きたい台詞だ。餓鬼程度の礼で満足するものか。するものか。

「礼ならその小娘にしろ。貴様の宝を見つけたのはそいつだ」

「そ、そうなんですか……?」

「いや、大したことしてないよ。かまえちゃんの手柄だつてば」

礼くらい素直に受け取らんか。バチは当たらんぞ。彩を睨みつけるが、気付いていない。

と、ここで唐突に彩が手を叩く。

「あつ、そうだ！四糸乃ちゃんと一緒に流れないプールを回ろうよ！かまえちゃん、お友達増えるよ！」

よ、余計なお世話だツ!!それより貴様、中々に慇懃無礼な奴だな!?

「友達だ?!?いらん!!」

「えー、でもその歳で兄貴と一緒にいるとか、かまえちゃん友達少ないよね?」

「私とついでに兄を馬鹿にしているだろう貴様!?!」

私が強く食って掛かっても、彩はまるで気にしていない。四糸乃がプールから上がるのを手伝っている。私以外は乗り気のようなのだ。くそつ、色無誠が現れてから上手くない。やはり奴は好かん。

「嗚呼、主人は兄君と上手く行っているだろうか」

澁々続いてプールから出ようとして、思わず口から不安が漏れた。

面白くない。

何故だ。主人は何故私を遠ざける。このような奴等と時間を共にさせる。

私が気に入らないのか。——何か、間違えたか。

私には、力しか無い。

——私は、無力なのか。



それは、凶報であり、吉報だった。

少なくとも、ASTの駐屯地で訓練をしていた鳶一折紙には、吉報だった。

「オーシャンパークにて、瞬間だけでも大きな霊波反応が検知されたわ。近くに色無誠がいるけど、火を放つ少女がいたという噂がSNSに何件か上がってる。間違いなく別に精霊がいると見ていいでしょうね」

「——！！」

AST隊長：日下部燎子が隊員を集めてブリーフィングを行う中、折紙は頭を強打されたかのような衝撃を受けた。

精霊。炎の精霊。

それはつまり、憎き両親の仇に——ヘイフリートに、他ならない。

この時を待っていた。

かつて、誠の『精霊は人間』という言葉に、心乱されたことがあった。

しかし、今の折紙に宿った暗い炎は揺らがない。

——例え人間であろうと、殺す。

「運良く近くに居た崇宮三尉に連絡を取ってるわ。暴れている様子は無いみたいだし、今は様子を見る。作戦決行は一時間後を予定するわ！各自、兵装とCR—ユニットのチェックをしてスタンバイ！解散!!」

各自が己の持ち場に戻る中、ワイヤリングスーツに着替えた折紙は一人、自分のCR—ユニットではなく格納庫の一角へ向かう。

そこでは、十名程の整備員が巨大な兵装の整備を急ピッチで行っていた。

「いきなり実戦かよ!!搬入してからへホワイトリコリスの動作テストやってねえんだぞ!?!」

「班長!ミリイに文句を言ってもどうにもなりませんぞ!」

「黙って最終チェックしろ!!三尉が戻ったら直ぐに出せるようにしとけ!!」

「何故ミリイはダメで自分はいいですかーっツ!?!」

上司に急かされ、悲鳴を上げて同僚のミルドレッドが整備するのは、へホワイトリコリス。理論上は精霊をも倒せるが、精鋭の魔術師ウィザードが30分も動かせない、DEM社新開発の欠陥兵器だ。真那ならば動かせるかもしれないとのことで、今はASTで預かって

いる。

その最高の失敗作を見つめる折紙の姿に気付いたミルドレッドが、工具を振り回しながら声をかける。

「んお？ おお、オリガミ！ どうかしたですか？」

「これは、動くの？」

「勿論ですぞ！ 弾薬も十分！ 火を入れれば今すぐ飛びますぞ！」

「そう——良かった」

折紙の言葉に引つ掛かるものを感じたミルドレッドだが、しかし全ては遅すぎた。機体正面に居た整備員を押し退け、折紙はへホワイトトリコリスを装着してしまう。

「オリガミ!？」

「へイフリート」を討伐する。出る」

随意領域が展開され、何者も折紙に近付けなくなる。鉄の塊を纏った少女が宙に浮かび上がると、格納庫の壁を突貫して飛び立ってしまう。

「何の騒ぎ!？」

「オリガミがへホワイトトリコリスで出ちゃったですぞー!!」

「はあ!？」

騒ぎを聞き付けた療子が慌てて格納庫に駆け付ける。随意領域に撥ね飛ばされてひっくり返っていたミルドレッドが、ずれた眼鏡を直しながら呆れたと言わんばかりに

叫ぶ。

「あんのバカ!! 誰か今すぐ出れる!?!」

「舞上勝兔二曹、行けます!」

「超特急で折紙を連れ戻して!」

「ユニットのスペックが違い過ぎます! 速すぎて追いつけませんよ!」

「巡航ミサイル抱えてでも追い付きなさい!」

「そんな無茶苦茶なあ!?!」

「なら、私が行きましようか?」

実力も装備も劣る舞上が、折紙を追い付くことも、ましてや止めることなど出来る筈がない。そう抗議していた所に、横槍を刺す人物が現れる。

「げえつ、執行部長!?!」

ミルドレッドが驚きと共に見つめるのは、DEM社執行部長——エレン・M・メイザース。世界最強の魔術師が、CR—ユニットを完全展開して立っていた。

「我々も、〈サツカバス〉……………色無誠に用があります。悪い話では、ないでしょう?」

日下部燎子に、肯定以外の選択肢など、無かった。

Date. 27 「二人羽織」

オーシャンパーク上空まで辿り着いた折紙は、疑問を覚えた。

「エイフリート」の反応が、二つある。大きな反応と、それより微弱な反応。計器の不調も疑ったが、誠と繰三は適切に判定出来ているのでそれはない。ならば何故違いがあるのか。折紙は思案し選択する。理由はともかく、より脅威になるであろう強い反応の「エイフリート」から潰す。

決断は下した。後は、余計なことは考えない。そもそも、自分がこの「エイフリートリス」をいつまで動かせるかも解らないと言うのに、悠長にしてはられない。

しかし、進路を変えた折紙の前に、淡いブロンドの髪を揺らして一人の魔術師が現れた。

「おや。「エイホワイトトリコリス」をそれだけ乗りこなし、尚且つバイタルも安定している。思いの外やりますね」

「——ッ!!」

追っ手。脳裏でその単語が浮かぶのと同様に、反射的に「エイホワイトトリコリス」が誇る二門の魔力砲を向ける。しかし、相手は世界最強の魔術師、エレン・M・メイザー

ス。照準が彼女を捉える前に、折紙の眼前に大剣の刃先が突き付けられていた。

「気が早いですね。私は確かにあなたを追つて来ましたが、連れ戻しに来た訳ではありません。用があるのは〈サツカバス〉だけですから」

「誠に、用？」

いつ攻撃されても対応出来るよう、折紙は随意領域をフル展開する。しかし、折紙の領内にいる筈のエレンは、平然としていた。

「ええ。あなたが〈エイフリート〉との対決をお望みなら、私はあなたに振り切られたことにしますので、存分に暴れて下さって構いません。では」

一方的に告げると、容易く随意領域から抜け出し、〈ホワイトリコリス〉を優に上回る速度で飛び去る。油断せず照準を合わせ続けるが、数秒で射程外に達し、捉えられなくなる。歯牙にも掛けられなかったことに敗北を感じつつも、折紙は降下を開始する。

世界最強に見つかった際にはどうなるかとも思ったが、無事に復讐の機会を得た。「増えた所で、結果は変わらない」

土道のデートに、殺意が降臨する。



「クソテン、焼きそば奢れ下さい」

「るるみー」

「お前ら……ラムネ買ってやったら……」

「こういう時ばかり息ピツタリで要求してきやがってこいつらコノヤロー……。俺に固定収入が無いって知っててこの仕打ちか。ツライぜ。」

「飲み物を買ったら食事も提供する。デートの定番でいやがります。ほれほれー」

「くーっ!!くくー!!」

真那が意図的に俺の腕に抱き付く。からかっても買わんぞーと思っていると、俺の頭の上にいる繰三が髪の毛を引っ張ってきた。よしなさい。何のつもりだよしなさい。禿げる。

仕方無い、まあ焼きそばくらいならさほど懐も痛まない。買ってやるとしよう。

「二人で一パックな」

「けちいー」

「るるみー」

「……真那の方が金持ってたんだから文句言うな」

「財布失格でいやがりますよ」

「ざぶきえる……!!」

ねえ神様。

こいつら触手で調教していい？

ちよつと真面目に検討して——

「!!」

霊力の流れに違和を感じ、流れの乱れに向かって反転。振り向く勢いを利用し、右手の人差し指と中指を揃えて振るう。

直後、レイザーブレードと指とが衝突し、鏝迫り合いのような状況となる。

「——いい勘をしていますね」

「あいにく、霊力の制御やらせたら精霊でもトップに食い込む自信あるんでねえ!」

相手は金髪の魔術師。くそつ、キヤラ被った。単機で来てはいたが、纏う雰囲気明らかにASTの比じゃない。相手の得意距離で闘いたくないな。距離を取るべく、足を狙って蹴りを放つ。

「反応は、よし。しかし——遅い」

「うおっ!?!」

が、随意領域に衝突した途端足を取られ、右足が動かなくなる。精霊のフルパワーを随意領域で掴んだってのかよ、とことんASTと格が違うぜ。

「クソテンツ!!そいつはDEM社所属の世界最強の魔術師、エレン・M・メイザースでい

やがります！私よりもナンバーが上で強いんで、気を付けねーとマジに死にますよ!？」

「先に言えや!？」

「言う前に挑んだでしょうに!!」

振り向いた時に振り落とした緑三を真那が拾い上げ、俺に注意を促す。もーちよつと早かつたら嬉しかったかなあ!？」

「おや、誰かと思えば。サボリですか?」

「二連休でいやがりますよつ!!」

あ、なんか真那に飛び火した。

「それより、どういうつもりでいやがります。誠は一応人間側の精霊ですよ。それを襲うなど、馬鹿げているとしか思えねーんですが」

いつでも装備を呼び出せるよう身構えつつ、真那はエレンとやらを睨む。その間も足を放して貰えなかったので、取り敢えず液化化して無理矢理引っこ抜いた。

「ふむ。確かにそれは言えています。ですが、思うような協力が得られていないということもまた事実。故に———実験材料になっていただいた方が、人類に貢献して頂けるかと」

あ。これヤバイやつだ。マジで殺りに来た奴だ。危険を察した俺が身構えると、それよりも早く真那が、CR—ユニットを呼び出して臨戦態勢を整える。

「どういふつもりですか、真那」

これには予想外だったのか、エレンは眉をひそめる。真那は世界最強を睨み付けたまま、口許に笑みを浮かべた。

「ちようどいいんでハッキリ言わせて貰いますが、私DEM社止めます。私の身体、随分弄くつてくれたらしいじゃねーですか。兄様も見つかつたし、恩義も失せたんで。辞表出してフリーの魔術師にでもなりますよ!!」

動いたのは真那。肩のパーツを展開して双剣に変え、交差するように横風ぎに振るう。エレンはレイザーブレイドへカレドヴルフを剣の軌道に差し込み、自分の太刀を挟ませる格好で攻撃を受け止める。

「バカなことを。アイクに牙を剥いて、あなたごときが敵うとでも?」
「今は一人じゃないんで、ね!!」

身を振って後方に飛び、距離を取る。真那の言動から俺が加勢すると思つたエレンがこちらを見るが、

「くふくふウツ!!余所見はナンセンス!次はわたくしですよ!!」

12人の繰三の分身が、エレンの周囲を取り囲み、剣を構えて一齐に突撃する。

真那が斬りかかつたタイミングで、繰三に触手を伸ばして魔力を返還。繰三の分身

【メッシュレット遍在】を出現させた。本体は今、俺の背後で高笑いしている。

完全な不意打ち。手数にも勝る。更に真那が双剣の剣先をエレンに向け、魔力を解き放って光線として発射。繰三の囲いを縫って援護射撃を加える。

しかし、エレンはその場で一回転してへカレドヴルフを振るい、繰三の群れも真那の光線も弾き返す。ただの、一撃で。

「くふっ!!」

「これはこれは………」

「よろしくないですわね」

格の違いを肌で感じた繰三の分身が、即座に撤退して本体を囲う。予想はしていたらしい真那は笑みを保つ余裕はあったが、それでも流石に冷や汗を流していた。

遠い。遥かに遠い。世界最強の座が。

「私以下の魔術師。大した霊力の無い精霊。有象無象が集まったところで、有象無象でしかありませんよ」

そう言っただけのけるだけの實力がある相手するのは恐ろしい。真那と繰三でダメなら、俺も加勢する他無い!!

「【整形^{マセカ}】解除——」

「兄貴!!兄貴いーっ!!」

「!?!」

突然の彩の声に、解きかけた変身を慌ててやり直す。な、何てタイミングで来るんだバカ!!

「来るな彩!危険だから帰れ!!」

追い返そうとするが、息を切らして走ってきた彩は見るからに冷静さを失っている。エレンの持つレイザーブレイドの輝きに気付いていない。俺しか見えていないのだ。

「兄貴!!どうしよう?!かまえちゃん飛んでっちゃった!!」

「はあ!?今ドツキリやってるどころじゃ——」

「空を見上げてたら、急に主人がどうのこうの言っつて、ジェットコースターとかある方に飛んでっちゃったの!!」

「何だっつて!」

司令の身に何かあった。それを裏付けるように、彼方より空気を震わす爆破音が響く。微かに聞こえてくる悲鳴。その後も爆音は途切れない。戦闘が始まっている。

一刻も早く、司令の元へ行きたい。しかし、精霊としての全能を発揮するには、彩に俺の変化を見せねばならない。そもそも、エレンが逃がしてはくれないだろう。

「お話は終わりましたか?」

「ああ……………これもお前の差し金か?」

「いいえ？ 鳶一折紙の望んだ事ですが」

……………折紙先輩……………。つまり、司令が、先輩の仇なんですわね。そっかあ……………そうなんだ。じゃあ尚更侍らせないといけないねえ？

「ええっ!？」

俺達が即座に察する中、彩が場違いなまでに驚く。エレンが先輩のことを知っているのは、恐らく調べたであろうから不思議ではない。よって、この場に於いて、折紙先輩の復讐心を知らないのは彩だけ。しかも、何を恨んでいるのかも知らない。何が起きているかも分からない。

彩だけが、知らない。

〈ラタトスク機関〉も精霊も、魔術師もASTも。——俺の事も。

何もかも知らない。

「兄貴、どういうこと!？何が起きてるの!？分かんないよ!!」

いずれ明らかになる事だった。どうせ隠し通せやしない。ならば、俺から明らかにしよう。

「……………彩。実はな。お前の兄貴辞めて、姉貴になっちゃったんだ」

「え?？」

「ほれ」

俺が彩の前で変身を解除する。キャミソールを纏う長身の金髪美少女に大変身。あー、何か久しぶりの気分だわ。ボッサボサ頭の目付きの悪い男性形態の方が、今じゃ疲れるからなー。

「え？——え？」

彩が、信じられないものを見たとばかりに身を震わす。

「この世界は、実はファンタジーに充ちているんだ。聞いてくれ、俺の真実!!」

俺はやはり、彩に嘘は吐かない方が気楽だ。そしてシリアスなんて嫌いだ。俺が見たいのはただ一つ、幸福から来る笑顔のみ。

さあ、始めよう。俺の第二の人生を、最愛の妹の中でも！

「水も滴る触手精霊、始めました!!」

両腕を天に掲げ、背中から触手を百数十本伸ばす。さながら蒼い孔雀の羽根の如く、俺の有り様を見せ付ける。

「えっ、ええええええええええっ!」

顎が外れそうな程の大口で、彩の口から絶叫が飛び出した。



炎の中から悠々と姿を現し、瓦礫を踏み抜いて、カマエルは挑発するように暴言を吐き続ける。

「フフフ………ハハハハ!! 温い!! 温いぞ鳶一折紙!! 私を殺してみろ!! そのデカブツは飾りか! そうだな、そうなんだろう!? 間抜けめ! 貴様が望んだ戦いだ、全霊を以て臨め!!」

「………指向性随意領域、座標固定ツ!!」

カマエルを随意領域が包み込み、ミサイルの雨が注ぎ込まれる。爆発が随意領域内で押し留められ、逃げ場を失った衝撃が全方位からカマエルの身体を粉碎する。

「まだまだ、私は膝を突かんで?」

しかし、煙が晴ればそこには、平然と立つカマエルがいる。琴里の水着と色違いの赤いビキニを纏い、不敵に笑っている。回復能力の恐ろしさを、まざまざと見せ付けるように。

だが、それを見つめる土道は気が気ではない。

妹と瓜二つの存在が、何度も何度もその身を焼かれ、斬られている。しかも、痛みは消せないで、カマエルは琴里のためにひたすら耐えているのだ。見ているだけで辛

かった。

折紙もそうだ。復讐に取り憑かれ、一般市民のいる中で攻撃を開始したのだ。このままでは、折紙は戻れなくなる。折紙の五年間研ぎ澄ました殺意について本人から聞いているからこそ、土道は折紙に止まって欲しかった。

だが、二人の戦いは予想外に呆気なく終了する。

「どうした鳶一折紙。そんなものか？」

「まだ。あなたを必ず殺す。五河琴里も殺す。ヘイフリートを全て消し去り……私の両親の復讐を果たす!!」

「——え？」

カマエルと琴里の声が、重なった。二人とも、茫然としていた。

「五年前の……大火災！私の両親の命を、私の目の前で奪ったこと、覚えていないとは言わせない」

「えっ……嘘……？」

「な、何だ……それは……!?覚えていない！知らないぞそんなこと!!」

琴里よりも、カマエルの狼狽ぶりが上回っていた。先程までの余裕は何処へやら、髪を振り乱して折紙を睨む。

「私は殺していない！断じて違う！町を焼いたのは認めよう！だが、貴様の面など今の

今まで知らん！貴様の親も知らん！知らんぞ！私は違う！違うぞおおおっ!!」

一頻り叫んだカマエルは、荒く肩で息をする。ゆっくりと琴里に向き直る。俯いたその表情は窺えない。しかし——

「カマエル、お前……………」

「兄君、主人を頼む。幸せにしてくれ。望みを叶えてやってくれ。理解した——私は、要らない」

「おい!?待て、何考えてるんだ!?!」

土道に答えたカマエルの足元に、雫が一つ落ちた。気付いた土道が息を呑む。しかし、それ以外言うことは無いとばかりにカマエルは振り返り、宙に浮かぶ折紙に向けて声を張り上げた。

「鳶一折紙、今一度問う!!貴様がその目でしかと見た親の仇は、五河琴里と断言出来るか!!」

「当然」

間髪入れずに返された返答に、カマエルは強く拳を握り締める。力を込めて強ばった手が、そのままひしゃげてしまいそうな程に。

「ならば、貴様の仇は五河琴里ではなく！五河琴里を操っていたこの〈灼爛殲鬼〉^{カマエル}であるッ!!仇を見誤るな!!」

「止めろカマエル!!」

犠牲に。身代わりになろうとしている。カマエルの意図を察した士道が制止すると、カマエルは再び振り返った。

「優しいな、兄君。だがな、罪は清算せねばなるまい。私は主人を導けなかった。主人の求めた強さを、私は力だと誤り、全てを焼いた。そのために主人が罪を負うなどおかし
かろう?」

「カマエル、あなた……………」

「主人。もぅいい。何も言わないでくれ」

それこそがカマエルの真意。

全ては、琴里の願った『強さ』の為に。

それが間違いだと、誰にも教えて貰えず挑み続けた。

「けど、カマエル!!お前はやってないんだろ!?!自信を持って言えるんだろ!?!なら、諦めるなよ!!」

「いや……………もう、真実なぞどうでもいい」

カマエルは、笑っていた。

酷く、寂しそうに。

「使命も果たせず、誰も私を必要としないなら、私が居る意味など無いだろう？」

——それは、士道が世界で一番嫌いな表情かおで。

「止めろおおおー！ツ!!」

折紙の振り下ろすレイザーブレイドが、カマエルのそのまま永遠にせんとしていた。

「——戻りなさい、〈灼爛殲鬼〉!!」

しかし、一撃が届く前に、カマエルの身体が霧散し、レイザーブレイドはアスファルトのみを切り裂いた。士道を押し退け、紅蓮の戦斧を握る琴里が折紙に向き合う。

「鳶一折紙。私からも言わせてもらうわ。私はあなたの仇ではない。悪いけど、他所を当たってくれる？」

不愉快とばかりに表情を歪める折紙だが、彼女が言葉を返すよりも先に、琴里の持つ戦斧が声を発した。これまでの琴里と変わらぬ声ではなく、僅かにエコーのかかった声だ。

『何故だ主人………私は………』

「何故？当然でしょう？冤罪には折れずに否と言いつける。常識中の常識よ。私、泣き寝入りなんて嫌いな」

地面と平行に得物を掲げ、琴里は折紙を睨む。睨み返す。迷わないという強い決意を込めて。

「アンタの涙を信じてみる。だから——寄越しなさい〈灼爛殲鬼〉。アンタの持てる力の全て、出し惜しみなく！」

『お、おお………おおおおおおお——！！！！』

大地が震える。溢れ出す霊力が、空間震ではなく空気を軋ませる。琴里の持つ最大の武器が今、真に琴里のモノとなる。

「鳶一折紙。私からの全力のノーよ、受け取って貰うわ」

「くっ………！！」

精霊。それは、人類にとっての災厄。世界の劇毒。あつてはならない存在。そして、少女の絶望を呼ぶ力。

士道は、琴里の求めたものはまだ知らない。

だが、一つだけ——突然頭に浮かんできた。

理由は上手く説明出来ない。だが、唐突に思ったのだ。

精霊とは——いや、天使とは。本当は、絶望に堕ちた少女を救うための、セー

フティーネットなのではないかと。

「さあ、私たちの論争ディートを始めましょう」

今、
天使カマエルと和解を果たした琴里を見て、
そう感じた。

Date. 28 「それぞれの道」

最後の一人だった真那が、地面にどうと倒れ伏す。

「そ、そんな……………兄貴……………皆さん!!」

膝から崩れ落ちる彩。その瞳に写るのは、世界最強の魔術師、エレン・M・メイザー
ス。

震える喉から、彩はただ一言絞り出す。

「勝ち方、エグ過ぎでしょ——ツ!!」

溢れる涙。溢れる唾液。

「おつ、おつ、おおおおおおうおおあおおおお——っ?!?」
 世界最強は、口から触手を幾本も生やして、白目を剥いて大地に倒れ伏した。

いやあ、執行部長は強敵でしたね。
 まさか勝てるとは。

とは言え、こちらにも満身創痍。彩を守りながら戦ったこともあり、俺たちも三人纏めて地面にぼったりと倒れている。戦っていた四人の誰も最後に立っていないとかどういうことだよ。強すぎだろ世界最強。

仮にも、精霊二体＋世界で五指に入る魔術師の即興チームだぞ。何でこっちが互角以上に立ち回られてんだ。

「正直、まぐれ勝ちというか……本当に対人精霊だから勝てたんじゃねーですか?」

傍らで仰向けに寝転ぶ真那が、呆れたという様子で俺に顔を向ける。

「うん。今回しか使えない奇襲だったからなあ」

作戦は単純かつ悪質。

空气中に俺の体を水蒸気にしてばら蒔き、呼吸を利用してエレンの体内に侵入、触手に変えて呼吸を奪う、という作戦だった。つまり喉ファックである。ちよつと鼻の穴の方にも触手を通したのはナイショだ。

この作戦、かなりの大博打だった。何せ、辺り一帯を俺の霊力で満たすとは言え、目論見が気取られれば即アウト。しかもエレンの随意領域を突破するには一瞬の隙を突かねばならなかったが、そのチャンスがなかなか訪れず長期戦となった為に、競り負ける可能性すらあった。

しかし、俺達は耐えた。単に俺の圧倒的防御力と治療能力にものを言わせたごり押し戦法とも言う。真那が技術で。繰三が手数で。交代交代で俺の治療を受けながら、エレン相手に粘って粘って粘りまくった。

そして、俺達三人が力尽きたと思つて油断したタイミングで触手をお見舞いし、何分間をも息継ぎさせない連続嘔吐を味わつて貰つた。こうして、三十分近い激闘は俺達の勝利で幕を下ろしたのだった。

「あーあ……私のCR―ユニット、完全にお釈迦じゃねーですか。回路が焼き切れて修理もできねー状態でいやがります」

その結果、真那のCR―ユニットは限界を超えて稼働し、修復不可能なまでに破損

した。夢のフリー魔術師の道はお預けですなーと言いつつ、相棒ムラクモとの別れを惜しむ真那。安心しなよ、そんだけ大事にされたら相棒も恨んでないだろうさ。

「じゃあさ、へフラクシナスで雇ってもらえば？」

「あ、それいいかも。クソテン、口利いてくださいな」

「へーへー」

真那の売り込みなど必要ないんじゃないかなーと思っていると、俺の左隣に俯せで寝ていた繰三が、ポンと小さな破裂音と共に縮んだ。人間大を維持出来なくなったらしい。

「繰三もお疲れ。助かった」

「やれやれですわぞ、やれやれですわいきえる………」

こちらも限界まで力を使ったようだ。正直、繰三の分身による人数的優位はかなり助かった。今度またケーキ買ってきてやろう。タルトはやらんが。

よっこらせ。面倒なんで上体だけ起こすと、エレンに纏わり付く触手に指令を出す。触手はスルスルとエレンの口から抜け出すと、一部がエレンの身体を縛り上げ、残りがエレンのCR―ユニットを外して俺の元に戻ってくる。

俺に還元された触手の霊力で、真那と繰三の簡易治療を行う。これで、改めて三人揃って立ち上がれるようになった。

エレンの意識は依然戻らない。接戦だったが、勝てば官軍とは良く言ったもんだ。さて……………と。こいつどうしようか。

自然と俺達は見合わせた。

「ヤつちやう?」

とは真那の台詞。

「ヤつちやいましょうか?」

と続く繰三の台詞。

「ヤつちやおうぜ?」

と俺も続く。

「「その為の触手?」」

揃うは、しょうもない台詞。自然と笑みが溢れる。

「あはは」

「くふふ」

「いひひ」

俺達が笑いだした時、丁度エレンが目を覚まし——戦慄した。無理もない、丸腰の状態で、触手を展開しながら笑う俺と相對するなど……………結果は見えているからな。

「やあ、世界最強。——俺達の調教デイトを始めようか？」

「ひ……いや………あ、アイク……っ!!」

悲痛な絶叫が、静かになったオーシャンパークに木霊した。

有栖部彩は全てを見ていた!!

自動販売機の影に隠れていた彼女は後に語った!!

どっちが悪役か分からなかったと!!



既に、初めから決まっていたのだ。

己を振るう主が折紙の指向性随意領域を切り裂いた時、〈灼爛殲鬼カマエル〉は感じていた。

ボタンを掛け違えた服のように、ちぐはぐだったこれまでの精霊〈イフリート〉。今、琴里とカマエルは精霊としてあるべき姿に戻ったのだ。

初めから。琴里の前を行こうとしたことが間違いだっただ。

カマエルは、琴里を知らずして琴里を導こうとした。心の強さを求めた琴里に、力

の強さを与えてしまった。だから、足並みは揃わない。カマエルが琴里の為と躍起になる程に、琴里はカマエルから離れていく。

必要なのは、手を取り合う事だったのだ。同じ歩幅で、並んで歩けば良かったのだ。折紙が叫び、空中に随意領域が現れる。それを切り捨て彼女に迫る。精霊として完成した琴里に、〈ホワイトリコリス〉では最早力不足。折紙を無力化すると決め、躊躇いなく振るわれる戦斧は、折紙の殺意の尽くを一蹴する。既に残弾の無い折紙は、接近してレイザーブレイドでの攻撃に切り換えていた。

「これで——終わりよ!!」

斧を避けて距離を取った折紙に向け、琴里が〈^{カマエル}灼爛殲鬼〉を投げつける。得物を捨てる悪手。攻めあぐねて焦りを覚えていた折紙が、好機とばかりに突撃する。

しかし、それこそが悪手。琴里の手を離れた戦斧は、空中で琴里と瓜二つの少女に変化する。琴里と色違いの緋色の霊装を靡かせ、少女は滞空して不敵に笑った。

「覚えておけ。我が名はカマエル。我が主人の天使——灼爛殲鬼であるッ!!」

天高く突き上げた右腕。その肘から手首までにかけてを炎が覆い尽くし、腕を柄に斧を為すかのように燃え盛る。

「くっ!!」

折紙が気付くが、もう遅い。既にカマエルは腕を降り下ろした。

「これにて決着としよう!!」レハヴェーガルゼン【焔の斬斧】!!」

炎の刃がへホワイトトリコリスのボディに触れ、熱した鉄をバターに当てたかのよう
に金属を溶かしながら、容易く両断する。随意領域が維持出来なくなり、黒煙を上げ
て墜落して行く。

「五河………琴里——ッ!!」

憎々しげに、天に浮かぶ二体の炎の精霊を見つめる折紙。墜ちていく視界の中で、
頭を過るのは両親を喪った、あの日の光景。憎き精霊に見下ろされる、五年前の記憶。

そして、ふと思った。

かつて見た仇と、姿形が違いやしないかと。

想い出の中の敵と、目の前の敵とを比べる間も無く。強烈な衝撃を全身に受けた折
紙の意識は、闇に沈んでいった。



俺達がエレンにやることやってスカッとサワヤカな気分です遊園地エリアに行くこと、
そこでは案の定全てが終わっていた。土道先輩に司令、カマエルは元より、十香と四糸
乃も揃っていた。最後二人の出番は無かったようだな。いや、そのほうがいいんだが。

「遅い！」

「言い訳はしません。はい」

取り敢えず司令に平謝りしてから、俺は廃墟と化したメリーゴーランドに墜ちている鉄の塊を見る。

「折紙先輩……………」

「言つとくけど、殺してないわよ」

「ハナから疑ってないです」

「あ、そう……………」

俺の盲信ぶりに呆れた司令を放置し、折紙先輩の体調を確認する。気絶しているだけで、ダメージはほぼ無い。これなら一日安静にすれば本調子になるだろう。

よし、まずは先輩をどっかに寝かせて様子を……………ダメだ。このデカイCR—ユニットの外し方が判らん。どうなってんだ？よし、真那に頼ろう。

「おーい真那、このデカブツの外し方分かる？」

真那にこつち来いとジェスチャーすると、偉く嫌そうな表情をしながら近付いてきた。やる気出してくれ、同僚だろーに。

「はいは——うえっ!?!これ、DEMの試作機じゃねーですか!?!姉様に使用許可なんて下りてるハズがねーですよ!?!」

——は？

「え、何？折紙先輩、無許可で使った奴壊したの!?ヤバくね!」

驚きのあまり、結構上擦った声を出してしまった。そーいやASTと戦いすぎて見慣れたが、随意領域つて最新技術の結晶なんだよなあ。その試作機つて……………制作費幾らだ？頭痛くなってきた。

「……………かなーり……………ヤバイでしょうね。これは進退に関わりません。ASTの名簿から消えてもおかしくねーですよ」

「無断使用だけならともかく、これでは訴訟問題になる可能性もありますわね」

どうすんだこれ。マジでどうすんだ。

「折紙が精霊と戦えなくなるのは、俺としては歓迎すべきことなんだろうけど……………」

「でも土道先輩、折紙先輩ならASTに忍び込んででもCR—ユニット手に入れそうですけど」

「それなんだよなあ……………」

土道先輩が頭を掻く一方、十香は何がいけないのか分かっていない様子だ。

「む。悪事をするなら警察に逮捕されるぞ。鳶一折紙が邪魔で無くなって良いではないか」

「いや、そうもいかない。折紙は精霊を殺すことが生きてる理由みたいなものだし

……四糸乃からよしのんを奪うみたいなものなんだよ」

「成る程。鳶一折紙は嫌いだが、ちよびつとだけ同情してやらなくもないな」

共に過ごすうちに、十香も折紙先輩への態度が少し軟化したな。同じ人が好きなん
だもの、互いを良く見ることになるからな。

さて、どうしたものか……。折紙先輩を助けつつ、尚且つ誰も損しない方法
……。

……あ、あるわ。これはいい。面白い。

さあ。俺の愛しの仲間の為に、一肌脱ぐとしましょうか!!



エレン・M・メイザースは執行部長である。

CR—ユニットは今無い。

どうして無いかと言えばオーシャンパークに理由がある。そこで出逢った悪魔の
ような三人組に持っていかれた。うち一人は顔見知りだ。

明らかにこちらが優勢、圧倒的状況であった。ターゲットの色無誠も、裏切り者の
崇宮真那も、贗作精霊の時崎繰三も、三人揃っても自分に敵う要素が無かった。その、は

ずだった。

だのに、三人とも地に伏し勝ったと思ったその油断を突かれ、自分の想像を絶する辱しめを受けた。

思えば恐ろしい夜だった。

手足を触手で拘束されたまま、捨て猫のように段ボールに入れられてオーシャンパーク入り口に放置された。触手は自由を封じるだけでなく、ワイヤリングスーツの上から身体中を撫で回してきた。特に耳を。

無理矢理与えられる全身マッサージのような快感に悶えつつも何とか夜をやり過ぐすと、靈力の切れた触手が水に戻り、ようやく自由の身となった。今朝六時の話だ。

私服に戻り、通り掛かったタクシーを拾ってASTのある陸上自衛隊天宮駐屯地まで辿り着く。財布から料金を払おうとすると、中身が一万二十八円しか無かった。もう三万はあった筈だが、真那辺りに抜き取られたらしい。腹いせに運転手を殴りかけた。九時を回った、つい今しがたの話だ。

それでもタクシー代は払えたので、駐屯地に入っていく。ASTの区画に入ると、子猫を思わせる岡峰美紀恵とか言う小柄な隊員が、今朝一番に届いた荷物だと言ってクール宅急便の箱を渡してきた。

何かと思つて開けてみれば、ドライアイスでキンキンに冷やされた待機状態のへべ

ンドラゴンが入っていた。差出人は真那だった。箱を投げ捨てて泣いた。岡峰が缶コーヒーをくれた。温かくて泣いた。現在進行形の話だ。

岡峰を抱き枕の代わりにして通路のベンチで拗ねていると、足音が近付いてきた。聞き慣れた足音だ。

「やあ、エレン。随分と面白い経験をしたらしいじゃないか」

「あ、アイク……………」

顔を上げれば、そこには自身が絶対の忠誠を誓う、DEMを牛耳る男・アイザック・ウエストコットがいた。さぞ愉快そうに笑っている。

「今朝は早くからAST上層部で会議があつてね。面白そうだから参加していたのさ。実際、収穫もあつた」

ウエストコットは後方に顔を向けると、手招きして背後にいた人影を呼び寄せる。

「紹介しよう。今日から精霊研究に協力してくれる、イロナシマコトだ」

「おつ、昨日ぶり。宜しく執行部長」

そこにいたのは、エレンにとつて一番会いたくない相手の一人で。

気付けば自分でも良く分からない声を上げながら、コーヒーの缶と岡峰を投げつけていた。

閑話―触手マテリアル―

Material. 1「プロローグ～四章」

〈色無いろなし 誠まこと〉

—MAKOTO IRONASHI—

Spirit No. —

Astral Dress—Succubus Type

Weapon—Core Type「Almisael」

総合危険度AA

空間震規模D

霊装B

天使AAA

力 170

耐久力 329

霊力 207

敏捷性 50

知力 150

性別：♀／♂

血液型：O

年齢：16

誕生日：4／27

身長：175cm（男女共通）

体重：67kg（男性時）

3サイズ：97／64／88

趣味：ゲーム（ジャンル問わず）

好きなもの：美少女／美幼女／美熟女／子供／彩／琴里司令＞春巻き

嫌いなもの：子供嫌いの奴／茄子

本SS主人公。良くも悪くも欲望に忠実。座右の銘は『仲間の為なら一枚脱ぐ』
『おっぱいに貴賤上下無し』。口癖は『にべもねえ』。とにかく美女好きだが普通に男性
の友情も大切にする。ハッピーエンドが好きそのため、自分の仲間の為に精霊の力を振る
う『人類も精霊も同胞と見なす』精霊。

十香と士道が出逢った四月十日、運命が動き出した日に、道端で無色透明の聖結晶^{セフィラ}
を拾ったことで、元男性の精霊という異端になる。

精霊としての容姿は、金髪碧眼の巨乳長身美少女。眼はつり目。ばるんばるんしよる！一方で、男性時は癖つけのある髪にキツめのつり目で、何は無くとも睨まれていると誤解されることがあった。

女性になったことは気にするどころか寧ろ人生勝ち組だと大喜び。このままでいいと考えているが、琴里に恋したことで少し考え直し始めている。

思考回路はバカだが、精霊になつて高校に通えず、暇を持て余した結果図書館で本の虫になつたため、高校の指導要領までは完全に習得している。

二重人格であり、裏人格の誠は好戦的・加虐嗜好・自己中心的。

*精霊へサツカバスとしての立ち位置

極端に空間震の被害が少なく、人間にも友好的な精霊。精霊対策の切り札となり得る為、各国が水面下で協議中。現状有利なのは、友人のいるASTと、研究協力を取り付けたDEMインダストリー。本人はへラタスク機関へ寄り。

精霊としての役割は『拠点』。仲間のフォローを行うことに長けている他、液状化出来るため物理攻撃にはほぼ無敵。反面、身のこなし自体は普通の人間とさほど変わらないために、素早い敵とは相性が悪い。

*霊装へ神威霊装・無番

キャミソールと、带状の前垂れのある腰布、サンダル、そして水晶の髪飾りからな

る青い霊装。特殊な能力は何一つ無く、防御力も霊装の最低限度。そのため、防御は誠自身の打たれ強さに依存する。

* 天使〈触抱聖母〉
アルミサエル

30cm程の水晶の形をした天使。能力は『霊力譲渡』。天使を取り込んだ本体の身体を水に変えて、その水を利用して他者に霊力の補給や治療を行う。

【寵愛】
キッド

水の触手を作り出す。数は百を下らない。本来の用途は霊力を供給するパイプ。

【棘鞭】
ザナグ

触手に圧力をかけて高速で放つことで、ウォーターカッターの要領で物を切り裂

く。現状唯一の攻撃専用能力。

【錬装】
ツイウツト

封印状態の精霊の霊装に自身を纏わせることで、擬似的に全力時の霊装と天使を再現する。誠単体で再現は不可能。

【福音】
ハエム・ハクドシヤ

誠最大の特技。触手を集めて人一人が軽く収まる水の球を作り、中に入った存在を、肉体・精神問わずに完全な状態に癒す。遺伝子情報から肉体の複製も可能。但し『無から有は産み出せない』ため、生命の創造は不可能。また生まれつき精神疾患を抱えて

いる場合も治療不可能。

使用時には後光を模した飾りが後頭部に現れ、ケープを肩に纏い、聖母を思わせる装いへと変化する。

ツイット・ナフハ
【晶製】

自分の霊力を濃縮することで固形にする。誠の霊力には微弱な快楽物質分泌作用があり、濃縮して使用することで、快楽を用いた恐怖抑制や鎮痛効果がある。このため、錠剤にすれば治療薬にもなるが、濃縮するほど媚薬になる。

〈時崎 繰三〉
とどきざき くるみ

Spirit No. 3 | Another

Astral Dress | Nightmare Type

Weapon | Clock Type [Zafkiel]

総合危険度 B

空間震規模 D

霊装 C

天使 B

力 140 (109)

耐久力 110 (80)

霊力 87 (220)

敏捷性 146 (103)

知力 201 (201)

※括弧内の数値は狂三のもの

狂三との身体的違い：全くなし

好きなもの：誠／触手／動物

嫌いなもの：彩（一方的恋敵）

誠が狂三の分身を治療し、独立した精霊として変化させた存在。狂三と霊装のカラーリングが変化しており、オレンジ色の部分が白くなっている。

全体的なスペックが向上した一方で、霊力が極端に減少している。天使も弱体化しており、精霊の持つ人智を超えた奇跡の体現はほぼ不能。実質的に『劣化』したと言える。

霊力が底を尽きると、身長10cm程の二頭身マスコットに変化する。霊力消費を極限まで抑えた姿であり、普段はこの姿で過ごすことが多い。この間は『くるみ』の関連語か『ざふきえる』としか喋れない。これは俗称『繰三語』と呼ばれ、精神的にピュアである人物にしか理解不能。誠は例外。

天使は〈刻々ゼフキエル・メグイエフ、偽帝〉。文字盤と、時計の針を模した長短一対の双剣からなる。能力は、『時の正常運行』。あらゆる時間操作に干渉することが出来るが、それ以外には意味がない。また、〔メシヤレット遍在〕で繰三の分身を12体作り出すことが出来る。時間を切り取る狂三と異なり、霊力で分身を維持するため継戦能力に劣る。なお、副次作用で、任意の土地の時刻が正確に把握できる。

誠惚れているが、単に触手の快楽に堕ちただけではない。敵だった自分、救う価値の無い筈の自分を助けた誠の優しさが原因。どうやらチヨロい个体だった模様。以後、誠に対して大変積極的になる。しかし、舞上の事例から、誠に『触手を気に入った』と思われるおり、まるで思いに気付かれない。

人間嫌いは解消された、とまでは言わないが改善はされている。ただ子供は苦手。

〈ありすべ有栖部あや彩〉

性別：♀

血液型：B

年齢：15

誕生日：3 / 17

身長：153 cm

3サイズ：80／57／77

趣味：トランペット

好きなもの：サンドイッチ

嫌いなもの：オクラ

色無誠を兄貴と慕う、妹分。いつも明るく元気。表情がころころ変わる。精霊とも魔術師とも無縁の人生を送ってきた、正真正銘一般人。この度兄が精霊になり、めでたく一般人を卒業した。

仙城大学附属高校一年生。学年で言えば同じ高校一年生なのだが、年がほぼ一歳違う。それが明らかになった際には本気で「ずるい」と抗議したことがある。

能力的には普通。学校の成績も10段階評価で殆どが8。高い社交性と土壇場での度胸の強さから、注目を集める場面に強い。また施設の手伝いをしていたことから、家事はそつなくこなす。

両親を交通事故で喪い、身寄りが無かったため施設に入所した。そこで誠と出逢うが、初対面の印象は悪いどころか無関心だった。現在では実の兄妹も同然の関係。

頼み事する際、親しい相手には『一生のお願い』と言う。特に誠に何か頼む際には、些細な内容でも確実に使用する。

兄の女性化（精霊化）については、事実としては受け止めたが、依然気持ちの整理が付かない模様。出来れば戻ってほしい。

〈カマエル〉

琴里との身体的違い：体重＋1kg（角の重み）

好きなもの：琴里

嫌いなもの：琴里の邪魔者

色無誠の手で肉体を与えられ、琴里から強制分離させられた天使〈灼爛殲鬼^{カマエル}〉の思念体。実質的に精霊であり、霊力は琴里と同質。パワーで琴里に劣るが戦闘技術は勝る。カマエルの意思が天使に戻ると、琴里に戦闘技術が還元される。

カマエルは琴里と霊力を共有しており、土道と精霊達が見えない霊力の経路^{パス}を持つように、琴里との間に経路がある。そのため、琴里が封印されると連鎖的にカマエルの霊力も封じられる。

琴里との見かけ上の差異は、髪色がオレンジであること、瞳が黄色であること、常に角が生えていること。霊装は色違いで、緋色の和装。着用するリボンも赤いものを付けており、一目で判別が付く。

琴里至上主義だが一般常識に疎く、トラブルメーカーになりがち。琴里の霊力が封

印されていた期間、カマエル自身も封印されて眠っていたためである。

琴里が精霊化した際に願った『強くなりたい』という願いを『力が欲しい』と誤解したため、カマエルは尊大・好戦的な人格を形成。琴里と自身を同化させることで、傷付くことを恐れない力の精霊に相応しい存在にしようとしていた。

横暴な手段で琴里を強くしようとしていたが、琴里のことを思っていたのは本心。折紙の両親殺しの罪を琴里に負わせたと感じた際には、本気で琴里の為に死ぬ気だった。

普通の人間として戸籍が作られ、五河家次女として迎えられる。戸籍上は『五河火万柄』表記。

〈舞上まいがみ 勝兎しょうと〉

性別：♀

血液型：A

年齢：17

誕生日：5 / 21

身長：157 cm

3サイズ：71 / 55 / 75

趣味：読書（恋愛もの）

好きなもの：イチゴのショートケーキ／（真那／触手）

嫌いなもの：台所で蠢く俊足のG

A S T所属、折紙の同僚魔術師^{ウィザード}。階級は二等陸曹。通称前髪カチューシャ。名無し
のモブのはずがネームドモブに昇格された。

実力は決して低くないのだが、これといつて精霊に恨みがある訳でもなく、折紙と比べて執念に欠ける。また、単独で飛び出す傾向があり、真つ先にやられがち。真那に指摘されてから、長柄の武器や遠距離武装を装備して突撃し、中距離戦闘を展開するようになったため被弾率が減少した。

折紙には何かと負けているため軽くライバル視しているが、尊敬してもいるため関係は良好。

現状、真那に惚れている。それまでは普通の男女恋愛に憧れていたため、自分でも少し困惑している。更に誠の触手の虜であり、真那と触手と常識の間で揺れている。

竜胆寺女学院二年二組。A S Tに所属しているため部活動はしていない。

第五章―八舞テンペスト―

Date. 29 「WELCOME to DEM!!」

鳶一折紙は目を閉じる。

思い出されるのは、つい数時間前の出来事。

「鳶一折紙一曹を、懲戒処分とする」

査問の場に於いて告げられた判決。部屋で、幹部達の視線を一身に受けていた折紙は、良くそれだけで済んだと思った。しかし、自分が力を奪われたことには、代わりがない。

無力。悔い。未練。そして決意。

例えばASTとして闘えなくとも、まだ全て終わった訳ではない。イギリスの対精霊部隊SSSには知り合いがいる。彼女らを頼るというのも一つの手だ。手段を選ぶ余裕が無い。そうでなければ、両親の仇が誰かも分からぬまま――

突如として響く、思考を中断する轟音。

一同の視線が、たった今破られたドアに向けられていた。

「あらら、俺こんな注目されたの初めて。ハッズカシー！」

そこには、ドアを撥ね飛ばしたであろう右掌を突き出したまま制止する、識別名〈サツカバス〉——折紙の後輩：色無誠が立っていた。

「何をしに来たの」

静寂の中、折紙の平坦な声が響く。

「あ、先輩。おはようございます。いやね？彩から、折紙先輩にカフェで一杯奢ってもらったって聞いたんで。細やかながらお礼しに来ました」

そう言うと、誠は折紙の位置まで歩みより、彼女を裁く幹部達から庇うように仁王立ちする。

「お初にお目に掛かります。わたくし、識別名〈サツカバス〉。色無誠——精霊です。今日は皆さんにお伝えしたいことがあります。正面に相対する桐谷陸将が口を開く。」

張り詰める空気。幹部達が息を飲む中、正面に相対する桐谷陸将が口を開く。

「聞こう」

「ありがとうございます。では……………」

誠が頷く。と同時に靈力を解き放ち、会議室を覆い尽くし、折紙を護るように触手

を展開する。

「覚えておけ。よく覚えておけ。鳶一折紙はこの〈サツカバス〉とASTとを繋ぐ代理人。彼女無くして俺と交渉出来ると思うなよ、AST」

霊力の暴風が吹き荒れ、室内が蹂躪される。傷害が目的でないこの圧力は、しかし折紙以外の人間を床に薙ぎ倒すには十分過ぎた。

最早これは査問ではない。一方的な通告。鳶一折紙を失うことは、ASTが掴みかけた精霊対策の切り札を喪うことを意味する。尚且つ——ここで殺される。

「な、何故だ!!何故鳶一曹でなければならん?!」

机にしがみついて堪える桐谷陸将が叫ぶ。冷やかな視線と共に、刺すような気迫で誠が返す。

「私が決めたんだよ。これ以上私の機嫌を損ねないうちにさっさと従え」

更に険しく睨み付けた途端に、陸将が身体を預けていた机が音を立てて割れ、背後の壁に叩き付けられる。傍らの折紙以外に立っている人間がいなくなると、誠は触手も霊力も引つ込めた。そして、

「決まりましたかあ、オ・ジ・サ・マ?」

自身が美人だと理解している女の作り笑顔を投げ掛けた。

誠が内心でしてやったりと思っていると、折紙がぐいと誠の肩を掴んで向き直らせる。

「……………何をしているの」

「へ？」

「あなたは……………私の為とはいえ、遂に自分の欲望の為に、公権力に対して力を使った。もう、ただの中立精霊ではいられない」

「あ、あ……………確かに……………」

誠の笑顔が引き吊る。やってしまったと思っているようだ。つくづく思慮が足りない、とばかりに、折紙は表情を変えずに小さな溜め息を漏らした。

しかし、やってしまってもただでは起き上がらないのが色無誠だった。

「あ……………じゃあこうしましょう。交換条件でどうです？折紙先輩の処分を撤回した場合、俺が新装備開発に協力するって感じで」

先程までと較べるとかなり低姿勢になった誠。しかし、それに答えたのは、桐谷陸将では無かった。

「素晴らしい！それは願ってもみないことだ。陸将、是非その提案を呑んで戴きたい」

既に戸を打ち破られ、開かれたままの入口より一人、男が悠然と姿を現す。

DEM社業務執行取締役、則ち世界で唯一の顕現装置メーカーのヘッド——
アイザック・レイ・ペラム・ウエストコット。

以前、誠も見せられたことがある。言わば、〈ヘラタトスク機関〉の、最大の商売敵。その、親玉である。

「我々も顕現装置開発に行き詰まっておりますね。開発部に新たな風が欲しいと思つていたところなのです。ASTにも、より質の高いCR—ユニットを提供出来るようになりましょう」

痛みに耐えつつ立ち上がった陸将は、ウエストコットに見えぬよう歯噛みした。ASTよりも上質の装備を揃えた私兵を持ちながら、よくもぬけぬけと。しかし、色無誠が技術提供すれば、相対的に装備の質が高まるのもまた事実。

だが。桐谷陸将とて、譲れないものがある。

「それとこれとは話が別だ。そちらの試作機を無断で持ち出した上に大破させた鳶一折紙一曹の処分はせねばならん！」

はつきりと断言した。したのだが……………。

「住居はこちらで用意しよう。当然、給金も出させて貰うよ」

「幾らっ？」

「言い値でどうかなの？」

「——気に入った」

「——商談成立だ」

陸将を完全に放置して、ウエストコットと誠が固く握手していた。その様子を、冷やかに折紙が見つめている。

「勝手に話を進めるな貴様ら!!」

苛立ちを隠さずに言葉にする桐谷。しかし逆に、お前は何を言っているんだと言わんばかりの疑念に満ちた視線を投げ掛けられる。

「え? まだ片付いてないの?」

「これ以上話し合う必要などありますか?」

「貴様ら……」

場を掻き乱すことに定評のある精霊と、何を考えているのかまるで解らない取締役。最悪のタッグを相手にして、陸将の心労は最早ブレーキの効かない暴走車のよう蓄積されていく。俗っぽく言えば、もうやだこいつら、といったところか。

苦虫を何十匹か噛み潰したようにくしゃくしゃになった顔で、陸将は喉から声を絞り出す。

「……………鳶一折紙一曹」

「はっ」

「懲戒処分を撤回、二ヶ月の謹慎を命じる」

「しかし陸将、それは——」

精霊はともかく、一般企業の圧力に屈するののか。折紙が自分の立場も忘れて異を唱えようとするが、

「じゃあその間、先輩もテストパイロットやれば良くね？」

「それはいい。へホワイトリコリスを乗りこなした魔術師を、一時とはいえ手元に置けるのは願ったりだ」

「謹慎という言葉の意味を知っておるのか貴様らア!!」

二人だけでどこまでも勝手に話が進んでいた。

——そして、今に至る。

突然過ぎる環境の変化。

明日より折紙が通うのは、DEM日本第一支社。学校と、自宅と、DEMの研究施設を往復する二ヶ月が始まろうとしていた。

しかし、これはチャンスである。DEM社の魔術師は総じてレベルが高い。折紙の

戦闘技術を向上させるには、十分過ぎる環境だ。また、テストパイロットとして、一時とはいえ専用機が得られる可能性がある。

——誠感谢你ねばならない。折紙はひしひしと感じていた。相変わらず後先考えない無茶をするが、仲間思いな点だけは確か。結果的に助けられた。

だが。思えば、誠は結局誰の味方なのだろうか。精霊に肩入れしているかと思えば、こうして人間にも味方する。双方の味方と考えていたが——均衡を保とうとしているようにも思える。

考えても答えは浮かばず……折紙はそれ以上考えるのを、止めた。



俺、色無誠。今日からサラリマン、いやキャリアアーマン？とにかく高給取りになりました！イエー！

「お金が増えるよ、やったね繰三ちゃん！」
「くるみみみ」

オフィス街に行く俺と、俺の着ている童貞を殺す服の胸元から顔を覗かせるちび状態の繰三。道行く人の注目は必然的に集める訳だが、写真撮りたい方には普通に応じな

がら歩いていく。

「ふふふ、繰三、そう言うな。今日から俺達、メシが豪勢になるぞ？一汁三菜安定だぞ？」

「み！みみみ！るみー！」

「何イ？ビュツフエにローストビーフう？食えるともよ！アイザックから前金貰ったからな！」

「ギ！ふきえるー！」

嗚呼、財布の中が久々に暖かい。この間繰三に水着買ってやったせいで有り金の大半を失い、一日百円生活を覚悟してたからな。今は懐に50万ある。え？世界的大企業から貰うにしちやあ少ないって？いいんだよ、俺の言い値だもん。

「しかも今日から風呂付き家具付きベッド付きの家だ！文明万歳！！」

「みー！」

アイザック、お前のこと気に入ったぜ！仲良くなれそうな気がするな！金の亡者的友情！そら金は命よか重いっすからねえ。

………：そーいや、行く前に琴里司令に何考えてんだってキレられたなあ。潜入調査って言っても許してくれなかったしなあ。まあわりと好き勝手するつもりだけど。

「みみみ」

「——あーはいはい、お前にはお見通しだよなあ。俺が司令から離れたいってのは」

流石にさ、フラれていきなりいつもの調子で付き合えつても無理じゃん？へタレ言うなやコラ。俺だってケツコー堪えてるんよ。俺の初恋は自覚と同時に光速で粉碎されたんだぜ？

「みみ。みみみー」

「ん？着いた？ここかあ……………」

並び立つビル群の中でも、一際高く空に聳える黒鉄の城……………じゃねえ、高層ビルだ。ここが俺が厄介になる、DEM社日本第一支社である。

聞くところによると、ここ鏡山市のオフィス街に立つてるビルの大体が、DEM社関連施設らしい。くっそ、ボンボンめエ！ボンボン企業め！何か前金を二、三倍は要求しても良かった気がしてきたぞ。

……………まあいいさ。ここで俺は今日から月給100万生活が始まるんだ。ガッツリ稼がせて貰おうじゃないか。何かこの機会を逃すともう稼げなくなる予感がピンピンにしているな。

「みみ？」

「ん？受付に俺の名前を出せば、担当の人が来るってアイザックが言ってた」

すれ違うスーツのDEM社社員達の視線を軽く流しつつ、堂々と正面から乗り込む。社内に入れば、先程とは比べ物にならない程に社員達から注目された。しかし何を

気にする必要があるうか。俺はお呼ばれしてるんだぞー、と受付に向かう。

「すいません、色無誠と申しますが」

アイザックに聞いた通り、受付嬢に名前を告げる。――が。

「はあ」

あれ。え、何それは。そのうつすい反応は何すか。

「……………あの、アイザック取締役から話通つてませんか？」

「ありませんね」

……………。

「アイザーーーーーッック!!!どうなってんだアイザーーーーーッックッック!!」

「申し訳ありませんが、お引き取り願えますか？」

受付嬢に、いい笑顔でバツサリ切られた。なんだこれ。なんだこれ!!俺間違えた？

実は明日だったとか？

「にべもねえ!?!いやあ、ちよつと確認とか取つて貰えませんか!？」

「ですが、向こう一ヶ月の予定の何処にも色無誠様のお名前はございせんが」

食い下がつてはみたものの、受付嬢は俺の足搔きを完全シャットアウト。とりつく島もないとはこの事か。ひでえ。周囲から凄く残念なものを見る視線と、くすくすと笑う声を感じる。

「ウツソだろお前!? 予定管理ガバガバかこの会社!? YO!?!」

「あまり騒がれると他の方の迷惑になりますので……………」

「現在進行形で俺が迷惑してるんですけど!?!」

受付前で俺がギャーギャー騒いでいると、警備員が二名程やって来て俺の腕を掴む。

「ごめんねお嬢ちゃん、悪いけどイタズラは他所でやってね」

「どうか高校生くらいだよね君。そろそろこーいう遊びは止めるべきだよ」

そう微笑むと、俺を入口に運び出そうとする。有名な、宇宙人が捕獲された時の写真みたいな感じで。

……………俺の中でプツツンと堪忍袋の緒が切れた音がした、丁度その時。

「何の騒ぎかな?」

俺が摘まみ出されんとしていたまさにその入口から、悠々とアイザック・ウエストコットが姿を現した。場の空気が水を打ったように冷ややかになる。社員一同、凄まじく緊張しているのが明白だった。

「おーいアイザック、これどうなってるの?」

「申し訳ありません。子供の悪戯です」

「今、追い出します」

不手際を見られたと思った警備員が、アイザックに向かって声を上擦らせる。俺を掴み上げる力が増している。手汗もだ。ちよつと、女の子をおっさんの汗でベタベタにするとか非常識ですよ。中身男だけど。

しかし、アイザックは微笑を浮かべ、手でそれを制止する。

「ああ、彼女は私の客だよ。イロナシマコト、私の名前を出さなかったのかい？」

「言った」

「ほら」

にわかに警備員の顔が青ざめた。俺から手を離し、じりじりと距離を取る。受付嬢も、身体を震わせて怯えている。アイザック・ウエストコットの前で、彼の客に無礼を働いた。まさか俺みたいないか臭い、あいや乳臭い小娘が客とは普通思うまい。

時間が凍りついたかのような重苦しい雰囲気社員達に漂う中、アイザックはフツ、と笑う。

「——まあ、私がわざと連絡しなかったんだけどね」

「アイザックてめエかツツ?!?!」

脱力した。距離的に届かないのを承知で右手でツツコんだ。

確信犯か。お前が元凶かアイザック。

「何で!? 何でそーいうことする!？」

「長い人生の中には、愉悦という名の刺激が必要だよ」

「社員まで巻き込んで実行すんの止めよう!? ねえ!？」

「サプライズというやつさ。君は私の可愛いエレンと仲良くやってくれたらしいからね」

「いつそストレートに意趣返しだつて言えよ!？」

肩を竦めてみせるアイザック。その場の誰もが啞然としている。うん。こいつ嫌い（素早い掌返し）。いつかこいつの寝てる間にシャンプーとリンスのボトルの中身すり替えてやる。

あーくそ。それにしても笑顔の絶えないいい職場じゃねえか（錯乱）。今日から楽しみだなあ、やけくそだけ!!

「さあ、では君の職場へ案内しよう。と言つてもすぐそこだ」

くるりと踵を返したアイザックは、社員達にすまんの一言も無く、来た道を引き返す。俺が悪い訳じゃないのに申し訳無い気分になったので、取り敢えず受付嬢に会釈して逃げ、アイザックの後を追った。



DEMインダストリー日本第一支社より徒歩で10分の場所に、その施設はあった。

『DEMインダストリー・特別技術開発局』、略してDEM特技局である。

周囲の高層ビル群と異なり、六階までしかなく低めの建物だ。しかし、反比例するかの如く、敷地面積は町の区画を優に四ブロックは保有している。

これが、今回のプロジェクトの為だけに作られたのだから恐ろしい。

「一体、どんなプロジェクトになるんですかね。ミリイは見当が付きませんぞ」

「例え如何なる計画だとしても、精霊の誠が出来ると言うなら、やれる」

特技局三階、第一会議室へと向かうのは、謹慎中にテストパイロットとして貸し出された折紙と、付き添いの整備士でDEM社所属のミルドレッド・F・藤村。そして、「お、折紙さぁーん！待ってえ、待ってくださぁーん!!」

抱えた機材や会議の書類の束でほぼ前の見えていない、ASTの優秀な見習いごと、岡峰美紀恵。一応謹慎扱いの折紙を監視するという名目で、同行させられている。本人は折紙の手伝いが出来るとやる気十分だが。

この三人が、ASTから派遣されたメンバーだ。

「ほらミケ、もうすぐ会議室ですよ。シャキツとしないと笑われちゃいますぞ?」

「そういうミリイはどうなんですかー」

「なっ!ミリイは万全ですぞ!大人だから出来てますぞ!」

「とても、心配」

「オリガミまで!」

他愛なく談笑しながら歩く三人だが、これこそAST隊長・日下部燎子の狙いだ。普段仲の良い三人で組ませることで、折紙の負担を少しでも減らす。燎子なりの気遣いだ。

そうこうしているうちに、目的の部屋に辿り着いた一同。ドアをノックした後を開き、会議室に足を踏み入れる。

「お、先輩!待ってました!」

会議室の最奥、議長の席に座るのは、ペットに餌付けするように繰三にポツキーを食べさせる色無誠。傍に、赤みがかった茶髪の女性が控えている。また、室内には三人掛けの机が対面になるように二つ置かれており、既に片側の三席はDEM社の社員らしき女性三人で埋まっていた。折紙達も、残る席に順次着いていく。

それを確認し、誠の隣に控えていた女性——アデプタスナンバー3、ジェシカ・ベイリーが口を開く。

「揃ったわネ。でハ、会議を始めましょう」

「おう、じゃあジェシカさん宜しく」

「アナタが音頭を取りなさいヨ。アナタがこのプロジェクトのリーダーなノだから」

「えー………仕方ないかあ」

澁々といった様子で誠は立ち上がり、一同を見渡す。

「では皆さん。精霊と人間の共同作業という、偉業に関わることになる皆さん」

わざとらしく窓に近寄り、ブラインドに指をかけて外を眺める。ジェシカが呆れたとばかりに溜め息を吐いたのに気付いたかはともかく、すぐに向き直ると、机に手を突いてプロジェクトの全貌を告げる。

「今日から皆さんには——魔法少女になって頂きます」

一同、誠の言葉を理解するのに、数分を要した。

Date. 30 「魔法少女、誕生」

俺の魔法少女創造プロジェクト——対外的には『Artificial Spirit人造精霊計画』と銘打っている——は、計画始動からたった一ヶ月で進展を見せた。

プロトタイプながら、出来た。〈イリルデー人造霊結晶〉。俺が作った霊力の塊を心臓部にし
て、CR—ユニットの持つ緊急展開や武器の呼び出しなどの能力を再現。これまでのCR—ユニットとは桁違いの基礎出力を誇る魔術師の装備が出来ました。それを一手に
引き受けたミリイ優秀過ぎイ!?

いやあ、へブライ語で『イルデー娘』とはよく言ったもんよ。名付けたの誰だっけ。ジェシカさん? まいいや、とにかく実験だ!

———ということやって参りました、特技局敷地内にある実験演習場です。

「折紙さん……………〈イリルデー人造霊結晶〉を」

「理論上は問題ないですね。後はオリガミのリアルラックですぞ」

「分かった」

テストを行うのは、勿論折紙先輩。その為に来たのだ。ミリイは観測機器とにらめっこしながらモニタリング、ミケはミリイの手伝いだ。かわいい。

「万が一のコトがあつたら、容赦なく斬るわヨ」
「構わない」

ワインレッドのCR―ユニットを展開したジェシカさんは、折紙先輩がもしも暴走した場合に備えてスタンバイしている。

勿論単独で抑えられない可能性も考慮して、俺もスタンバっている。ちび繰りにミックスナッツ餌付けしながら。え、何？胡桃食べたくない？旨いじゃん胡桃。

皆の注目が集まる中、折紙先輩が〈人造霊結晶〉を掲げ――唱える。

「――転送」

「イヤイヤイヤイヤイヤ」

俺が折紙先輩に中止アピールすると、無表情なままに先輩がかくんと首を傾げる。

「何か、問題？」

「大有りですよ！魔法少女がそんなスッゲー現実感溢れるしよっペー変身の仕方するもんかい!!」

「技術的には、CR―ユニットの緊急展開と同じ」

「そーですけどー。確かにそーですけどー。そうじゃないんです。ロマンですロマン。………土道先輩になら分かって貰えんだろうなあーこれは………」

土道先輩なら。俺がそう洩らした途端、折紙先輩の見えないスイッチが入った。眼

に静かな炎が点っている。やる気が先程とは段違いだ。

「具体的には？」

「まあ変身中に全裸……とかは倫理的に危ないんで置いときましょう」

「土道の前でなら、やる」

「やるんかい」

「そのまま組伏せる」

「わー、肉食ー」

定期的に危険に晒される土道先輩の貞操。取り敢えず祈つとこう。童貞卒業の方を。俺が十字を切っていると、ミリイがモニターの影から顔を覗かせる。

「あ、そういえばオリガミ。ミリイの渡したお薬は彼に使ったですか？」

「あの睡眠薬はとてもいい。追加発注を依頼する」

「お前が流通ルートか」

「彼氏さん、不眠症なんですか？」

ここで言っている睡眠薬とは、恐らく数カ月前に土道先輩のアイスティーに混ぜて飲ませた奴である。オマエノシワザダタノカ。そしてミケ、君は綺麗なままできてく。こんな変態共に毒されてはいけない。

「まあそれはいいとして。魔法少女がファンシーな掛け声も口上も無しに変身とは片腹

痛い」

俺が力説しようとする、目を細めたジェシカさんが溜め息を吐いた。

「そんなノ他所でやりナさいヨ」

「これは大事！蕎麦を音を立てて啜る並に大事！」

「ジャパニーズにし力分カラない例えは止めて欲しいノだけド」

「じゃあアイザックの居ないDEMみたいな？」

「理解はしたけど、ウエストコット様と同列にサれるのは嫌ネ」

ああん。第二執行部の皆さんはアイザックへの忠誠スゴいらしいからねえ。この

くらいもダメかあ。

「何でもいいカラ、早く実験開始しなさいヨ」

「くっ………仕方無い。折紙先輩、今回は無しで行きましょう。土道先輩に披露するま

では考えといて下さい」

「分かった」

「重要機密なノ、分かってイるわヨネ!？」

怒った。怒った。ジェシカさん怒るとシワ増えますよ。ただでさえヒステ

リックなんだから。

「怒るとシワが増えますぞー」

「何ですって
Wha t!?!」

「なつ、何でもありませんぞー?!?!ミリイのお給料はどうぞご勘弁を!!お目こぼしを!!」

胸ぐらを掴まれ、更に鬼の形相で睨まれてビビりまくるミリイ。今回のプロジェク
トに於いて、DEM社側の責任者は、M Dの指名で、アイザックジェシカさんということになって
いる。つまり、メンバーの給金はジェシカさんが握っているのだ。あー言葉にしなくて
良かった。俺はアイザックから直に貰ってるから関係無いけど。あつ、こら繰三、カ
シューナツツばつか食うな。胡桃食え胡桃。

「ハイハイ、大人の色香が分からないミリイはほつときましよう。先輩、お願いします」
ブチキレてファックだの何だの英国人と思えないほどド汚い台詞を連発している
ジェシカさんをひっpegし、実験を開始する。あのままだとミリイにレイザーブレイド
で斬りかかりそうだったからなあ。

「転送。装備展開」

折紙先輩が〈人造霊結晶〉を掲げると、華奢な身体が眩い光に包まれて見えなくな
る。視界を奪われる程つて、ちよつと光強すぎねえ!?

「イロナシマコト、想定より派手ヨ!?!」

「ミリイ!中止の必要性は!!」

「霊力安定、このまま行けます!」

「折紙さん！頑張つてー！！」

俺達が見守る——と言つても眩しすぎて何が起きてるのか見えない中、折紙先輩の声が届いてきた。

「——起動」

刹那、光が弾けた。おかしな表現かもしれないが、俺達の視界を塞いでいた閃光が、まるで弾け飛んだみたいに一瞬にして霧散したのだ。思えば、俺が精霊化した時もこうだったのかもしれない。

そして、折紙先輩は無事に立っていた。

「AS—001〈キャラマール〉、稼働開始」

手にはガトリングガン一丁。確かASTで〈ハーヴェエスト〉という名前で採用されているものにソックリだ。片手で軽々と持っている。

格好はと言えば、白いブルーム。リボンタイ。フリフリスカート。ニーソにガーター。——どう見ても、土道先輩が家に来たときのメイド服だった。

え？何でそれ？

正直、俺含めた一同絶句している中、頭を抱えたまま空を見上げていたジェシカさんが、眩くように俺に話し掛けてきた。

「イロナシマコト」

「何でしょう」

「説明してもらえル?」

「えつと………精霊って、顕現する時に、なりたい自分を反映するんで………これが折紙先輩の理想だったんじゃないかね? としか………」

「どんな理想!?!」

「えーと………『精霊と戦える力』と、『彼氏を魅了する姿』?」

「私情を持ち込みすぎヨ!!」

唸るジェシカさん。どう報告したものかと思っているのだろう。一方の折紙先輩は無表情で小躍りしている。先輩の中にはマジで精霊を倒すことと士道先輩のことが無いんだな。逆にスゲエ。

「オリガミ、似合ってますよ!」

「お、お、お、折紙さん!! ハヒヤアアアッ!?!」

ミリイがスマホで写メを撮り、顔を真っ赤にしたミケが鼻元を押さえる。お前から結構順応早いな。ジェシカさんを見習え。

「士道のハートに、ご奉仕する」

「止めてえつ!! ジェシカさんの胃にダイレクトアタックしてるから止めたげてえ!!」

無表情のまま、胸の前で手でハートを作る折紙先輩。実にノリノリである。魔法少

女名はへ心盗従者^{シーフメイト}テストロイヤール・オリリンでいいだろ。盗むのは貴方の心か心臓です。もうやだこのメイド。

しかし、どんな姿であれ起動実験は成功だ。ミリーのモニタリングにも異常は出ていない。よし、では今度は運用テストだ。

「では先輩、想定通り模擬戦に入ります。改めて確認ですが、活動可能時間は覚えてますか？」

こくりと静かに頷く先輩。真面目な雰囲気が漂ってきたためか、ジエシカさんにもいつもの調子が戻ってくる。普段のビジネススーツ姿に戻ると、バインダーを開いて、このへ人造霊結晶の活動時間について読み上げる。

「トビイチオリガミ。人造精霊としてアナタに与えられた時間は810秒ヨ。つまり、稼働開始から13分30秒後には活動限界を迎えるワ。既に二分経過したカラ、これヨリ10分間ノ模擬戦を行う。イイ？」

「了解」

メイド服が淡く光り、同時に折紙先輩の身体が宙に浮かび上がる。そう、なりはメイド服だが、随意領域を展開出来る等、CRユニットとしての機能も持っているのだ。正に、精霊の絶対領地[※]に近い服となっている。

んで、模擬戦の相手だが。俺でもジエシカさんでもない。俺等が初めて顔合わせし

た時からいた、DEM社第一執行部の社員三人組である。折紙先輩の変身完了の報を受け、ワイヤリングスーツ姿で演習場に現れた。

第一執行部のメンバーは、総じて第二執行部よりもアイザックへの忠誠心が低い。そのため、アイザックに反旗を翻すDEM社幹部が使うのは、大体第一執行部の魔術師だとか。そのせいか、第一執行部にいる間は、給金は第二執行部とそうは変わらなくても扱いが著しく悪いらしい。

そういう訳で、三人は第二執行部入りを目指し、このプロジェクトで手柄を立てたいとの事だ。勿論、アイザックへの忠誠ではなく、金のためだが。……じゃあ無理なんじゃね？

折角なので、この三人を紹介しておこう（カメラ視線）。

「我々の苦勞が今、報われたのです。自分、感涙です」

まず折紙先輩を見て涙ぐむのは、コールサイン：セオリカス9、ゼラ・バルザック。東洋系のハーフらしく、艶やかな黒い一つ結びの髪が綺麗だ。妙に涙脆い為に、ハンカチを常に四枚は持ち歩いている。

「明日のミルルのパンダが紫色だったのだ」

意味不明な台詞と共にメギヤアアアンとかの擬音が似合いそうなポーズを取っているのは、コールサイン：セオリカス8、ミレイナ・メルト。赤目で水色の短髪で、ど

こ出身か分からない。スーツの下から主張する程のグラマーだが、髪はあまり手入れしていない。産まれながらに頭のネジがブツ飛んでいる。人懐っこいのだが、事務的連絡を一方的に伝える以外は会話不能。どうやってこの会社入ったんだ。

「定刻タイムオーバーより遅刻だねえ。何かあったかい？」

三人の中で最も手練れで、傭兵歴10年、契約魔術師歴5年のベテラン傭兵。コー
ルサイン：セオリカス5、金と時間に厳しい姉御肌のアイミー・エドモンソン。赤髪の
ポブカットで、肌が日焼けして小麦色だ。癖の強い二人を上手く使い、普段からこの三
人で行動している。

ということ、この三人が折紙先輩の演習の相手——

「一つ」

「たわばっ!」

折紙先輩の靈力を光線に変換して放つガトリングガンが、接近しようとするゼラを
蜂の巣にする。

「二つ」

「ひびく!」

靈力を纏わせて光輝くガトリングガンの砲身をミレイナの胴体に叩き付け、ホーム
ランのように演習場の端までかつ飛ばす。

「三つ」

「あべしつ!？」

掌から出した触手を鞭のように振るい、随意領域を突き抜け、アイミーの脳天に鮮やかな面打ちをかまして昏倒させる。

この間20秒。

早すぎイ!?自分草いいすか!?

あんなに一人一人丁寧に説明したのに、全員もれなく瞬殺かよ!!

「第一執行部とハ言え……………わが社の魔術師が子供扱い!？」

ジェシカさんも驚きを隠せない。ふざけた見た目からは想像出来ないパワーだ。勿論折紙先輩の技量もあるが、間違いなく性能が十分過ぎる。かつてAST相手に十香が無双した時のような、圧倒的な地力の差。まさに、数分間の間精霊になれる装備だ。

「す、凄い……………これが量産されれば……………」

「容易く精霊を倒せますね、間違いなく」

ミケやミリイも、喜びに沸いている。まだまだ単独で精霊と打ち合うには、まだ不足しているだろうが、それでも十分過ぎるだろう。

この人造精霊は、封印状態から霊装を部分展開させた精霊の力とそう変わり無い。だから、現段階では量産されて真価を發揮するとしか言えない。折紙先輩や真那レベル

の実力者が使うならともかく、一般の魔術師が使う分には、CR—ユニットの上位互換でしかないが、倒す見込みが見えただけでも世界から見ればボロ儲けか。

……まあ、あんま強くなりすぎると今度は俺の仲間がヤバイから、このくらいの性能でいいだろ。

「次は量産ですかね？」

「そうネ」

予想していたスペックを超えてきたことに、ジェシカさんの口元が自然と緩む。キツネみたいな人だったが、こう素直に喜ぶところを見ると中々に美人だ。

「何ヨ」

「いえ。笑っているジェシカさんは魅力的だなと」

「お世辞？それか、口説きたいノ？」

「どっちでもないです」

「くー！くー！くー！！」

「イテツ?!何で嘯むんだよ繰三?!」

折紙先輩に駆け寄るミケとミリイを見つめるジェシカさんを横目に、俺は食いついた繰三を振り払う。今日はやけに機嫌悪いな、何か俺やらかしたか？

「……………打ち上げでもします？」

「遠慮しとくワ」

「にべもねえ」

ま、ともかく。意外にも、DEMでの生活は刺激的で、これからも楽しくなりそうだった。

◇

同日夜、へフラクシナス艦橋。司令室には最低限の待機メンバーを残して、空席が目立つ。

「暇でいやがりますねえ」

「そうですねえ。真那さん、私取り敢えず椅子になりましょうか?」

「ケツコーです」

その中で、琴里が居らず雑務も終わった神無月と、正式な雇われの身になった真那という珍しい組み合わせで談笑する姿があった。相変わらずの神無月を真那が流しつつ、本当に他愛ない話をする。それだけだった。

「誠くん、元気ですかねえ」

「元気も元気、毎日写メ送ってくるんですよ」

「へえ、そんなんですか。是非見せてください」

「ちよつと待ちやがりませ……よつと！これですよ」

真那がスマートフォンを取り出し、数秒操作した後、神無月に手渡す。そこには、ファミレスでDEM社社員と思われる三人とAST三人組、そして誠と繰三の八人で画面一杯になった写真が写っている。因みにジェシカも全ての場にいるのだが、写ることを拒否して撮る側に回っている。

画面をフリックする度に、実に生き生きとした一同（折紙のみ無表情）の写真が出てきて、神無月は苦笑した。

「仲良さそうですね」

「ええ、こう、リア充爆発しやがれって感じですね」

「では対抗して、私も〈フラクシナス〉忘年会・隠し芸大会の写真を……」

スツと立ち上がり、手近で空いていたコンソールから〈フラクシナス〉のファイル共有ソフトを開く。しかし、真那はそんなもの見たくないと手をヒラヒラと振る。

「どーせあなたは裸踊りか何かでしょう？興味がない——」

「焼き土下座です」

「早く見せやがれ下さい」

自らも立ち上がり、モニターを覗き込む。思えば、自分が画面を見ることになるの

は初めてだったかも知れない。純粋な好奇心から、真那は神無月に尋ねる。

「こっちのソフトって何ですか？」

「ああ、それは現在確認されている精霊の位置情報を表示させるものです。折角なので、このモニターじゃなく、作戦用の大きな方で見てみましょうか」

神無月は司令室のメンバーに一声掛けてから、艦のメインモニターを起動させる。日本地図が浮かび上がり、その中に二つの点が浮かんでいる。

「あれが誠くんですね」

神無月が指差すのは、天宮市の隣に位置する鏡山市。白い点の上に誠の名が表示されている。

続いて、今度は天宮市の辺りにある別の色の点を見て、

「で、こっちが、今は被害報告が無くやけに大人しいヘリリス——司令が戦い損ねた方ですね」

「今度告げ口しますよ」

「ありがとうございます!!」

世界の方も見てみましょうか、と表示範囲を広げる神無月。彼が顔を上げるより前に、真那は異変に気付いた。

「ヘリリス」が増えている!？」

「何ですって、本当ですか!？」

「ほら、イギリスに一つ!」

真那の指摘通り、イギリスにもヘリスを示す点が表示されている。日本にいるものより弱々しいが、それでも存在は一致しているようだ。

「どうなつていやがるんですか……?!？」

「——ちよつといいですか?」

神無月が表示範囲を再び操作する。今度は天宮市とその周辺都市まで絞り、かなり精度を高くしている。

すると、先程までは写らなかつた小さな点が、鏡山市に浮かび上がる。誠の表示と同じだ。

「やはり、誠くんがやってみると言っていた人造精霊……!!」

「え、まさか」

「恐らく、そのまさかです」

「《私》と名乗る方の誠くんも、人造精霊を増やそうとしているんでしよう——!!」

へフラクシナス〜クルーに、緊急招集が掛かったのは、言うまでもない。

Date. 31 「集え、或美島へ」

七月ともなれば、加速する暑さに、クーラーが月月火水木金金のブラック労働を始める頃だ。

という訳で俺達特技局の面々も、休憩室でクーラーガンガンにして涼んでいる。時刻は夜七時を回ったところ。今日も皆お疲れ様だ。特にメカニックを一手で引き受けているミリイがへばっているからな。

それに、皆ぶつちやけ楽しく仕事してるが、同時にかなり暑さにやられてる。

DEM社第一執行部：セオリカスナンバーの三人は、備品取りに行つて貰つたり模擬戦やつてもらつたり（流石に前回みたく瞬殺されてないが）と大忙し。納品チエックはミレイナに任せちゃいけないってそれ自明だから。大抵やらないでパンダの絵描いてるから。

折紙先輩はテストパイロットとして、学校から帰るなり様々なメニューをこなしている。もう魔法少女としては貫禄の動きだ。いや違うな。あれは歴戦の兵士だ。

ミケは書類整理にお茶汲み、皆の健康管理。下手すると食事もせずに工廠に籠っているミリイみたいなのが出てぶつ倒れるから、それ対策。特技局施設内の往復回数にメ

ンバー最多だ。

ジェシカさんはDEM社や備品メーカーとの連絡・営業で特技局に居ない日もあ
る。戻ってくるなりビールの缶を開けて大いに愚痴るのは止めて欲しい。見た目はあ
れだが俺、未成年です。飲ませようとしなくて下さい。

俺はミリイに付き合っって工場で霊力結晶を作りまくってる。上手いことCR—ユ
ニットに適合するよう作るのが中々難しいが、結晶作りにはかなり慣れた。

繰三は俺の横でミックスナッツ食ってる。たまに人間大になってエールを送って
くれる。そしてサクマドロップ食ってる。

……あれ、約一名何もしてねえ。こないだジェシカさんの纏めた経費一覧に『繰
三のエサ』って書いてあったけど、ペット扱いなのか？

「ふいー……死ねますぞ……ぐう」

「ぬはー……ぬはー……」

ソファにぐったりと沈むミリイとミレイナ。気を利かせたミケが冷蔵庫へと向か
い、ペットボトルのお茶を取り出す。

「お茶飲む方いますかー？」

「鶯一折紙、戴く」

「ゼラ、お願います」

これ、特技局メンバーの決まりだ。自分の希望を出すときは自分の名前を言う。分
かりやすいからね。

「ミルルをバルトに至れると思ったかい？」

「コーラがいいってさ。アイミーはビールで」

「何でアイミーさん分かるの？」

各々の希望通りにミケがドリリンクを届けたところで、折紙先輩が口を開く。

「七月十七日から三日間、休暇が欲しい」

「きゅーか？急ですね先輩。ASTから呼び出しですか？」

俺が素で尋ね返すと、ミケがカルピスウォーターから口を離し、折紙先輩に先回り
して答えた。

「違いますよ誠さん、修学旅行です」

「そう」

ああ、もうそんな時期か。なるほど納得。周囲の面々が頷く中、年長組のアイミー
が真っ先に食い付いてくる。

「ジャパンのハイスクールだと、オンボロ神社仏閣かガランドウ海水浴のどっちかに行くって聞くけど、どう
なんだい？」

「海。或美島だと聞いている」

「或美島？それ、我が社の系列会社が目玉にしてるリゾートじゃない？」

「あ、そうなんですか？」

俺がジェシカさんに聞き返すと、ビール缶を一つ煽って飲み干してから補足して説明してくれた。

「我が社は軍需が主力だけど、他の事業をやってる企業を幾つも子会社化しているワ。確か、日本で花屋やスーパーマーケット辺りもやっていたハズ」

「意外に身近だった」

「その旅行会社は、日本でも活動してることから考えても、クロストラベルでしょうネ。まあ我が社のことだから、裏があるのかどうかは考えても仕方無いことヨ」

「アダプタス3が言うと重たい!!」

ともかく、ちよつとDEM社が絡んでそうな話な訳だ。アイザックにメールしてみよう。『来禅の修学旅行で何かやんの？』、つと……………。

さて、話が逸れたな。先輩が旅行に行くから休める？って話だったもんな。

「ジェシカさん、結局のところ休みって取れそうですか？」

「そのくらい出すわヨ」

「「休暇Ye e e e e e e e e e e a r !!!」」

「セオリカスにまで出すとは言ってないワ」

「何でさ」

「ナン生地」

「なにゆえ」

賑やかな人達だ。しかしちよつと援護してあげよう。何故なら俺も修学旅行にちやつかり行きたくなつた。久しぶりに土道先輩や十香に会いたくなつてきたぜ。司令？あー、うん。無理かも。

「でもジェシカさん、テストパイロットがいないんじやどーしようもないですよ」

「ミケにでもやらせれば——」

「私も行くんですが……」

「………そういえばあなた、オリガミの補佐として同じ学年にいたわネ……」

頭を抱えるが、こればつかは仕方無い。何せ七人精鋭のメンバー。施設運営は他の契約社員がやってくれてくれるが、プロジェクトに関わっているのはここにいる面子のみ。一人欠けた時点で回らなくなる。

「………あー、分かつたワ。その三日間は全員休み！これで文句無いでシヨ!？」

「感謝する」

「ありがとうございます！」

「………ミリイが寝てる間に何か決まつたですか？」

「セオリカスに乾杯！」

額に手を当てたジェシカさんは、そのままフラフラとビールを求めて冷蔵庫に向かっていた。

いやあ、めでたい。激務の日々から解放だ。気分上場！

「気分いいし、みんなでチーム組んでマリオカートやろーぜ！」

と唐突にWi i U持ち出す俺だった。ちなみにこれゼラのやつな。

「何か賭ける？賭ける？金？」

「アイミーさん、俺ら未成年。晩飯で」

「じゃあ三レースやって、一番多く最下位になったチームが、一番多く一位になったチー

ムのメシを奢る！」

「ミリイはお肉食べたいですぞー」

「たらふく食わせてやるよ……勝てたらな!!」

ビールをがぶ飲みしているジェシカさんを除いて、やる空気が出来上がっていた。いずれ来る休暇に大ハシヤギ。実に仲の良いメンバーだった。

最終的に、勝ったのは折紙先輩率いるチームAST。最下位はチームセオリカス。俺と練三のチーム精霊は二位だったので火傷も美味い汁も無かった。いや、出費が嵩んで涙目のセオリカス見ながら食う飯は美味かったが。

それと。

アイザックからメールの返信が来てた。

『答えは自分の目で確かめておくれ』

言ったら面白くないじゃんってか？アイツちよつとぶん殴りてえ。

◇

一方、へフラクシナスへにて。

「修学旅行の行き先が変更？」

「ああ。元の行き先が事故でダメになった所にDEM系列の会社が接触してきてね。或美島のリゾートに招致されたんだよ」

琴里達も、修学旅行にきな臭さを感じ取っていた。へラタトスク機関へからすれば最大の敵、警戒して当然と言えば当然だ。

「ふうん。ま、その日にはへフラクシナスを随行させればいいでしょ。無駄足ならそれでよし。クルーの休暇になるし」

「司令！泳ぎますか！泳がれますか！是非この神無月をビート板に!!」

「今すぐ主砲で或美島に送り届けてあげるわ」

「アッりがとうございまあす!!」

神無月の鼻つ柱にコークスクリューパンチを決めた所で、琴里は令音に尋ねる。

「で、いつだったっけ? 行く日取りは」

「七月十七日から、二泊三日だね」

それを聞いて、琴里は顔をしかめる。

「私の出向と被ってるじゃないの……………」

ちようど本部に出向する日取りと同じだった。ずらすのはまず無理。誠の人造精

霊の件について、報告しなければならぬ。

「ええ……………じゃあ、代理艦長決めましょ」

「この神無月が——ぐはあっ!!」

「立候補だ。その大任、任されようではないかっ!!」

小さな影が神無月を押し退け——ようとして勢い余つて壁にまで叩き付けて、

姿を艦橋に現す。

「主人よ。このカマエル、この一月の間に艦長としての指揮の心得を学んだ。安心して

任されよ。フハハハハア!!」

高笑いを上げるのは、琴里と瓜二つの少女にして、琴里の意思ある武器。受肉した

天使、〈灼爛懺鬼〉である。彼女はこの一ヶ月、世間の一般常識を学んでいたが、琴里の

手伝いがしたいとして艦長としての勉強もしていたのだ。

「……………もつとも、精霊の攻略をするには常識に欠けているので、本当に『艦長代理』しか出来ないが。」

「……………令音、どう思う?」

不安しかない琴里は、令音に意見を請う。答えは普段と変わらぬ表情のまま返された。

「ん。DEM社とぶつかる可能性を考えれば、戦闘指揮が出来る艦長は悪くないと思うがね」

「本当に大丈夫?」

「後はやらせてみるしかない」

ちらとカマエルを見る。ふんぞり返っているが、幻の尾が千切れんばかりの勢いで振られているのが見える。尊大だが琴里に忠実、琴里に構って貰いたがる。まさに犬だった。

「……………カマエル」

「応!」

「クルーの皆の言うこと、ちゃんと守んなさいよ」

「承知!!」

ここに、カマエル艦長代理が爆誕した。

◇

兄は、何故姿を変えてしまったのか。ベッドに横たわる少女は一人、枕を抱いて天井を見つめる。

色無誠の妹：有栖部彩は、未だに兄の変化を理解出来なかつた。

士道や十香、琴里といった面々から、精霊の存在とそれを巡る戦いについて知らされた。

自分の生きてきた世界が、にわかには色を変えてしまった。

兄は今日も、仲間を守るために、どこかで頑張っている。兄は優しいから。でも。

会いたいと思うのは、自分勝手だろうか。

もつと施設にいた頃みたいに、一緒にいて欲しいと思うのは、我儘だろうか。

だって、唯一の『家族』なのに。

枕を抱く腕の力が増し、形を変える。

兄の行方が知れなくなつたと聞いた時、本気で泣いた。自分の足で、来蟬高校まで

行つたし、天宮市を隅から隅まで尋ねて回つた。でも会えなくて、……寮に数日引き籠つた。

それでも兄ならばきつと、

「笑顔のお前の方がいいって！」

と云うような気がして、頑張つて学校に通つて数カ月。兄は生きていた。

彩は安堵したが、同時に兄の変化も知ることになつて。

……一人、取り残された自分を見た。

声に出してみる。

「一生のお願い」

いつだって、優しい兄は叶えてくれたから。

「私も手伝いたい」

何度だって、兄は力を貸してくれたから。

「足手まといになつてもいいから」

自分だって、兄の苦しい場面を助けたい……！

「兄貴に会いたいよ……！」

枕に顔を埋める。誰が見ている訳でもない涙を隠す。誰が聞いている訳でもない

声を塞ぐ。

「かなえてあげるね」

「えっ!?!」

驚いて飛び起きる。この寮は一人一部屋。他の誰かが自室にいるのはおかしい。だが、夜風を取り込むべく開けた窓に、人形のような白いドレスの、白髪の美しい少女が座っていた。

「こんばんわ、あや。こーんばーんわー」

「だ、誰……!?!」

「でつた、つてよんでね」

身構える彩に対し、警戒を解くでもなく、ただ朗らかな笑顔を向ける。

「あやがまことにあいたいっていったから、むかえにきたよ」

「でつたちゃんは……何者なの? 兄貴の、何なの?」

「てんしだよ。まことのとんしだよ」

天使。それは精霊の持つ最強の武器、と聞いた。つまり、このでつたと言うのは、兄の武器。

賭けるか、安全を選ぶか。

「いこうよ。まことのぼしよならでったわかるよ。いかないの？」

「……………ちよつと、考えさせて。行くにしても、準備が要るの」

「そつか。がつこう、がつこうだね。でった、いいこだからまてるよー！」

楽しそうに、少女は笑う。この状況を楽しんでいるような、はたまた彩との会話そのものを喜んでいるような。

「ねえ、兄貴は今どこ？」

「んと、かがみ……………や、ま……………し？でも、じゅーしちにちに、あ、あ……………あー、びー、とうー？にいくみたいだよ？」

でつたいえたよー!!と嬉しそうに体を揺らす。それを尻目に、彩はノートパソコンを起動させてネットを検索する。

或美島。クロスストラベル保有のリゾート。

彩は更にクロスストラベルの予約サイトから或美島の予約を確認し……………十七日から三日間、全予約が埋まっていることを確認する。間違いなく、ここだ。

続いて彩は、枕元に置いていたスマートフォンを手に取ると、素早く電話番号を打ち込みコールする。

「あや、かつ……………い」

てきばきと動く彩につられたでつたが室内に上がり、彩を覗き込んでいた。

「ちよつと黙つててね」

「むゆ」

言いつけ通り口を塞ぐでつたに苦笑しつつ、相手と繋がった彩は矢継ぎ早に捲し立てる。

「——もしもし、先生ですか？夜分済みません。あの、親戚の法事が入ってしまった、十七日から三日間ほどお休みを……ええ、移動時間を含めると、はい」

「むむゆ」

失礼しますと通話を切り、でつたに向き直る。

「もういいよ」

「わーい」

それだけで気分が高揚したのか、でつたはくるくると踊り出す。彼女に向かって一言。

「でつた、お願い。私を連れてつて。ただし、十七日に、或美島にね」

「わかつた！あくまはやくそくをまもる！でつたはいいこのてんしだよ！」

じゃあね、ばいばーい。そう言つて、どこまでも明るく、でつたは窓から夜空に飛び出し、そして消えていった。

「兄貴……私、兄貴のこと、知らないから。もっと、教えて貰うよ。絶対。絶対に」

……!!」

有栖部彩は、決意した。

——普通の女の子を、辞めると。

そして、役者が揃う。

全ては、或美島に。

Date. 32「BAD COMMUNICATION」

鏡山市、オフィス街。DEM社の関連ビルが建ち並ぶ中には、社宅のマンションも結構ある。

だがDEM特技局の開発メンバーには、基本的に特技局の施設内に設けられた居住エリアの部屋が宛がわれている。当然、俺にもだ。これが普通にILDKで上々の住み心地。俺と繰三は二人で一部屋だが、繰三は普段掌サイズなので、一人暮らしも同然。快適な広さだ。

「そうだ、或美島行こう！決定!!」

「みー!!るみみー!!」

「繰三嬉しそうじゃねえかよお」

さて、そんな俺だが、今は床に胡座かいて繰三と作戦会議中である。色気のねえ女(?)だぜ我ながらよう。議題は当然、降つて湧いた明日から三日間の休暇の過ごし方についてだ。

三日間の休みが出た。しかも有給。サイコーじゃねえか、ジエシカさん結婚してくれ。声に出して言ってみたらフラれた。本気で言った訳じゃなかったから良しとしよ

う。良くない。まあ今は置いてこう。

そして当然のように考える。

俺だつて学校行事くらい経験したい。そうだ、土道先輩にくつついて或美島行こう、と。

繰三は特に案が無かつたらしく、あつさりと了承。争いがなくて万々歳だ。

早速ジエシカさんに或美島に行きたいと電話したら、自分で予約を取れと言われてしまった。コネでどうにか安上がりにならないかと思つたが、流石にホテルは手配してもらえなかつたよ。

それから一応スマホで先輩達の泊まる旅館の宿泊状況を見てみたが、空室無し。間違ひなく来禅高校の貸切り状態だ。アイザックが何かやるみたいだし、暗に邪魔すんなと言われているように思える。

——行かねえ訳、ねえけど？

そもそも俺にとつて宿無しなんざ慣れつこな話だ。元ホームレス精霊舐めんな。同じく繰三も、狂三時代からあちこち回つてる訳だし野宿も慣れたもの。

そう、俺と繰三は何処にでも湧いて出る!!

……言つて悲しくなってきた。台所で蠢くGか俺ら。

気を取り直して。

行くなど言われても行く。これはいい。それに、或美島は世界的に有名な観光地。ホテルはまだ何軒かあるから無理な野営も必要ない。さて問題は、どう行こうかという所にある。

「繰三、先輩から貰ったコピーどこだっけ？」

「みー」

「あつ、俺の胸の谷間か。出し忘れてた」

「……………ざぶきえる……………」

呆れたという様子で繰三が鳴く。確かに素肌に当たる感触で普通忘れないぞ。普段から繰三を胸に突っ込んでるせいで、物が挟まつてる状態が気にならないのかも。ナニを挟んでも気にならない身体になってしまった!!お嫁を取れない!!誰か嫁に貰って下さい、主に司令。ダメか。

それはさておき。折紙先輩に頼んで、旅行のしおりのコピーを取らせて貰っていたのだ。こいつで旅程を確認しよう……………ふむ、飛行機で約三時間か。

「飛行機か……………国内便でチケット幾らするんだろ？」

「みーみみー」

「あ、そうか。飛行機に乗らなくてもいいのか。精霊なら自力でどうとでもなるしな」
「み」

「経験者が語ると説得力が違うぜ」

「ぎゃいふきえる!!」

恐らくだが、俺も霊力を上手いこと噴出させれば飛べるんだろう。ただどうもその辺の細かい霊力の調整は苦手だ。だが、そうでなくとも俺には海という味方がいる。海に俺の霊力を通せば、海の上を滑るように高速で走れるだろう。

「けどさあ……………それだどつまんなくね?」

「み……………」

折角修学旅行に参加（忍び込む）つもりなのに、俺達だけ徒歩で合流とかつまらなにも程がある。明らかかなハブだ。ハブられるのは嫌だ（お呼びじゃないが）。

「み!!:るるみ!!」

「え?ファーストクラス!?高くね!?節約しようぜ」

「みみるみみ!!」

「うるせー!!悪かったな貧乏性でよ!!」

折角飛行機で行きたいなら、ファーストクラスで予約すればどうかと提案されたが、公園暮らしの金銭感覚が染み付いた俺には敷居が高過ぎる。ケチつて言うな、今の暮らしも長く続くか分からないぞ?

それに、修学旅行の皆でワイワイ行く雰囲気はファーストクラスでは味わえない。

優雅、エレガント。そんな単語が脳裏に浮かぶ（偏見）。普通席でいいや。

自力か、飛行機か。

だがそもそもその話、どちらの方法で或美島に行こうとそう変わらない。何故なら、繰三と二人旅になってしまいうから。修学旅行を味わいたいなら、土道先輩達と一緒に行かなければ話にならない。

どうしたものか。繰三一人なら、小さいしいくらでも先輩達と同じ飛行機に忍び込めるのだが。

「あつ」

「るるみ?」

「それだ!」

「みー……………」

また変なことを思い付いたな、と言わんばかりの繰三。大正解だ。

「そうと決まれば善は急げ。ほらいくどー」

「みみみみみ!?!みみみ!?!」

さて、そうと決まれば話は早い。俺は繰三をむんずと捕まえると胸元に押し込み、最低限の荷物を持って部屋を出る。

「おつと」

「おや誠くん。夜中でも活動的で自分感動です。どちらへ？」

ドアを開けると、セオリカス三人組トリニティが一人、ゼラに出くわした。ビール缶が六本とツマミが数種類入ったコンビニの袋を持っている辺り、三人で酒盛りするのだろう。

「ちよつと、繰三と二人で出掛けます。三日間空けますんで、アイミーさんとミレイナに宜しく願います」

「そうですか、それはそれは。お土産話を期待しています」

いつてらつしやいと送り出されたので、俺はゼラに手を上げて返し、背中を向けてその場を後にする。通路の角を曲がり、ゼラの姿が見えなくなった所で、繰三が突如俺の胸元から転がり落ちるように脱出し、人間大になった。

「誠さん。出掛けるのは構いませんわ。ええ構いませんとも。ですけど、流石に何の説明も無しなのはご勘弁頂きます!？」

「しようがねえなあ」

「どちらかと言えば誠さんの方がしようがないのですけれど」
「だろうね」

まあ仕方無いね。これは俺の手落ちだ。流石に相棒に説明無しはアウトだった、反省しよう。

「まあ、あんまい案でもないし誉められた案でもないんだが」

「いつものことでしょう」

「にべもねえ。……ちよつと怒ってる?」

「いいえ、ちつとも」

「いやいやいやいや」

「怒ってなどいませんわ。いませんとも。どうぞ続けて下さいまし」

気持ち頬を膨らませ、そつぽを向く繰三。幻聴か、つーんと効果音が聞こえた。機嫌を損ねたらしい。いやしかし、そんな怒る程のことか?意外に短気?

「まあいいか。つまりさあ——」



「見て土道、雲が絨毯のよう」

「ぐ、ぐぬぬ……し、シドー……機内のカーペットも悪くないぞ……?」

「……ツフ」

「今鼻で笑っただろう!?笑ったな!」

「気のせい」

「う、うがーっ!!」

「お、おい止めろつて。俺達の学校の生徒じゃないお客さんもいるんだぞ」

「その通り。あなたは非常に迷惑」

「ぐ、ぬぬぬぬうっ……………おのれえ……………」

窓側の折紙。通路側の十香。土道を挟んで座る少女達のやり取りに、土道は早々に快適な空の旅を諦めた。

或美島へと向かう飛行機の客席。修学旅行ともなると、生徒達も興奮して騒がしい。だが土道の気を引かんと争う二人のために、三人の周囲だけ飛び抜けて喧しくなっていた。大体音量の大きな十香のせいだが、それは言わないでおく。

ともかく、窓の外の景色を克明に伝えてくる折紙と、対抗して通路側の席から見える機内の様子を叫ぶ十香のサンドイッチに、土道は早速頭を悩ませていた。

「そう怒るなつて。あつ、そうだ（唐突）。十香、初めての飛行機だろ？乗り心地はどうだ？」

「おお、そういえばそうだった。へフラクシ——ごほん！程ではないないが、これはこれで気に入ったぞ！」

「そ、そうか。良かった……………」

凄く危ない単語が飛び出掛けた。〈ラタトスク機関〉が擁する空中艦〈へフラクシナス〉とは、聞かれても困るし口が裂けても言えない。冷や汗がどつと湧き出る。ちらと

令音の方に視線をやるが、特に反応もしていない様子だった。問題はないと判断し、士道は安堵する。

「フラクシ？」

——だが、折紙にばつちり聞かれていた。

引つ込みかけた冷や汗が、再び士道の全身を濡らす。

「士道。フラクシとは、何？」

「えっ、ええ………ほら、アレだよアレ。なあ十香！分かるだろ!？」

「う、うむ！アレだ！何だかよく正確に思い出せないが、間違いなくアレのことだ！気にするな！」

大慌てで何とか誤魔化そうとするも、折紙の視線が逃げることを許さない。視線が士道をロックオンして全く動こうとしていない。

「士道。夜刀神十香と、二人で乗ったの？」

「い、いやあ、聞いたことしか——」

「………乗った」

「十香!？」

突如裏切った十香。折紙に窓側の席を取られたことが余程悔しかったのか、反撃材料を見つけたとばかりに胸を張る。

「ふふん、残念だがお前がフラクシに乗る日は永遠に来ない!!」
「土道。どういうこと。フラクシとは何」

一転攻勢。十香の態度が空威張りではなく、確たる自信から来ていると察した折紙。視線の圧力は威力を増し、土道を目で殺さんばかりに凝視する。

こうなればやけっぱちだ。額の汗を袖で拭い、土道は腹を括った。

「フラクシってのはフラワータクシーの略で、前に十香と行った植物園にあった、花畑を巡る園内バスなんだ。残念ながら、先月閉園になっちゃって、もう乗れない。十香が言いたいのはそう言うことだよ」

嘘八百。オールフィクシオン。よくもまあ適当な話がこうも浮かぶものだ自嘲しつつ、少々強引に事態の收拾を願う。

「なあ?」

十香に笑みを向ける。

これ以上調子に乗るなという威圧。

「う、うむ……………」

静かではあるが、珍しく怒りを向けられたことに、十香はしゅんとしながら首肯する。

「そう」

一方で折紙は、一応納得したような様子を見せる。興が冷めたのか土道から視線を外し、床に置いていた鞆を膝に乗せると手を差し入れる。完全とは言えずともある程度は誤魔化したか。土道は若干警戒しつつも、乗り切ったと胸を撫で下ろす。

——その平穩も、折紙が鞆からペットボトルを取り出すまでだった。

座席備え付けのテーブルに、静かに置かれたミネラルウォーターのボトル。蓋が独りでに開くと、中から水が吹き出した。

「な、何だあ!？」

「シャベッタアアアアア」

十香が驚き奇声を上げるのを他所に、ボトルから溢れ出た水は人の顔を形取り、成形が終わると同時に色付く。

「頭だけの美少女とかそれなんてフェラ肉——」

「それ以上いけない!!」

金髪碧眼、整った顔立ちから飛び出すは非常に残念な台詞。それは正しく色無誠。頭がペットボトルから生えているという何とも不気味な状態になっている。

「るみー、くーるーみー!」

「おお、繰三ではないか。シドー、繰三もいるぞ!」

見れば、鞆からマスコット状態の繰三が這い出している所だった。床に降り立つと

とてとてと走り出し、十香の座席のテーブルに飛び乗る。予想外の繰三の登場に、十香の顔も綻ぶ。

思えば、誠がDEM社の世話になり始めてから、しばらく会っていないかった。それもあってか、繰三も繰三で嬉しそうに鳴いている。

和やかな空気だが、水を差すようでも土道は聞かねばならない。

「お前ら、何で来てるんだ？」

「修学旅行と聞いて、折角なんでお相伴に与ろうかと!!」

「昨日の晩、連れていけとせがまれた」

「……ああ、そういう奴だったなお前」

後で令音と相談しようと土道は誓った。これまでも誠の存在は結果的には助けになっっている。だが、とにかく自分の都合、或いは誠が原因で周囲を引つ掻き回すので事態が予期せぬ方向へ行く。少しは落ち着いて貰いたいと切に思う。

「精霊二人同行するんです。仮にトラブルがあっても、絶対に大丈夫ですよ!!」

「それはそうだけどさあ」

「あつそういえば。この旅行キナ臭いんで気を付けて下さいね、土道先輩」

「初日から縁起でもねえ!？」

士道の心配を他所に、空の旅は順調に進んでいく。

ただ唯一、救いがあるとすれば。十香は繰三に、折紙は誠に関心が逸れたために、到着までの間に一時間程寝れたことだろう。

◇

エレン・M・メイザースは静かに笑っていた。

カメラマンとして頼禅高校の修学旅行に同行し、〈プリンセス〉がどれ程の者か自分で確かめるのが今回のミッション。アイクのためにもと成功を誓う。

そして、空港を出て、初めて見たらしい海に〈プリンセス〉は完全に浮かれ、端から見れば精神年齢の低い高校生そのもの。油断しきっており、自分をカメラマンと完全に信じ込んで。これなら、いつでも仕掛けられる。願わくば、己と刃を交えるに相応しい相手であらんことを。

———そのことだけを、途中までは考えていた。

資料館に向かうまでの道中、写真を適度に撮りつつ、〈プリンセス〉の様子を伺っていた際。優れた魔術師故の観察眼から、偶々見つけてしまったのだ。生徒達の中に紛れ込んだ、金髪の美女を。

「あれは——色無誠!？」

オーシャンパークにて、裏切り者真那と贗作精霊三を合わせた三人で、エレンに黒星を付けた精霊。その際に受けた辱しめを、忘れる筈がない。

ここで借りを、返す。現状、色無誠はDEM社にも協力的な存在となつていゝ以上、殺すことは出来ない。しかし、立場はハッキリとしておきたい。反抗の芽は摘むべきだ。私怨からではない。けして私怨ではない。うんうんと頷き、一応誠の写真を撮るべくカメラを構える。

「おや？」

カメラがない。ついでに帽子と財布も無い。

「撮ったどー!!」

「取ったどー!!」

「盗ったどー!!」

気付けば、へプリンセスのクラスメイトの少女三人が、エレンの持ち物を握り締め、周囲を取り囲んでいた。

「何をされるんです、返してください。私は仕事です」

「ええー、固いなエレンさん!カメラマンならもつとフレンドリーにいかないよ!」

「そうそう!ほら、笑って笑ってー!!はいチーズ!!」

「どうせなら一枚脱ごつか!!色っぽく!!あ、胸無いから無理か」

「……………いいから返してください」

ぶつきらぼうに言い放てば、三人組から返ってきたのは、くつくつくという邪悪な笑いだった。

「それー!!」

「逃げろー!!」

「競争だー!!」

くるりと踵を返すと、一斉に走り去る。

「な……………待ちなさい!!」

慌てて追い掛ける。しかし、敵は予期せぬ強大な相手だった。エレンの俊足を以てしても追い付けない。

エレン・M・メイザースは戦いた。

精霊より恐ろしい人間に、出逢ってしまったのかもしれない、と。

因みに数分後、すべて無事に返却された。



「こんにちは。いつも兄貴がお世話になっていきます、有栖部彩です。」

「ねえでつたちちゃん」

「なあにー？」

「空って寒くない？」

「でつたあついのもさむいのもへーきだよ」

「いや私が寒いって話ねこれ」

「ええー。でつたどうすればいいのー？」

失敗した。失敗しましたとも。

でつたの上に乗る、空を飛んで或美島までの直線ルートの旅。季節は真夏。行き先はリゾート。私は軽装で来てしまいました。

さっむい。空さっむい。

風をモロに受けるし、そもそも気温が低い。泳ぐ可能性を考慮して、バスタオル持ってきて良かったー！布一枚でも多少は変わる。お陰で死ぬほど寒い死にはしない。

「でつたちちゃん、結構飛んだけど、後どのくらいで或美島に着くか分かる？」

「はじめてだからわかんない。おひさまがかたむくまでかかるかも」

「今、10時だから、そうすると………ツライ………ツラすぎる………何か食べ物持って

くれば良かった……」

早くも挫けそうな私。ファイト！或美島に行かなきゃ、兄貴のことを知る以前の話だよ！スタートラインに立ててないよ！

「あや、あーるびーとうー？いつてどうするの？」

「兄貴に会う。兄貴と一緒にいるの。おいてけぼりなんて嫌だから」

そのために行くんだ。握る拳に力が籠る。兄貴が何をしているのか、どうして姿を変えたのか。全部、全部話してもらおう。私だって、兄貴の妹なんだ。

琴里ちゃんとか、真那ちゃんとか、火万柄ちゃんとか、みんな私より小さいのに、お兄さんへの思いで頑張ってる。私だけ、指を啜えてるなんて……我慢してらんない。

「でもあや、たたかえないよ」

「うぐっ………な、何とかなるよっ！」

「まことはそんなことしてほしくないっていつてたよ」

「………兄貴は、優しいから。今私を遠ざけるのも、いつもの優しさだって知ってるの。でもね、兄貴が私を思っただけ距離を離すのとおんなじように、私も兄貴と距離を詰めたいの」

「むつかしいよ………でつたわかないよ………」

頭を抱えるでつたちゃんが可愛らしくて、私は身を乗り出して頭を撫でてあげる。

「ありがとうでったちちゃん。兄貴とおんなじで優しいね。大好きだよ」
 「わーい！よくわかんないけどでったもあやがすきー！すきー！」

はしやいでいるうちに、眼下に島が見えてきた。空間震で特徴的な形に抉られた島、或美島。あれだ。先程の会話から10分も経ってない。

「でったちちゃん、見えたよ或美島！スゴいよ、早いよでったちちゃん！」

「ふえ？でったがんばった？でったがんばった!?!」

「頑張った頑張った！ありがとうでったちちゃん！」

「またあやにほめられた！きょうはいいひ！げんき！」

でったちちゃんの高度が落ち始め、或美島に向かって一気に突き進む。ぐんぐんと迫る島の像。兄貴に会える。やっと来たんだ！

「でったちちゃん、もうひと踏ん張りだよ！島に着けば休めるよ！」

「うん！首なしエドガーぼんころりーん♪頭が落ちたぞぼんころりーん♪」

「不穏な歌!?!誰作詞!?!」

思わずでったちちゃんにツッコミを入れた、その時。

「ふゆ？」

「な、何あれ？竜巻?.....台風!?!」

突如として立ち込める黒雲。それは嵐。テレビで見たことがある。竜巻とかの進

むスピードは速い。車でも追い付かれるなんてこともあるらしい。

でも、おかしい。素人目にもおかしい。

あの竜巻、速過ぎるし動きが一定じゃない。まるでベーゴマでも回しているみたいに、右へ左へフラフラと動き回っている。中に人でも入ってるのかと疑ってしまう。

近寄りたくない。でも、近付かなければ島には降りれそうにない。行くしかない、ここまで来たんだから。

「あの竜巻、回り込める？」

「やってみる」

「慎重にね。無理ならすぐ離れて」

間隔を保ちながら竜巻の脇を飛んでいく。風が強く、今にも振り落とされそう。でったちちゃんの服を、強く握り締める。

島に近づくに連れて、建物が見えてきた。博物館か何かかな？中々の敷地面積だ。あれに入れば、竜巻そのものには耐えられなくても、せめてこの暴風も凌げるはず。

「でったちちゃん、あの建物の前に降りれる？」

「できるよー！」

「ゆっくりね。気を付けて」

「あや、やさしい。でったちがんばる」

迫る大地。背の短い雑草に覆われた地面。受け身を取る？草がクツションになる？全て不可能だ。頭を埋め尽くすたった二文字の言葉。

——死ぬ。

速やかに、そしてみつももなく。

「し、死にたくない！死にたくないよつ！死にたくないよーっつ！！助けて兄貴いいいいいい！！兄貴いいいいいいいいいいいい！！やだあああああつ！！」

恐怖に頭が支配される。もがくことすら叶わない。風圧に、身体が潰されてしまふと錯覚する。迫る世界。迫るあの世。お父さんとお母さんが呼んでいる。迎えに来ている。そんな筈はない、ありもしないものが見える筈がない。怖い。怖い。幻を追いやろうと、せめてもの抵抗とばかりに目を閉じる。

こんなことなら、兄貴に内緒で来なければ良かった。兄貴に一生のお願いすれば良かった。泣き付いてでも一緒にいれば良かった。いや、最初から、兄貴とずっと一緒にいれば良かったんだ。一緒の学校にすれば良かったんだ。そうすれば、こんなことには。こんな、こんな、こんな一人ぼっちで死ぬなんてことには。

——ごめん兄貴。私、妹失格だ。



何かに見られている。

しきりにそう訴える十香に付き合い辺りを見て回っていた土道と誠は、学校の皆に置いていかれてしまった。ちなみに練三は十香の不安を拭うべく、マスコット状態のまま分身して周囲を調査している。慌てて資料館へと向かう道中、異変が起こった。

俄に空が曇りだし、風が吹き荒れ出したのだ。

「天気予報、また派手に外れてやんのっ！先輩、大丈夫ですか!?!」

「目を開けるのも……………ツライ……………!!」

土道が腕を盾代わりにしてやっとの状況で、封印されていない精霊である誠は苦もなく走つてのける。自分の身体を風避けにし、土道の前を走つて負担を和らげようとしていた。土道の側を向き、全く重心をぶらさずに後ろ側へ走っている時点で、身体能力の差を見せつけている。

当然ながら、封印されていて人間を凌駕する力を持った十香も、この風はそう苦にならない。土道に手を引かれているが、足取りは土道よりも軽い。

その十香が、何かに気付いた。

「危ないシンドーっ!!」

士道の前に躍り出て、自らを盾にする十香。その直後、
「ぎやぷっ!!」

十香の顔面に、金属製のゴミ箱がクリーンヒットした。

「————あああああっ?!?!?」

「ぷいっ!!」

続けて、仰け反った胴体に何処からか飛んできた彩の尻がクリーンヒットした。十香は大の字で地面に倒れ、馬乗りになった彩は何事かと周囲を見回し、十香に乗っていることに気付いて大慌てで立ち退く。

「わああああん!!あや——っ!!」

「へえっ!?!」

「ぎゅっ!?!」

間髪入れずに、何処からか飛来したへりリスの体重全てを受け止めることになった十香の喉から、人間の出しではならないのでないかと思わせる声が漏れた。

「……………」

士道と誠は、顔を見合わせる。啞然とする二人。まず状況が飲み込めない。彩が何故居るのか——しかも、何故へりリスと共に居るのか。

暫し我を失っていた二人だが、泡を噴いて気絶している十香を認めて正気を取り戻す。

「誠、十香を診てやってくれ！入念に頼む！」

「合点!!そら退いた退いたア！医者が通るぞ、乗るなら俺の上へ!!」

「誠!!彩に事情聴取!!お前なら聞き出せる!!」

「おういマイシスター!!お前どうしてここにいるんだ!?この兄に全部吐け！」

「誠!!へりリスゝに警戒するんだ!!敵意の無い確証が取れるまで!!」

「多いわア！要求過多です先輩、俺は便利屋ですかあ!?勘弁して下さい!!」

無茶振りのような指示に匙を投げ、土道の肩を掴んで揺さぶる。幾らなんでも無理だと声を大にして叫ぶが、土道としても悪気がある訳ではない。誠は治療の出来る精霊であり、彩の兄である。そしてへりリスゝと対峙するには土道は無理がある。本当に全て誠に頼むのが一番なのだ。

「頼む！今お前しか頼れないんだ!!じゃあ、彩には俺が聞くから後二つはマジで頼む！」
「にべも……………なくもねえ。了解つす」

「お、おう」

釈然としない様子だが、一応納得はしたらしい。触手を展開してへりリスゝを取り囲みつつ、十香の額に触れて容態を確認する。

さて、士道も彩に話を聞こうと振り返った所、空から二つの人影が降りてきた。

「あれは——」

「ん？先輩、何かありましたか？……おろ

？」

瓜二つ。細部に違いはあれど、ほぼ同じ姿をした、まさしく双子と形容出来る少女。魔術師でもないのに、天から降りてきたという事実。そして、彼女らの周囲だけ風が凜いでいる。

「精霊——双子の、風の精霊!？」

士道をちようど中央にし、得物を構えて相間見える。その姿に、士道の口からは自然と驚きを含んだ言葉が飛び出す。当然だ。これまで士道は、攻略した精霊は独りでいる姿しか見てこなかった。狂三は別だ。一つの定説が崩れたような感覚を覚えた。

故に、対応が遅れた。

「ちわつす、お取り込み中悪いね」

目を離れた一瞬の間に、誠が大きく跳躍。二人の精霊の間に割り込んだ。しかも、霊装を展開している。嫌な予感しかしなかった。

「ん？何者だ貴様。我らの決闘に土足で上がり込むとは、何のつもりだ？」

「警告。物珍しさに近寄ってきたならば、あなたは数秒後に死にます。立ち去ることを

「いやお前こそ何やってんの!？」

的中した不安に、目を見開いて声を張り上げる。

「喧嘩売ってるんですよ先輩!! 申し訳ありませんが彩に手を出した時点でコイツらは有罪だ!! 触手プレイ撮影してシコシコ動画に流してやる!!」

「シスコンの上に陰険とは恐れ入ったぜ!!」

厄介なことをしてくれた、と土道は頭を抱える。精霊と仲良くならねばならないのに、ファーストコンタクトをぶち壊してくれた。ここまで盛大にやらかしてくれたのは初めてではないだろうか。

「ウチの兄貴がバカでホンツツトすいません!!」

「あやー、あやー、あやがいきてたあああー!! よ”がつ”だあ”あ”あ”あ”あ!!」

当の彩は、兄の醜態に耐えかねたのかしきりに土道へ頭を下げている。彼女の胴にはへりリスンが泣きじやくりながらひしと抱き付いており、更にその足元では十香が相変わらず伸びている。誠に頼んだことは全部放置されていた。

「いつつ……この無礼者め!! どうあつても邪魔をしようというのか!! 夕弦!! 勝負の内容を変えるぞ!!」

「同意。流石に頭に来ました。二重の意味で。耶具矢、この勝負乗りました」

一方、耶具矢、夕弦と呼びあつた双子の精霊も、頭を擦りながら闘志を燃やして
た。

「真の八舞を決める勝負」

「応答。百番勝負の大締めは」

「ハンティング
狩 獵」

耶具矢が突撃槍を、夕弦が鎖を構え、誠に向き合う。

「来るなら上等!! 返り討ちに……いや、帰り堕ちにしてやる!!」

背中から無数の触手を展開し、さながら青い孔雀のように凜と立つ誠。

「いざ尋常に——」

「——勝負!!」

三体の精霊が、今激突する!!

「ちよつと待てえええええ——!!」

「「待たない!!」」

「アツハイ」

士道には、
どうにも止められそうになかった。

Date. 33 「天敵」

誠と、耶具矢・夕弦の勝負。先に動いたのは八舞姉妹だ。当然だが、二人は精霊最速なのだ。ヨーイドンで戦闘開始するなら、間違いないで先手を取れる。

「てええええええっ!!」

「攻撃。てやーっ」

そして、最速ということは、攻撃速度も尋常でない。瞬間移動に近い動きで誠に詰め寄ると、耶具矢の突撃槍が風を切って迫る。時を同じくして、夕弦の鎖が鞭のように振るわれ、唸りを上げて誠を打ちのめさんとする。

「速いっ!!」

一方で誠は精霊中でも最鈍。速度で八舞姉妹には張り合えない。為す統べもなく二人の攻撃を、その身で受け止めることとなる。

笑みを浮かべる双子。しかし、直後にその表情は驚愕へと変わる。

「——何だ、速いだけか。ビビり損した!!」

「そんな!」

「仰天。これは、予想外」

避けられないと判断した誠。足を肩幅に広げて二人の攻撃を真つ向から受けた所、大した反動すらなく受け止めてしまったのだ。確かに槍は刺さり、鎖は誠を捉えた。だが刺さったと言っても精々2cm。捉えたと言っても良くて擦り傷。まともなダメージとは言えなかった。

それもその筈。誠は防御・補助能力に特化した精霊。攻撃力は低い、タフさは精霊随一なのだ。慌てて二人が退避した直後、二人がいた場所に触手が殺到。獲物を逃して空を切った触手が絡まり合う。

「ならば!!我が颯風の神通力にて貴様を八つ裂きにしてくれるッ!!」

「反撃。あの触手に捕まる訳にはいきません」

姉妹が手を翳すや、誠を中心にした暴風が吹き荒れる。触手で囲いを作つてガードしていた誠だが、あることに気付いて喚く。

「ちよつ、止めるバカ!!キャミソールが捲れて下が見えちゃうだろうが!!——いいぞ、もっとやれ!!」

普通の洋服姿で過ごすことが多いため忘れられがちだが、誠の霊装〈^{アー}神威^シ霊装^ラ・無番^ト〉は防御力が低い。それは布一枚分の厚みしかないことに加え、胸元の見える露出の高さからもなる。

要するに、風で簡単に捲れてしまうのだ。ちなみにサラシなどは付けていない。

ちよくちよくその下、胸の先端部（意味深）が見えそうになり、土道は慌てて目を逸らす。

「ちゃんと下に着ろ変態!!」

「でも先輩、そういう霊装だから仕方無いじゃないですか!!チラリズムですよチラリズム!!」

「露出癖の変態め!!」

「そう言いつつもチラチラ見てるじゃないですか」

「戦場で目を瞑れと!?!死ねと!?!」

余裕綽々。戦闘と関係ないことを考えていられる程、誠にとって風は通用していなかった。八舞の二人が幾ら威力を上げて通じない。目に見えて焦り始めている。

「何故だ………貴様、何故これだけの風を受けて立っていられるのだ!?!」

「困惑。このような事態を想定したことはありません。俗的に言えば、ヤッバーという所でしょうか」

痺れを切らした二人は、風に誠を閉じ込めたまま、各々の武器を構えて再突撃する。「おつ、来たか。ならば………別にやり倒しても構わんのだろう!?!」

誠が触手で迎撃しようとするが、荒れ狂う風に切り刻まれて水に還る。気を良くした二人は、持久戦と決めて誠の周囲を飛び回り、擦れ違い様に刺し、叩きを繰り返す。そ

の速度は人間の目に捉えられる限界を超え、まるで誠を中心とした橙色の竜巻が発生したかのようだった。

しかしながら、唐突に変化が訪れる。突然、二人の動きが止まったのだ。空中にピタリと静止して動かない。寧ろ、動けないという表現が適切であるようだった。

「う、動けん……………!? バカな!」

「驚愕。こ、これは……………!」

それは、誠が合図を出すように悠々と右手を掲げたのと同時。八舞姉妹の全身に、幾つもの触手が纏わり付いていた。全ての触手は、誠の背中へと収束している。

「触手は全部私の風が切り裂いてたはずだしっ!! どーやって!」

「愕然。全く突然に触手が現れました。耶具矢が漏らした触手は私が落としたはずで、見逃した触手など……………!!」

二人に見落としては無かった。誠がしたのは、風に散らされた水を利用した触手の再構築。エレンを倒した際の水蒸気からの触手の構築に近い。湿気ある所は誠の間合いに同じ。そうとも知らずにこのこやつて来た獲物を捕らえたのだ。

捕まった。速度の領域に於いて絶対の自信を持つ二人のプライドを傷付ける事実。身体を奪われ、最早二人には、睨み付けることしか抵抗する術がない。それも、意味を為さない悪足掻きだと気付いていながら、だ。

「お前たちの敗因は、簡単な理由だ。俺がお前らの天敵だったから」

「天敵……!!?」

「追求。それは、どういうことでしょうか」

二人は知らない。誠の能力は触手ではない。それはあくまで副次的なもの。誠の能力は、自身を液化化させることに肝がある。即ち――

「俺に物理攻撃は通用しない。故にお前らの武器は俺には脅威となり得ない。風はどうだ？ 水は吹き飛ばしても形が変わるだけ。風の圧力で潰すか？ 鎌鼬でも作って切り飛ばすか？ それじゃ鎚や剣と何も変わらない。ってわけ」

「なん………だと………!!?」

「諦念。これは白旗を上げるしかなさそうです。くっ殺です」

敗北の二文字が頭に浮かぶ八舞姉妹に、一步、また一步と歩み寄る。ザツザツとわざとらしく足音を立て、萎縮している相手に更に追い討ちをかける。

「ひいつ?! 私は颯風の御子だから美味しくないし?! 夕弦のほうが脂が乗ってて食べごたえあるし!!」

「提案。耶具矢はこう見えてとても美味です。どうぞ世界の珍味、へちよ耶具矢からお食べください。なむー」

「お供えするなし!! へちよくないし!!」

「撤回。そうですね、脂の少ない耶具矢はスレンダーです。へっちよへちよです」
「何故悪化させたし!？」

何だか互いを売り始めた。それと、何故か食べることが前提になっている。面白くなってきたので、誠は少し弄ってみることにした。

「じゃあえつと………へっちよい耶具矢だっけ?そっちから食べるかな?」

「おう来いや!!私を食べろ!!へっちよくないって証明してやるしっ!!やみつきにしてやるしっ!!」

「制止。やはり旨味の足りない耶具矢では美味しくありません。夕弦を食べるべきです。美味しいです」

「おや?と土道は首を傾げる。突然二人が、自分をこそ食べろとアピールを始めたのだ。

「オーケイオーケイ。その熱意に負けた、夕弦のほうを戴こう」

「称賛。それでよいのです。夕弦は今が旬ですよ。調理や味付けはお好みでどうぞ」
「待った!!耶具矢のが断然旨いし!!昆布とか煮干し並に旨み詰まってるし!!」

「誠がふざけて目標を変えれば、白羽の矢が立った夕弦が安堵するように笑い、逆に耶具矢が慌て出す。

「どうやら張り合っているらしい。どこまでも勝負好きのようだ。そのようだが

……冷静に考えると、まるで互いを庇うようではあるまいかと、土道の中で疑念が首をもたげた。しかし、そう言ってもいられない。土道は意を決して誠に駆け寄り、正面に立ち塞がる。

「待てよ。もう決着付いただろ？ 彩も無事だったんだ。後は二人に謝ってもらえば済む話じゃないか!!」

「そうだそうだー!!」

「同調。我々は自由と権利を主張します」

何だか知らないが、交渉してくれるならこれ幸いとばかりに、土道の言葉に乗っかってくる二体の精霊。誠は溜め息を吐いた。

「分かりました。先輩の顔を立てましょう。動画アップロードは止めです」

「よっしゃー!! ざまみろー!! ……ゲフン。良くやった人間よ、誉めてつかわそう」
「感謝。圧倒的感謝をあなたに。では、この触手を解いてください」

助かった。二人が歓喜に湧く。これで何とか方向修正が出来れば。土道も胸を撫で下ろす。

「何言ってるんだ。俺のバトルフェイズはまだ終了してないぜ!!」

——のは、早かった。

「え……、何で、止めるって言ったじゃん……」

「絶望。……………そういう、ことですか」

耶具矢がふるふる怯え、夕弦がやがて来る未来を想像して、固く目蓋を閉じる。

「お、おい誠!？」

「安心してください。純潔は奪いませんよ」

「そういう問題じゃ——おわっ!？」

触手が士道の胴体に巻き付くと、その身体は容易く持ち上げられ、八舞姉妹や誠を見下ろす位置にまで掲げられる。

「撮影は止めるが触手プレイは止めると言っていない」

「ひいひいひいひいっ!？」

「終了。生きてえなあ……………」

迫る触手。縛り上げられる身体。辺りこだます悲鳴と嬌声。

「兄貴エ……………」

「あや、なんででったのおめめふさぐの? みえないよ、くらいよ、ふえーん」

「ちよつと我慢してねでったちゃん」

彩がでったの目を押さえるその横で、ようやっと目を醒ました十香が、鼻先を擦りながら起き上がる。

「うう……………む……………し、どー——ぬ?」

その目に飛び込んできたのは、異様な光景だった。

「んぶ……………あああう……………はっ、ん、む……………」

「ふっ、あむ……………んんっ!!むっ……………あふっ」

青い触手に絡め取られた二人の少女が、抱き合つて舌を重ね、恍惚の表情で幾度も接吻し合う。罪人の拘束具か奴隷の縛衣か知れないが、ベルトで構成された衣装は惜し気もなく肌を晒け出している。触手は二人を縫い合わせるように纏わりつき、圧迫された胸が相手の胸を潰し、柔らかな歪さを産み出す。二人を縛らぬ触手は、彼女等の周囲で籠となつてその淫靡な遣り取りを包んでいた。それは何処か神秘的ですらあつたが、同時に背徳の行いであることがまざまざと感じられた。

——そう、見えた。

この時、実際は耶具矢も夕弦も必死になつていた。十香からは見えなかつたが、二人の舌が触手で纏めて縛られ、離れようにも離れられなかつた。しかも、全身を這い擦り撫で回す触手は長大な一本の触手であり、丁度二人の舌の部分に結び目があつた。これを外せば拘束が逃れられるとあつて、一心不乱に舌を動かしあつていた。

だが、そんなことを十香が知るはずもない。また、誠の靈力の微弱な媚薬作用によつて、本人の意に反して、結び付けられた半身の身体と触手と己の身体が擦れる感触に快感を覚え、火照り始めていた。

結果。どう見ても頬を染めて互いを貪り合う双子の構図が出来上がっていた。

口から溢れた唾液が肌を伝い、耶具矢と夕弦の肢体を濡らす。にちやにちやと音を立てた、ディープキス。それは十香の知らない世界。

「キス………が、激しく………!?!」

あまりにも刺激が強すぎた。性を知らない初^{うぶ}な生娘。恋も恋と気付かぬ純粋な乙女。初めてのキスはきな粉味。男女の恋愛（※仲良く遊ぶだけ）しか知らない。

どうして女の子が女の子とキスしているのだろう？

どうしてキスがあんなに激しいんだろう？

シドーとした時とは、何かが違う。

———では、その何かとは？

「………きゆう………」

世界の災患だった少女は、キャパシティを超えた現実を理解しきれず、顔を真っ赤にして気絶した。

夜刀神十香、戸籍上16歳。

大人の保健体育には、まだ早かった。

Date. 34 「湯けむり温泉殺人事件（大嘘）」

風呂と言えば、混浴である（迫真）。

俺、色無誠は断言する。

風呂と言えば、混浴である（二回目）。露天風呂で混浴しようぜ。俺の夢の一つなんだ。

ということ、来禅高校御一行様と共にやって参りましたのは、これまたご立派な旅館。いい仕事してんねえ通りでねえ!!

制服姿でさらつと修学旅行に紛れ込んだ俺。一応点呼の際にはササツと隠れてやり過ごしている。基本は士道先輩か折紙先輩からある程度の距離を保ちつつ、旅館までやって来た。わざとらしいこの背徳感!!良いッ!!

「みーみみ。くるみー」

「ん? まあ、何とでもなるって」

人の目も多いため、流石にバレやしないかと繰三が警戒している。繰三は狂^{オリジナル}三が休学中扱いなので、間違われると面倒ではある。それでも手乗り繰三ならバレる心配は無いので、安心して胸ポケットに突っ込んである。俺も先輩のクラスメイト以外には知ら

れてないので、紛れ込んでも「見かけない美人の生徒」で済む。

「風呂、寝床は何とかなる。それよか飯はどうする?」

「みみー」

「今から他のホテル泊まるの?マジで?ヤダー!!最悪コンビニ行こうぜ!!」

「……………ざぶきえる」

ずつとこの調子でお気楽に振る舞ってはいるが、さつきから殺気がめちやくちや背中に飛んでいて地味に居心地が悪い。視線の主には見当が付いているさ。ちらと目だけで脇を見遣れば、土道先輩をサンドイッチするように密着している双子精霊が、隙あらば首を搔くと言わんばかりに睨み付けている。

……………まあ、初対面の相手に触手プレイはやり過ぎたか。うん、いいものだったな。今でも目に浮かぶぜ。実に濡れたよ、何処がとは言わないけど。お礼も込めて笑顔でサムズアップしたら、二人とも土道先輩の背中に隠れてメチャクチャ警戒してた。流石にここじややらねえよ。ん?いや、むしろやって欲しいのか?衆人環視の中で?

「——上級者?」

「な、何を考えてるかは知らないけど否定しておくし!!」

「同意。とにかく半径5m以内には近付かないで下さい」

「くーっ!!」

おかしい。繰三まで毛を逆立ててる。おこかね？君、おこかね？まさか君また触手プレイをご所望かね？俺が繰三をつねったり小突いたりして反応を確かめっていると、八舞……………だったか。双子精霊が士道先輩にすがり始めた。

「士道よ。あの淫獣を何とかせよ。早急にだ。さすれば我が寵愛をくれてやろう。嬉し
いだろう？ん？」

「要望。いつまた襲われるとも分かりません。何か手を打って下さい。お礼は夕弦の愛
ですよ」

「お、おう……………？」

どうも、士道先輩なら俺を止められると判断されたらしく、先程から二人ともべつたりと引つ付いている。俺の排除は二人の共通命題になったようで、100番勝負は代案として士道先輩を落とすことになったそう。うーん、役得。実に羨ましいことになってる。

「シドー、何だか体調が悪いのだ。その……………もう少し背中を借りていても、良いか？」
「大丈夫か？」

「士道。私も体調が悪い。物理的に胸を借りたい」

「誰か代わってくれ」

おい凄いことになってんぞ士道先輩。八舞の百合百合シーンを見てから体調の優

れない十香が背中に、対抗した折紙先輩が胸元にもたれ掛かり、四方を美少女に囲まれておる。つまり美女四方固め。一回くらいやられてみたい。繰三に頼めばやってくれるだろうか。嗚呼、裏山。

「五河ア!!俺はお前を殴る!!殴らせろ!!」

「やれ、やってしまえ殿町!!」

「男の敵イ!!」

「女にとつても敵イ!!」

「何これ味方いないんだけど!?!」

クラスメイトの皆さんの団結力が素晴らしい件について。これはこれは………つまり、士道先輩やバイですねえ。いつか死なないといいけど。五河姓なだけに。妬み嫉みには気をつけよう!!

それにしても、双子精霊のどちらも士道先輩に積極的なのは助かる。だから尚更十香と折紙先輩には離れていて貰う必要があるんだけどね。作戦会議のために先輩の悲痛な叫びをスルーして人込みから抜け出し、俺は令音さんの元へ向かう。

「令音さん、どうです?」

「ん、依然として駄目だね。へフラクシナス」との連携は期待出来そうにないよ」

たまちゃん先生や他の生徒の目を意識して、小声でやり取りする。何故なら、我ら

が艦へフラクシナスと通信が一切出来なくなったからだ。どこに原因があるか分からない以上、注意はしなければならぬ。

こんな状況下ではあるが、令音さんは攻略をするつもりだ。精霊中最速と言つて過言でないへベルセルクこと八舞姉妹を今封印出来ない、次はいつ逢えるか分からない。このチャンスを逃す手はないとのことだ。とにかく今は少しでも長く士道先輩にくっ付け、仲を深めてもらわねば。そして二人と幸せなキスをして終了といきたい。

「そうだ、俺が島の外に出て連絡付けてみましょうか？海上でやってみれば変わるかもしれないし」

「それもそうだ。私は副担任の立場があつて大きく動けないからね、ありがたい申し出だ」

「うつつ、それじゃ行つてきます」

足早に令音さんと別れると、俺は修学旅行の一団から離れて旅館の裏手に回る。この旅館には露天風呂があり、すぐそばが海だ。俺は水の精霊なので、海に入つて液状化してしまえば追跡は不可能。更に周囲が武器として使える水だらけ、と海ほど適した環境は無い。即ち某三位一体変形合体ロボの三番目だ。たぶん一番はカマエルで二番が線三。

では、ささつと海に潜つて島を出ようか——

「兄貴!!」

妹がくつつついてきてた。へりリスも一緒に。何やねんお前。何で来てんの。

「……………何で来たんだよ」

「言つたでしょ! 兄貴がどっか行かないように見張ってるの!!」

「みはるー!!」

頭が痛い。基本聞き分けが良い彩だが、俺には無茶振りを連発してくるしワガママになる。なついてくれるのは嬉しいがちと今は勘弁してくれ。

それとへりリス。妙に彩にべったりだが何なんだ? 彩を襲うでも、土道先輩達を狩うでもない。ただただ彩について回ってる。読めん。読めないぞいつの行動。

だがそれは後回し。今はへフラクシナスの神無月と連絡を取りたい。え、カマエル艦長代理? 知らん。どうせ脳筋だから信用できない。

「丁度今からどっか行きたいんだけど」

「じゃあ私も行く」

「戻ってくるから」

「……………本当?」

上目遣いに覗き込んでくる。うん、最近女らしくなってきたな妹よ。俺の食指は動かんが。あと土道先輩には惚れるなよ、競争率が異様だから。

「俺がお前に嘘吐いたことあるか？」

「兄貴、前に私のプリン食べたのに、しらばつくれた」

「……あつたな……」。

あつたわ……確かに二年前に間違えて彩のプリン食って怒られたわ……。あの時は彩の気迫に圧されてケーキ屋まで走らされましたね。自信満々に言っておいて恥ずかしくないのかよ？ 恥ずかしいよ!! 穴があつたら突っ込んでくれ。主に下の口に。ぶち込んでくれよ!! 違うか。

「あー分かった。覗きでしょ。兄貴露天風呂に張り込んで女湯覗くつもりでしょ!!」

「えっちだ! えっちだよ!!」

「それは後。今は別件」

「覗くには覗くんじゃん!!」

「えっち!! えっちー!!」

楽しげな〈ヘリス〉の合いの手(?) が鬱陶しい。たぶんあんまり意味を理解してないぞアレ。何かこれ以上は不毛なので話をバツサリ無視して海に飛び込む。

「夕飯には戻る。てか腹へつたら戻る」

〈触抱聖母〉^{アルミサエル}を呼び出して体内に挿入、液化化すると、ザボンと音を立てて海に沈む。

線三を置いていかなないように、水で作った中空のボールに放り込む。

「あー！ー！ー！っ!? バカ兄貴戻ってこー！ー！ー！い!! 逃げるなー！ー!!」

「えー！っち!! えー！ー！ー！っち!!」

精霊の身体能力が為せる技か、彩達の声は水中からでもはっきり聞き取れた。しかし今は迷わず海を行く。

が。

「でったちちゃん乗せて!! 追い掛けて飛んで!!」

「まかせてー」

何と彩を背中に乗せたヘリリスがスーパーマンの如き姿勢で飛び立つと、繰三の影を頼りに俺を追いかけてきた。にやろう、こちとら馴れない隠密行動したいとこなのによ!!

ということ、触手で捕まえて二人を水中に引きずり込む。繰三を入れていた球体を拡大し、十分なスペースを確保して捕まえた二人を放り込んだ。

「あのさあ、ここだから言うけど、精霊絡みのまともな用件なんだよね。バレたら怒るよ?」

「え、あう………迷惑にはならないから!! 兄貴、一生のお願い!! このまま連れてって!!」

「………いいけど、プリンの件は忘れるよ」

「対価安過ぎない、兄貴?」



時は流れて午後七時。来禅高校の生徒たちの入浴時間である。しかし、修学旅行となれば、大概入浴時間が決まっているもの。三十分も経てば、生徒たちの姿は消えている。

故に、午後七時三十分。大浴場には、再び静寂が訪れていた。

「……………風呂……………露天風呂……………湯けむり……………」

カラカラと戸をゆっくり開き、人影が露天風呂に現れる。

「月明かり……………星空……………美少女の裸体……………肴……………月見酒にワカメ酒……………」

風呂桶にアヒルのオモチャとタオルを入れ、逆にその身に一糸纏うことなく現れたのは、触手精霊こと色無誠だ。

つい先程まで、海に潜ってへフラクシナスとの連絡を試みていたが、海中にまで広がる随意領域らしき障壁に阻まれ、何の成果も得られず帰ってきた。因みに誠なら破れない随意領域ではなかったが、ヘラタトスク機関の活動がバレては困るので手が出せず仕舞いだった。

しかし、誠が沈痛な面持ちでブツブツ呟いているのは、それが理由ではない。

「美女祭り見逃した!!不覚!!一生の不覚!!」

風呂の覗きをし損ねたことを嘆いているのだった。旅館に戻って来てみれば、浴衣姿の生徒たちが大半。これを見た誠は瞬時に悟った。今や、遙か彼方に理想郷。国敗れて山河あり。情に竿差して夢逃す。旅館の入り口で膝から崩れ落ちた。

仕方無いので、せめて美少女のダシが出る湯に浸かろうという、転んでもタダでは起きない精神で露天風呂にやって来た。

「いい湯加減だなあ」

文句は言っても、やはり風呂そのものは心地好い。誠としては、風呂は琴里を思い出すものでもある。精霊になった初日に、もし五河家に忍び込まず、琴里に逢っていないかかったら。

もしそうなら、自分は今頃何をしていたのだろうか。ただ欲望の限りを尽くし、それこそ狂三と同じ人に仇為す者になっていたかもしれない。

考えても仕方がないことだが、物思いに耽ることの出来る程、大浴場は静かであり、また眺めは良いものだった。

「何か、お悩みですか?」

練三がいつの間にか側に来ていることを、気付かせないくらいに。話し掛けられてようやく、誠は自分が思考の海に沈んでいたことを察した。

「んー？ちよつと考え事。悩みつて程じゃない。もし俺が司令や士道先輩に逢つてなかつたら、つていう、今更考えても意味ない話だよ」

「IF^{もしも}と考えるのは人間の傲慢ですわ。過ぎ去つたことを後から愚痴愚痴蒸し返すなんて、潔くないですもの」

海を見つめる誠の隣に繰三が座り、並んで湯に浸かる。束ねた髪をタオルで押さえる繰三と、毛先が湯に浮かぶことを気に掛けない誠。見た目も仕草も対象な美少女というのは、それはそれで絵になっていた。

「繰三は、もしも、なんて考えないのかよ」

「考えない………というより、わたくしがその、IFの存在ですもの。『もしも時崎狂三が、足を止めたら』。臆病なオリジナル。立ち止まるのは、振り返るのは、目的を諦めたからではないというのに」

誠との距離を詰め、肌を密着させる繰三の頭が、誠の肩に重みを預ける。

「正しくは、『無理矢理にも引き留めて貰えた』、かもしれないけれど。ね、誠さん？」

「お、おう!?!」

のぼせた訳でもなく、誠の顔が紅潮した。何てことはない、これまで繰三のことを『相棒』『触手に目覚めた美少女』位にしか思っていなかった誠だが、急に好意をぶつけられて慌てているだけだ。

「思えば、二人きりというのも久しぶりですわね」

「まあ、このところ賑やかだったしな」

「本当は、わたくしと誠さんだけで何処かに出かけたかったですけど……これはこれで、良しとしますわ」

やっと府に落ちた。繰三が機嫌が悪かった理由。これも何てことはない、自分を選んで貰えなくて拗ねっていたのだ。人の機微には疎いな、と誠は反省する。

「繰三」

「何ですか？」

「今度、どっか連れてってや……ん？」

ふと気付いた。繰三の顔が嫌に赤い。そして何より——酒臭い。思えば普段よりやけに大胆だし、艶っぽい。繰三の身体を隠すバスタオル。そこから覗く柔肌も、心なしか普段より赤みを帯びている。

「お前、呑んだのかよ!？」

「くふふつ、精霊に未成年だの何だのは通じませんわ。誠さんもいかがですか？」

繰三の身体で隠れていたが、徳利と猪口の乗った盆が湯に浮いている。

「誠さんなら、やれワカメ酒だ、月と女を肴に一杯だと言ひ出すかと思ひまして」「否定できねえ!!」

實際言つた。

しかし、元が一般人のために妙な所で常識に拘る誠。断固として飲酒ダメ絶対という単語が頭を駆け巡る。だが、繰三の誘いを断るのも男が廢る、いや触手精霊たる矜持に反する（要らぬ誇り）。

そして誠は決意した。当初の目的も合わせて、己の欲望を叶えんと行動する。

「飲酒はしない——だが、ワカメ酒は飲ませてもらう!!」

「どっちですの!?!」

「いくぞ!!そおい!!」

繰三に向かつて向き直り、膝を抱くように座っていたその身体を湯から無理矢理抱き抱えて引き上げる。

「ひやつ!?!な、何ですの!?!」

丁度、所謂お姫様抱っここの姿勢になり、誠に捕まった繰三が何をされるのかと慌て出す。誠の視線の先を追い——それに気付いた。

脚の内股と、下半身とが作る三角形。そこに溜まった湯の存在に。月の光とタオルで、幸い大事な部分は隠れてはいるが。

「え? あ——ああつ!?!」

酔いが醒めそうな程に、繰三の頭が沸騰した。つまり——露天風呂の湯を、繰

三を器代わりに飲む、ということだった。自分から誘ったといえ、今にも我が身が羞恥に燃え上がりそうだ。

「誠さ……………ほんとに……………うう、……………しますの……………う？」

「覚悟は出来てるか——俺は出来てる」

「最高に破廉恥な覚悟ですわよ!!」

「安心しろ、目は瞑つとくから」

「しかも覚悟出来てない!!」

何事も勢いと思い付いたこと任せ。そしてヘタレさも混ざった男、色無誠。だからこそ出来る思いきりであり、だからこそ越えられない一線でもある。

「ほつとけ!!ええい、戴きます!!」

「んっ、ふ……………あっ!？」

繰三を更に抱き寄せ、無理矢理顔を突っ込む。股に他人の肌が触れる感覚に、こそばゆさと羞恥心が加速させられる。思わず、繰三は祈るように手を組んでいた。

「ど、どうですの……………っ？」

気が動転している。何を自分は訊いているのか。口に出してから、繰三は己の行いを愚かしく思った。

「繰三の味がする」

「ひやいつ!？」

「嘘です。ミネラル分の多いただのお湯の味しかない」

「ばつ、バツカじゃないんですの!？」

顔を上げた誠の頬をがつと掴んで思いつきり引つ張る。恥ずかしい思いをさせられて、からかわれて、何かやり返さないと気が済まなかった。

しかし、それは何も繰三だけの話ではなかった。

「兄貴いゝゝ?」

誠と繰三の背筋が凍った。硬直した身体はそのままに、声の主に揃って眼だけを向ける。

「何……………やってんの……………?」

そこには、怒り心頭の彩が仁王立ちしていた。背後から、ヘリリスが興味津々という様子で二人を眺めている。

何と返すか。妹分への言い訳は、誠の中には持ち合わせが無かった。

「え……………あ、その、のぼせ?ですの?」

自分の痴態を見られた繰三にも、しどろもどろに答えにならない返事をするのが精

一杯。

「えっち?」

トドメは、へりリスに刺された。

「馬鹿兄貴イイイイイイイイッ!!!!」

「どわああああつ!?!?」

渾身のドロップキックが炸裂し、誠は線三をその場に落つこととして海に墜ちていった。

奇しくも、土道の風呂上がりと似たような格好である。……………送り出され方には、天と地の差があるが。

Date. 35 「八舞に死す」

風呂に入ったのに冷えました（矛盾）。そら頭から海へ飛び込みやそうもなるわな。ということ、二度目の入浴をし、適当に旅館をぶらついている。浴衣姿の金髪美女姿、とくれば、胸元緩めの下着チラ見せがベストだろう。フルーツ牛乳片手に、色気をムンムン解放である。すれ違う男性の視線が自ずから胸に行く。もつと見てくれ。

そういえば人間ってフェロモンを感じる機能が退化してて、まるで感じ取れないとか。バカじゃねーのか。ほんとバカじゃねーのか。あ、でももし機能したら今襲われる可能性もあるのか。複雑。どうせ襲われるなら美少女に襲われたい。あつ、それってASTじゃん。襲われる違いだけど。わーい、夢が叶ったぜチクシヨウ。

色気ムンムン、煩惱モンモンで歩いていた俺だが、ふと視界の端に何やらクロワツサンが見えた。廊下の角から、ちろりと覗いている。

「警戒。じーっ」

否。それは巻き上げられた鮮やかな横髪。風の精霊：八舞姉妹の片割れ、ジト目の方の夕弦だ。鎖野郎でも可。いや女の子だから野郎は悪いな。つまり………鎖野郎（語彙不足）。名前と呼んでいいかは聞いてない。近寄らせてくんないから。

「何か用？」

「肯定。マスター折紙より、色仕掛けならあなたにも意見を聞けとのご指示を受けましたので、大変不本意ながら教えを乞いに来ました」

え、何？今回は土道先輩が攻略するんじゃないかと土道先輩が攻略されるの？俺が〈フラクシナス〉探してた間にそんな話になってたの？後で令音さんにちゃんと聞いとかなないと。

それはさておき。面白いじゃないか。土道先輩にちよつかいを出すなら俺も仲間に入れてくれよー。そういうことなら仲良くやろうじゃないか。

「オーケイ、それなら任せてくれ。静の折紙先輩、動の俺の変態タッグが合わされば、インモラルの限りをお前に提供しよう!!」

「疑念。それはそれで身の危険を感じるのですが、こちらの勘違いでしょうか」

「初心者には無理もない。えーとそれで、ジト目」

「指摘。夕弦と呼んで構いません」

いいのか。ならばそう呼ばせてもらおう。最悪ジト目ナポリタンとかジト目クロワッサンとかいう渾名になる所だったからな。

「サンクス。じゃあ夕弦。シチュエーションと、折紙先輩からどんな策を授かったか教えてくれ」

「説明。今回の目的は、士道の看護です。尚、マスター折紙には誰を看護するかは伝えていません」

あれま……風邪でも引いたのか。先輩もツイてないなあ。折角の修学旅行、十香や折紙先輩がイチャイチャしたかったらうに。

「詳細。我々の悪戯の末、露天風呂から海に飛び込んで冷えきった風邪引き士道を、看護の名目でめろめろにする作戦です」

「お前らも海にぶち込んだらか」

この悪戯娘め、どんだけ寒いか知ってるのか。知らない？ほならね、自分も飛び込んでみろよと。軽く睨み付けると、夕弦はちろりと舌を出す。あざといな。表情が動きにくい奴はあざとい。折紙先輩はあざとさがアグレッシブな方向に進化過ぎて18禁だけ。捕食者系女子だよねアレ。

それはさておき、こいつらは今までにないパターンだ。精霊にしては人と関わることに抵抗ないどころか、ちよつかい出したくなる。人間に対して比較的態度が寛容だ。……まあ、悪戯の度が過ぎる感はあるが。士道先輩、死ななきやいいけど。あ、カマエルがいたか。心が折れなきや大丈夫か。あの人に限って挫折はあるまい。

「それで？折紙先輩は具体的にどうしろと？」

「想起。風邪を引いた場合、発汗は放置できない。きちんと拭き取るべし、と」

「……………何使つて?」

「開示。舌です」

「流石」

流石性欲の塊、肉食獣のごとき怒濤の攻めだ。本人にやらせたら、間違ひなく唾液でベトベトになるまでやるだろう。なお一部は土道先輩の下の槍から出た液の模様。そして事後ティッシュと同じように、拭き取る呈でおさわりして二度美味しい。マーキング効果で十香を牽制して三度美味しい。やはり天才か。

しかし、初心者には些かハードルが高過ぎやしないか? 現状好きでもない相手にやるにはちと重たい。

物事には手順がある。いきなりブチ込んではいけないのだ。お風呂で洗いっこして、「おい、待てい(江戸っ子)。肝心な所^ヲ洗い忘れてるぞ」「羞恥。そ、それは……………」みたいなレベルで、外堀を埋めることから始めないと。ということ、もうちつと色仕掛けチツクに行こう。

「夕弦。敢えて聞くが、土道先輩のことを舐めたいと思うか?」

「応答。勝つためならば、やりましょう」

「意気込みの問題じゃない。じゃあ言い換えよう。やりたいか、やりたくないか」

「飛躍。極端ではありませんか？」

「そうでもない。お前が土道先輩を好きでやるか、それともやりたいからやるか、はたまたイヤイヤだけど背に腹は変えられないからやるかでかなりシチュエーションが変わってくるんだ」

ていうかフツーあり得ねー状況だしなこれ。という台詞は飲み込む大人な俺こと誠さんであった。俺がフツーを語るとか、ちゃんちゃらおかしいけど。

「要求。それぞれの違いを説明して下さい」

「まず①、好きパターン。溢れる愛と欲求から、土道先輩の汗を摂取したいという行為に他ならない。全身余すところなく舐めることになる。ちなみに折紙先輩の域だからなこれ」

「困惑。好きでこれでは、残り二つが心配です」

「じゃあ②、やりたいパターン。派手な自慰と何も変わらん。主に相手の性感帯を徹底的に攻める。身体や舌使いを見せ付けるようにねっとり攻める」

「驚愕。流石に無理です」

「最後③、イヤイヤパターン。上目遣いに睨みながら、文句を垂れてやれ。それか、抵抗感や嫌悪感を隠したぎこちない笑みを作り、必死に言われるままにする。これはどれも相手の嗜虐心を刺激し、征服欲を高める。自分には拒否権などなく、命令されるがまま

に、行為の中心は徐々にいきり立つ——」

「制止。それ以上いけない」

おつといけない、夕弦のドクターストップが入りました。熱が入りすぎた。このままだと墮ちる所まで説明しそうだった。話が変わってくるからな。

「不承。マスター折紙とはまた異なる手練れとお見受けしました。一時休戦して教えを請います。私はどうすれば良いでしょうか」

結果オーライだった模様。先輩と変態度合いが近かったか。愛を拗らせた折紙先輩と、肉欲に溺れた俺。……どっちも酷いな、うん。

「よし夕弦。ズバリどれが今のお前に当てはまる？」

「思案。五秒下さい—— 出ました」

「言ってみ」

「結論。①です」

「チョロい!!」

なんだこれは、たまげたなあ。どの辺に惚れる要素があったのやら。またか、また主人公補正なのか。

「反論。土道は誠実です。魅力満点の夕弦と、へちよいとは言えそこその美貌の耶具矢に言い寄られても、容易く手を出すことはありませんでした。好意にまで至った訳で

はありませんが、好感を抱いたのは確かです」

「俺なんか出逢って数分で触手プレイしたからな」

「侮蔑。人として、精霊として、どうなのかと思えます」

「うるせーほっとけ」

俺のことはまあいいさ。ともかく土道先輩の評価は悪くないことは分かった。ならば話は早い。

「よし、では夕弦。冷えた身体を暖めるにはな——何よりも、人体がいいんだとよ」

「懷疑。確かにフィクションでは良く聞きますが、その信憑性は疑わしいです」

「分かっているいな。異性に効くんだよ。得に土道先輩みたいなウブな人に」

特に下半身に効く(意味深)。

「納得。腑に落ちました。では、具体的な作戦を教えてくださいです」

「オツケー、ではこういうのはどうだ？」

俺の提案する作戦とはこうである。『見せずに見せる』。

まず、土道先輩に正面から抱き付き密着する。この時点で、土道先輩は拘束から逃れられなくなる。脚を絡められれば上出来だ。身長差から、夕弦の頭は恐らく先輩の胸板から首元までの間に来る。

ここで、先輩の浴衣を緩めて先輩の肌に舌を這わす。先輩は、夕弦の顔、或いは致

す内にはだけた胸元までが見えることになる。しかしその下はどうだろう。

八舞姉妹が伝家の宝刀、お腹の出番である。

士道先輩もガッツリ見ているであろう、霊装から覗く健康的なくびれ。綺麗なヘソ。肉付きも非常に程好い。これが先輩のどこに押し付けられる？——そう、下腹部である。

先輩からは、けして見えない位置のお腹。しかし、先に見た姿がフラッシュバックすること間違いはない。妄想の夕弦、現実の夕弦。二人の夕弦に挟まれ、先輩の悶々は加速していく。きつと、先輩は理性的故に手は出さない。出さないが故に悶え苦しむという寸法である。そして二人は危険な領域に——

「——という感じで………ん？」

滔々と語り尽くした後に夕弦を見ると、俺との距離が5m位離れていた。あれま、引かれましたねこれは。

「恐怖。マスター折紙といいあなたといい、何故ここまで考えられるのでしょうか」

「性欲あでしよ」

「苦笑。ぱちぱち」

「うるせー触手ブチ込むぞ」



一応俺に礼を言つて立ち去つていった夕弦。報酬はコーヒー牛乳でした。いい仕事をした、と額の汗を拭う俺の視界に、新たな陰が現れた。

「……………」

耶具矢だった。明らかに夕弦より警戒している様子で、夕弦が立ち去った側とは反対の角から頭を覗かせている。よその家に連れてかれた子猫が、見慣れぬ人間にフシャーと威嚇しているかのような、微笑まし……………微笑ましい殺気を放っている。

「何か用かね、耶具矢君」

「うそ、気付かれッ!?……………かか、颯風の巫女の隠れ身を見破るとは、やるではないか」
角から全身を現すや、キアラを取り繕おうとしているが、まあ無駄だ。ポーカーフェイスが出来てない。その玉のような冷や汗を拭えよ。

「頭出ててバレバレだったぞ」

「うっさい！夕弦よりは上手いし！」

……………分かった。めんどくさくなりそうだから追求は止めよう。恐らく夕弦と同じような理由で来たんだらうが、一応聞いておく。

「そんで？何しに来たの？」

「士道に取り憑く悪鬼悪霊を祓う術を求めていた折、我が眷属が進言したのだ。貴様の知恵を借りてはどうか、とな。貴様のことは心底憎いが、忠実なる僕の言だ。我が深淵の叡知を勝り得ずとも、試してみる価値はあると見た故に来てやったのだ、ありがたく思うがいい」

——そのグルガン族の男は静かに語った——。

いや、わかんねえよ。誰だよ眷属って。俺はノムリツシユはさっぱりなんだ。暗黒創造神耶具矢、もつとゲヘナ使役してゲヘナ。え、違う？

「なあ」

「何だ」

「その厨二喋り、疲れねえ？」

「厨二言うなし！」

「ハイハイ、既にネタが割れてるのにキャラ作りお疲れ様でーす」

耶具矢のぐぬぬ顔を拝んだ辺りで、そろそろ潮時と見たので話を進めることにする。

「で、眷属って誰？」

「……………十香」

「ああ、なるほど」

十香のことだ、闇魔法カッコいいフレーズにやられて耶具矢と仲良くなったんだろ。きつとそうだ。初対面の時は圧倒的な凄みと共に美少女ヒロイン感出てたのが、今では愛すべきアホの子だ。これも土道先輩の調教の賜物である。これはポンコツ精霊専属調教師の土道先輩ですね、間違いない。

「で？俺にどうしろと？」

「土道を看病するついでに、夕弦と魅力勝負するの。私の美貌と十香の情報さえあれば負けるはずないんだけど、十香が行け行けって言うから、いちおーうあんたの意見を聞きに来てやったのよ！」

「そうかそうか。じゃあ頑張れ」

「え?!」

何を驚いていらっしやる。受けるとは一言も言っていないぞ、受けるとは。

「あーあー、俺夕弦にも聞かれちゃったんだよねえ。どうアタックすればいいかって。どうしようかなあー、夕弦からは報酬としてコーヒー牛乳貰ったしなあ」

「なっ?!——ぐうっ……ちよつと待ってなさい!!」

声を残して俄に耶具矢の姿が消え、その数秒後、強風と共に再び現れた。左手には牛乳瓶が二本握られている。即行で買ってきたのか(困惑)。流石風の精霊、とんでもなく速い。最強のパシリじゃないか。

「イチゴ牛乳でどうよ!!二本な!!」

「別に買ってこなくて良かったのに。言ってみたかっただけだから」

こう、弄ってくれオーラのようなものが出ていたのでやった。今は反省するでも思ったか。取り敢えず一本受け取り、詫びとして代金を渡す。…………牛乳三本目は重いな。繰三飲むかな?溢してエロ展開にならないかな?

「私が真の八舞になったらブツ飛ばす…………!!」

「悪かったって…………あ、リベンジは日中で宜しく」

「なぜだし」

「夜は右手が忙しいのさ」

「?」

リベンジが実現する日は来ないし来させない。士道先輩がそうさせないから。俺もそのためにやってる訳だし。

そういうや、俺自身はどうなんだろう。いつか封印される日が来るのだろうか。士道先輩ごときじゃ、私を封印なんて絶対に出来ないと思うけどね。

「それはさておき、話を進めよう。十香は何をやれって言ってたんだ?」

「一緒に布団に入って寝ろって」

「微笑ましい……………十香らしいな」

……しかしだ。ここで十香を全否定するのも可哀想だ。本人は本気だろうし、せつかく耶具矢に信頼されたのを無下にするなど下策。それに、今回は八舞姉妹に土道先輩を攻略させるようだけど、結局は二人を封印するのが目的。なら敢えて分擔させることで共同作業にし、絆を深めさせてもいいってことだよな。

方針は決まった。耶具矢には——ホントに添い寝して貰おう。

「耶具矢自身の考えは、何かあるか？」

「ない……………」

焦りの余り、玉のような汗がナイアガラ。滝のように吹き出している。目も泳いでいる。耶具矢に余裕が無いのは明白である。

「だろうな。だが十香は土道先輩が喜ぶと思ったことを言ったんだ。方向性は間違っていない。あと一步踏み込めば、立派な策になる」

「えっ、ホント!？」

「ああ。夕弦にも負けないし、何よりネタが被らない。耳貸せ!!」

覚悟するといいい、土道先輩。

今宵の八舞は刺激的ですよ。



八舞姉妹が部屋に入ってから、どれくらいの時が経つただろうか。酷く落ち着かない夜だ。

俺は士道先輩の部屋の外に陣取り、先輩が寝たからと人払いをしている。最悪触手で物理的にも近寄せないつもりだ。つい十分程前に玉恵先生を追い返し、それからはこの部屋を訪れるものはいない。

「困惑。段々汗と唾液の区別が付かなくなってきました。士道、如何ですか？」

「い、いや、もういいよ……………」

「察知。効果てきめんだと判定しましたので、続けさせていただきます」

「やめろオ（建前） やめろオ（本音）」

予定通り、夕弦は士道先輩に抱き付き汗を舐めとる。初めはぎこちなかったが、先輩の反応に触発されて八舞の『悪戯好き』な部分がむくむくと膨れ上がり、開始から20分後には既にノリノリで舌を這わしていた。

「ちよつと夕弦。士道は寝るんだから、あんまり刺激しないでよ。——ほら士道、もうそろそろ一緒に寝よう？ね？」

「お、おう……………」

一方の耶具矢の作戦。それは、そのまま添い寝——即ち、子供ガを寝かしブつける

シチュ或いはお姉さん系幼馴染とお泊まりシチュである。

耶具矢に包容力が無いと思つたアナタ、舐めて貰つちや困る。耶具矢は多大な素質を持つている。それはギャップ萌え。耶具矢は尊大に振る舞おうとする結果、素が出た際の『親しみやすさ』が他の同じような性格の奴よりも強く感じられる。『背伸びカワイ』のだ。

では耶具矢が醸し出す背伸び感とは何か。それは当然、『余裕』である。普段のキャラは演じているもので、しかも長続きしない。即ち余裕が無い。余裕が無い尊大キャラなどポンコツ厨二病である。蓋を開ければただの元気な少女に過ぎない。

だが、それがいい。元気一杯な娘に顔を覗き込まれ、「大丈夫？もう寝ようよ。明日も頑張ろう？ね？」と言われたら、その包容力は天元突破だ。ついでにいいこいいこされたら死ぬ。

そう——耶具矢は、微笑みが爆弾なのだ（90年代臭）。耶具矢には「素直になれ」とも伝えてある。威力の底上げに余念などしませんよ先輩。

「ごめんね土道、寒かったよね。暑いかもだけど、ちゃんと寝るのが一番だよ。一緒に布団で暖まろうね」

「い、いや、だけどタ弦が……」

「同調。夜はまだこれからです」

対する夕弦も負けていない。否——熱が加速している。

八舞姉妹は双子だが、夕弦はどちらかと言えばサディステイックな気質をしている。耶具矢を弄り倒す姿はまさにそれだ。であるからに、土道先輩が抵抗できないこの状況は格好の得物だ。

土道先輩とて男。僅かでも好意を向けてくる美少女が、腹の上でくねりながら自分の汗を舐めてくるのは芯に効く。色好い反応を見せる土道先輩に、夕弦は思っている以上に興奮しているはず。

更に様々な板挟みに遭っているのを見るのは、サドにはご馳走と言ってもいい。耶具矢と夕弦、エロスとプラトニック、性欲と睡眠欲。土道先輩が一方を求めれば求めるほど、もう一方がそれを阻害する。そう、愉悦である。

「ちよつと夕弦、土道は私と寝るの!」

「反論。土道はおままごとよりアバンチュールがお望みです」

「……………一人で寝かせてくれない?」

「絶対になウ!!」

「誠におおおつ!!お前だろこの状況作つたの!!」

そうだよ(爆笑)。

どちらを選ぶことも、どちらも拒むことも出来ない。土道先輩に出来ることはた

だひとつ。八舞に溺れるのみ。存分に大人の階段を登って下さい。

ちなみにこれ、士道先輩だから通じる奴ね。試しにこれを折紙先輩に置き換えてみよう。士道先輩が二人に増えて折紙先輩を看病するとして——間違はなく3pが始まりますね。勿論折紙先輩が士道先輩sを食う訳だが。変態にエサをあげないでください。

ところで——俺は今、戦場にいる。

俺の任務は、何が来ようと、士道先輩のいる部屋に立ち入らせないこと。そのため、〈触抱聖母〉^{アルミサエル}でビッチリ戸をコーティングして塞いでもいるのだ。

何人たりとも。そう、例え相手が誰であつても——例えそれが、

「誠！シドーに会いたいのだ！意地悪をしないで通してくれ！」

純真無垢な天使（精霊）、士道先輩の正妻こと夜刀神十香であろうとも。

「邪魔をするならば、遠慮はしない」

己の恋路を邪魔する者は、己の足ではつ倒す爲一折紙先輩であろうとも。

「誠さん、また浮気ですの？」

「お前は何を言ってるんだ!?!」

何故か怒り心頭の時崎狂三のイミテーション、繰三であろうとも。

——正直、勝てる気がしない。

おかしいな、ここに居る誰より俺のが身体能力は上だぞ。

「いや、あのね皆さん？この部屋には病人が——」

「「そこを退けええええええつ!!」」

「にべもねええええええつ!？」

その後のことは、敢えて言うまい。



翌朝。

海の見えるベンチで、一人の男と一人の精霊が、噛み締めるような、何か悟ったようなとてもいい笑顔を浮かべながら、朝日を受けて光る海原を見つめていた。

「誠」

「何です先輩？」

「昨日仕込んだの、お前？」

「そつすよ」

「そうか………。」

「それで、士道先輩？」

「何だ？」

「昨日、何発でした？」

「3発………かな」

「そつすか………。」

二人の間に、沈黙が訪れる。

ただ静かに、二人の浴衣が潮風に揺れていた。

Date. 36 「デート・ア・ストレイ」

「土道」

折紙から身を裂かんとばかりに腕を引かれ、土道は痛みにも耐えつつ困惑していた。普段とは違い、水着のために袖がない。腕を直に引き抜かれるような感覚は流石に御免被りたかった。

ビーチで美少女に抱き付かれているというのは、回りから見ればとても羨ましいことだろう。しかし、当事者になってみれば、いかに土道は土道で辛いか分かるだろう。

そして、いつも傍にいる少女が、今日は一人足りなかった。

「……………」

十香だ。突然中身が四糸乃と入れ替わったかのように、物影から土道を窺っている。ただし、どうやら嫌われた訳ではないらしい。妙に視線が熱っぽい。土道と目が合うと、サツと物影に隠れてはまた顔を出し、目が合つて隠れるを繰り返す。

折紙が土道に抱き付こうものなら実力行使も辞さずに排除する十香が、今日は物影で悔しげに睨むばかり。それに気を良くした折紙は、ますます土道と密着する。

この状況を産み出した全ての元凶は誠。昨夜の出来事が引き金である。

誠のセツティングした士道への『看病』現場に、二人が飛び込む。結果、部屋の中で行われていた看病とは名ばかりの情事をしかと見られることとなった。尚、先に部屋へ飛び込んだのは顔を三人に殴られ仰け反って跳ね上げられた誠であった。即座に繰三に抱えられて連れ去られたが。

二人の反応はそれぞれ相反していた。

「あつ、あ、うあ……………しど……………」

十香は頬を真っ赤に染め、両手で顔を押しさえて悶えた。時おりチラチラと指の間から様子を覗き見ては、怯えるように、それでいてもっと知りたいと望むように身体を震わせる。

八舞姉妹のディープキスを見た時のようなカルチャーショックに似た症状こそ起こさなかった。が、洗礼を受けたことにより『性への興味』が生まれた十香には、——
——士道への『異性としての意識』が、この瞬間芽生えていた。

一方の折紙と言えば。

彼女としての、正妻としての、女としてのプライドに火が付いていた。

「——」

故に少女は何一つ語ることなく。

それは拳銃を抜き放つが如く神速に。

懐から（人造^イ霊^ル結^ル晶^デ）を取り出すと、握り潰すように力を込める。結晶を持つ右拳から眩い光が部屋中に広がり、部屋の明るさが戻る頃にはその身をメイド服に変えていた。

人造精霊一号、キヤラマール。

初めて（厳密に言えば二度目）見る姿に土道が驚くより速く、折紙のメイド服より伸びた触手が裸の土道を絡めとり引き寄せた。

「ひゃっ!？」

「うぶっ!？」

互いに土道へ体重を預けていた八舞姉妹は、支えを失い布団に沈む。不満を述べようと折紙を睨む二人であったが——それよりも前から、折紙が右手に構えるガトリングガンの銃口が姉妹を睨み付けていた。

「どちらにも慈悲はない——死ぬといい。女狐、泥棒猫」

霊装を纏っていないければ、いくら精霊でも無事では済まない。それに、今の折紙に相手が生身の人間か否かは問題ではなかった。

その刺し殺すような殺気を肌で感じた土道。折紙の姿は置いておいて、とにかく凶行を止めようと叫ぶ。

「おい折紙！待て！！それはヤバいだろ！！」

「安心して」

その表情は普段と変わらないが――

「続きは、私が引き受ける」

乙女のように朱が差していた。

「ぎやああああーっ！！」

「戦慄。退避、退避です」

「お、おのれ鳶一折紙！！私まで撃つか！！」

果たしてその台詞と共に、断末魔が木霊する中、魔力弾を躊躇いなくばら蒔くその姿が、真つ当な乙女と言えるかは兎も角として。

その晩ホテルの一室が吹き飛び、『生徒が持ち込んだ花火を室内で点火した』こととして従業員に頭を下げる令音の姿があった。無論のこと看病は中止、関係者全員別々の部屋に分けられ、部屋から出ないよう釘を刺された。

この顛末が原因であるのは間違いないが、朝から十香と折紙が普段の調子でないのだ。

十香はより生娘に。

折紙はより貪欲に。

面倒なことになった、と土道は頭を抱える。二人とも自分から離れてくれそうになる。折紙は勿論のこと、物理的距離こそ離れている十香も、戸惑いながらしつかり付いてきている。このままでは、八舞姉妹攻略にいつ横槍が入るか分からない。

「土道」

「うおっ!?! な、何だ!?!」

突如折紙に話し掛けられ、思考の海から強引に引き上げられた土道の心臓が跳ねる。

「二人きりになりたい」

「え”っ!?!」

若い男女が二人きり。その台詞が意味する所は、土道とて知っている。更に昨日の今日だ、昨晚の折紙を思い出すのは容易だった。

『続きは、私が引き受ける』

確信めいた直感が脳を貫く。これは、ヤバいと。焦りが導き出す未来予想図が、土道の不安を加速させる。

『土道。今日から私も五河家の一員』

『琴里。私のことは、今日から義姉ちゃんと呼ぶといい』

『士道あなた。女の子。目元が貴方似』

『士道あなた。千代紙をお風呂に入れて』

『士道。千代紙が眠った。今夜は寝かさない』

何故こんなにもハッキリと想像出来るのかは自分でも分からないが、まあ幸せそうな風景が浮かぶ。

但し、それはこの場に於いては大問題。もしもこの未来に踏み込んだ上で今後精霊攻略などして身の回りの女子が増えようものなら、どうなるか分かったものではない。

「いや……………えーと……………折紙サン?」

ダラダラと脂汗を流し、折紙の表情を窺う士道。

「……………駄目?」

自分の腕に抱き付く折紙の顔は、普段の能面——ではなく、心なしか眉が下がり、普段より僅かに弱々しく見えた。

絡められていた折紙の腕が、僅かにその締め付けを増す。

普段と違う折紙にどぎまぎしつつ、言葉を選ばなければならぬという考えに至る。断らねばならない。しかし傷付けてはならない。意を決した士道は、折紙の肩を掴んで引き寄せ、対面になる。

「駄目だ……俺にまだ甲斐性がない!!」

「問題ない。対策はする」

折紙が両ポケットに手を差し入れ、帯状に連なったシートのようなものを取り出す。

右手にゴム。左手にスポングレート錠剤。各10シート綴り。

「幾らでも求めて欲しい。私は構わない」

「外堀を埋められている!？」

「土道は常識インモラル外れな行為が好み。望む全てに応えてみせる」

「それは誤解だ!!」

土道のすべてを受け入れる姿勢は漢らしくすらあるが、昨日の晩にあったことは誠監修であつて土道が要求した訳ではない。そう説明してはみたものの、

「なら、土道の好みは?」

「何を言つたところで首が絞まるのか……」

背に腹は変えられない。土道は半ばやけくそで、伝家の宝刀・強引な話題転換を發動することにした。

「そうだ、そういえば折紙! お前、昨日のあの変身は何なんだ?」

「あれは誠が作った〈人造霊結晶〉によるもの。則ち、マホウシヨウジヨ人造精霊」

「魔法少女ってオイ……………」

「まだ発展途上ながら、性能面は従来のCRユニットを凌駕する。あとはコストさえクリアすれば、そのまま実戦投入されてもおかしくない」

見た目に反して優れた能力。それが誠の人造精霊である。折紙が評価するからには、有用性があるに違いない。新たな敵の出現を予感していた土道だが、その思考はまたも中断される。

「土道は、やはりメイド服が好き？」

「しまった、藪蛇だった!!」

「……………まさか、精霊を助けるのは……………変身が好き、だから？」

「話が変な方向へ壮大に!!」

他所でガタンという大きな音がしたが、気のせいだろう。丁度、十香が隠れていた自動販売機が倒れ、その背後で夜色の髪がプルプルと震えているが、きつと気のせいだろう。土道はひとまずそう思うことにした。

今は、目の前の折紙鬼門が先だ。そう考える土道に、救いの手が差し伸べられる。

「折紙さぁーん!!」

旅館の方から、小柄な少女が駆けてきた。来禅高校の制服を着ているが、顔つきは明らかに高校生より幼い。

士道は彼女を知らないが、折紙のASTにおける同僚、引いては誠にとつてもDEM特技局の同僚である岡峰美紀恵であった。

「やつ、やつと見つけましたあ………旅館の中にいらっしやるとばかり………」

息を切らしてやって来た美紀恵は、折紙の目の前で立ち止まり、

「あつ」

今の今になって状況を理解したらしい。茹で上がったタコのように、急激に顔が真っ赤に染まる。

「あひゃあーっ!?ごっつ、ごっつごめんなさいどうぞごゆっくりーっツ!」

「ミケ、落ち着いて」

「みぎゅっ!」

大いに取り乱し、来た道を脱兎のごとく戻ろうとして折紙に襟首を掴まれた。首が絞まった美紀恵の喉から、声にならない声が漏れる。涙目で噎せる美紀恵に、折紙は問う。

「ミケ。この件の重要度は?」

無理矢理引き留めた折紙だが、既にある程度察しがついていた。美紀恵が焦って自分を探す程の内容ならば、恐らくは精霊絡みか特技局関係。しかし、自分のAST用端末には何の連絡もない。となれば後は、DEMしか残らない。

「大至急、です!!」

「分かった。士道、また後で」

「折紙さん、こちらへ!!」

返答は得た。折紙は持っていたものをポケットに押し込むと、士道の応答を待つことなく、美紀恵に続いて森の中へ消えていった。

残された士道は、一難去った安心と折紙への心配が去来していた。

それを油断と言わずして、何と云うのだろうか。

「シドー……………」

折紙と入れ替わるように、十香が背後に立っていた。頬を紅潮させ、もじもじと指を弄びながら、身体を左右に振っている。元々均整の取れた肢体で身体を揺らすものだから、立派な胸元が動きに合わせて揺れている。

「そ、その……………シドーは、私が霊装を纏うのが、好き……………なのか?……………シドーが見たいなら……………私はやらなくてもいい、が……………」

そんなことを、潤んだ瞳で上目遣いに提案された。

一難去ってまた一難。

士道の苦難の道のりは、まだ始まったばかりだと言うのに。



折紙と美紀恵は、森の中を駆け抜ける。

美紀恵から伝えられた一大事。それは、正体不明の識別信号を発する人造精霊が出現したという、ジェシカからの報告だった。

これは、あり得ない話だった。何故なら、DEM特技局で造り上げた〈人造精霊結晶〉は、折紙の持つ第一号キャラクター以外、一切存在しないのだ。

現状、霊力の結晶を生成する技術は確立されていない。従って、新たな人造精霊を産み出したのは誠に他ならないのだ。

更に話はここで終わらない。

『その人造精霊……アナタ達の近くにいるのヨ。執行部長が付近で極秘作戦を展開中らしいノだけレド、随意領域に件の奴が引っ掛かったようヨ』

現在は、丁度来禅高校が利用している旅館付近の森に潜伏中という。何をするつもりか分からない。行動を開始する前に接触し、場合によっては身柄を抑えなければならぬ。

程なくして、二人は開けた場所に出た。キャンプ用の薪を伐るためであろうか、幾つかの切り株を残して、後は背の低い草が広がっている。

その中央にある株に、女が一人腰掛けていた。ワイヤリングスーツ姿である以上、魔術師であろう。

「待つていたぞ、鳶一折紙……おや？あの時の小娘まで釣れたか！これはいい!!」
 再会に歓喜するその女は、二人にとって想い出深く、しかし記憶とは少々姿が異なっていた。

アルテミシア・ベル・アシクロフト。

嘗て、ASTに最新型のCR—ユニットが搬入されたことがあった。その名もへアシクロフト。このユニットを巡る戦いに、折紙と美紀恵は身を投じた。

後になって分かったことだが、そのCR—ユニットは、超一流の魔術師^{ウィザード}であるアルテミシアの脳内情報を用いて造られた非人道兵器であった。アルテミシアは脳死状態となっていたが、美紀恵の装着したへアシクロフトを通し、彼女を護り導いた。

戦いの末、全へアシクロフトは完全に損壊。奇跡的にアルテミシアの脳内情報は一切喪失せず、本人へと戻された。

その彼女が、目の前にいる。

否。容姿は確かに同じだが、肌や髪の色が異なっている。嘗て出逢ったアルテミシアは金髪であったが、今目の前にいる彼女は、肌の色が日焼けしたように浅黒く、また髪も銀髪なのだ。

「あなたは…………アルテミシアさん、ですか?」

警戒しつつ尋ねる美紀恵に、女は嘲わらいかける。

「そうだと云ったら?」

「……………違うんですね?」

問答が琴線に触れたのか、女は大いに笑い転げる。一頻り笑い尽くしたのか、目元に滲んだ涙を指で拭い取ると、傍らのレイザーブレイドに手を掛けた。

「その答えはお前なら分かると思っただがな、岡峰美紀恵!!ならばサービスしてやろう!!」

柄だけだったレイザーブレイドから魔力の刀身が現れる。戦闘態勢を取る二人だったが、その切っ先は二人へ向くことはなかった。

女は、自分の右目を、切り裂いた。

「なっ!?!」

額から上頬にかけて走った斬痕から血が溢れ出る。しかし、出血はわずか数秒で治まった。

残ったのは、目を跨ぐように走る傷。

「まさか、こんな傷のある、アルテミシアの成り損ないが生きているなど、夢にも思えないしなあ?」

「!？」

それは、嘗て闘った女の顔だった。

新型顕現装置（ヘアシユクロフト）を巡る戦い、その引き金となった——アル
テミシアをDEM社に売った人物。

それこそが、ミネルヴァ・リデル。

アルテミシアに対抗心を抱き、破れ、憎しみはやがて羨望に、歪んだ愛情に変わり、
自分がアルテミシアそのものになることを望んだ女。

しかし彼女はアルテミシアになれなかった。アルテミシアなら出来た（ヘアシユクロ
フト）の五機同時制御を成し遂げられず、敗北。騒動の最中に死んだと思われていた。

そのミネルヴァが、アルテミシアの姿になって、そこにいた。

美紀恵が、折紙が、顔を歪めるのを確かめると、ミネルヴァはくくくと喉を鳴らし
た。

「思い出したか。せつかく旧友と思い出を温めようというのに、私だけ覚えてましたで
は面白くないからなあ！」

「アルテミシアさんの姿で……喋らないで下さい」

「つれないな。残念だが私はアルテミシアでありミネルヴァだ。フフフ……」

犬が体温調節をする際のように、ミネルヴァは舌をだらしなく垂らす。そして、

「ああ…………アルテミシア。やつ…………とお前になれたよ!! 嗚呼、アルテミシア!! アルテミシア!! これでいつでもお前を傷つけられる!! いつでもお前に傷つけられ…………あつ、ああ、ああああああつ!! かつ、感じる!! お前を感じ過ぎるぞアルテミシアア!!」

唾液を胸元へと溢すと、全身の感覚を確かめるように、手で肌へ塗りたくる。己の行為に昂ったのか、立つことすらままなくなり、崩れ落ちて尚その行為は止まらない。醜悪な音が響こうと、二人が蔑みの目を向けようと、ミネルヴァは自分の世界へ堕ちていた。

「ふ、く…………ツくつく…………!! 鳶一折紙イ…………!! お前もなつたんだろう? 人造精霊に…………お前の欲望が形になっただろう!」

何度目かの痙攣から立ち直ったミネルヴァは、ゆらりとその身体を起こす。自傷に使ったレイザーブレイドを、今度は剣道の上段に酷似した構えにして。

応じるように、ミネルヴァの身体を霊力の鎧が覆う。それは幾分有機的になってはいたが、嘗てミネルヴァが使った「アシユクロフト」——No. II、ヘジャバウオツク」に酷似していた。

「あなたの醜悪なそれと、折紙さんを同じにしないで下さい!!」

CR—ユニットを展開する美紀恵。例えスペックでも技量でも劣ろうと、譲れない

闘いがここにある。

それは折紙とて同じ。

折紙は〈人造霊結晶〉を握りしめ、その姿をメイド服へと変じさせる。相対するの

は、否定しなければならぬ過去の呪い。

失われた恋人のために戦った戦友の為。
アルテミス

信じた正義のために奮闘した仲間美紀恵の為。

そして今、この戦いを知らぬ恋人士道の為。

「ミネルヴァ・リデル。あなたの存在を抹消する」

今、魔法少女は相対し——デート——ストライク激突する。

Date. 37 「魔法少女の真髓」

太陽が一日で最も高い位置に来る、正午の時間。俺は日向でアクエリアスをバキュームフ……：……ラツパ飲みしていた。ああ、うめえなあー！ツ！！水の精霊になつてから水を美味しく感じるようになったという事は、味ついたドリンク飲んだら倍美味しいのだ。もう滅茶苦茶に美味しい！！味覚感度3000倍である。

陽射し？そんなものは関係ない。精霊は肌が日焼けすることはない———のではなく、日焼けするか選べる。ようは霊力の調整だ。丁度健康的にこの辺がセクシー、エロイッ!!という感じに仕上げられる。逆に日焼けから普段の肌に戻ることとも可能。エロゲの肌色選択みたいなことが出来るのです。

え、それは治療能力のある俺だけ？そんなー。

「いやあ、海は楽しいなあ繰三!!」

「わたくしは大変疲れましたわ」

俺の横では、黒のパレオビギニを着た繰三がビーチベッドに横たわっている。完全にお疲れの様子で、額に腕を乗せてぐったりとしている。ちなみに俺スリングショットね。

「だらしねえなあ」

「大体誠さんのせいでしょう!! 昨晚のようなことが起きないように、今日一日見張っておくつもりでしたのに! あんな……あんな……うう」

あんな? あんなとは何ですかね。

サンオイル塗れって言われたから、オイルに霊力通して体積を操作し、繰三の全身にぶっかけてぬるぬるにしたこととか?

浮き輪になれと言われたから、望み通り浮き輪に変身した後、お尻を中央の穴に引きずり込んで水中でおさわりしたこととか?

サーフィンしてみたいって言われたから、いい感じの波になって繰三の乗るボードを操り、ついでに水着をかつ拐ったこととか?

「どれだよ」

「全ツツツ部ですわッ!!」

涙目で睨まれたの巻。いやあ、しかたないじゃん? 日常に潜む触手の魔の手とか、戦う美少女の宿命って奴でしょ。気を抜いた君が悪いのだ、魔法少女は常在戦場である。え? 繰三は精霊? 似たようなもんだって。ちなみに水着の下は俺だけ堪能した。手入れが綺麗ですね。どこがとはあえて言わんが。

実際、他の来禅高校の生徒から離れたこのプライベートビーチ染みた場所で、繰三

みたいな美少女とイチャコラ出来て舞い上がったのは事実。しかし、多少のことは夏の太陽が大体悪いのだ、俺は悪くねえ。

今日の朝から半日間の繰三をリフレインして悦に浸っていると、思考に没頭している間に繰三が鼻先三寸のところまで詰め寄ってきていた。

「よろしいですか誠さん。あなたが欲望の限りを尽くすまでは良しとしましょう」

「しちゃうのかよ」

「もう諦めましたの！ですが誠さん!? 土道さんまで巻き込むのは大ッ変いただけませんわ!!」

「えー、だって土道先輩、ホモ疑惑が湧くくらい女の子に手出さないじゃん。一つより女の子に積極的になつて貰おうかと思つて」

絶世の美少女十香、好意が初めからクライマックスの折紙先輩。どちらに対しても靡かない。四糸乃………に手を出すなら黙つてない。散々可愛い妹だと思つていた琴里司令を女として見ろというのは酷かもしれん。それでも、思春期男子にあるまじき恐るべき鉄の自制。

いや、土道先輩がホモでないことくらいホントは知ってるよ? 精霊攻略には、その鉄の紳士こそ相応しいのも知ってるよ? でもさ、先輩はもうちつと素直になつていいんじゃないかな

「十香と四糸乃の教育に悪影響だと思いませんか!？」

「やめて、それは俺に効く」

繰三の痛烈な指摘には勝てなかった。仮に四糸乃にそんな先輩の姿を見せたらどうなるか分からん。そーですね、それはそうよ。

罪悪感に胸を押さえる俺に、繰三が勝ち誇る。

「良いですこと? 誠さん、自己責任で済む範囲にして下さいましね?」

「前屈みに善処する」

「相変わらず一言余計ですのね……………」

はいそこー、残念な人を見る目を俺に向けない。今更でしょー。テストに出たぞー。

溜め息を吐く繰三だったが、不意に視線が俺から逸れた。向きは依然俺のいる方向だが、焦点が俺より後ろにあるという感じだった。付き合いが長くなってきたからこそ感覚か?

何かと思い俺も振り向けば、そこには十香が駆け寄ってくる姿があった。今日も玉肌に聳える双子山が揺れている。眼福である。

「誠、繰三。令音からシドーとビイチバレエなるものをやると聞いたのだが、……………その、二人もやらないか?」

どこかいつもより元気がない。歯切れが悪い。昨日の夜の件がずいぶん尾を引いているな。何かいじらしい十香は新鮮だ。

「俺はいいぜ！繰三お前どうする？」

「断る理由もありませんし、お付き合ひ致しますわ」

十香の事情を察してか、はたまたこちらも素直でないだけで誘われて嬉しいのか、繰三も即座に了承する。

「決まりだな——ん？」

何だろ。遠くでとんでもない霊力の高まりを感じる。八舞ではなさそうだし、知ってる精霊の霊力じゃない。

………あつ。これ、折紙先輩の人造霊結晶じゃね？

明らかに通常出力じゃない………。すると、アレ使ったんだ先輩。あー。使っちゃったのかあ。

「どうした誠。向こうの林がどうかしたのか？」

生暖かい視線を遠くの雑木林に向ける俺を不思議がり、十香が小首を傾げる。

「いや………ちよつとエンジン全開で天に昇った人がいただけだから」

「天に………!?死人が出たのか!?!」

濁した言い方のせいで勘違いした十香が、驚きのあまりビーチボールを押し潰し破

裂させる。相変わらずの馬鹿力だ。

「いや、多分死んでないから。あと昇ったの折紙先輩だから」

「そうか、ならば別にいい」

あつさり興味を失うと、十香は本人の意識ではいつの間にか割れたビーチボールに驚く。折紙先輩と聞いただけでこの淡白さよ。

最も、俺も折紙先輩なら大丈夫という謎の信頼感から見に行く気は更々ないが。

「ボールの一つや二つ気にすんな。何なら俺がボールになろう」

「おお、流石だな誠」

「却下。どうせセクハラが目的ですわ」

「にべもねえ」



戦闘開始より、12分。折紙とミネルヴァの戦いは、明らかにミネルヴァ優勢で展開されていた。

足裏から靈力を噴出する推進力で飛行しつつ、ガトリングガンで弾幕を張る折紙。しかし、ミネルヴァは空中を滑り、姿勢を変えずに移動し弾雨を避ける。僅かな被弾す

らせずに折紙へ詰め寄ると、カギ爪の付いた脚を振り上げて折紙を狙う。
「くっ!!」

掌から触手を放ち、水平に薙いでミネルヴァの脚を打つ。攻撃の向きは変えられたが速度を殺しきれず、掠めたスカートが切り裂かれ、白い肌にうつすらと一筋の赤い線が走った。

「このおーっ!!」

「お前は後だ!!」

「ふ、ぐあ?」

木の裏から飛び出した美紀恵がレーザーブレイド（ノーペイン）を振りかぶり奇襲を掛ける。しかし、ミネルヴァは折紙を蹴った勢いを殺さずに美紀恵に向き直り、腹部に脚が刺さるかのような痛烈な蹴りを浴びせられた美紀恵が鞠のように容易く吹き飛ばされてしまう。

美紀恵に目もくれず、折紙は攻性結界を纏わせたガトリングガンでミネルヴァに殴りかかる。下手に味方を庇うより、目標を引き付ける。精霊との戦いで培った経験が折紙を突き動かした。

判断としては間違いではなかった、が。

「目を逸らしもしないか、流石だなトビイチオリガミ!!だがア!!」

「!!」

同じく攻性結界を纏わせたミネルヴァの掌が、折紙の結界を突き抜けガトリングガンを引き裂く。

「ぐっ、う——」

その余波は、随意領域に守られ、更にワイヤリングスーツを凌駕する疑似霊装^{メイド服}を抜けて折紙の肌を刻む。さしもの折紙も、苦痛に顔を歪めた。僅かな集中の乱れから飛行速度が落ち、高度が下がる。

歩みが遅れる一瞬を、この女が見逃す筈がない。突撃槍のごとき鋭角の攻性結界を手刀に付与すると、反動で地面が抉れる程の魔力を噴出して折紙に突進した。

「分かるか？ パワー負けしてるんだよ、オマエ達はあ!!」

咄嗟にスカートの裾から触手を放ち、束ねて盾にする。それも、致命傷を避けるだけにしかならない。精霊の一撃を思わせる衝撃が襲い、纏う疑似霊装を引き裂かれながら折紙は吹き飛んだ。

白い肌を血に汚し、愛する少年に捧げた衣装がズタズタになり、無惨な姿で折紙は地に伏していた。

「これだ……これだ!!私^が求めた光景は!!圧倒的……圧倒的アルテムシア!!」

折紙の鼻先に降り立ったミネルヴァは、折紙の頭を蹴り上げる。跳ね上げられて仰

向けにされた身体を踏みつけければ、掠れた呻き声と共に無力な柔らかさを足裏に感じる。それがまた、堪らなかつた。

「技術？根性？愛情？違う!!絶望的な格の違い!!分かるだろう？そう、精霊から感じるソレを！私から!!お前が!!アルテミシアで!!」

だから、気付かなかつた。

折紙の目は、全く闘志を失っていないということに。

「触手内装、展開」

「ああ?——うっ?!」

折紙の眩きがミネルヴァの耳に届いた時、足から伝わる感覚に弾力が増した。

それは奥の手。特技局での稼働実験で、最も苦戦した大技。疑似霊装の内部に触手を生やし、性的興奮を霊力に変換して出力を上げるのだ。

「臨界稼働、開始」

瞬間的に霊力が増大し、油断していたミネルヴァを弾き飛ばす。突然のパワーアップに驚くミネルヴァだが、しかしすぐに冷静さを取り戻す。

「少し驚いたが………何だ、全然変わっていないぞ?」

こけおどしを、と笑うミネルヴァ。その通り、本来この機能は稼働時間の延長のためにある。810秒の稼働の後、触手内装を起動することで83秒間ほど追加行動出来

る。稼働時間が残っている時に使っても、平時の1.14倍程度の出力上昇が関の山だった。

それに、とミネルヴァは笑みを歪に歪めた。

「随分と気持ち良さそうだなア？」

「……………っ、く……………」

立ち上がった折紙だが、普段の凜とした武道家のような姿勢ではなかった。己を抱き、肌を朱に染め、前屈みになっている。

それもそのはず。今の折紙は、快樂物質を分泌させる作用を持つ誠の触手で、折紙の意思と関係なしに全身を撫で回されている。立っただけでも繰三以上の忍耐力なのだ。

ただ無様を晒しているだけ。ミネルヴァはそう判断した。

だが。ミネルヴァは忘れていた。

いや、知らなかったのかもしれない。

鴛一折紙が、たかがこの程度で終わる女ではないことを。

「ミネルヴァ・リデル。あなたのその姿は、歪んでいるけれど、愛」

「はっ。」

「愛ならば——負けられない」

「……………はア?どうしたお前」

呆れ調子のミネルヴァを他所に、折紙は懐からピルケースを取り出す。ケースを開けたその中には、折り畳まれたハンカチ大の布があった。

無言でそれを摘まみ、広げる。指が震えるのは、触手に悶えるからだけでない。

思い出すのは、これを手に入れた際の誠とのやり取り。

『誠。折り入って頼みがある』

『何です先輩、改まって』

『コレが欲しい。頼みたい』

『スゲエ嫌だ!!』

『報酬としてジェシカ・ベイリーのシャワー写真を——』

『9枚でいい』

『待ちなさい』

そうして手に入れたこれは、過去最上級品。徐にそれを顔に近付けければ、ツンと鼻を突く匂いが。

それは——士道の、体液(場所は伏す)。

「つあああああああああああ、あ、あ、あああああ——アツ!!!!
 士イ道おおおおおおおおおおおおおお——おおツ!!」

喉を震わせ叫ぶ。声を張り上げ、渴れるとも。

これは起爆剤。昂る感情が霊力の稼働率を跳ね上げる。激情で頭をクリアにする。さあ再現しろ。鳶一折紙、お前は知っているはずだ。お前の恋人の手付きを。指の長さを、径を、形を、感触を、味を！その手付きを！！

「土道っ！！土道ッッ！！土道！！ああっ！！土道！！」

それは最早、ミネルヴァを戦慄させる程の光景。

己の服の内から無数に飛び出した、人の掌が備わった触手に全身を撫で回され、懸想する人間の香りを一心不乱に求めて布を口許に押し当てて。その強烈な思慕の情は強引に触手を己の意思の元に操る。触手の快樂物質を上回るための行為であるが、ここまで大胆になっているのは少なからず触手のせいであった。

そして、この清纯にして淫蕩な乙女の存在を異様にするのは、霊力が先程までのほぼ倍となっていることだろう。その圧力は、ミネルヴァに精霊と対峙している緊迫感を思い出させた。

「鳶……………折紙イ！！」

立場が逆転した。霊力を計測した訳ではないが、戦士としての肌の感覚がそれを告げていた。焦りを感じたミネルヴァは全霊の力を込めて飛び掛かる。

しかし。土を蹴った直後、その身体は大地に沈むことになる。

「ぐ、は……………ツ?!?!」

叩き付けられた衝撃が随意領域を突き抜け、肺から空気を吐き出させられる。噎せながらも何とか首を持ち上げれば、そこにはミネルヴァを見下ろす折紙の姿が。翳すように伸ばした右手からするに、どうやら先の攻撃は掌を振り下ろし打ち据えただけであるようだ。

「キサ、マ……………!!」

「ミネルヴァ。本来ならば不適切な表現ではあるけれど、あなたには敢えて言わせてもらおう」

あれほど叫んでいたのが嘘のように、折紙の顔は平時のように表情がない。一切の感情を殺した能面のまま、掲げた右手にスナイパーライフルクライ・クライ・クライへC C Cをコールすると、銃口をミネルヴァの額に突き付けた。

「あなたの愛は、軽い」

「キサマがあああああつ!!!」

怨嗟の絶叫にも容赦なく、引き金が引き絞られる。着弾の轟音と共に、ミネルヴァがいた地面が一発の弾丸により抉り去られ、半径5mはあろうかというクレーターが残された。

たったの二撃。

決着に要した手数、僅かに二手。

折紙とミネルヴァの絶対的な差だった。

暫し残心の如く動きを止め、クレーターの中央を見つめていた折紙だったが、自然な影に気付く顔を上げる。

「鶯……………折紙……………イ!!よくも、アルテミシアの傷を!!」

どうやら辛うじて直撃を避けたいらしいミネルヴァが、ボロボロの姿で宙に浮かんでいた。煤や泥にまみれ、左目を押さえる指の間から血が溢れている。

「くそつ……………お前、アルテミシアの傷を舐めたなッ!!この傷をッ!!よくも!!」

「ついでに」

手負いであろうと関係ないとばかりに、折紙はライフルをミネルヴァに向ける。しかし、ミネルヴァは折紙の動作よりも速く地面にグレネードを投げた。対魔術師用の閃光弾が、薄暗い雑木林を輝きで塗り潰し、折紙の視界が正常に戻る頃にはミネルヴァの姿は消えていた。

周囲の靈波を探るが、反応するものはない。ミネルヴァは完全に退却したようだ。戦闘は終了したと見なした折紙が変身を解くと、虚脱感と共に全身に重みを感じた。顕現装置を使つた直後に来る疲労を、暫しその場に座り込んで癒していると、背後から落ち葉を舞上げ飛行する音が接近してきた。

「お、折紙さん!!ご無事で!!」

「問題ない。ミネルヴァは撃退した」

スラスターユニットを最大出力で吹かし、息を切らせてやって来た美紀恵に、折紙は静かに応える。普段と変わらぬ澄まし顔に、美紀恵は安堵して顕現装置を収納した。

「お役に立てず、すみません」

「気にしなくていい。通常の顕現装置ではスペックが違いすぎた」

「ありがとうございます……でも、役に立てなかったのは事実ですから。もっと上手く使えるようになって、今度ミネルヴァに遭ったら一太刀入れてみせます!!」

「期待している」

折紙の隣に腰掛け、決意を新たにする美紀恵だったが、ふと思いついたことがあるように、折紙の顔を覗き込んだ。

「ところで折紙さん。こちらに戻ってくる時に、何だか凄い絶叫が聞こえたんですが」「愛を叫んだだけ」

「——えっ!?!」

「なにか?」

「い、いえっ、何でもツ?!」

深く追求しない方がいい気がして、美紀恵は口を閉じた。